HAKAGI
ハカギ・ロワイアル
ROYALE
6

HAKAGI ROYALE

ハカギ・ロワイアル

❻

――――――――【残り22人】

葉鍵ロワイアル参加者名簿

~~一　　番　相沢　祐一（あいざわ・ゆういち）~~

~~二　　番　藍原　瑞穂（あいはら・みずほ）~~

三　　番　天沢　郁未（あまさわ・いくみ）

~~四　　番　天沢　未夜子（あまさわ・みよこ）~~

~~五　　番　天野　美汐（あまの・みしお）~~

~~六　　番　石原　麗子（いしはら・れいこ）~~

~~七　　番　猪名川　由宇（いながわ・ゆう）~~

~~八　　番　岩切　花枝（いわきり・はなえ）~~

~~九　　番　江藤　結花（えとう・ゆか）~~

~~十　　番　太田　香奈子（おおた・かなこ）~~

十一番　大庭　詠美（おおば・えいみ）

~~十二番　緒方　英二（おがた・えいじ）~~

~~十三番　緒方　理奈（おがた・りな）~~

~~十四番　折原　浩平（おりはら・こうへい）~~

~~十五番　杜若　きよみ〈原身〉（かきつばた・きよみ）~~

~~十六番　杜若　きよみ〈複製身〉（かきつばた・きよみ）~~

十七番　柏木　梓（かしわぎ・あずさ）

~~十八番　柏木　楓（かしわぎ・かえで）~~

十九番　柏木　耕一（かしわぎ・こういち）

二十番　柏木　千鶴（かしわぎ・ちづる）

二十一番　柏木　初音（かしわぎ・はつね）

二十二番　鹿沼　葉子（かぬま・ようこ）

二十三番　神尾　晴子（かみお・はるこ）

二十四番　神尾　観鈴（かみお・みすず）

~~二十五番　神岸　あかり（かみぎし・あかり）~~

~~二十六番　河島　はるか（かわしま・はるか）~~

~~二十七番　川澄　舞（かわすみ・まい）~~

~~二十八番　川名　みさき（かわな・みさき）~~

二十九番　北川　潤（きたがわ・じゅん）

~~三十番　砧　夕霧（きぬた・ゆうき）~~

~~三十一番　霧島　佳乃（きりしま・かの）~~

~~三十二番　霧島　聖（きりしま・ひじり）~~

三十三番　国崎　往人（くにさき・ゆきと）

~~三十四番　九品仏　大志（くほんぶつ・たいし）~~

~~三十五番　倉田　佐祐理（くらた・さゆり）~~

~~三十六番　来栖川　綾香（くるすがわ・あやか）~~

三十七番　来栖川　芹香（くるすがわ・せりか）

~~三十八番　桑嶋　高子（くわしま・たかこ）~~

~~三十九番　上月　澪（こうづき・みお）~~

四十番　坂神　蝉丸（さかがみ・せみまる）

~~四十一番　桜井　あさひ（さくらい・あさひ）~~

~~四十二番　佐藤　雅史（さとう・まさし）~~

~~四十三番　里村　茜（さとむら・あかね）~~

~~四十四番　澤倉　美咲（さわくら・みさき）~~

~~四十五番　沢渡　真琴（さわたり・まこと）~~

四十六番　椎名　繭（しいな・まゆ）

~~四十七番　篠塚　弥生（しのづか・やよい）~~

四十八番　少年（しょうねん）

~~四十九番　新城　沙織（しんじょう・さおり）~~

五十番　スフィー（すふぃー）

~~五十一番　住井　護（すみい・まもる）~~

~~五十二番　ＨＭＸ－13型セリオ（せりお）~~

~~五十三番　千堂　和樹（せんどう・かずき）~~

~~五十四番　高倉　みどり（たかくら・みどり）~~

~~五十五番　高瀬　瑞希（たかせ・みずき）~~

~~五十六番　立川　郁美（たちかわ・いくみ）~~

~~五十七番　橘　敬介（たちばな・けいすけ）~~

~~五十八番　塚本　千紗（つかもと・ちさ）~~

~~五十九番　月島　拓也（つきしま・たくや）~~

~~六十番　月島　瑠璃子（つきしま・るりこ）~~

六十一番　月宮　あゆ（つきみや・あゆ）

~~六十二番　遠野　美凪（とおの・みなぎ）~~

~~六十三番　長岡　志保（ながおか・しほ）~~

~~六十四番　長瀬　祐介（ながせ・ゆうすけ）~~

~~六十五番　長森　瑞佳（ながもり・みずか）~~

~~六十六番　名倉　由依（なくら・ゆい）~~

~~六十七番　名倉　友里（なくら・ゆり）~~

六十八番　七瀬　彰（ななせ・あきら）

六十九番　七瀬　留美（ななせ・るみ）

~~七十番　芳賀　玲子（はが・れいこ）~~

~~七十一番　長谷部　彩（はせべ・あや）~~

~~七十二番　氷上　シュン（ひかみ・しゅん）~~

~~七十三番　雛山　理緒（ひなやま・りお）~~

~~七十四番　姫川　琴音（ひめかわ・ことね）~~

~~七十五番　広瀬　真希（ひろせ・まき）~~

~~七十六番　藤井　冬弥（ふじい・とうや）~~

~~七十七番　藤田　浩之（ふじた・ひろゆき）~~

~~七十八番　保科　智子（ほしな・ともこ）~~

~~七十九番　牧部　なつみ（まきべ・なつみ）~~

~~八十番　牧村　南（まきむら・みなみ）~~

~~八十一番　松原　葵（まつばら・あおい）~~

~~八十二番　ＨＭＸ－12型マルチ（まるち）~~

八十三番　三井寺　月代（みいでら・つくよ）

~~八十四番　御影　すばる（みかげ・すばる）~~

~~八十五番　美坂　香里（みさか・かおり）~~

~~八十六番　美坂　栞（みさか・しおり）~~

~~八十七番　みちる（みちる）~~

八十八番　観月　マナ（みづき・まな）

~~八十九番　御堂（みどう）~~

~~九十番　水瀬　秋子（みなせ・あきこ）~~

~~九十一番　水瀬　名雪（みなせ・なゆき）~~

九十二番　巳間　晴香（みま・はるか）

~~九十三番　巳間　良祐（みま・りょうすけ）~~

~~九十四番　宮内　レミィ（みやうち・れみぃ）~~

~~九十五番　宮田　健太郎（みやた・けんたろう）~~

~~九十六番　深山　雪見（みやま・ゆきみ）~~

~~九十七番　森川　由綺（もりかわ・ゆき）~~

~~九十八番　柳川　祐也（やながわ・ゆうや）~~

~~九十九番　柚木　詩子（ゆずき・しいこ）~~

~~百　　番　リアン（りあん）~~

葉鍵ロワイアル
舞台　地形図

葉鍵ロワイアル

※この物語は巨大掲示板２ちゃんねるの葉鍵（Leaf&Key）板において創作されたリレー小説です。

※今回の単行本化にあたり、著者自身の手によって本文の表現やタイトルが改められた個所があります。
※ Web ページの原文を縦書きの単行本として出版するにあたり、最低限必要な改行等の改変を編集側で行わせていただきました。

683　口は災いの門

それにしても腹減ったなぁ。
多分もう昼過ぎだから、仕方ないと言えば仕方ないな。
「北海市場！　激安食品販売店です！　食費が今の半分になります！」
何故かそんなフレーズが頭に浮かんだ。
蟹、イクラ、ホタテ、もずく……食べたいなぁ。
いつもなら「お昼休みはウキウキウォッチング♪」から「何が出るかな、何が出るかな♪」のゴールデンコンボを見ている時間だからなぁ。
などということを考えている間も、七瀬さんと晴香さんによる国崎往人公開尋問ショーは続いているようだ。
あの二人が刀を持って尋問してる様子を一言で表すと、「あれは恐ろしい物だ」って感じだな。
しかし、このままじゃらちがあかないのでそろそろ俺様の出番だな。
「まぁまぁ、七瀬さんも晴香さんも落ち着いて」
ギロッ！　という擬音が聞こえてきそうな程の勢いで二人ににらまれてしまいました、母さん。
蛇ににらまれたカエル、どころの騒ぎではありません。
例えるならラオウの前の村人A、もしも「お前はもう死んでいる」と言われたら僕は「アベシ！」と言いながら死んでしまってもおかしくないほどです。
それでもわずかながらの勇気を振り絞って二人の女王様に提言いたしました。
「あ、あのデスね、ぶ、武器も持っていないようですし、た、多分危険な人では無いと思われますです。ハイ」
「まぁ、そうね。見た目は十分に怪しいけどね」
そう言って二人は刀を収めてくれました。良かった良かった。

「すまない、助かった」
「いえいえ、大したことはしておりませんよ、国崎往人さん」
「そう言えば……何故お前は俺の名前を知っている？　会ったことは無いはずだが」
「ああ、そうそう。私達もそれが聞きたかったのよ」
「あ、それはですね。国崎さんの事を捜している女性二人組と少し前に会ったからです」
「何⁉　それはどんなやつだ⁉」
国崎さんが突然俺の言葉に凄い反応をしたので少し驚きながらも答えた。
「え、え～とですね。長い黒髪のお嬢様風の人とピンクの髪の小さな女の子でした」
「そ、そうか」
そう言った国崎さんの顔には失望の色がはっきりと表れていた。
「その人達、国崎さんの知り合いなの？」
「いや、聞いた感じだと、面識は無さそうだった」
「じゃあ何でその人達国崎さんの名前知ってたの？」
「その二人が参加者名簿を持ってたからだよ、晴香さん」
「ふ～ん、そうだったんだ」
晴香さんはあまり興味が無さそうに返事をした。
「あ、そうそう。自己紹介がまだだったわね。私は七瀬留美。で、こっちが――」
「巳間晴香よ」
「俺は北川潤だ」
「あ、ああ。国崎往人だ、っと、もう知ってるみたいだがな」
「でも、どうしてあんなところに居たの？」
七瀬さんが木の上を指さしながらそう尋ねた。
「いや、それが俺にもさっぱり分からん。気がついたらあの木の上にいたんだ」
「ふ～ん、不思議なこともあるもんね」

「それよりもお前達に一つ聞きたいのだが、この辺で金髪ポニーテールの女の子と関西弁のおばさんを見なかったか？」
「さあ？　知らないわ。北川は？」
「……女の子の名は？」
「観鈴、神尾観鈴と晴子の親子だ」
「いや、見たことも聞いたこともないな」
「そうか……、邪魔したな」
そう言って国崎さんが立ち上がった。
「俺は人を捜さなければならんのでな、失礼させてもらおうか」
「わ、ちょっと待て！　捜すって、あてはあるのか？」
「……無い」
「それじゃあ、俺と一緒に来てくれないか？　あんたを捜してた二人に会わせたいんだ」
「悪いが俺にそんな暇は無い、早く二人を捜してやらないと」
「まぁ、待て。あてもなく捜しても仕方ないだろ。その二人に会ってくれるならこれをやるからさ」
「何だそれは？」
「これ、詳しい理屈は分からないがどうやら対人レーダーみたいでさ、これがあればあんたの捜し人も早く見つかるんじゃないのか？」
「何!?　本当か！」
「ああ、ほらこの光の点が人を表してるみたいでな、ほら中心に四つあるだろ。で、この端っこにある二つの点が多分、あんたを捜してたっていう二人組だ。方角的に間違いなさそうだ」
「……」
「どうだ？　悪い話じゃないだろう？　それに国崎さん武器も持ってないみたいだしさ、俺と行動した方が安全だと思うぜ」
「……いいだろう、だがその二人には会うだけだぞ。その後、すぐに観鈴たちを捜しに行かせてもらうからな」

「ああ、それで構わないぜ」
よし、これでスフィー達に国崎さんを会わせることができるな。
会わせる義理は無いけど。ま、相沢を看取った仲だしな。
それに健太郎さんのこともスフィーに一言伝えておかなきゃならないし。丁度いいか。
「ちょっと北川」
「ん？　何？　七瀬さん」
「蝉丸さんたちのところに行くっていう話はどうなったのよ？」
「ああ、それは国崎さんをその二人に会わせてからそっちに向かうよ。そんなに急いでるわけでもないしな」
「そう、まぁあんたがそれでいいんなら構わないけどね」
さて、話もついたことだし一安心だ。
……あ、もう一つあったっけ。
「あの～、晴香さん、七瀬さん」
「何よ」
俺は恐る恐る切り出した。
「それでですね、国崎さんにも何か武器が必要だろうし、この三つ俺が持っていってもいいよね？」
うぅ、二人の視線が痛い。
「ま、いいわよ。どうせ私達もそんなに持てないし」
「そうね」
ふぅ、生きた心地がしなかった。あの二人に睨まれたらメデューサも真っ青だな。
え？　なんか二人の顔が急に険しくなったぞ？
「北川、あんた死にたいらしいわね」
「七瀬、私も手を貸すわ」
って、俺また口に出してたのか～!!
「く、国崎さん！　助けて！」
「……二人とも死なない程度にしてやってくれないか。いや、待てよ。死んだらレーダーが無条件で手

に入るな」
「え？　え？」
「と、いうわけで好きにしていいぞ」
「ちょっと……」
「ま、そういうわけだから」
「覚悟しなさい」
そう言って二人が近づいてきた。
二人とも笑顔だけどなんて言うかこんなに恐ろしい笑顔を見たのは初めてだ。
相沢、案外早くお前に会えるかもな。

684　来訪者の多い場所

叩きつけるように降り注ぐ、雨。
「随分と唐突に振り出したものねぇ」
呟き、窓の外のグレーの空を見上げる。
この降り方だと、未だ暫くはここに滞在しなければならないようだ。
兎角、時間がない。
こうしている間にも、国崎往人が生命の危機に晒されている可能性もあるのだ。
残りは二十五人を切った。いままで協力態勢をとっていた者たちでも、ここまで人数が減れば、もしかしたら全員殺す気になるかもしれない。
——放送の直前か、直後に聞こえた耳を劈くような轟音だってそう。
それは誰かが、まだやる気なのを暗示するものなのかもしれない。
そう考えると、この小屋にも長時間滞在するわけにはいかない。
参加者のひとり、北川潤に場所を知られているからだ。
彼が裏切るとは思えないが、可能性は全くのゼロではない。それに、本人は、その気がなかったとしても、もし他人にこの場所の事を話したときに、相

手がやる気になっていたとしたら……。
「……早くやんでくれないかなぁ、この雨」
溜め息混じりに、スフィーが呟く。
そう。雨が降り止まないと、この場所からは動けない。降り注ぐ雨は視界を奪い、響き渡る雨音は聴覚を奪うからだ。
それに雨に打たれて体が濡れたら、体力を奪われる。この島で体調不良になれば致命的だ。
いまはただ、時間が過ぎるのを待つしか無い。
ふと、窓の外にもう一度目をやる。
窓に叩きつける雨、その水滴によってぼやけた風景の中。
並べられた、三つの十字架。
……木の枝を折って、ロープで結び付けただけの乱雑な十字架。
それを見て……思う。
……彼らは、満足だったろうか？
精一杯生きて、満足な死を迎えられたと言えるだろうか？
それは、否、だろう。
突然こんな所に連れて来られて、殺し合いさせられて……満足なわけが無い。
だけど……それなのに。
どうしてあの三人は、あんなに安らかな顔で……眠りについたのか。
ホントは、死にたくなんて無かった筈なのに。
それでも、あの三人は、笑って、逝った。
『死にたくない』という自分の気持ち、恐怖、全部押し殺して、それでも笑った。
「安心して。あなたたちの気持ち、願い、心……全部、わたしたちが全部……受け継ぐから」
それは、嘘。
ひとの想いをまるまる抱えきれるほど、強い人間なんていない。
だけど、出来る範囲でなら。
自分が頑張って、頑張って、もう限界っていうと

ころまでは、やってみせるから。
……だから、このぐらいの嘘は、許して欲しい。
「芹香……」
気がつくとスフィーが、わたしを見上げていた。
改めてひとの死を認識した事で、心細さとか、そういった感情が再び沸きあがってきたのだろう。
不安げに、服の端を掴んでいる。
そんな彼女の頭を優しく撫で、わたしは言った。
「まだまだ……これからなんだから。頑張りましょう、三人のぶんも……ね」
そう。一足先にここを発っていった北川潤の、ように。
わたしたちも……強くあろう。
スフィーもそれに、笑顔で、答えた。
「うん!」と、元気いっぱいに。

と。

突然。

ずしん、という、微かな重低音と、僅かな揺れ。
「……地震?」
スフィーが、再び顔を曇らせる。
地震。いや、それにしては……揺れが短すぎる。
これは何かが倒れたとか、落ちたとか、そう言う系統の振動だ。
それも……重いものが。
冷や汗がひとすじ、頬を伝う。
参加者同士の戦闘?
それとも何かのアクシデント?
理由は分からない。だが、自然に起こったものとは……そうそう思えない。
そして、それは、この耳で聞こえる位置……そう遠くない位置。
つまり、居るのだ。参加者が、そう遠くない場所に。
……どうする?
ここに留まるのは、危険なのではないか? リス

クを負っても、移動すべきではないか？
（全く、この辺りは本当に……来訪者の多い場所ね）
芹香は、皮肉っぽく笑った。

685　雨宿り

落ち始めた礫を手で受け止める。雨の冷たさは火照った肌に心地良い。
……しかし、
「このままだと、冷えて体力が奪われてしまうな」
そして思い出す。スフィー達がいた小屋のことを。あそこなら、雨宿りに最適だろう。
「……というわけで、皆さん小屋に急ぎませんか？」
「言い逃れとは見苦しいわよ」
と、晴香さん。
「そういえば、昔から往生際は悪い男だったわね、あんたって」
と、七瀬さん。
女性二人に迫られるシチュエーションというのは甘美な響きがあるが、それの相手が日本刀片手に凄んでいるとあれば話は別だ。
判決を待つ被告のように縮み上がりながら、無限のような数秒が過ぎる。
やがて、晴香さんは小さくため息をついた。
「……でもまあ、あんたが言うことも確かね。すっかり、本降りになってきたみたいだし」
そう言って晴香さんは刀を鞘に収めた。「しかたないわね」といった顔をして七瀬も戦闘態勢を解く。
強くなってきた雨脚は俺にとっての恵みの雨となったみたいだ。
「……はぁ、すっかり濡れちゃうわね」
水も滴る、いい漢といった風情の七瀬。言いようによっては色っぽい台詞もめっきり男らしい。
「小屋に着いたら服、乾かしましょう」

ということは、小屋に着いたら全裸に……。

想像してみよう。

雨で冷えた体を暖めるために、肌を寄せ合う二人。戦いのなか芽生えた友情はいつのまにか違う感情を二人の中に目覚めさせていた。

「……晴香の体やわらかい」

「七瀬の体も引き締まって……素敵よ」

「体中こんなに冷え切っちゃって……」

「ちょっと、やだ、七瀬。どこ触ってるのよー」

「ねぇ、晴香。体が暖まること……しない？」

なんてな。

うむ、我ながら若さめいっぱいな妄想だな。

不用意に想像してしまったせいで、歩きづらくなってしまった。こちらも若さ爆発といったところだ。

……あれ？

なんだか、注目を受けてる気がするのはなんででしょう？　七瀬と晴香さんは頬を赤くしているし、国崎さんはにやにやと。

「北川とやら。妄想は頭の中だけにしといたほうが良いぞ」

うぁ。またですかっ。

また私はやっちゃいましたか。

「……ここまで濡れたら、多少は変わらないわね」

「ＯＫ、晴香。どうやら、北川は覚悟完了しているみたいだし。……どうでも良いけど、何で私の台詞はやたら男っぽいのよ!?」

私の視界にお二方が大きくなって行きます。指を鳴らしちゃったり、腰に手を当てて威嚇したりしています。

……フェイドアウトしていく意識の中で、呆れ返っている相沢の姿を見た気がした。

686　日常と狂気の交わる場所

目覚めは最悪だった。雨に打たれ泥に塗れ見るも無残な姿になっていた。

眠る前と変わらず周りには人の気配は無かった。

しかし風景は少し変わっていた。動転しながら走ったせいだろう。

このまま雨に打たれるのは危険だった、体温も下がりきっている。

重い体を何とか持ち上げ這うように進んだ、視界に映る建物を目指して。

建物は喫茶店だった。誰の持ち物か分からないが毛布も着替えもあった。

震える指先で服を着替え、毛布に包まりながら置いてあったコーヒーを沸かしなおした。

体を温めながら全てを思い返す。全てを――。

何度考え直しても否定できなかった。観鈴は確かに死んだ。

そしてその事を受け入れた時、心を繋ぐ鎖が完全に壊れた時、彼女は――。

かつてこの喫茶店は希望の里であった。

この絶望に包まれた島の中、何とか生きて帰ろうと寄り添ってすごしていた。

しかし何時から歯車が狂いだしたのだろう。

ある者は愛する人に否定され。

ある者は愛する人をその手で殺め。

ある者は愛する人を自分のせいで失ったと思い込み。

ココは島で最も日常に包まれた場所。

しかしココを利用した人のほとんどは日常と決別を果していった。

そして新たに――。

「居候……やっぱりアンタの考えは甘すぎたんや。

ゲームに乗ってない奴なんてほとんど居ない」
　抑揚の無い声で呟く。その声は染み込むように自分の心に満ちていった。
「観鈴……寂しい思いさせるな。でも待っててな、すぐ友達連れて迎えに行ってやるから」
　愛する者を失った悲しみが己を包む鎧となってまた新たに日常と決別する者が生まれた。
　確かにこんな島でも幸せを噛み締めて逝けた人も居た。それは事実だ。
　しかし、負の感情を纏い奈落に落ちて逝った人も居る。それも事実だ。
　喫茶店――そこは島で最も日常にあふれた場所。
　喫茶店――そこは日常があふれるが故に狂気を呼び集める場所。
「ほな……行ってくるわ」
　誰も居ない店内に別れを言うと晴子は進みだした。
　その瞳はこの島で最も冷静で、最も歪んでいた。

687　エンプレス二人

人の世の、浮かぶ未練の舟足に、かかる憂き世の因果経、伝幕上がりし猿芝居なり。

「大丈夫か？」
　見目麗しき二人の戦乙女の活躍によって、程良くボロボロになった北川潤（二十九番）に国崎往人（三十三番）は遠慮がちに声をかけた。
「……田舎から産地直送されてきた都市型大量殺人兵器ルミーとハル。ヤツらを封じねば朕に活路はひらけんのじゃよ……」
　自身の熱い迸りを甘いバラードにのせて、全世界（なかんずく彼女ら）に発信した結果、北川は完膚無きまでに叩きのめされ、地面と暑苦しい抱擁を交わす羽目と相成ったのである。

往人からしてみれば北川の様は自業自得以上でもそれ以下でも無かったが、ここまで無惨な姿をさらけ出されて面食らってしまったのも確かである。
その北川を撃破した張本人である二人といえば、一度は小屋までついていく素振りを見せていたものの、いまや「もう、勝手にしろ」と言わんばかりに彼らの側を離れ、木を庇にして新規獲得した支給品をきゃぁきゃぁ言いながらなでくりまわしていた。
いっこうに降り止まない雨、立ちこめる湿気、お祭り騒ぎのバーバリアン二体と失意の二人。息の根が止まりそうなくらいに、長閑な状況であった。
うんっ、と大きく伸びをして北川は立ち上がる。そして身体に纏わり付いた泥や埃を左手で払い落とすと、やれやれといった面もちで往人の方へ向き直った。
「慣れてますから……と言いたいところだけど、あいうタイプはちょっと特異です」
「俺の知己にも何人かはっちゃけたヤツはいたが、あそこまで益荒男となるとな」
その内の幾人かはすでに鬼籍に入り、この世の人ではなくなった。
「まぁ巳間さんは見た目は勝ち気で負けず嫌い、責任感の強いしっかり者で、曲がったことが大嫌いってな具合の頼れる姉御。ピチカート・ファイブをBGMに銀色のATBにまたがって、白いシャツに白いジーンズそして白いデッキシューズで川沿いをシュタタタタターっと軽やかに走り抜ける……とスポーティな感じがものすごく似合うんですが、案外そういう人に限って、一度懇ろな仲になれば、彼氏に首輪つけて表参道あたりをわんわんと引きずりまわしたり、冷たい公園のベンチの下にマッパで放置してくれて凍死寸前のところでようやく御迎えにきたりとか、手かせ足かせをつけて、ものごっつい水深のダイビングプール底に沈めたりとか、十分な注意が必要でしょうね」
「手の施しようがないって感じだな。七瀬……だっ

たか、あっちのザンバラ髪の方はどうだ？」
往人は、巳間晴香（九十二番）と共に武器の物色に興じている七瀬留美（六十九番）をアゴで指し示した。
「ああ、七瀬は元クラスメートでしたからそこら辺のことはよく知ってますよ。本人曰く『ハイエンドかつソリッドで高域帯を意識した乙女を目指してる』だそうですけど、実際は三つ以上を『たくさん』って数える民族の出身で、他人の原チャリのガソリンタンクに角砂糖を入れたり、トイレの水をガバガバ飲んで、『コロされるー』って叫びながら校内を駆けずり回ったり、月のものが止まってるんじゃないかと疑われるような行動ばかり取るヤツでした」
はぁ、と軽く北川はため息をついた。
「救いようがないって感じだな」
「転校して手つきが小猫ちゃんみたいになって、声がかぼそくて、眼鏡をかけて、素敵なファンがいっぱい憑いちゃって、全方位から光線出るくらい、まなざしを注がれてそうな女の子になってはいないもんかとは思ったんだけどなぁ。なかなかどうして上手くいかないもんです」
そういって北川は肩をすくめると、ポリポリと頭をかいた。
「身を裂く淵の天塩川、身動きならぬ天満橋……か。止みませんね、雨」
「さすがにまずいな。ここで時間食ってるわけにはいかないんだ」
往人は鬱陶しげに天を仰いだ。鉛色の空からはひっきりなしに雨粒が降り注いでくる。厚くたれ込めた雨雲は当分晴れる気配を見せない。
「ダッシュで行けば、ずぶ濡れ一歩手前で済むと思います。スパッと行ってスパッと片付けちゃいましょうか」
「そう……だな。悪いがよろしく頼む」

「御意。水先案内人のお役目、しかと承りましてございます」
北川は大仰に頭を垂れると、胸元からレーダーを取り出して画面をチェックした。スフィーを示す光点は依然として先の場所と変わらずに表示されている。
「うし、動いてないな。巳間さぁん!! 七瀬ぇ!! 今から国崎さんをスフィーの所に連れていくわ。すぐに戻ってくるからそれまで荷物頼む！」
「ちょ、ちょっと待ってよ！ あんた達本気なの!?」
「雨すごいのよ！ すっころんで泥まみれになってもしらないわよ！」
北川は晴香達に向かって叫ぶやいなや、森の奥へと駆け出していた。それに続いて往人が後を追う。たちまち晴香と七瀬の視界から二人の姿が小さくなって消えていった。
「こんな雨の中をねぇ……なんとも手の施しようが無いわね」
「同感。まったく救いようがないわね」
二人は顔を見合わせて深くうなずきあった。

688 反転芹香は輝く魔女？

「あくまでここに留まる事にした芹香だったが、かなりの時間がすぎ、苛立ちを隠せないのであった」
まるで、ナレーションをするかのように一人ごちる芹香。
「……まだ数十分しか経ってないわよ、そんなに早く雨が上がるはず……」
「スフィー。貴方魔法使いでしょう？ 魔法でとっとと晴れにしなさい」
理不尽な物言いはいらだっている証拠だろう。結界の中でそのような魔法が使える訳が無いのは芹香が一番良く知っているはずだった。
「そんな事出来るんならすでにして……」

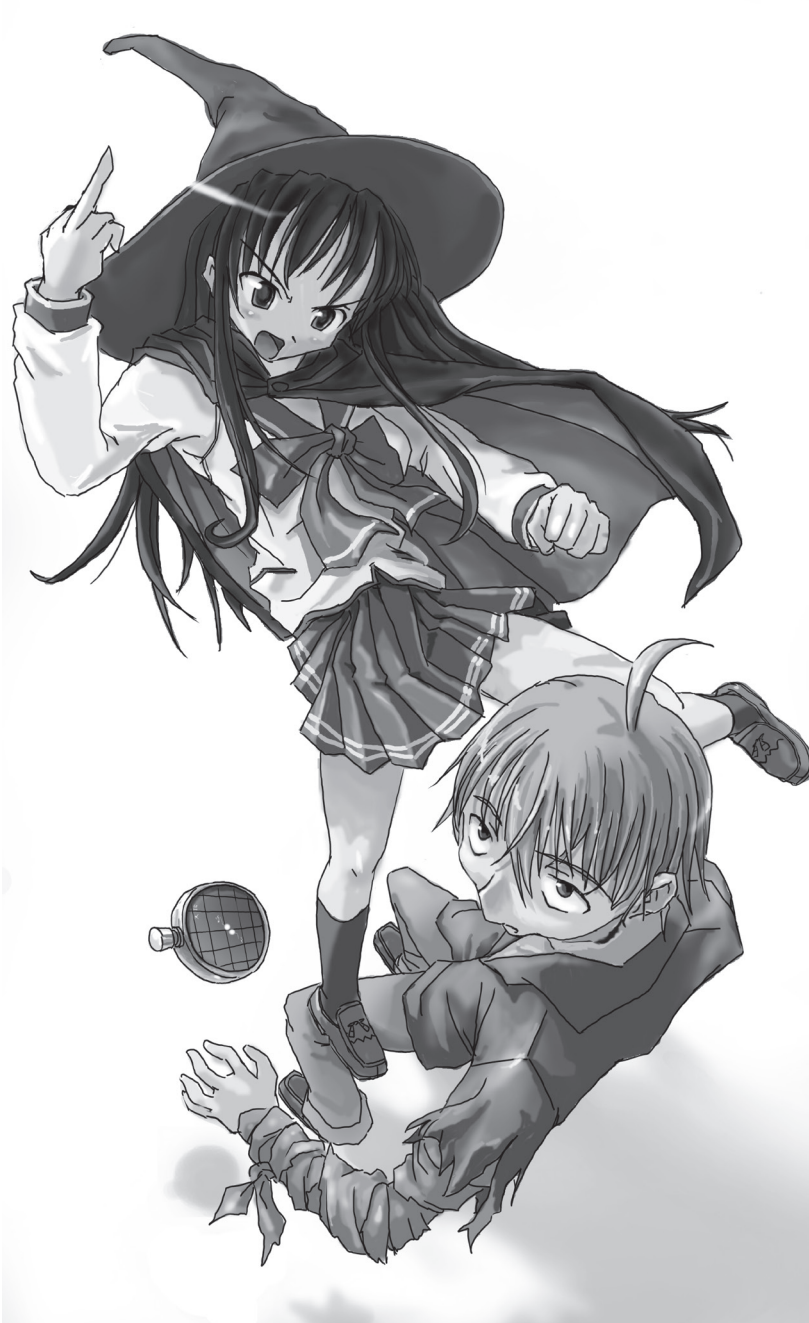
「その触角は飾りなの？」
勿論、触角（というか髪の毛）が魔法に関係が有る訳も無い。
「芹香さんだって……」
魔法を使えるはずでしょう——と言う前に芹香は畳み掛けるように続ける。
「いい訳は聞きたくないわ。どうしても言いたいなら私を倒してからになさい」
（そんな、むちゃくちゃな……）
声に出してもいないのに何故か芹香は聞きつける。
「何、その反抗的な態度は？　まあいいわ、今日のところは大目に見てあげる——来客よ」
そう言って芹香の表情が引き締まる。
「窓の外に人がいるわ。スフィー警戒なさい」
スフィーの体に緊張が走った。
「……いい、相手がドアを開けたところを、一気に取り押さえるわよ」
「……うん、わかった」

二人はドアの横で息を潜めてその時を待つ……。
二つの光点は相変わらず動いていない。二人ともあそこで雨宿りをしているのだろう。
「小屋が見えてきたな」
「ああ……」
小屋の前に雨ざらしになっている土盛が三つ。それを目に留めた北川は数瞬目を閉じて祈った。
「……」
その姿を目にした往人は複雑そうな表情をした後、北川に倣って死者の冥福を祈った。
「小屋の二人のうち、芹香って娘はかなり大人しいんですけど、スフィーって触覚娘には気をつけたほうが良いです。いきなり撃たれることは無いと思いますが……」
「ああ、わかった」
ドアの前に着く。
「じゃあ、開けます。芹香さん、スフィー、俺だ、

きたが……ぐぁ⁉」
ドアを開けたとたん、鮮やかな膝蹴りが北川に見舞われた。
「シャイニングウィザード……」
という言葉をつぶやきながら北川は倒れた。
すかさずバックステップをして銃の照準をつける往人。一触即発の雰囲気に素っ頓狂な声を上げたのはスフィーであった。
「あー！　あんた、北川じゃないっ‼　それに、もう一人のあんたは……国崎往人⁉」

689　転機、そして彼は

朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現狀トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク。
――。
朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス。
――。
宜シク擧國一家子孫相傳ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ總力ヲ將來ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓ツテ國體ノ精華ヲ發揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ。爾臣民其レ克ク朕ガ意ヲ體セヨ。

朗々とした声が部屋に響き渡る。
源之助の周りを取り囲むように、虹色の光が渦を巻き始めた。
島に巻き起こる、常人には見えない不可視の嵐。魔法の力。魂の力。気持ちの力。それらの流れ。
「――――――――――‼」
源之助の口から、呪文以外の言葉が発せられる。
これから消し去らんとする神奈へ、どんな言葉を投げかけたのか。

不可視の風が集い、一つの大きな流れになった。
暗雲に、島と青空をつなぐ穴が開く。
『神奈ぁぁぁぁぁーーーーーーーーーー!!』

――カッッッッッ!!――

空で光が爆ぜ、島全体を閃光が包み込む。
全ての雲が吹き飛び、その後にはなにも無い青空が広がっているのみ……。

「まさかこんなことを考えていたとはね……」
担いでいた男を投げ捨て、彼はしばらくその場で考えをめぐらせる。
これからの自分の役割について。

690 産声

立ちのぼっていた土と雨が混ざった匂いがひどく不快だったので、七瀬彰は思わず眉を顰め、その果てなく立ちこめた暗雲と降り注ぐ雨に耐えながら、眼前に広がる道とも呼べない道を歩き出す。道ともいえぬ道――泥に塗れた森の中を最短距離で抜けようとするその行動には果たして冷静な思考があるのかどうか、今の七瀬彰には判らない。この道を通ったところで彰の目的までの道のりが短縮されるとも思えない。けれど彰は森の中、歩きづらい道の中を無理矢理に行く。
そもそも彰の目的とは何なのだろう。彰は自分が目的を見失ったことにまだ気づいていない。自分の目的は長瀬祐介と天野美汐とを、あの診療所に連れて行くことであった筈なのだ。自分の愛しい人の待つあの診療所に、自分が出会った優しくて強い二人を連れて行く。そのために自分はあの愛しい柏木初音を置いて診療所を飛び出したのだ。
けれど長瀬祐介と天野美汐はもう死んだ。彰の耳がまともな聴覚をまだ保持していて脳味噌に蛆が湧

いていないならば、確かに二人が死んだという放送を聞いたのは事実だと思う。結局会うことが出来ないまま失ってしまい、自分は確かに悲しみの感情を抱いたのだ。自分のような死に損ないがまだ生きていて、彼らのような希望の光が消されることに、彰は確かに憤りを覚えた筈なのだ。

なのにあの放送を聞いたとき、自分の瞼から雫が零れることは無く、ただぼんやりとした目つきで空を眺めるに留まった。それが不思議だった。

そのことはともかくだ。自分は今さっき目的を失った。そして診療所には自分の愛しい人を待たせている。もしかしたら彼女に危険が迫るかも知れない。それならば自分はすぐに診療所に戻るべきなのだろう。けれど彰の足は、診療所の方を向いているようには見えなかった。

彰の脳髄は壊れ始めている。

森を濡らす雨はそんな傷ついた脳髄にはひどく重い。冷たく濡らされた脳の中の世界は不愉快過ぎる。ずきりと痛む頭を片手で抱えながら、彰は小さく息を吐く。早く雨が止めば良いと思いながら、足を引きずって歩く。歩いて、歩いて、歩く。

自分は今防弾チョッキも拳銃も身に着けていない。なんとなく手に取ってきた小さなナイフがこの右手にあるだけなのだが、それでも不思議と『安全』を感じている。それは、もう交戦する意志のある参加者は殆どいない筈だという憶測だけが、根拠なのだろうか。

いや、彰だって心の何処かで気付いてはいるのだ。戦いがまだ終わってはいないということには。長瀬祐介と天野美汐が死んだ。それは誰かに殺された、ということに他ならない。まだ殺し合いを続けようとしている人間がいることは確かなのだ。

――だが。それでも彰は安全を覚えてこうして歩いている。ナイフ一本で拳銃やマシンガンに敵う筈がないのに、彰はそれでもこの危険な〝ひとり〟という状況を改善しようとはしなかった。この足は何

処へ向かっているのだろうか。愛しい人の待つ診療所に向かっているのだろうか。違う。自分の足はまったく違う方位を向いている。

立ち止まる。この状況を改善しよう、と彰はやっと思う。目的がなくなった今、こうしてひとりでいるのはやはり危険『なのかもしれない』。

彰はその曇天の下、方向を変えて歩き出す。診療所のある方向がどちらだったかだけをゆっくりと考えて、あとはただ茫洋として歩き出す。足取りはしっかりしているくせに、その顔つきにはとても安堵を覚えることは出来ない。

安全を感じていた理由など決まっている。彰は心の一番深いところで理解しているのだ、

ひとりでいようが、ナイフしか武器がなかろうが、凶悪な重火器を持つ気の狂った殺人鬼が現れようが、『自分が負けるわけがない』ということに。

それを、鬼、と便宜的に名付ける事にしよう。

今、七瀬彰の脳髄を侵蝕している鬼が願っている事は、今『鬼』が巣食っている彼——七瀬彰を、どうにかして堕落させる事だった。彼の身体を、鬼は支配したがっていた。

今はただ、七瀬彰の意識の底に潜むだけで構わない。その鬼はまだ産声を上げたばかりの赤子のようなものだ。赤子には睡眠が必須なのだ。彼の意識の一番深いところで寝息を立てる、今はそれだけでいいに決まっているのだ。ゆっくりでいい。七瀬彰をゆっくりと、鬼に染め上げていけばいい。

診療所に向かっていた彰がふと歩みを止めたのは、雨足が多少強くなってきたからだった。雨宿りも良いかも知れない、と思い、何処か適当な木陰を探し、彰は膝を崩してへたり込む。泥の色をした水溜まりの前に座り、そこから拡散する泥水の流れを見つめながら、彰は小さな息を吐く。

考えてみれば、診療所を飛び出してからの自分は、

どうもおかしかったような気がする。長瀬祐介と天野美汐の死を知って、なお涙すら流さなかった自分の頭は、やはり疲れきっているのかもしれないと思う。

——思考が落ち着いてきた今ですら、なお。

七瀬彰の瞼からは、水滴の一粒も落ちない。

彰は思う。きっとこの悪夢が終わって、もう少し時間が経ったならば——その時にこそ、やっと自分は彼らのために泣くことが出来るのではないかと。そう考えなければ、自分が自分ではないように思えてしまってならなかった。自分は大切な友達が死んで、涙すら流せないような人間ではなかった筈なのだ。

ぼんやりと空を眺め、彰は思考を停止する。森の深くからその曇天の空を見て、思考を停止していた彰の脳髄に浮かんできた事は、三年前——自分が未だ高校生だった頃の、ある日の思い出だった。

あの頃から非生産的で動くことが嫌いだった自分にとって、雨というものはひどく喜ばしいものだった事を思い出している。雨が降ってさえいれば、無理に外出する必要はなかったからである。好きな読書に時間のすべてを費やすことが許される。彰はだから、雨というものがすごく好きだった。

藤井冬弥や河島はるかといった活発な友人の事は心底好きだったたし、彼らに連れられて街中で遊ぶ事が嫌だったわけではない。彼らと一緒にはしゃいで楽しむ自分の姿は決して偽りではなかった。だが、雨が降ると心が穏やかになる自分が居るのもまた事実だった。晴れた日に図書館に行って借りてきておいた本を、雨を横目に読む事が好きだった。溜まっていた本を、雨の打つ音をＢＧＭに読むことが好きだった。

——あの日も雨が降っていた。美咲さんと出会った日の、あの休日の事だ。何故、あの日自分が朝っぱらから雨の中、市立図書館に行こうと思ったのか、今では覚えていない。思い出す必要も、無駄に理由

をつける必要もないことは判っている。けれど当時、自分はこんな自分の気まぐれにひどく真剣に悩む気質の人間だった。文学少年の定義とは、何も定義出来ないくせに何かを定義したがる無知な人間、といえるかも知れない。その定義の元で、自分は間違いなく文学少年の範疇にあった。

あの日自分が図書館に行かなければ、あの日澤倉美咲に出会わなければ、自分はどうなっていたのか。自分はあれほど狂おしい恋に落ちたのかどうか。

ともかく自分はあの日、雨の中、図書館の前で一人佇む澤倉美咲の姿を見たのだった。

黄色の傘と、休日だというのに真面目に着こなした制服を身にまとった澤倉美咲という人間が雨の中に存在している。ちらちらと腕時計を確認しながら佇む澤倉美咲の姿は、まるで絵画から切り出したように明瞭にそこにあった。

美咲さんはあの当時から有名人だった。

彰は以前に彼女が書いて賞を取ったという書評や短編小説を読んだ事があって、あまり周囲の事情に詳しくない自分でも、彼女のことはよく知っていた。文章書きになりたいと思っていた自分は、彼女の端正で丁寧で奥行きに溢れた文章に魅了されたものだ。天才とは、こういう人間のことを言うのだろう。

自分とは別世界にすむ人間だと思った。

だから、その日、図書館の前に立っている彼女を見た時、彰は少なからず動揺したのである。図書館は雨の中閑散としている。

——というか、誰もいなかった。

流石にこんな雨の日にわざわざやってくるような人間は少ないという事だろう。まあそれは仕方ない。

——では澤倉美咲はここで一体何をしているのか。

ぼうっとしている自分の姿に気付いたのだろう。傘を少し揺らせて美咲さんはこちらを見ると、ゆっくりと歩み寄ってきた。

それは彼女が、初めて自分『だけに』微笑みかけた瞬間で、そして自分が彼女に魅了されつくした瞬

間だったのだと思う。この笑顔を、自分だけのものにしたい。才能に溢れたこの美しい人の、この美しい笑顔を、自分だけのものにしたい。
「あなたも、開館時間間違えたの？」
少し笑って言う美咲さんの声を聞いて、彰はようやく自分が開館時間を間違った事を悟ったのである。
「……間違えた、みたいです」
「あはは。実は私もなんだ。お互いおっちょこちょいだよね。……ごめん、気を悪くした？」
「いえいえ。あの澤倉先輩のドジなところを見れてちょっとだけお得な気分です、なんて」
「――あれ？　何で私の名前を？」
彼女のすべてを自分のものにしたい。
こんな風に思ったのは、多分、七瀬彰の人生で初めてのことだった。
そのことが縁で、自分と美咲さん、ひいては冬弥、由綺、はるか。そんな仲間の円が出来た。

――今はもう、なくなってしまった円。
あの雨の中、自分が外に出ようと思わなければ、この縁は生まれなかった。些細なことから始まった円は、もしかしたら自分が何もしなくても始まっていたのかもしれないけれど、その円の形はきっと違った形になっていたのではないだろうか。
美咲さんと過ごした日々がなければ今の自分は存在しなかっただろう。それを思えば、あの日の自分の行動には、やはり何かしらの意味が存在していたのかも知れないと思う。考えても仕方のないことを考えることが好きなのは、今も変わらない。自分はまだ文学少年のままなのだな、と思った。

――何故そんな事を今更思っているのだろうか。
何故。何故今、壊れきった円のことを、崩れきった縁のことを思い出しているのだろうか。
自分は訣別した筈ではなかったか。自分は彼らにさよならの言葉を告げた筈ではなかったか。日常は

変わりゆくものと諦めた筈ではなかったか。
日常とは変わりゆくものであるから日常なのだ。同じ日常など存在するわけがないのだ。そうやって吹っ切った筈なのに。何故。
何故?

雨。
木々の隙間を縫って雨が入り込み、自分の頬が冷たく濡れる。その冷たさで彰はふと思う。
僕の日常には、常に何処かしら雨の匂いがあったような気がする。雨が僕の日常の象徴だったのではないか、と今になって僕は思う。激しい雨と雷の音。まるで雨足は緩まる様子がない。木陰にいるとはいえ雨は今も容赦なく自分の身体を濡らしている。このままでは風邪を引いてしまう。ならばいっそ早く診療所に戻って休んだ方が良いのではないか。暖かい建物の中で休みたい。暖かな空間にいれば、自分はこんな風に思考の檻に閉じ込められないと思う。

愛しい人——初音にも会いたい。
そう、今自分が命を懸けてでも守らなければいけない人。早く帰らないと。震える身体を起こして、再び診療所に向けて歩き出そうとしたそのとき、彰は見た。森の影の奥に、初音と同じような亜麻色の髪をした女の姿を見たのだ。
「鹿沼、葉子さん?」
彼女はこんなところで何をしているんだろう。よく見れば足を引きずっているようだった。身体がまだ調子のよくないまま、どうして彼女はそうやって無理に行動しているのだろう。
止めなければ、という声が彰の奥底でした。
彰は小さく息を吸うと、その影が向かった方に足を向けて、泥水を跳ねとばしながら走り出す。
彰の心の底で、何かがゆっくりと目を覚ましている。便宜的に言えば『鬼が目を覚ましている』。
彰が走り出したのと同時に、象徴の雨は止んだ。まるで産声を止めて、眠りについた子供のように。

691　破損

目を覚ますと、草の匂いがした。冷たい土の感触。身体が重い。
身体を揺らす。ぐちゃり、と嫌な感触。服が濡れている。今の格好を考えるのは止そう。
ともあれ、観鈴は目を覚ました。空に広がる、灰色の雲。雷鳴が聞こえてきた。
「起きたのね」
と、そんな声。
驚いて、振り向く。包帯だらけの女の人。天沢郁未だ。観鈴の横に座り込んでいる。
目は虚ろ。死んだ魚のような目が、ふと、観鈴を見て、再び正面にむき直る。視線の先には何も無い。
「んと……」
何を言うべきか。声を掛けづらい。話し掛けて、反応するだろうか？
恐らくはしないだろう。何となく、そんな気がした。全身から漂わせる雰囲気。それは拒絶とも取れる。
とは言え、何もしないわけにもいくまい。
「う、うぃっす」
とりあえず挨拶。しかし、無反応。失敗。
いや、反応した。観鈴の方に顔を向けた。そのまま、顔を戻すことは無い。綺麗な顔だった。
しかし、その目は観鈴を見ていない。
反射的に振り向いただけなのかもしれない。
暗い――光を灯さない目。
それでも、観鈴は続けた。見ていないからこそ、彼女は続けた。
「びしょびしょ、だね」
「――」
「こんな所にいたら、風邪引かない？」
「――」
懸命に語りかける。それでも、彼女は返さない。

続けた。
「あそこの木陰に行こ？　ここにいると、寒いよ。それに、ねぇ、ここにいると危ないよ。誰がいるか分からないし、恐い人が来ちゃうよ。あの、男の人とか――」
そこで、言葉が止まる。
郁未が観鈴を〝見ていた〟。光の消えた瞳に、再び、光が戻る。
だが、それは。何かが違った。普通ではない、何か。思わず、身震いする。
にやり、と笑った。おぞましい笑み。そうだ。あれは、狂気の光。
「あの男」。それが、彼女の〝スイッチ〟を入れたのか？
「望むところよ」
雷光が彼女を照らした。そして、鳴り響く轟音。
郁未が、ゆらりと立ち上がる。

のんびりとした少女の言葉で頭が醒めた。
そうだ。ここで呆けている場合ではない。『奴』を追うのだ。自分の元を去った、あいつを、あの人を。助けよう。助けねばならない。もし、出来ないのなら――殺さなければならない。
そう決めた。そう、約束した。
首を巡らせば、いくつか荷物が落ちているのが見えた。鞄が三つ。アサルトライフル。ショットガン。とりあえず、鞄を手に取った。誰の荷物だかは分からない。だが、背負えるのは一つだけだ。これでいい。
少年が行った方へ、歩き出す。足が痛い。それでも、歩く。痛い。
「ま、待って――」
声。引き留める声。無視して、歩く。痛い。
「待って。その怪我じゃ危ないよ！」
うるさい。
「ねぇ、落ち着いて――一人じゃ危ないよ？」

駆ける音。ぐしゃぐしゃと、水を踏む音。

腕を掴まれる。振り向けば、先程の少女がすぐ後ろにいた。怯えたような顔。それでも、使命感を帯びた顔。

にぱ、と笑う。苦笑じみた笑み。白々しく見えた。

「一緒に行こ。ね？」

「――」

「わたし、足手まといだったけど――でも、きっと、役に立つから」

「――」

そう言って、最後に、もう一度だけ笑った。今度は、寂しげな笑顔だった。

ふと、よく分からない感覚がした。ぞわり、と。何かが蠢くような。

右腕が伸びる。掴む。首を。ぐっ、という呻き声。少女のものだ。愕然とした顔。

「――うるさいわね」

意図せず、そんな声が出た。一瞬、誰の声かと疑った。紛れもない、自分の声なのに。

持ち上げる。少女は、軽かった。何となく、自分が笑っているのを感じる。感じる？

少女が、右腕を掴んでいた。抵抗のような、そうでないような。随分と非力だ。

そんな事に、笑っているのか、私は？　狂ってる……！

「随分とへちょい考えなのね。一緒に？　そんな事言って、私が貴女を殺さない保証があるの？」

どくん、どくん、どくん、どくん――

熱い。全身が昂揚している。血が巡る。不可視の力。それが、私を、狂わせている？

冷静な心。狂った心。冷静な自分が、狂った自分を見ている。不可思議な感覚。もう一人の、自分。

右腕を振るう。放り投げる。背中から少女は落ちた。叩き付けられた。

「笑わせないで」

抑揚の無い声で、私は言った。踵を返すと、森の

中へ足を進めていく。
心なしか、痛みが引いている気がした。
いや、違うか。痛みを認識しなくなっているのだ。
どうも完全に狂ってきているらしい。
狂っているのが分かっているのに、どうでもいい気がした。目の前の光景を、ガラス越しに見るような感覚。全てが歪みつつあった。少年を、あの人を、あいつを、『奴』を切っ掛けにして。そんなに脆かったのか、私は。
私の顔も、歪んでいるのだろう。ぎらぎらと、狂気を宿した目。裂けたように開かれた口。
それは、まるで、鬼女の様。
『――脆いものよの』
そんな声が、聞こえた、気がした。
少女が、まだ叫んでいる。
懲りないやつ。
聞かない、聞く必要などない。
それでも、彼女は泣きながら叫んでいた。
戻ってきて、と。

692　嵐、そして太陽

「もう一度、落ち着いてゆっくり言ってくれ」
「何度でも言ったげるわ。鹿沼さんが、あれだけひどいケガして寝込んでた鹿沼葉子さんが、いないの」
マナが息せき切って飛び込んできてそう告げると、耕一の眉がピクリと動き、初音の表情がみるみる不安そうなそれに変わった。
が、今にも外に走り出してしまいそうな勢いのマナに、耕一は比較的のんきな口調で言った。
「手洗いとかじゃないのか？」
「ん……そ、そうかもね。ちょっと確かめてくるわ」
パタパタとマナの姿が廊下に消えると、耕一は初

音にちょっと待っててね、と言い残して同じくドアから出て行った。
――程なくマナが帰ってきた時、耕一は既に居間に戻っていた。それこそ苦虫を噛み潰したような顔をして。
「ダメ、全部の部屋探してみたけどいなかった」
「出てったよ、葉子さんは」
「……はぁ？」
「彼女の部屋の窓からだ」
耕一はマナが一階を探し回っている間に二階の葉子の部屋を調べに行ったのだった。
マナは葉子の姿がないことに動転して気がつかなかったのだろうが、少し注意して見れば部屋にもともとあったカーテンがないのがわかっただろう。
そして、そのカーテンが細く裂かれ、それぞれ固く結ばれて、固定された窓の縁から外に向けて垂れ下がっていたことにも。
「そんな……なんだってそんなことする必要があるの⁉」
「気づかれたくなかったんだろ、俺たちに」
「どうして⁉」
「そんなこと俺に聞かれたって困るよ。……取りあえずちょっと落ち着け」
耕一にたしなめられ、マナは予想外の出来事に自分の頭が完全にヒートアップしてしまっていることをようやく認識した。
（この島でいろんなことがあって……ちょっとは成長したと思ってたんだけど、いざとなるとからっきしダメね）
こんな時だからこそ、いつでも冷静な思考を失わないことが大切なのだ。自分が苦手なことだけに、強く、そう思う。
そして、見た目によらず――と言っては失礼にあたるが――耕一を少しだけ頼もしく思った。もちろん死んでも口には出さないが。
「でも……鹿沼さんケガひどいんだし、わざわざそ

んな無茶してまで……」
「実際キツかったんだろうな、窓の下に人が倒れたような跡があった。……伝って降りる途中で落ちたんだろ」
「鹿沼さんっ……！」
そんなことを上でやっていたのなら――あまつさえ、ある程度の高さから落ちたりもしていたのだ、相応の物音もしていただろう――どうして自分は気づけなかったのか？
気づけていたら、あの状態の葉子をそのまま外に出すようなことはせず、何らかの相談はできたのではないか。そう、私たちは仲間、なのだから。
だが、その時、今もだが、外では凄まじい雷雨が降り続いており、その音で聞こえなかったとしても何の不思議もない。――忌々しい雨！
「……探しに行くわ」
マナはすっくと立ち上がった。
「こんな雨の中で鹿沼さんを一人で歩かせておけないもの。どんな事情があるにせよ、すぐにぶっ倒れちまうわ」
「一人で行くつもりだってんなら――」
「ストップ。私は一人で行く」
ピッと手で制して言いかけた言葉を遮ると、耕一は渋い表情で言った。
「意地張ってカッコつけてるとマナちゃんから死んじまうよ？　せめて俺が……」
「あの娘はどうするのよ」
マナはチラリと一瞬、初音に視線を向けた。
「どうしたって今のところ外よりはここの方が安全よ。あなたもわざわざ初音ちゃんを危険に晒したいわけじゃないんでしょ？」
「そりゃ、そうだ、けど……」
「で、あの娘がここにいるのなら当然あなたもここにいるわよね。一人にしとくわけにもいかないでしょうから」
「な、なら、俺が葉子さんを……」

「あなたが戻ってきた時、私と——私はこの際どうでもいいわ、初音ちゃんが誰かに襲われて殺されていたとしたら、あなたはそれに耐えられる？　できないでしょ？　だったら私に任せなさい。それが一番妥当な判断よ」
「……優しいんだよな、マナちゃんは」
耕一は歯噛みして、ほとんど泣きそうな表情で吐き捨てるように言った。
「だけど、凄ぇヤな奴だ……」
耕一の目の前に立つこの小柄な少女は、耕一にとって——例えば二人が崖から今にも落ちそうになっていた時、咄嗟にどちらに手を伸ばすか、というような意味で——自分よりも初音の方が大切な存在だということを知っている。
その上で、自分の身を敢えて危険に晒すような提案を耕一に呑ませようとしている。耕一が答えにくいのを、そして受け容れざるを得ないのを知って。
「ありがと。全然誉められてる気しないけど、せっかくだからお礼言っとく」
そうして部屋の隅の、小さくまとめてあった自分の荷物を取ると、顔のあたりでひらひらと手を振った。
「そんな葬式みたいな顔しないでよ。葉子さん連れて、さっさと戻ってくるからそれまで二人とも無事でいるのよ。……じゃ、ね」
そう言い残して、居間を横切り、窓の側を抜けて玄関に出て行こうとした時だった。
それまでずっと黙りこくっていた初音が、マナの服の袖を掴んだ。
「……伸びるから離して欲しいんだけど」
「私も一緒に行く」
マナは初音に向き直ると、その目をキッと見据えて言った。
「あのね、私に気を遣って言ってるんなら止めてちょうだい。……困るわ」
「ううん、そうじゃないの、あのね……」

初音は小さく首を横に振ると、ややためらいがちに言葉を続いた。
「……彰お兄ちゃんが」
「七瀬さん？」
「うん。……なんだか胸騒ぎがするの。彰お兄ちゃんが、呼んでる……ううん、ちょっと違う。なんて言えばいいのかな……」
――そう、泣いてる。泣いてるの。そんな感じがしたの。
本当はそう繋げたかったのだが、やめた。なんとなく、彰みたいないい大人に泣いてる、なんて言葉を使うのが失礼に思えたからだ。
「……それは鬼の血がそう言ってる……みたいな感じなのかな」
耕一が、腕を組んでぼそっと呟いた。
「そう……かも、しれない。でも、違う気もする……単に、何の根拠もないいんだけど、ただ胸騒ぎがする、みたいな……」
「胸騒ぎ、ね」
初音はマナの両手を取ると、自分の胸の前あたりまで持ってきた。今度は初音が見つめる番だった。
「だから、多分私は彰お兄ちゃんのところに行かなきゃいけないの。葉子さんを見つけるついでにでもいい。ただ……もしかしたら逢えるかもしれない、って、それだけでいいから……お願い、連れてって」
マナは測りあぐねていた。初音の言っていることが本気なのか。
それとも、自分一人危険な目に遭わせないための方便なのか。
これまで接した短い時間の中でも、初音が優しい子だということは充分マナにもわかっていた。
だからこそ、初音の言葉の真意が掴めないでいるのだった。
――しかし。
「わかった。俺も初音ちゃんも一緒に行く。決まりだ」

「ちょ、そんな、いきなりなんで……」
初音との付き合いの長さで言えば、耕一はマナの比ではない。
だから、耕一には初音の優しさがどの程度のものであるかがマナよりも遥かによくわかっていた。
少なくとも耕一の知る限り、初音はこの状況で気休めのウソをつくような子ではなかった。
「鬼の血ってんならちょっと怪しいんだ。この島ではなんか妙な結界が張られてて、鬼の力とかも薄れてるらしいからな。ただ、どんな結界にだって阻めない能力ってもんがある。それが——女の子のカン、特に恋する乙女ならなおさらだ」
初音の顔がポッと見る間に赤くなる。耕一がニヤッと笑った。
「だから、初音ちゃんの言葉は信用に足る。つまり、初音ちゃんには外に出かける理由がある。となれば——頼りにならないこともなさそうなナイト気取りの犬ころが一匹、ついて行っても悪いこたないだろ」
「まったく……」
肩を震わせて、必死に笑いを抑え込んでいたマナだったが、とうとう堪え切れなくなり、アハハと笑い出した。
「イヤんなっちゃうくらい……いい人たちなんだから」
「見りゃわかるだろ、初音ちゃんのこの天使のような顔に、俺のポルトガル人宣教師のような顔。慈愛に満ちてて、いかにも善人って感じだろ？」
「ぷっ……バカ言ってないの。それじゃ……本当に一緒に行くの？」
「おう！」
耕一が高々と右手を突き上げた時、サッと窓から一筋の陽光が刺し込んできた。
その筋はみるみるうちに太くなり、やがて眩しく輝く太陽と青空が覗いた。雨が止んだのだ。
幸先いいな、とマナは思った。そして——

雨で錆び付いていた物語の歯車は、ゆっくりと回り始めた。

693　死者からの贈り物

『プシーッ』
自動ドアの開く音に対して、柏木梓は身を構える。その音源の方を一瞥してから肩の力をふっと抜いた。そして声をかけようとして止めた。何かを言うことなんてできなかった……二人の顔を見れば御堂がどうなったかなんてことは、聞かなくてもわかってしまったから。
沈黙という空気をまとわりつかせた二人が、梓の方に向かって俯き加減でゆっくりと歩く。二人とも目を赤く腫らし、涙を流した痕を残していた。しかし、瞳はそのことを乗り越えた意志のある輝きをもっていた。
二人が同時に梓に気づく。柏木千鶴はゆっくりと首を横に二回振ってから梓から視線を外した。月宮あゆはそのいたいけな瞳でじっと梓を見つめている。そして月宮あゆは言った。
「おじさんの分までがんばろうね！」
知らなかった。彼女はこんなに強い娘だったんだ。
「おう！」
梓はその言葉に後押しされる思いであった。

「それで、あなたたちの方には何も起きなかったかしら？」
「何もなかったっていうわけではないよ」
「何があったの？」
「ん〜、かくかくしかじかで、今詠美がコンピューターに向かって四苦八苦してるところ」
千鶴たちがいない間出来事をざっとかいつまんで説明する。
「ふ〜ん、そう」
千鶴はため息をひとつついた。ここにきてこれま

での疲れが出たのだろう。
「そのCDの中身の確認っていうのはすぐに終わるのかしら？」
「さあ、どうだろう？　あたしはコンピュータのことなんてからっきしだからなんともいえないけど、詠美のと繭の分に加えてあの白衣着たおじさんもCDを持ってたから計三枚ものCDの中身を見なくちゃいけないんだ。それなりに時間がかかると思うよ？」
「そう。それじゃあそれが終わるまで少し休んでていいかしら？」
「いいんじゃない？　解析が終わったら、どうせまたすぐに動き出すだろうし、体力を回復しておかないとね。それにしても千鶴姉、これくらいでバテるなんてもう歳なんじゃない？」
そう言って手を口に当て、ぷぷぷっと笑う。それに反応して千鶴の眉がわずかに顰められる。
「え、千鶴さんっていくつなの？」
あゆが無邪気にそう尋ねると同時に、辺りには殺気というか邪気というか悪意というかなんともいえぬ代物が漂ってきている。
「いくつにみえるかしら？」
にっこりと顔を微笑ませながらそう尋ねる千鶴であったが、目は笑っていなかった。
「えーと、秋子さんと同じくらいかな？」
ズンッと得体の知れないプレッシャーに梓は押しつぶされそうになる。
(助けてーっ、耕一！)
思わず、心の中で助けを求める。
「あ、そういえばボク、秋子さんの年知らないや」
そんな雰囲気をものともせずに、さらにあゆは続ける。
「秋子さんみたいに綺麗だから、とっても若く見えるよ」
「そ、それは……」
フォローになってないとつっこみたかったが、先

ほどの得体の知れぬ何かが梓にそれ以上言葉を発することを許さなかった。先刻とは違った沈黙を強いられる。奥の方からは動物達が危険を知らせ合うかのような騒ぎ声も聞こえてくる。
「うふふっ、企業秘密ですよ」
周りの空気があたかも氷解するかのごとく、緊張が解けていった。

「じゃあ、あたしは詠美のとこに行くから、あゆも休んどきなよ？」
そう言い残してから梓は部屋の奥に向かおうとして振り向くと、いつの間にか繭が悲しそうな顔でエプロンドレスのすそを握っていた。
「どうしたんだ、繭？」
「みゅー、おなかすいた」
「えっ……食べ物ってまだあったかな？」
「うぐぅ、ない」
「詠美がもしかしたら……ってあいつにそんな計画性あるわけないか」
「みゅーみゅー！　ハンバーガー！　みゅー！」
「ああ、はいはい。わかったから暴れない、暴れない」
じたばたする繭を優しくなだめる梓。それを見てあゆが一大決心をするかのように言う。
「よし、ぼくにまかせて！　ぼくが何か食べられる物を探してみるよ！」
「お、気が利くね。それじゃあ、悪いけどよろしく頼むよ」
「うん。繭ちゃん、少しの間待っててね」
「みゅ～♪」
意気揚々と探索を始めたあゆを尻目に、繭を引き連れ詠美のところまで戻ってきた。まるで嫌なことを頭の隅に追いやるかのように、ディスプレイに必死でしがみついている彼女の姿を見やる。
「どう、進んでる？」
「ふみゅーん。ちょっとわかんないかもー。で、千

鶴さん達は戻ってきたの？」
詠美は梓のほうを振り返らずにそう聞く。
「う、うん。それでさ、詠美に言わなくちゃならないことがあるんだけど……」
「……したぼくの事でしょ。わかってるわよ。あの状態から元気に復活しましたっていう方がブキミなんだから」
再びあの沈黙が場を支配する。繭がどうしていいかわからず、梓と詠美の間をおろおろと往復している。そして繭が三往復目を終えた瞬間、詠美が『バンッ』と目の前にあったキーボードに両の手のひらを叩きつける。
「あいつの分まで絶対生き残ってやるんだから！」
詠美の悲痛な叫びであった。それを聞いた梓は背後から優しく詠美を抱きしめてあげる。
「うん」
それを見た繭は遊んでると勘違いしたのだろうか。かまって欲しそうに、二人に抱きついてきた。

「みゅ～♪」

「ごっはん～ごっはん～♪　た～いやき、た～いやき～♪」
あゆは先ほど宣言したとおり食べ物を探していた。そして、その任務はあっけないほど簡単に成功してしまった。隣りの部屋が簡単なキッチンになっていて食事が摂れる場所になっていたのだ。ここにいた長瀬源五郎が使っていたのだろう。
「あ、冷蔵庫がある。食べ物も入ってる！　勝手に食べちゃっても……いいよね？　誰のか知らないけどいただきます」
一応断りを入れてから、冷蔵庫に入っていた食材を取り出していく。
「さ～て、ここで秋子さん直伝の料理の腕を披露しちゃおうかな」
と、意気込んだのはいいのだが、肝心の調理器具がまったく見当たらなかった。それもそのはず、こ

このキッチンはメイドロボ以外は使っておらず、調理器具は彼女らの体に内蔵されていたからである。
「うぐぅ、どうしよう……」
そこであゆはあることを思い出す。
「あ、そうだ！　ぼく、ナイフを拾ったんだった」
すかさず彼女は自分のかばんを漁り、目的の物を取り出した。
「あった、あった。拾っておいてよかった」
しかし、そのナイフには毒が塗られているということを、彼女が知る由もなかった。

694　それぞれの勇み足

くくく……。
こんなチャンスはもう二度とないかもしれぬ。
たった一人の雌。
彰の心に力を送る。刺激するのは性欲。
『象徴の』――雨は止んだ。代わりに彰の心には『無』が広がる。
決して雨が止んだからといって、晴れるとは限らないのだ。
記憶改竄なんぞでちまちまやっている必要は無い。
ここが力の使い時だ……。
残りの力のほとんどを使った。
一度目の失敗の反省を糧としない、本能剥き出しの鬼がここにいる。
そして眠りについた。起きたときには状況が好転していることを信じて。
――これは心の鬼の勇み足――

意志無き表情の彰が一歩を踏み出した。
その時。
――カッッッッ!!――
天空で光が爆ぜた。
ほんの一瞬。他のことに気を取られていれば気づかないほどの一瞬。

「うわっっ!!」
だが確かな閃光が島を包んだ。
「なんだ!?」
彰は空を見上げる。先程まで空を埋め尽くしていた雲は掻き消えて、一面の青空が広がっていた。
「一体何が……?」
しばし呆然とそれを見つめ。再び地上に視線を戻す。そこには動揺に呆然と立ち尽くす鹿沼葉子の姿。
「葉子さん!!」
——これは彰の勇み足。ではない——
力の奔流、そして閃光——
体なにが起きているのだろう。
私はしばしその場に立ち尽くす。
「葉子さん!!」
ハッとしたように彰の方へと向き直る。
彼は……。

そう、小さな女の子と一緒にいた男だ。と彼女は気づく。
「こんな所でなにしてるの? 怪我は大丈夫?」
「はい、大丈夫です。私を治療してくれたんですよね、ありがとうございます」
「お礼ならマナって娘に言ってあげてよ。僕は何もしてないから。後、お礼と言えば、さっきは助けてくれてありがとう」
「いえ……無事だったみたいで良かったです」
脳裏に過る高槻との戦闘。あの少女も無事だったのだろうか。
「それより、一人でどうしたの? 武器も持たずに……」
なにをしようとしていたんだっけ?
なんで武器も持たずに駆け出したんだろう?
葉子は少年のことを思い出した。あの時彼がやる気だったら……。
ずいぶん軽はずみな行動をとっていたものだ。今

の自分に一体なにができるというのだ。
――これは葉子の勇み足――

「なるほど、それで居てもいられなくなって、黙って飛び出してきたわけだ」
彰は渋い表情。
考えてみれば、彼も軽はずみに外に飛び出した口なのだ。
「さて、ここで愚図っていても始まらない。一旦皆のところに戻るとしようか」
「はい」
彰は自分の心に住まう鬼を覚えていない。
記憶や映像の改竄も気づいていない。
そう。『皆のところに戻る』
これこそが。
――これは彰の勇み足――

695　新たなるボケ役？

雨の中ずぶ濡れになって死体漁り、今のうちにやってないと雨が上がってからが恐いからだ。
ナニかが漂いそうで。
「そっちの死体は何か持ってた？」
「変な携帯電話みたいなやつだけよ、メモみたいなものは無いみたいね」
北川達が出発してからすぐ本来の目的である高槻の死体を調べだした。
もっとも確かな成果があったわけでは無いが。
「とりあえず北川が言ってた小屋に向いましょう。これ以上は何もなさそうだし」
全く北川もいい度胸である、この乙女たる私に死体漁りをさせるなんて。
晴香の方の同じ意見のようである、次の行動は決

まった。雨宿りついでに北川を――。
などと話しているとすぐに小屋は見えてきた。往人と女の子二人の姿も見える。
何故か入り口で北川が股間を押さえて痙攣しているが。
「あの馬鹿。まさかセクハラでもやった――」
私の言葉は閃光によってかき消された。

北川が痙攣している、他の三人は険しい顔をしている。
その上、晴香まで険しい顔をしだした、おまけに今の閃光。
気まずい沈黙、小屋に響くのはただ北川の呻き声のみ。
「ここで顔色変えてる人は、みんな今の力の奔流を感じ取ったらしいわね」
「参加者名簿の中には、あんな強力な奴のことなんて載ってなかったわよ」

「参加者じゃないもの。長瀬源之助、管理側の人間よ」
「あなた、何か知っているの？」
「……」

先ほどの閃光の後、皆さんは必死に討論していて、私と北川は置いてきぼりを食らっています。
しかも、何故か国崎さんは私をじっと見詰めてきます。
やはり私は罪作りな乙女、また新しい男を虜にしたようです。
でも、タイプじゃないので却下、北川の看病でもしておこうかと思います。

目の前では不可視がどうとか結界がどうとか禁呪がどうとか色々と話し合っています。
けれども、私には理解できない話なので北川に膝枕してあげてます。

看病するために膝枕してあげる、やっぱり私って乙女ね。
横の変な視線が痛いけど、やはり私を狙ってるのでしょうか？
とりあえず晴香が見つけた携帯電話でも調べてみますか。図鑑で見た気がするし。
こんなことなら診療所の本棚に図鑑置いて来るんじゃなかったな。
とか何とか考えてると国崎さんが私の方に近づいてきた。
もしかしてこれは、乙女のピンチ？
「その探知機を譲ってもらえないか？」
「へ？」
「その手に持ってるやつだ。北川から譲ってもらう事になってるんだ」
私は何か勘違いしてたのでしょうか？　ボケは北川の仕事だったはずなのに。

696　それぞれの目的へ

「本当に別々に行動するの？」
あの後スフィーちゃんと芹香さんは別々に行動すると言い出しました。
「私の方はこの人にどうしても用があるからね」
「何の用かは知らないが、とりあえず歩きながら話してくれ。俺は今すぐ出発したいんだ」
「それは私も同感、じっとしてるなんて性に合わないわ。まずはどっちを探す気？」
「最初は観鈴、その後に晴子だ」
「じゃあね。二人見つけたら合流するから」
そう言うとさっさと二人は出発していった。
「俺は今から診療所に向うよ。その後はＣＤによるな」
「私はお墓参りして、ＣＤの中身見たら往人さんが見た夢が気になるから西に行くと思う」

「何でＣＤに興味持ってるんだ？　信じてなかったのに」
「機会があれば話すわ、さっさと出発しましょう。また会いましょうね」
「ちょっと待てって、じゃあまた診療所で会おう」
こっちもやけにあっさり出発していった。腰を引き気味の北川が少し情けない。
そしてまた晴香と二人っきりになってしまった。
「じゃあ私達も出発しますか」
「今度こそ寄り道せずに潜水艦を見つけましょうね」

彼らはそれぞれ目的のため分かれた。
大切な人を捜すため、脱出の鍵をＣＤにかけ、自分の勘を確かめるため、亡き人の言葉を信じて。
彼らがまた再会することができるかどうかは分からない。
ただこの島の象徴たる雨は止み、雲は晴れたことだけは確かであった。

697　碁石

「新規データを受信いたしました」
「参加者データを更新いたします」
メイドロボの無機質な声を聞いて、ぱちりと目を開ける。
人は起きた瞬間から、はじめて自分が寝ていたことを理解できる。
そう。私は、まさに寝てしまっていた……ようだ。
楓ほどではないけれど、血圧が高くないせいだろう。起きがけは少々頭の回転が鈍る。
しょぼつく眼をしばたいて、コンピューターに囲まれた円形の一室を見回してみた。
すぐに違和感を覚える。
（……人の気配が、しない）
あの口うるさい梓や、負けないくらい騒がしい詠

美ちゃん、ときおり奇声をあげるあゆちゃん、負けないくらい奇声をあげる繭ちゃん。そんなかしましい面々が揃っているにも関わらず、誰ひとりとして声を発していなかった。奇跡と言ってもいいだろう。とにかく、静かだった。

ほとんどすべての機械が放つ冷却機の運転音だけが、不快なコーラスを奏でて、わずかに静寂を乱している。

（……おかしい）

全員がここに揃っていたはずなのに、私を置いてどこへ行ってしまったというのか。

鈍った思考では付いて行けないほどの急展開に、焦りを感じて頭を振る。立ち上がり、深呼吸をした、その瞬間。

端末の画面に向き合うように座ったまま、だらりと手を垂らして伏している誰かが見えた。

（……詠美ちゃん!?）

駆け寄り、姿を確認すると、やはり彼女だった。

あとは探すまでもなく、他の面々が視界に入ってくる。詠美ちゃんの使用する端末の座席に、もたれかかるようにして倒れている梓。そのまた後から、折り重なって倒れた繭ちゃん。加えて烏。さらに猫。

少し離れて、あゆちゃん。辺りには、黒い何かが散らばっている。

（……碁石？）

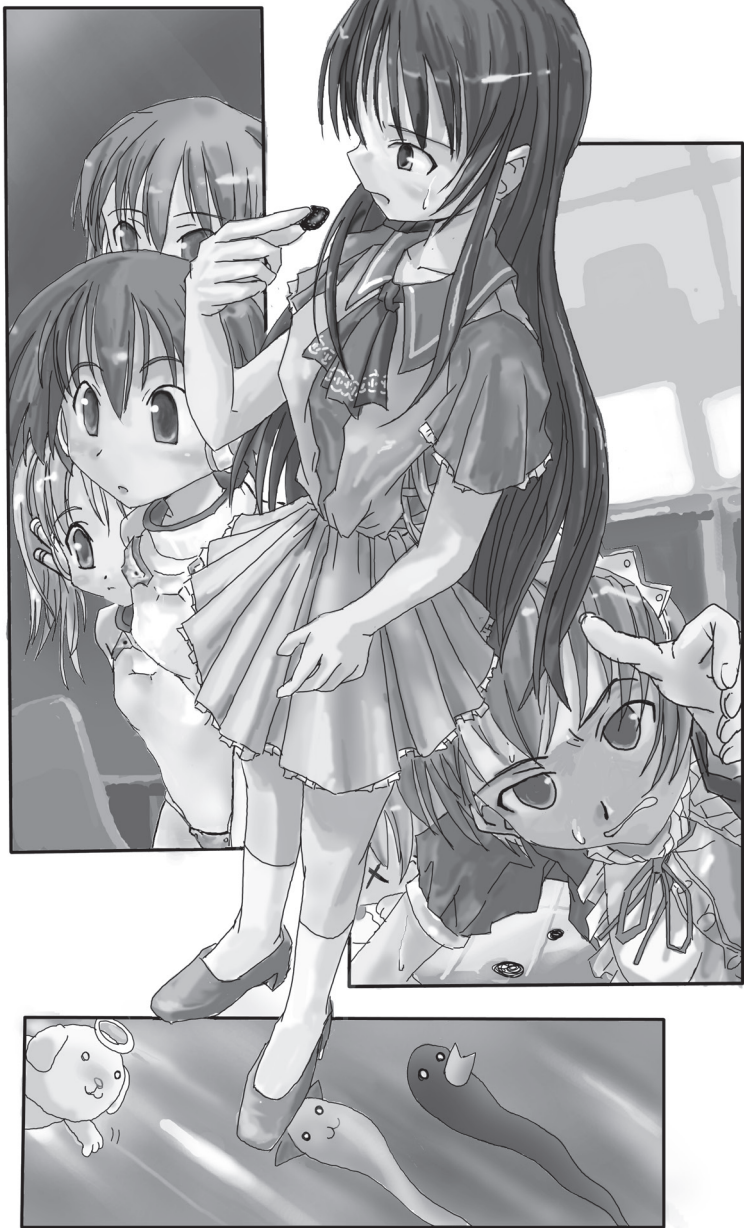
銀色のトレイがひっくり返っており、そこを中心に黒い固まりが拡散していた。

一つ、拾ってみる。匂いをかぐと、炭のような臭いに混じって、かすかにアーモンドの香ばしさが感じられる。ひょっとしたら、食べ物なのかもしれない。

直径二センチ程度の碁石状の何かを、齧ってみることにする。

「ち……千鶴姉っ！　それを食べたら駄目だっ！」

ごっくん。

苦しげな梓の声を聞くと同時に。

わたしは、碁石を飲み込んでしまっていた。
……怒っている。
あれは、かなり怒っている。わずかだが、千鶴姉の白い額に青く血管が浮いてるのが見て取れた。これは間違いなく、危険な兆候だ。
あたしたちは、この椅子だらけの部屋で、なぜか冷たい床の上に正座をして、小さくなっていた。正確に言うと、繭と動物は倒れたまんまだけど。
「……つまり、こういうことなのね？」
千鶴姉が、努めて怒りを抑えながら、状況を確認しはじめた。

『じゃーん！　クッキーだよっ！』
四枚あるはずのＣＤのうち、二枚は手元にあったので、解析はそこから始めた。ほぼ可能な限りの調査が終わったと考えた頃、あゆがクッキーと主張する何かを持ってきていた。
『……なんだこれ』
『……碁石？』
詠美と二人で呆れ果てる。
『うぐぅ、ひどいよっ！　ちゃんと甘いしアーモンドも入ってるんだよっ！』
確かに、そのような臭いがするような気もしないでもない。
……だが本質的に、これは炭と分類するべきだ。
『碁石と言うより、炭だな』
『碁石でいいのよ、だってコレ、かたいわよ』
驚くべき事に、詠美は文句を言いつつ齧ってみていた。
ふと視線をずらすと、あゆが涙目になっている。
（あちゃ……。あたし、こういうのに弱いんだよなー……）
動揺に流されるまま、空中に泳がせた視線が、詠美と合う。二人同時に、決意と観念の頷きを交わす。
（ああ、そうだ。詠美だけを彼岸の地に逝かせるわ

けにはいかない！）
　覚悟を決めて、あたしも齧る。
『うわっ……硬っ！』
　たいやきより先に、あゆには教えてやるべきことが山積みだな、と考えながら。あたしは、炭を飲み込む事に成功した。
　……あとは見ての通りだ。
　どういうことか、全員が意識消失してしまっていた。
　文字通り、彼岸の地に逝くとこだったよ。
（結局、みんな食ったのか……）
　自分も含めて一人残らずお人好しとは、恐ろしくもおめでたい一団すぎて涙が出るね。
　千鶴姉の説教のもと、真実は解き明かされた。
　原因はやはりクッキー（注：作者自称）。
　生地の切り分けに使った刃物に、何かが塗られていたようだ。
（ねえ、梓）
　千鶴姉に説教されながら、詠美が肘でつついてくる。
（一つだけ聞きたいんだけど）
（なんだい？）
（どうして、さっき食べたはずの千鶴さんは……倒れないのよ？）

　そういえば。
　いまや絶好調の演説をかます千鶴姉に、昏倒の気配はちらりとも見えない。
　……地獄の釜か、鉄の胃か。
　きっと、謎な料理は千鶴姉に効果がないのだ。
（なあ、詠美）
（……その悟ったような表情はなによ）
（蛇や河豚が、自分の毒で死ぬか？）
（……うぐぅ。ボクは河豚じゃないよっ）
（（そういう問題じゃないっ！））

思い起こすと、いつだか怪しいキノコを食ったときも、効果がなかった。
裏の裏は表だから、効果がないように見えただけだと、その時は思っていた。
（懐かしいなー、セイカクハンテンダケだっけ？あの時は、初音が豹変しちゃって大変だったよなあ）
（豹変……？）
その単語にちょっとした引っ掛かりを感じ、伏せていた顔を上げる。千鶴姉の後ろで、まだ倒れている動物と……繭が見える。
何かがカチリと音を立て、ぴたりと一枚の絵が出来上がったような気がした。思わず立ち上がり、叫ぶ。
「千鶴姉！　セイカクハンテンダケだ！」
「お座りなさい梓！」
「はいー……」
繭、あんたの豹変の原因が、わかった気がする。
とりあえず、千鶴姉の説教が終わるまで、おあずけのようだけど。
（あのー……梓さーん）
ぽややんが遠くから小声で呼んでいる。
（ＣＤ二枚分の解析、だいたい終わりましたけどー……）
ああ、悪かったね。
あたしたちが寝ちまったから、結局あんた一人でやってたんだね。
でも、だめだ。
あんたの結果発表も、千鶴姉の説教が終わるまで、おあずけだよ。

698　そしてここから始まるストーリー

「ん？　ここはどこだ？」
気がつくと俺は草原にいた。

おかしいな？　いつの間にこんなところに来たんだ？
何か記憶が曖昧だ。
落ち着いて思い出してみよう。
確かあのあゆとか言うガキが作った碁石（本人曰くクッキーらしい）を食べたところまでは覚えているんだが……。

バッサ、バッサ。
その音で空を見上げるとそこにはそらがいた。
「おう、鳥。ここがどこだか分かるか？　確か俺たちゃ建物の中に居たはずだよな？」
「ええ」
「それが何でこんなところにいるんだ？」
「私にも詳しいことは分かりませんが、私が人間から話に聞かされた【死後の世界】という所かもしれんませんね」
「何⁉　じゃあ俺達死んじまったってのか⁉」
「可能性はあります。あの碁石のような物に毒物が付着していたのかもしれませんね」
「クソッ！　こんなことで死んじまうとは情けねぇ！　これじゃポテトの野郎に笑われちまうぜ！」
「全くだな。情けない」
後ろから声をかけられた俺は驚きのあまり声も出なかった。
それはこの世に存在するはずのないヤツの声だった。
「ほう。あなたがここに居ると言うことは、やはりここは死後の世界というやつのようですね」
「ああ。ま、正確に言えばその入り口だけどな。それにしても……情けないな、ぴろ」
「何だと！」
「フン。情けないヤツを情けないと言って何が悪い。それでも俺が生涯唯一認めたライバルか、貴様は」
「この野郎、言わせておけばいい気になりやがって！　丁度いい！　ここで決着つけさせてもらう

ぜ！」
「断る」
「おい！　逃げる気か！」
「今の貴様と勝負する気は無い。第一貴様らにはまだやるべきことがあるはずだろう？」
「ポテト！　お前、何さっきから訳の分からねぇこと言ってやがる！」
「落ち着きたまえ、ぴろ君。ポテト君、我々はすでに死んでしまった身だと思うのだが？」
「ああ、そのことだがな。お前らはいわゆる仮死状態ってやつになってるだけだな」
「何⁉　じゃあ俺達まだ死んでないの⁉」
「ま、そういうこった」
「そういうことか……。ん？　そう言えば、ポテト。お前さっき変なこと言ってたな。やることがまだあるとか何とか。ありゃどういう意味だ？」
「どういう意味も何も言葉通りだ。お前、そんなことも分からないのか？　やっぱり馬鹿だな」
「テメェ！」
「いいか？　お前らは俺と違ってまだ生きてるんだ。この俺が命張ってあの人間どもを守ったんだ。お前もそのくらいの根性見せてこい、ぴろ！」
「……」
「貴様との決着はその後でゆっくりつけてやるよ。まぁ、俺が勝つに決まってるがな」
「ポテト！　その言葉後悔するなよ！　今度会うときにはきっちりぶちのめしてやるからな！」
「ああ、せいぜい楽しみにさせてもらおうか」
　突然周りの世界がぼやけてきた。辺り一面に霧がかかったみたいでポテトの姿もはっきり見えなくなった。
「何だ⁉」
「どうやら時間のようだな。あ、そうそう。もう一つ頼みがある」
「……彼女のことですね？」

「ああ。さすがだな、鳥。話が早い。あいつのこともよろしく頼むぜ」
「ケッ。相変わらずお人好しなヤツだな、お前は。死んだ後まで面倒かけやがって。まぁ、このぴろ様に任せときな」
「ああ、頼んだぜ、相棒」
その言葉を最後に俺の意識は光の中へと消えていった。

『……ん？』
『やぁ、ぴろ君。気がついたみたいですね。どうやら元の世界に戻れたようですよ』
『ああ、どうやらそうみたいだな』
そこは気を失う前と同じ景色だった。あっちの方では人間どもがわめいてやがる。
全くうるせえやつらだ。
『……何やってるの？　あなた達。こんなところに倒れ込んで』
『あぁ、それは色々と訳が――って何でお前がここに居るんだ⁉』
『やぁ、新入り君。どうやら私達の後を追ってきたようですね』
『……』
『どうやらその様子だとポテト君が死んだこともご存じのようですね』
『……来る途中で、見つけた』
『そうか……』
『……だから言ったのに。仲間なんて薄っぺらいって』
『おい！　何て事言いやがる！』
俺は思わず叫んだ。
『お前にあいつの何が分かる！　あいつはあいつが仲間と認めた女をかばって死んだんだ！　それを否定することは許さねぇ！』
『……』
『まぁまぁ、ぴろ君。落ち着いて』

『これが落ち着いてられるか！』
『彼女もそのことは分かってるはずですよ。でなければ私達を追ってここまで来たりはしないでしょうから』
『……』
『新入り君。何が君をそんな風にしてしまったのかは私には分からない。でもいい加減自分の殻にこもるのはやめたらどうです？』
『……でも、きっとみんな私の側からいなくなる。現にあの人も居なくなったじゃない』
『確かに彼、ポテト君は死んでしまいました。でも彼はあなたのことをとても心配していましたよ』
『……え？』
『ああ、俺達はあいつにお前の事を頼まれたんだよ』
『……どういうこと？』
『どういうことも何もそのまんまの意味さ。ま、そういうわけだからさ、お前が嫌がっても無駄だぜ』
『悪いですけどそういうことです、新入り君。野良犬にでもかまれたと思って諦めて下さいな』
『お！　上手いこと言うな！　確かにそうだ！　犬に頼まれたからな！　ハハハ！』
『別にそういう意味で言った訳では無いのですけどね。まぁいいでしょう』
『……』
『ん？　どうした？　新入り？』
『……ぽち』
『ん？』
『私の名前。そんな変な呼び方しないでくれる』
『ああ、んじゃ改めてよろしくな、ぽち』
『……イヤ。誰があなたたなんかとよろしくするもんですか』
『ああ！　そりゃどういう意味だ！』
『どういう意味も何も言葉通りの意味よ』
『テメェ！』
『フッ。どうやら彼女も吹っ切れたみたいですね。

これで君の頼みは叶えましたよ、ポテト君』
(なあ、あの動物達何騒いでるんだ?)
(知らないわよ! そんなこと!)
「そこの二人! 真面目に聞きなさい!」
「「はいっ!」」

699 沈黙

ソコは沈黙が支配していた。聞こえるのはただ風の音のみ。小屋の前に作られた三つ並びの十字架の前で黙祷するスフィー。そして、それを離れたところからただ見守るだけの北川。
やがて、スフィーは立ち上がって歩き出す。その後をついていく北川。
「ありがとう」
ただ一言、それだけで充分だった。二人は同じ傷を持つ者だから。

静かだった、拍子抜けするほど静かだった。
二人の話ではかなりの人数が寄り添って過ごしている筈なのに全く人がいなかった。
「誰かに襲撃でもされたのかな?」
「それはないと思うぞ。争いの形跡は無いし、荒された様子もなさそうだし」
水や食料、アイテム図鑑にパソコンを置いていっている事からまた戻ってくる気だということは簡単に想像できた。
全部の部屋を見たがやはり隠れている人や留守番をしている人は見つからなかった。
正直、ベッドに生々しい痕跡のある部屋を調べるのはちょっと抵抗があったが。

ソコは沈黙が支配していた。聞こえるのはただパソコンの動作音のみ。パソコンの前で悪戦苦闘する北川、そして、離れた場所でその様子を静かに見ているスフィー。

二人の頭の中にはただ一つの言葉がよぎっていた。
『誰だが知らないが（けど）、後始末ぐらいしろよな（てよ）』
この沈黙はＣＤが解析できるまで続きそうだ。

700　選択

「おや、目覚めましたね」
「……！　……!!」
「……やはり、祐介君を殺した事が僕を狙う理由だったんですね」
「……」
「そういう恨みがましいこと言わないでください。一応、僕はあなたの命を救ったんですから」
「……」
フランクが覚醒した場所はベッドの上だった。だが、布団は敷かれていないために板張りの上に寝かされていた。
辺りを見渡すとカーテンで仕切られて視界が遮られている。そして、消毒液のアルコール臭が鼻をつく。フランクはここがどこかと少年に聞いた。
「ここは『学校』と呼ばれるところです」
「……」
フランクは得心した。だが、別の疑問も浮かぶ。
「……」
少年は少し笑みを浮かべて答える。
「まあ、確かに骨の折れる仕事でしたが……。医療機器があるところは他に知らなかったんです。それと決別です」
「？」
そう言って少年は笑みを消す。そして、今までのどこか余裕ある態度を無くして小さく呟く。
「ここでね、少女が死んだんですよ、埋葬したのはつい先ほどですが……」
「!!」
フランクの目が大きく開かれる。それは無論、死

者がいたところに寝かされていたからではない。
「その子は、心臓を患っていました。それでも必死に生きようとしてましたよ……。でも、参加者の一人に殺されてしまった」
「……」
そして、二人の男は目を瞑る。かつてこの部屋で死んだ少女に黙祷を捧げているようにも見えた。
管理者といえどフランクも人の子であった。人の死を悲しみ、悼む心も持っている。そう思う心はこの殺人ゲームを管理することが決まったとき、本人は捨てたと思っていたのだが……。
そして、しばらくして、また少年が話しを続ける。
「僕はそいつが憎かった。彼女の敵をとってやりたい、そうも思った。だけど、そいつも死んだようです……」
「……」
「そして、僕は悟りましたよ。たとえ、人殺しでも、参加者は皆、被害者であると。真に恨むべきは……」
そう言って少年は身にまとっていた偽典をフランクに向かって投げつける。
「管理者だと」
少年の手から放たれたものは、フランクの頬を浅く切りつけ背後の壁にささった。
「だけど、あなたを殺したりはしません。あなたは責任をとらなければいけない。この島に死んでいったすべての人々に対する責任を」
その言葉に対してフランクは首肯する。言われるまでもないと。
もはや、フランクに少年を殺せる好機は来ないだろう。ならば、生き恥をさらしても死んでいった者たちへの責任をとるのが役目だと、フランクは思った。
少年は話を続ける。
「高槻を含めた管理者を打倒する。そして、この馬鹿げたゲームを終わらせる。それだけに邁進してれ

ばいい。そう、思ったんですけどね。そうはいかなくなってしまったんですよ」
「？」
「植え付けられた疑似人格。それが消えてしまったからです」
「……！」
フランクの額に玉のような汗が浮かぶ。少年が言ったことが真実ならば、事態は最悪の方向に転がっているからだ。
「それともう一つ。今となっては神奈を守るために手段を選んではいられなくなりましたからね」
「……？」
いぶかしげな顔をするフランクを一瞥して、少年は言葉を繋げる。
「あなたが気絶している最中に、大きな魔法が発動しました。おそらく、神奈を誅するために」
「……!?」
「ええ、神奈は生きていますよ。僕が生きていることがその証拠です」
フランクはうつむいて、そうか、と呟いた。そして、その目から涙がこぼれ落ちる。
「残念でしたね。何人もの人々がこの島で殺し合い犠牲になったのも全部神奈を滅ぼすため。そのすべてが無駄になってしまったのですから」
その言葉を聞いたとたん、フランクは立ち上がり少年にくってかかる。胸ぐらをつかみ、少年を持ち上げる。少年はこの重病人にこれだけの力があるのか、となぜか感心した。
「……！　……!!」
フランクは早口でまくし立てる。この男がここまで饒舌になるのか、と少年は場違いなことを考える。
やがて、落ち着いたのかフランクは少年から手を離した。しわくちゃになった襟元を直しながら少年は言う。
「それでですね、今までのことを踏まえた上で、一つお聞きしたいことがあるんですよ」

「……」
「まあ、そう言わずに。聞いておかないと後悔するかもしれませんよ？」
「……」
フランクは憮然としながらも頷く。
「じゃあ、言いますよ。僕はこれから参加者の中で魔法を使える人を捜そうと思いましてね」
フランクの顔に緊張が走る。
「それで、管理者のあなたなら知っているでしょう？　僕も参加者のことは大会前に少しは教わったのですが、魔法に関しては教えてくれなかったので」
少年をジョーカーとして参加させるにあたって参加者の情報をリークしたが、管理者側は万が一を考えて魔法の使い手の情報だけは伝えなかった。それは、神奈に対抗するのにもっとも有効な手段が魔法であるからだった。もし、少年が疑似人格を失えば魔法使いを狙う……。その管理者の危惧が現実のものになった。
「……」
フランクは首を横に振る。当然だ。
「そうですか……。残念です」
少年は落胆しているように下を向いた。だが、それが演技であるというのはフランクの目にも明らかであった。
「では、仕方がありません。不本意ですが、残った参加者を全員殺さなければなりませんね」
「!!」
フランクは自分の耳を疑った。先ほどの少女の死を悼んでいた少年とは同じ人物なのだろうか？
「だって、そうでしょう？　あなたは魔法使いですかって、一人ずつ聞いて回る訳にもいきませんし」
「……」
はったりだ。そうに違いない。それにしては、あまりにも稚拙だ。そう、フランクは思った。だが、次の言葉がフランクの心臓に見えない槍を突き刺し

た。
「ですから……。あなたの甥子さん。七瀬彰さんでしたっけ？　彼も手に掛けなくてはいけなくなってしまうんですよ。さすがにこれ以上あなたに恨まれるのは嫌だと思って聞いてみたんですが……。やっぱりダメですか？」
「!?」
そして、フランクは慄然すると共に、すべてを理解した。これは復讐なのだと。
少女が死んだという話しも、管理者の責任も、少年の疑似人格が消失したことも、すべてを話した上で悪魔の選択を少年は強いた。どちらを答えてもフランクの心が傷つき後悔するように仕向けた。
YESと答えてもNOと答えても少年は言ったことを実行する。それは間違いないだろう。
YESと言えば少年は魔法使いたちを殺す。それは今までの自分たちの行為を無に帰することになる。彼女らのことを教えることは、管理者にとってもこの島で散っていった者たちに対しても大きな裏切りになってしまう。
しかし、暗に少年は彰を襲わないと言っている。少年もわざわざ無駄に戦うリスクを負うとは思えない。だから、その密約は守られるであろう。
NOと答えれば少年は彰を狙う。そして、彰のこめかみに偽典を突きながら、また自分に強要する。魔法使いは誰か？　と……。少年にとっては遠回りになるが結果は同じだ。それに彰は度重なる戦闘で満身創痍だ。彰をこれ以上戦闘にさらすことはフランクとしても避けたい。
しかし、監視所で見たときに彰は多くの仲間たちと一緒にいた。もしかしたら少年を返り討ちにできるかもしれない。だが、少年を倒したとしても相打ちで彰が死んでしまったら元も子もない。
どうする……。
時計の針が三時を指したとき。フランクはようやく口を開け、

「……」
と、言った。

701　木と風の祝福

降りしきる雨の中、汗と埃にまみれて、目の前の機械と外を交互に眺めつつ、彼らは長らく作業を続けていた。
　雨の降り込みを防ぐために窓を開けることもできず、熱気と湿気がこの狭い一室の中に充満しており、背後にただ一つある鍵の壊れた扉だけが、換気口になっていた。
「どう思う、月代」
「(･∀･)うーん……やっぱり外のスピーカーが、変なんじゃないかな?」
　鍵を破壊して侵入したのは、坂神蝉丸。
　そして常に彼と共にある謎のお面は、もちろん三井寺月代だ。
　二人は、消防団の詰め所にいる。
　この建物のすぐ近くで昼の放送を聞いたにも関わらず、声の聞こえた方向が違っていたため、あまり期待せずに調査を開始した。
　壊れたシャッターを引き上げ、古びた南京錠を掛け金ごと破壊し、放送室へ侵入する。
　即座に施設管理のズボラさに遭遇する羽目になった。半ば朽ちて倒れた木の椅子。曇り硝子のように不透明な、ひびの入った窓。積もった埃と、ほうぼうに張られた蜘蛛の巣が、長らく使われていないことを雄弁に物語っている。
　とは言え、常時使われている施設は、逆に言うと兵士がうろついている可能性があり、たいへん危険でもあるので、ある意味これは好都合でもあったのだ。
　配線図を手にとると、二人は蜘蛛の巣をはらい、軽く掃除をして、放送施設の配線をくまなく調べ、また電気が通ってるかどうかを確認し、ようやく内

部的問題はないと結論を出した。
「(・∀・)あとは櫓の上の、スピーカーそのものだね」
数時間に渡る、埃と蜘蛛の巣と配線との戦いに疲弊した月代が、ほう、と息を吐きながら、隣接してそびえる火の見櫓を眺めつつ結論する。
「そうだな。風雨に晒されて、配線が切れたくらいだと良いのだが」
月代と同じように外を見ながら、蝉丸は答えた。
雨の降りは、ときおり集中的に強くなり、遠くないどこかで雷が大地を叩いているのが聞こえてくる。気分的に、高いところへ登りたいとは思えない環境だった。
そのとき。あたり一面が、真っ白な光に包まれた。
「(・∀・)せっ！　せみまるっ！」
「むうっ……！」
一瞬爆撃かと思い、伏せてしまったのは、職業軍人の悲しい性だと言える。続いて思いついたのは落雷だったのだが、それに思考を寄せる間もなく、大きな変貌が訪れていた。
――光が消えると共に、嘘のような青空が広がっていたのである。
「(・∀・)うわ……うっそ……」
「……ふむ」
呆然とする月代。少なからず驚きつつも立ち上がる蝉丸。
「(・∀・)……蝉丸？　これ、どういう事なの？」
「まるで解らん。……だが、櫓に登って作業をするには、好都合じゃないか」
唇の端だけを僅かに上げて、不敵に蝉丸が笑う。そして躊躇うことなく、すたすたと外へと向かった。
「(・∀・)わあ、ちょ、ちょっと待ってよ！」
埃を舞い上げながら、慌てて月代も立ち上がる。
走ろうと思って工具につまづき、あたふたしたまま工具箱に詰め込む。いいかげんながらも、どうに

か蓋を閉じて丸ごと抱え、早くも息を切らせながら後を追う。
いつになく素早い判断で行動する蝉丸に、驚きを感じていた。
扉をくぐり、階段を駆け降りる。シャッターを抜け、すっかり明るくなった屋外へ出ると、火の見櫓へ向かう蝉丸が見える。
「(･∀･)せみまるっ！」
半ば飛びつくように、半ばぶら下がるように、月代は腕を絡ませる。
「む？」
それでも、ほとんど揺らぐことなく歩みを進める蝉丸が頼もしい。満足感を味わいながらも、置いていかれた恨みごとを漏らしてみる。
「(･∀･)もう、工具も無しにどこ行くの」
「月代が持ってきてくれると、思っていた」
「(･∀･)う、うわ……」
……くらっときたのは、太陽のせいだろうか？
月代はそんなことを考えながら、わけもなく赤面した。あの放送を聞いてからというものの、今の天気と同じくらいに、蝉丸は変わった気がする。

ほどなく二人は、火の見櫓の頂上に到達していた。
吹く風が涼しげで、先ほどまで居た狭く暑い一室とは、天地の差がある。
視界は広く、雨宿りを終えた鳥たちが羽ばたいていくのが、あちこちで見える。
柵に足をかけたまま、頭上のスピーカーを点検する蝉丸を見上げつつ、月代はぽつりとつぶやいた。
「(･∀･)蝉丸……なんか、変わったね」
「……嫌か？」
「(･∀･)ううん、嫌なわけ、ないよ」
小さく答えた言葉の端が、風に揺れる木々の声に掻き消されていく。
その短い会話を最後に、二人は黙々と修理を続けた。不用意に通した配線が強烈なハウリングを引き

起こし、耳鳴りと共に修理の完了を確信した頃には、かなりの時間がたっていた。
　吹く風と、木々の声だけが、変わらず二人を包んでいる。
　月代は、この島に不似合いなほどの幸福感を味わっていた。
……そしてきっと、蝉丸も。

702　姉の立場として

　北川が解析している間、私は昔のことを思い出していた。
　私の母は若くない。だから、両親は婚姻の儀をすませると、すぐに後継ぎをつくろうとした。それに反して母は流産の連続で、グエンディーナ中は失望に包まれていった。
　だから私が四十を過ぎた母から生まれた時、両親はもちろん、国中が歓喜の嵐だったらしい。母の年齢からいって、私が唯一の子になるであろうと国中から思われていたからだ。実際にはその二年後にリアンが生まれたのだけれど。
　リアンは優秀だった。家族、とりわけ祖父の期待はリアンに向けられるようになった。
　おそらく私の父と母、そして祖父のような人の場合、神さまからの授かりものはより聡明な方一人で充分だったのだろう。（事実、嫡子が継ぐという掟を祖父は改めようと考えてたらしい）
　そんな環境では姉妹仲は険悪だと思うでしょう？　だけど私たち姉妹はめったに喧嘩もしなかったし、憎みあうこともなかった。
　何故かリアンは私に懐いてしまったからだ。
　リアンは両親や祖父にかわいがられてる時も常に私の方に気を向けてたし、私の悪口を聞いたら怒って部屋に閉じこもり、一日は出てこなかった。
　そうこうしている内に私とリアンは大の仲良しとなった。

家族にとっては皮肉なことだったが。
私たちは遊ぶ時は何をするのも一緒だった。
ままごとから始まり、
川遊び。（リアンは泳ぎが苦手だったけど）
虫集め。（リアンは虫が嫌いだったけど）
魔法を使ってのいたずら。（リアンは反対したけど）
移動魔法による世界一周旅行。（リアンは泣いて反対したけど）
もちろん寝るのも一緒だった。（実は私がグエンティーナを出る直前まで続いていた）
私にとってリアンはカケガエのない存在だった、だから今でも死んだなんて信じられない。
なんでこんなこと思い出したのかわかる？　あまりにも悲しすぎるから、忘れようとしていたのに。
あそこのベッドの血のせいだよ。
たぶん愛しあってる二人が使ったんだろうね。愛する人と会えたんだろうね。そして結ばれたんだろうね。
羨ましいよね。
あなたにも好きな人はいたのにね。
会いたかったよね。
「……けんたろのばか」
スフィーは呟いた。涙を押し殺しながら。
八つ当たりだとわかっていても。
「……やっぱ子供なんだな」
それを見て北川は呟いた。少しの同情を抱きながら。
ちょっと誤解入ってるけど。
解析は続く。

703　綱の上の踊り手

例えば、怒りに我を失いながら、悲しみに涙を流す。例えば、憎しみに身を焼きながら、愛しさに心

を震わせる。
　相反する二つの感情の両方を激しく行き来する。
あなたは、そんな境遇に陥ったことがあるだろうか？
　……いっそ堕ちてしまえば、かえって楽なのだと思う。
　どちらかに決める事さえできれば、悩む必要などないのだから。

　かすかに目を開く。
　何かに顔を押し付けているのは、うつ伏せに寝転んでいるせいだ。
「くぁ……」
　くるりと仰向けになり、目を開くと同時に大きくあくびをして、ぐっと伸びをする。見上げる空の晴れやかさと、記憶に残っている雷雨との落差に、少なからず途惑ってみる。
　私は、あの観鈴とかいう子に怒りをぶつけて、彼女を放り投げたあと、振り向きもせず去ったはずだった。
　それから何があったのか、ちょっと整理してみる。
　脚の痛みも感じなくなって、彼を探すために森の中へと入って……。
「かみなり、だよ」
「わっ！」
　突然目の前に被さるように現れた顔に、心臓が止まりそうなくらい驚いた。一方的に、しかも乱暴な別れを告げたはずの観鈴が、そこに居た。
「あっ、あんたっ！　どっから出てきたのよ！」
「にはは、ずっとここにいた」
　疑問と共に、びしっと突き出した指を間抜けにおろしながら、冷静に状況を確認すると、どうやら気を失ったまま、観鈴に膝枕されていたようだった。
　濡れた木々の間を駆け抜ける風が、涼しくて気持ち良い。

いつまでも膝枕をされていては、言いたいことも言えないので、無理矢理体を起こすことにする。再び脚の感覚が戻ってきており、痛みに顔をしかめながら聞いてみる。
「……雷って、何がよ？」
「どうして倒れたのか、知りたいみたいだったから」
そう言って彼女は、傍らに倒れている巨木を指差した。ぷすぷすと燻るそれは、落雷で倒れたものなのだろう、見ると鞄が枝に引っかかったままだった。
「倒れてきた木の、枝にぶつかって一緒に倒れたんだよ。ほっといたら一緒に焦げちゃいそうだったから、観鈴ちん頑張って引っぱったよ」
「そっか……助けてくれて、ありがと」
あんなにも怒っていたのが、馬鹿みたいに思えてくる。
たしかに、彼女たちに出会った頃から、今の惨劇が始まったと言ってもいい。だからといって彼女のせいではないのも、解っている。
……どうして私は、あんなに怒ったのだろう？
思考を巡らせて、過去の情報を吟味してみる。
すると、変わり果てた天気のせいなのか、随分と昔のように思える、少年の言葉を思い出した。
『君たちは姫君とつながっている。姫君の分身が君たちの中にある』
『姫君の意識はいずれ君の我を飲み込むだろう』
……そう、〝姫君〟と彼が呼んだ存在。
私はその声を聞いていた。
『――脆いものよの』
あの声の主が、私を喰わんとする〝姫君〟なのだ。

相反する自意識に押し潰されていた、私の心の間隙を縫うように、彼女は現れたということだ。
　いま正気を保っているのは、たまたま事故に遭ったショックか何かなのだろう。それがラッキーだったかどうかは……解らないけれど。
　毒気の抜けた意識が、自然と肩の力を抜けさせ、私は軽く鼻から息を吐いた。
　ふと手を見ると、爪の間に違和感があり、全ての指先が赤く染まっている。
「なんだろ、これ」
「……な、なんでもないよ！」
　慌てて観鈴が、自分の腰のあたりに手を当てた。
あまりに不自然な仕草に、ちょっと腹を立てて追求する。
「なんでもないって、どうしてあなたが判るのよ？」
　無理矢理捕まえて、隠した彼女の背中をこちらへ向ける。

　――血だらけだった。

　……つまり気を失って、うなされている間に、私がやったのだ。おそらく彼女の膝に顔を埋めたまま、腰に手を回して力の限り引っかいたのだ。
「あなた……ば、馬鹿じゃないの？　そんなだから、へちょいって言われるのよ」
「が、がお……。だって、苦しそうだったから……」
　じゃあ、あなたは苦しくないの？　……と言おうとしてやめる。聞くだけ無駄だ。この子は、そういう定規の持ち合わせが全く無い、稀有な存在なのだろう。
「光がね」
　気恥ずかしい感謝の気持ちと、呆れた脱力感が私を無口にしていたが、かわりに観鈴が話し始めた。
「……ひかり？」
「うん、ぱあって光が広がって。雨も土砂降りだっ

たのが、綺麗に晴れたよ。それからずっと、気持ち良さそうに寝てた」
「……そ……っか」
どうやら、偶然では無かった。
私のあずかり知らぬところで、何かが〝姫君〟を押し戻したようだ。少年という〝姫君〟の勢力があるように、それに敵対する何かが存在するのだろう。しかし、それは私にとって好都合とばかりは言えない。
何故なら私は、彼に約束したからだ。
『あなたを助けるわ。それができないなら。あなたを殺してあげる』
『そうだね。君ならそう言うだろうと、思っていた。強いよ、確かに君は』
彼を、助けなければならない。
自分を見失うことなく、失われた彼を救い出す。

限りなく絶望的な目標を達成するために、私は立ち上がる。
「私、行くわ」
「え……」
当然のことだが、私の思考に付いてこれない観鈴は、この切り替えに理解が及ばないようだ。
だから私は、手をさしのべる。
それが精一杯の、感謝の気持ち。
「あなたも、一緒に来るでしょう？」
「にはは、ふぁいと、だねっ」
殺意の巨大な影と、希望の狭い光の小道の間。
私は、境界線上を、危うい足取りで歩いている。
それは、命綱の無い綱渡り。
私は激しく冷や汗をかきながら、踊り、笑う。

私の消える、その日まで。

704　壮大なムービー

「あ〜、やっぱここだよ……」
『パスワード：実在する魔法の国の名は？』
前の解析の時もここで詰まった。
なんとかこれを回避しようと頑張っているのだが……。
「くそー……。回避できねー。適当に入れまくるしかないのか？」
それが非常に非現実的な方法であることはわかっている。
だが他に思いつかない。
「ねぇ、どうしたの？」
スフィーが北川の後ろから覗きこんだ。
「あ？　お嬢ちゃんにはＰＣわかんないだ……」
「なんだ簡単じゃない。グエンディーナよ」
沈黙が訪れる。
「は？」
「だからぐ、えん……」
人差し指だけで、カタカタとキーを押すスフィー。
入力ボックスに次々と文字が表示される。
『ｈ＠５ｙ』
再び沈黙が訪れる。
「むきーーーーーーー!!　なんでよ!!」
「いまどきカナ入力かよ……それで？　グエンディーナ？」
――カタカタカタ……カタン！――
『ＢＩＮＧＯ!!』
「うお!!　マジ!?　ナイスだスフィー!!」
「え!?　え!?」
自分を抱きしめてくる北川に、あたふたとした態度で応対する。
「これで長年にわたるＣＤの謎が解ける!!」

画面いっぱいにMedia Playerが開かれる。
流れ始める壮大なムービー？
画面に！
『へのへのもへじ』が現れた。
三度沈黙が訪れる。

「わしは長瀬一族の偉大なる長。長瀬源之助じゃ。スフィーよ、リアンよ。よくぞ、ここまで来た！断っておくが、きみたちがこれを見るころには、わしはもうこの世におらんだろう。それからもうひとつ。この動画のアバターの顔が少し適当になってしもうた。時間が無かったので許して欲しい。あまり気にしないように！」
――適当すぎだった――

「さてスフィー、リアンよ。もしかしたらお前達ももう勘付いておるかもれないが、この大会は、かつてグエンディーナの大誓約で使われた禁呪を使う儀式として執り行われておる。能力者の魂と心、この二つを触媒にして、莫大なエネルギーを生み出す禁呪。それを用いてでも滅ぼさなければならない対象、それが『神奈』だ。やつは――」

なにやら壮大な話が展開されているようだが、北川にはなんのことやら『はぁーサッパリサッパリ』である。
だが話は続く。
例え北川とスフィーの背中に武器が突きつけられたとしても。
「このCDを入れて六枚のCD集めろ。それを岩山の施設で使えば禁呪が再現できる。守りのメイドロボもお前達の命令なら……」

705　真実の明暗

気の早い鳥たちが、森へと帰っていく。

たったいま抜けたばかりの森は、これから鳥たちのねぐらとして、静かに繁盛するのだろう。草原を横切り、更に森を通り抜けた間、何者にも遭遇しなかった。
ただ鳥だけが、彼の視界の中に生きるものだった。
(まいったな……)
まばらな鳥の編隊を、とぼけた顔で見上げながら、少年は思う。
そして、ぽりぽりと頭を掻いた。
正直言って、戦力は低下している。先ほどの魔法が、姫君に影響しているせいかもしれない。魔法の影響はやがて消えるだろうが、消えたら消えたで、身体にかかる負荷が強まるだろう。
どちらにしても、ドックに突入した時のような無茶はできない。
(もう少し、からめ手から攻めるべきだったかな?)
少しだけ、反省してみる。情報は、真に必要な物だけでなくても構わなかったのだから。
きっと長瀬に連なる者ならば、現在どの程度の勢力が存在しているかも知っていただろう。むしろ彰に直接係わり合いのない情報ならば、安売りしてくれたかもしれないな、と過去を振り返る。

沈黙の続く一室で、時計の針がかちりと音を立てて、三時を示した。
発声することを忘れたかのように、沈黙を保持しつづけた男が、ようやく口を開いた。
「……知ったことか」
長い長い迷いの時を経て、フランクがようやく出した結論は、全てを運命に任せるかのような一言だった。
いや、彰という青年の可能性にかけたのかもしれないし、他の参加者に少年が打倒されることを期待していたのかもしれない。
真意の程は、本人だけが知っている。

少年は、大きく溜息をついた。珍しく、苛立たしさを感じていたかもしれない。
「……強情な人ですね。その上、僕に残りの全員を殺して回れとは、残酷でもある」
「……」
「ああ、そうですね。あなたはもう、用なしです……いえ、殺しはしませんよ。僕が殺すよりも、他の参加者が憎しみも顕わに、あなたへ襲いかかるほうが、姫君は喜ぶでしょうから」
少年は表情一つ変えずに、いや、いつもの微笑すら浮かべて、死の宣告を行った。
「あなたの顔は、典型的な長瀬の一族の物ですからね。さぞ、参加者からは恨まれていることでしょう」
「……！　……！」
再度興奮し始めたフランクを、つまらなそうに見ながら、少年は答える。
「はは、今に見ていろとは、武器も持たずに威勢が良いですね。どうやら、いまだに管理者気分が抜けないと見えます」
「……」
「ああ、連絡が途絶えているでしょうから、御存知かもしれませんが。潜水艦のドックは、僕が襲撃済みですので、あしからず」
少年は満面の笑みを浮かべながら、そう言うやいなや、驚くフランクの後頭部に打撃を加え、その一撃で彼を気絶させた。

……結局、姫君へ捧げるものが一つ増えただけのことだ。
再び執念を燃やして襲い来るのならば、姫君にとって格別のご馳走となる。彼に言った通り、参加者に殺されるのならば、なお良い。
それはそれで良いのだが。
確かに存在する危険を防ぐという意味では、まるで役に立たない。彼も今ごろ、目を覚ましてどこか

へ移動しただろう。
これからのことを、考えなければならない。
『おーーーーーーーーい』
思考の淵に沈みこんでいた少年に、伸びのある甲高い声が投げかけられる。
周囲を窺うが、見渡す限り人影はない。改めて自分の能力に衰えを感じながら、もう一度探してみる。
『ここだよ！　ここーーー！』
かなり遠くだが、高さ十数メートルの鉄塔が立っている。
頂上で手を振っているのは、不思議な仮面の呪いをうけた少女だった。隣には、常に自然体のままでありながら隙を見せない、手練の軍人が立っている。
（……はずれ、だね）
この二人が魔法使いとは思えない。
だが、この島にあって無敵とさえ思えるあの男を、ここで屠ることができれば僥倖だ。あの男を倒そうとする者など、そして倒せる者など、他には存在しないだろうから。なればこそ、自らが手を下す必要性が生じるというものだ。
悪意を深く心に秘めて、微笑を浮かべながら、少年は手を振った。
「久しぶりだね」
櫓の頂上に登るなり、少年は笑いかける。
「ああ、無事で何よりだ」
「(・∀・)ずいぶんボロボロだけど、だいじょうぶなの？」
蝉丸と握手をし、月代の頭をなでる。
当然のように、話題は蝉丸から聞いた地下の騒音の事となった。
少年は潜水艦があったことを告げ、続けて修理中

であったことを告げる。脱出方法のひとつが浮かび、そして消えたことを、蝉丸たちは残念がっていた。
彼らは少年の期待通りに、数人の参加者情報を教えてくれた。さすがにリーダーシップを発揮し始めたらしく、残り人数から考えると多くのコネクションを築き上げている。
視線を外して、景色を眺めるふりをしながら、少年は情報を吟味した。
(ずいぶん多くを仲間にしたもんだ……でも、魔法使いはいないようだね)
おそらく蝉丸を中心とした一団は、生き残り参加者の最大グループなのだろうと思われる。
それならそれで、全員が集中する前に、戦力を削げれば言うことはない。
「ところで、ここで何をしているんだい?」
蝉丸との会話中、暇そうにしていた月代へ声をかける。
「(･∀･)え? あ、放送、するんだよ」
「放送?」
誘いをかけるために、わざと少年は大袈裟に首を傾げる。
「今はもう、爆弾の起爆装置が無効になっているらしいから、呼びかけも可能だと思ったのだ」
蝉丸が月代を補足する。
脱出に向け、更に仲間を増やすための放送の内容を考えていたところだった、というわけらしい。
「街角の一室に、仲間のほとんどは居るはずなのだが……」
腕を組み、蝉丸は考え込んでいた。
あそこは安全性の高い反面、わかりにくい。なんといっても蝉丸たちは、島の中をあまり移動していない。常に共に居た月代と相談したところで、良い場所は浮かんでかなかったため、長い間悩んでいたのだ。
「……学校なんて、どうかな?」
「学校?」

「全ての階とは言わないけれど、電気の付けっぱなしになっている教室もたくさんあるし、何より大きいから、比較的わかりやすいと思うんだ。いくつか戦闘の跡があるけれど……それはどこでも、同じだしね」

蝉丸が慎重に情報を吟味し、何度か頷く。

「反面、危険性が伴うが……それを考えていては始まらない。学校の位置は、説明できるのか？」

「ええ、もちろん」

「では決まりだな」

そう言って櫓を降りようとする蝉丸を、ちょっと待って、と少年は引き止める。

(……ここからが、肝心だね)

心の中で誘導する方向を確かめながら、慎重に、しかしいつもの気楽さを失わないように、少年は発言する。

「せっかくだから、放送内容に加えてほしい事があるんだ」

「む？」

「先ほど空が光って、天気が急変したでしょう？」

「(･∀･)うん、すごかったね」

あの雨の中を移動し、今この空を見たならば、誰しも不思議に感じるだろう。蝉丸たちも例外ではなく、少年に謎解きを期待する眼差しを送った。

「馬鹿馬鹿しいと思われるかもしれないけれど、あれは魔法なんです」

少々気が引けているような、自信に欠けた態度で言い出してみる。だが真実なのだから、しょうがない。

「魔法、だと」

「(･∀･)馬鹿馬鹿しいなんて……そんなこと、思わないよ」

月代は自分のお面を指差して、魔法を肯定する。蝉丸もそれを見て、なんとか自分を納得させた。

「あの魔法には、僕も少々関わりがありましてね。あれは多分、結界をつかさどる者への攻撃だったん

です」
　これは、真実。
「でも、僕は魔法そのものの内容について、詳しくは知らない。だから、もし加わる仲間に魔法使いがいれば、自ら名乗り出て、説明して欲しい。……そう付け加えてもらえないかな？」
　これも、真実。
「結界への攻撃か。確かに希望の道は、何本あっても困らないからな」
　蝉丸が答える。
　実際問題として、地下の潜水艦が望み薄となった今、新たな希望は何でも歓迎したいところだ。
　そして少年の言葉に嘘はなく、すべて真実なのだから、疑う事もなく受け入れられた。
「では放送を流すとしよう」
　蝉丸が櫓を降りる。
「(・∀・)はやく降りたほうがいいよ！　ここにいると、音がすごいから」
　続けて降りる月代が、少年に声をかける。
「ああ、今行くよ」
　少年は、声を涼やかな風に乗せ、軽やかに答える。
　まずは、狙いどおり。
　そして、放送が終われば。
　……この二人に、用はない。
　変わらぬ笑みの下に、殺意を秘めて。
　少年は、再び大地に降り立った。

706　芹香の誤算

　ザッ！　ザッ！　ザッ！
　雨が上がった後の草原を国崎往人、来栖川芹香の二人は神尾観鈴を探して歩いていた。
　が、往人の歩くペースでは芹香には辛いのか、す

ぐに音をあげ始める。
「ちょっ……ちょっと待ってよ……」
「なんだ、もう疲れたのか？　偉そうな口調の割にはバテるのが早いな」
「しかたないでしょ！　性格は変わっても、身体能力は変わらないんだから！　私、今まで箸より重い物を持ったことなんてないもの！」
（……その割にはいろいろ持っているな、あのバッグに）
小屋で北川、スフィーと別れるときに二人が持っていた合計三丁の銃と電動釘打ち機を四人で分けることになった。
「一人が何丁も持つより、一人が一丁ずつ持ったほうがいいんじゃない？」
と、言い出した芹香の提案によってだ。
一番体格がいい往人がアサルトライフルを、
北川はデザートイーグルを、
スフィーはM19マグナムを、
そして芹香が残った電動釘打ち機を持つことになった。
何故か北川は、次々と無くなる自分の武器に涙を流していたが。
「何度も言うが、俺は連れの二人を探しているんだ。とろとろ歩いている暇なんかない」
「だからって……もちょっとゆっくり歩いてくれたっていいじゃない」
「本当は走って行きたいんだ。このペースで歩いているだけ感謝しろ」
「……まあいいわ、それより聞きたいことがあるの」
と、言いながらバッグから参加者名簿を取り出す。
「これはさっきも見せた参加者の一覧表なんだけど……」
「ああ、観鈴と晴子の番号を確認するためにさっき見たやつだな」
「そう、それで重要なのはここからなんだけど

……」
　そう言って芹香はペラペラとページをめくって住人の項目を本人に見せる。
「ここの部分、アンタの能力の『法術』ってやつが『現状まま』って書かれているのよ。だからスフィーと……もういないんだけど結花って娘の三人でアンタを探していたの、結界の制限を受けないアンタなら結界をなんとかできるんじゃないかって」
「……多分なんともならないと思うぞ？　俺の法術を見れば制限とやらが無いのも納得できるだろう。……見てみるか？」
「ええ、是非お願いしたいわ。どの程度のことが出来るのか知りたいもの」
「分かった」
　そういって往人は、ポケットから人形を取り出す。
「随分古びた人形ね……」
「ああ、お袋の持ってたやつだからな」
（……ってことは相当の伝統ある人形なのね、子にわざわざ託すものなんだから。これは期待できそうね）
「……見てろ」
　そう言いながら往人は人形に力を込め、やがてその人形がゆっくりと動き出す。
「凄い、これが法術……」
「ああ、種も仕掛けもないぞ」
「分かっているわよ……で、その人形で何が出来るの？」
「は？」
「は？　って法術って人形を媒体にして力を引き出すんじゃないの？　今見た感じではそう思ったんだけど……それとももっと別な方法なの？」
「いや、俺に出来るのはこれだけなんだが……」
「…………」
　沈黙のあと、恐る恐る芹香が喋りだす。
「い、今なんて……」
「俺の法術は、この人形を動かすことだけだって言

ったんだ」
「じゃあ結界の封印を解く事とかは……」
「出来ない」
「法術を戦闘に使うことは……」
「人形を動かしても相手は倒せないと思うが」
「傷や病気を治したりは……」
「それが出来れば今ごろ俺は医者にでもなってい
る」
　堂々と語る往人。
（つ、使えない……。なんて無能さなの……。これじゃあなにも知らないのも無理ないわね……）
　完全な誤算だった。
　結界に関する唯一の手がかりではないかと期待していた往人が、優秀な法術師ではなく、箸にも棒にも引っ掛からないようなヘボ法術師だったとは……
（ぐ、愚痴っても仕方ないわね。取り敢えず戦闘に関しては手馴れているようだし、早いとこ神尾さんって子を見つけて、スフィー達と合流して今後の対策を練らないと……）
「もう休憩はいいな、遅れた分は走るぞ」
　返事も待たずに、往人は走り出す。
「ま、待ってよもう！」
　送れて芹香も駆け出した。
　往人は気付いていない。人形がうっすらと青白い光を放ち、雪見や智子に人形を動かした時とは違い、いつもの人形の動きになっていたことに。

707　飛空艇の墜ちた地で

　喀血!!　赤黒い液体が大量に舞い散る。
　高度、約二千メートルの暗室。
　薄闇の中で僅かに揺れていた蝋燭も、火を覆うように吐かれた大量の血液によって、全て消え去った。
「まだ……まだ足りぬというのか。神奈よ……」
　源之助は全身の力を失い、大きく音を立てながら前のめりに倒れ込んだ。

外からは派手な爆音が漏れ聞こえていた。
「……もはや……これまでなのか……」
力無い呟きで自問する源之助。
しかし、数瞬後。
顔を上げた彼の瞳は、未だ光を失っていなかった。

――僅かな時を経て。洋上、巡視艇艦橋。

「上空で爆音！　空が、空が晴れてゆきます!!」
「上空の飛空艇より入電。正体不明の爆発により、緊急事態発生！　キャプテン！　飛空艇側はこちらに指示を求めています!!」
オペレーター達が驚きと共に報告を読み上げる。
「状況の詳細を至急報告させろ！　向こうへの指示は長瀬老が下されるはずだ！　向こうのオペレータは何をやっているのか!?」
大木は指示を下し、続報を待つ。
「駄目です、キャプテン!!」
「どうした!?」
「飛空艇より入電！『我操舵不能、我操舵不能。これよりパラシュートによる脱出を試みる』です！」
オペレータの一人が絶望的な表情で大木を見上げる。
「保たせろ！」
――一体、何が起こっているというのだ!?――
訳の分からぬことの多かった今回のプログラム。しかし、此処までの異常事態は大木も予想し得なかった。
「長瀬老はどうした!?　何故つながらない!!」
「それが、向こうも混乱している様子で……。うわっ！」
叫んだオペレータを詰問しようとした大木だったが、相手の視線が上空に向けられたまま釘付けになっているのを見て、その先を追った。

そして……。
「……なぁんてこった！」
呻く大木。
炎に包まれた巨大な飛空艇が、ゆっくりと島の方に向かって落下しつつあるのが見えた。
「一体、何が起こっているのだ……」
遙か上空で人智を越えた作戦が実行されていたことを、大木は知らない。

——同時刻、再び上空。

「長瀬老はどうした⁉」
「それが、お部屋にお籠もりになられたまま、ご返事もされぬ様子で！」
「ならば捨て置け‼　もともと俺は、この話には乗りたくなかったんだ！」
「し、しかし‼」
「ええい、そんなことよりも自分の命を心配したらどうだ‼」
追いつめられた者達の怒号が響きわたる艇内。
刹那、またどこかで大きな爆音が響く。
「駄目です！　どの脱出口も火が回っています‼」
「馬鹿な！　どこか無事なところがあるはずだ！　俺はこんなところで死なん！　死んでたまるか‼」

戸外の喧噪をよそに、源之助は己に課された最後の仕事を片付けるべく動いていた。
「今まで多大な犠牲を払って行ってきた『これ』を、このまま無為に終わらせるわけにはゆかぬ……」
伏したまま、源之助は呟く。
「後事を、誰かに託さねばならぬ……。幸い、今ならば神奈の力が弱まっておる……」
閉め切ったドアの向こうから、脱出を促す声が聞こえる。
しかし、源之助はそれに応えず、自らの血を用い

て床に何かを記している。
「今さら脱出もあるまい……。仮に脱出が叶ったとて……ぐふっ！」
さらなる吐血。源之助の顔色は、いよいよ真っ青になりつつあった。
……もはやこの体、保つまい。……スフィーか、或いは、まだ生き延びている能力者……いや、特殊な能力などなくても……強い、ひたむきな思いさえあれば。神奈に、対抗し得るはずじゃ……
「しかし、『あの情報』を開けるのは、おそらくスフィー以外にはおるまいか……」
スフィー……聞こえるか？　スフィー……！
残された僅かの力を振り絞り、源之助は最後の仕事に取りかかる。

源之助、最期の思い。
届くや⁉　届かざるや⁉

708　間が悪い耕一

「……えちゃ〜〜ん」
彰と葉子の耳が同時に声を拾った。
静寂な森の中にこだまする、少女の声。
「……にいちゃ〜〜ん！　葉子おねえちゃ〜〜ん！」
「彰おにいちゃ〜〜ん！　葉子おねえちゃ〜〜ん！」
耕一の後ろから初音が叫ぶ。
考えてみれば、葉子が知っているであろう人物は初音だけなのだ。そして声を知っているのも。
敵がどこに潜んでいるかも分からないこの島で、声をあげて探すのはかなりのリスクを伴う。
しかしまぁ、これしか方法がないのだからしょうがない。
メイド姿の女装マッチョ。しかも面識無しの前に

あらわれるほど、阿呆な女の子ではないだろうから。
うさぎちゃんではなく、狼さんが現れたときのために耕一は辺りを警戒する。
手にはベレッタ。残してきた武器は丁寧に隠したから、万が一小屋に侵入者がいても大丈夫だろう。
(ＰＣとかも隠しとくべきだったかな?)
まぁ葉子(とうまくいったら彰も)を見つけたらすぐに戻るつもりだ。そんなに時間もかから……。
「ぜんっぜん見つからないわね……」
マナの冷静な一言。
「あはは……」
「笑っても駄目」
「うう……」
「泣いても駄目!」
「むきーー!!」
「怒っても駄目!!」
マナちゃんは冷たい。

雨で消えかけていた、足跡『っぽい』ものを追跡していた……考えてみれば少し行き当たりばったりだったかもしれない。だが、俺たちの指針は他にもある。そう、恋する乙女の勘だ!
「だいたいなんであの時、あんな提案しちゃったのかしら……。私……。考えてみれば全員であの小屋空けるのは致命的な気が……」
「マナちゃん……。ほらほら! もっと元気だそうよ。大丈夫。きっともうすぐ見つかるよ! 耕一お兄ちゃんも元気出して〜」
初音が二人を元気づける。ずーっと声を出しっぱなしでつらいだろうに。
「うう……。初音ちゃん。いい子だ〜。がんばり屋さんめ〜」
初音を抱きしめ、ほお擦り。
「あはは、耕一お兄ちゃんおひげが痛いよ〜」
再会はそこで訪れた。

（やったーばんざーい、あきらくんとようこさんだ〜）
耕一くんの頭の中はひらがなです。
「……。余計な心配をおかけしました」
とは葉子さん。
（……。余計だと思っていた心配は見事に的中しました……）
とは彰くん。
沈黙。
沈黙。
沈黙。
「あ……彰お兄ちゃん。葉子お姉ちゃん。お……おかえりなさい！」
初音ちゃんは耕一くんの腕の中から声をあげます。
ただ、彰くんの目が怖いです。
初音ちゃんは硬直する耕一くんの腕をすり抜け、彰くんに飛びつきました。
それでも、彰くんの目は怖いです。
「とりあえず、小屋に戻ってから話さない？　あんたたちもその様子だと、帰るつもりだったんでしょ？」
マナちゃんの提案。
「そうですね……。軽率な行動であなた達まで危険にさらしてしまったみたいです……。すいません……」
耕一くんを先頭に、一同は小屋に戻ります。
でも、初音ちゃんの手を握りながらも、彰くんの耕一くんを見る目は……。
まじ怖いです。

709　CD

カタカタカタ……。
キーボードをかき鳴らす軽快な入力音が、無機質に室内を埋め尽くしている。

ちょっとしたハプニングこそあれ、私たちは最後のＣＤ解析にまで手を出していた。いや、正しくはこの部屋に居たメイドロボと、詠美ちゃんに任せきりなのだけれど。
私と梓は、その時間を使って参加者のデータを閲覧し、過去ログを調査している。何かが切れてしまったような無軌道ぶりを見せている繭ちゃんを、外に連れ出すことができるようにする、とある物品を探すためにである。
実際のところ、彼女は今の状態が地のようなのだが、はじめて出会ったときの知性的な彼女の方が、この島で生き抜くのに都合がいい。あらゆる危険性を理解しない、今の彼女が外に出ることは、遠からず死を意味することになるだろう。
「お!?　ホントにあったよ千鶴姉！」
「……家に帰れば、簡単に手に入るのにね」
求める物品とは、柏木家に生えていた謎のきのこ。その名もセイカクハンテンダケである。どうやら、もともと天沢郁未という少女に支給されていたようなのだが、効果時間を考えると、彼女と繭ちゃんが別れたあとに、きのこの摂取が行われたと見ていいと思う。
そうなると何らかの理由で、セイカクハンテンダケは繭ちゃんの手に渡ったと考えるのが妥当なようだ。
「うーん、過去ログって見難いなあ」
梓がぼやいている。視界の端で、目覚めて動物を引き連れる繭ちゃんと、それを羨ましげに眺めているあゆちゃんが、楽しげに話し込んでいる。何か円形の機械で遊びはじめたようだ……あれは、なんだったかしら？　どこかで、見た事があるような……気がするけれど……。
「千鶴姉、聞いてる？」
「あ、ごめんなさい。ちょっと、ね」
そうだ……あれは誰かが、持っていたような気がする。

「うん？　ま、いいけど。……この時が、怪しくないかな？」
梓が指摘したのは、崖での一幕。その時の画像を呼び出す。さすがの巨大コンピューターも少々の時間を要したが、やがて二人の少女を救い出そうとする少年の姿が見え、持ち物の鞄が崖下に吸い込まれていった。たぶん引き上げる際の重さを軽減するために、いったん捨てたのだろう。この鞄のどれかに、セイカクハンテンダケが含まれている可能性は高いと思われる。
その後、繭ちゃんは崖上に残り、相沢祐一と北川潤、宮内レミィの三人は崖下で合流し移動している。画像を呼び出せば、大量の荷物と相沢祐一を抱えた、北川潤と宮内レミィの姿が確認できる。
さらにそのあと数人の死者が出て、あの大量の荷物を受け継いだと思われるのは、北川潤の他に、来栖川の令嬢芹香さんと、スフィーという少女の合計三人となる。
「うーん、ここまで追って三人かあ」
「絞り込んだとは、言えないわね」
それでも三人程度なら、希望が持てる人数だ。誰か一人に遭遇できれば、セイカクハンテンダケの所在は解るだろう。
一息ついて、ＣＤ解析中の二人に声をかけた。
「詠美ちゃん、そっちはどう？」
「ふみゅ？　呼んだ？」
再び作業に没頭していた詠美ちゃんが、遠くの端末から顔を出す。
それを梓が軽くあしらう。入力は詠美ちゃんが行っているが、実質的にはメイドロボのほうが解析内容を理解しているからだ。
「詠美、アンタはお呼びじゃないよ」
「なな、な……なによっ！　し、したぼくのくせにっ！」
「げぼく……まあ、いいや。……あたしも色んな呼び方されてるけど、アンタの下僕になった覚えはな

いってーの」
二人は言い争いを始めた。梓の方が口達者なのは、慣れというやつだろう。
とりあえず必要以上に友好を深め合う二人を無視して、残ったメイドロボに尋ねることにする。
「CDの方、どうかしら?」
応じるメイドロボの報告は、表情から予想する限り、残念なものだった。ぺこり、と頭を下げた彼女は、やや緊張した面持ちで説明を始める。
「はいー。まだ詳細は解らないんですけれどー。えーとですねー……まず、これです」
ぽん、と画面に浮かぶ〝神奈備命〟という言葉。
「これが、なんなの?」
「これはですね、番号付きの二枚どちらのCDからも、最初に発見された言葉なんですう。どちらも、同じ目的のために作られた、同じ作用のものらしいんですー」
私は首を傾げる。

「それじゃ、四枚同じ物がある意味は、なんなのかしら?」
はいー、と深く頷きながら彼女は答える。
「今ある四枚限定で考えるとですね。二枚とも、別の座標に作用点を設定されているんです」
「すると四枚とも同じもので、対象座標が異なる可能性が高い、と?」
はいはい、と軽快に返事を返しながら、メイドロボは続ける。
「しかもですね、どちらの地点も……島の外なんです」
口頭での説明と共に、一番大きな画面を指差しながら、彼女はその二点を赤い光点に設定する。島の北西と、南西に赤い光が点灯した。
「とりあえず、この二点が今あるCDが作用する点なんです」
よく意味が解らない。
「……どういうこと?」

「そうなんです。これだけだと、ぜんぜん解らないんですよー」
明朗に答えられても、それは多いに期待はずれな結論だった。
肩を落とす私を諭すように、メイドロボは言葉を続ける。
「あ、正しくはですね。詳細は解りませんが、大きな負荷がかかるらしい事までは、解るんです。タイミングとバランスを取らないと、島自体が大変な事になる、って書いてあるんですよー」
「大変な事？」
再び、はいー、と深く頷いてから、彼女は答えた。
「この作用点にある装置から、何らかのエネルギーが発生するらしいんです。それを効果的に収束させるには、四枚同時に起動しないといけない、と。……もし収束に失敗すれば……この島そのものを対象にして、発生したエネルギーが作用するそうですう」
要するに、全部揃うまでは試してみる訳にもいかない、たいへん危険な装置の鍵ということのようだ。
「単なる来栖川の兵器である可能性はないの？」
私の抱いた当然の疑問に対し、彼女はにっこり笑って、無記名のＣＤを指し示す。
「ところがこれに、タネあかしが入ってたんですよー」
それは、長瀬源五郎が保持していたＣＤである。
「〝神奈備命消滅〟という目的のもと作られた四つの装置の存在と、そこへのアクセス方法が書かれているんですう。それによると、装置が島の外にあるのは、装置の発動を抑える〝結界〟という力の影響から逃れるためなんですねー」
「……神奈備命、ねえ……」
よくわからない存在のために。
私たちが玩具にされているらしい事だけは、理解できた。

710　動き出す意思

「五つのＣＤを集めろ。それを岩山の施設で使えば禁呪が再現できる。守りのメイドロボもお前達の命令なら……」
　へのへのもへじの語りかけは、まだ続きそうな様子であったが、北川は突如一時停止ボタンを押した。
「ちょっとまだ途中じゃない、何考え……」
　抗議の声を上げるスフィー。だが、すぐに自分たちがおかれている状況に気がついたらしい。彼らの首筋には鋭利なナイフの刃が突きつけられていた。
　ひぃっと、息を飲むスフィー。
　北川は、刃で傷つかないよう、辺りを見回した。いつの間にやら完全に取り囲まれている。
　まあ、こうなることは十分予想できたことだ。
「蝉丸さんか耕一さんは居ますか？　七瀬さんの紹介で来たんですが……」
　北川の言葉に周囲を取り囲んでいる人達の緊張が緩むのが分かる。北川達に向けられた銃口が外される。
　だが、首筋に当てられたナイフの刃に込められた力は一向に緩む気配がない。そのナイフを持った青年は、表情をぴくりとも動かさずに北川達をにらみつけている。
「証拠はあるのか？」
　その様子に北川は大げさに肩をすくませてみせた。
「七瀬さんの中学時代の恥ずかしい話ならいくつか知ってるんだが……それじゃあダメか？」
　北川の首筋のナイフに込められた力が強まる。
「……じょっ、冗談だってば!!」
　一触即発の雰囲気。
　それを破ったのは、初音の沈痛な声であった。
「彰お兄ちゃん止めてっ！」
「こいつらはウソをついているかもしれない」
「……まぁまぁ、彰君。ここには俺達もいる。いざ

ってときも何とかなるさ……それに、こうやって会う人会う人疑ってては、誰とも協力し会うことなんてできないだろう？」
「耕一お兄ちゃんの言うとおりだよ。……それに、この人達悪い人じゃないと思うな」
「……分かりました」
そういって、彰は二人から離れた。
だが、彰は緊張は解かず、北川達が変な動きをしようものならいつでも飛びかかれる臨戦態勢を維持していた。
それでも、とりあえずの危険を回避した北川は、ナイフの当てられていた首筋をさすりながら、ふぅっと息を吐いた。
「さて、七瀬さんの紹介とはどういうことか説明してくれるかな？」
北川は七瀬との関係、そして彼自身のこれまでの経緯、そして何故ここにやってきたのかを話した。
話し終える頃には周囲の雰囲気は穏やかなものになっていた。今はお互いの簡単な自己紹介を兼ねた雑談になっていた。
神経を尖らせていた彰も幾分か落ち着いた様子だった。
「落ち着いたかい？」
耕一が話しかける。
「心配かけてすいません。耕一さん少しいいですか？」
彰はそう言って耕一を周囲の会話が届かない場所へと促した。
「一体何の用だい？」
「実は……」
彰は一人で行動していた時のことを耕一に話した。
知り合い二人を探しに行っていた事。
彼らはすでに死んでしまっていた事。
施設の裏口を発見したこと。
そして……
「その施設から同じ匂いっていうか良く分からない

んですけど変な感覚がしたんですよ」
そこまで聞いて耕一はある予感を感じていた。もしかしたら千鶴達がそこに居るのではないか。
「すいません何か変なこと言って。こんな愚痴、初音ちゃんとかに聞かせる訳にもいかないので」
すでに耕一は彰の言葉を聞いていなかった。その時彼は心の中で堅く決意していたのだった。一刻も早く施設に向かおう、と。
耕一達が戻ると、彼らはどうやら耕一達のことを待っていたようだ。このゲームの管理者からのメッセージを観ようということらしい。
すでに北川達は途中まで観ていたムービーであったが、皆で内容を確認するためもう一度最初から繰り返された。
へのへのもへじの語りかけは続く。
「……次に神奈が封印されている社の位置と、もしもの為の他の封印場所を記載しておく。まずは社の位置だ、それは……」

そして全ての情報が読み終わり画面はブラックアウトした。
誰も言葉が出なかった。
この老人がしようとしたことは理解できる。
正直、鬼の力が使えたとしても神奈とやらには勝てる気がしない。多分、この島の能力者すべてが手を組んでも勝てる可能性は低いだろう。
こんな化物が暴れれば確かに天文学的な被害が出るかもしれない。しかし……
その沈黙は意外な形で破られた。
『スフィー……聞こえるか？　スフィー……！』
直接頭の中に刻み込まれる声。
その声はつい今し方、パソコンから聞こえていた声。
長瀬一族の長、長瀬源之助。
その声を聞いたスフィーは、その声に応えようと呪文を唱えだした。だが、やがて溜息とともに無理を悟る。

あれほど強大な呪文が発動したというのに結界の力は弱まっていないようだった。
色々問い質したい事があった、文句の一言も言いたかった。
でも、このメッセージは片道だけ。
ただ聞くしかない。
『……ＣＤを集め……ることを祈って……施設……別の参加者……占拠され……』
結界に妨害されているのであろう、受信状況の悪いラジオみたいに断続的に聞こえてくるメッセージ。それを一言でも多く聞き取ろうと、彼らは声に集中する。
『……奈の善の心……抵抗されず……倒せ』
やがて、声がとぎれる。結界の中に入ったかそれとも力尽きたのか。
「今のは一体……内容もあまり把握できなかったが？」
「主催者からのメッセージよ。最新情報のおまけ付きでね」
各人が聞き取る事ができた断片的な情報を整理する。
すでに施設は別の参加者が占拠したらしいという事、先ほどの魔法は失敗したという事、そして……。
「私はこれから神奈が封印されてる社に行くわ」
「どういう事だよ、お前が居なきゃこのＣＤが揃っても意味無いんだろ？」
「別に私じゃなくても大丈夫よ。魔力がある人なら芹香さんもいるし、協力してくれるかわからないけど国崎往人って人もいけると思う」
「けど、お前以外が簡単に見つかるって保証も無いだろ？」
「大丈夫、この魔法を起動するのに魔法の力は必須ではないから。もちろん、あるに越したことはないけど、この魔法は起動に必要な魔力と術式をパッケージ化しているから、魔力が無くても起動はできるわ。むしろ、必要なのは『想い』よ」

「想い？」
「魔法っていうのは想いを実現させる物、想う力が強ければそれだけ魔法は威力を増すわ。強い想いがあればこの魔法は発動させることができる。それができるのは……アンタだけよ」
　北川はスフィーが冗談を言っているのかと思った。だが、スフィーの表情は真剣そのものだった。
「アンタ、そのＣＤに今生きる目的の全てを賭けているんでしょ？」
「……ああ。確かにそうだ。俺はレミィとの思い出が詰まったこのＣＤにすべてを賭けてる。だからといって……」
「自分の気持ちが信じられないの？　全てをかなぐり捨ててでもＣＤを使ってやるくらいの意気込みは無いの？　アンタが本気で彼女の事を思ってるなら絶対成功させなさい。アンタの自身の手でね」
　それを聞いた北川は決意の表情も新たに答える。
「本気で彼女の事を思っているなら、か……だったら俺は絶対に成功させるぜ」
「あら、自信満々ね」
「それよりお前の方は一体どうするつもりだ？　このＣＤを発動させればこんなゲームも終了するのに」
　このまま一緒に施設へ行ってＣＤを使えば神奈とかいう奴が倒せる。そうすれば何の邪魔も無くこの島のどこかにある潜水艦で脱出できるんだ。
　たとえ潜水艦が無くても能力者の中には脱出することができる能力を持っている奴がいるかも知れない。
「いくら、さっきの呪文で神奈が消耗してるからって同じ呪文で倒せるとは限らないわ。それにアレほどの化物に下手に抵抗されれば呪詛返しであっという間にあの世行きよ。だから神奈が抵抗できないようにしに行くの」
「そんな事ができるのか？」
「ええ、一つだけ心当たりがあるわ。だから一緒に

行けないの」
リアンと一緒に神奈と接触した時確かに善の心を持っていた、それを説得できれば……。

711　北へ

紆余曲折はあったが、巳間晴香と七瀬留美はようやく潜水艦探索を再開する第一歩を……。
「ようやく、再出発ね」
「うん、これで探索に専念できるわ」
「で、高槻の死体には何もなかったけど、他に潜水艦を探す手掛かりはあるの？」
「え、えーと、あいつ、ほかになにか言ってたっけ……」
「もしかして……」
「あはは、ないや」
バキッ

第一歩を踏み出せないでいた。
久々に会心の左ストレートをたたき込んだ巳間晴香は大きくため息を付いた。
しかし、心中はそれほど暗澹としているわけではなかった。
彼女には潜水艦がある場所に心当たりがあったからだ。かつての仲間、保科智子と神岸あかり、そしてマルチが一緒にいた頃、管理者側の兵士から奪ったジープに拠点の位置が書かれた地図が入っていた。だが、晴香はそのことはあまり思い出したくはなかった。
その地図が示した拠点に攻め込んだことを、今は死ぬほど後悔していたからだ。
無謀な戦いの結果、高槻の奸計により、晴香と智子とあかりは捕らえられた。
晴香は高槻に屈服することによって命は助けられたが、あかりは慰みものにされたあげく殺され、智

子もまた高槻の手の者に殺された。
マルチはそのときは無事だったらしいが、放送によると、もうこの島には存在しないらしい。
悔やんでも悔やみきれなかった。
だから、激しい戦いに身を投じ、そのことを忘れ去りたいと思ったのかもしれない。
だが、今はそんな泣き言は言っていられない。死んでいった者たちのためにも、生き残っている者たちのためにも。そう、今こそ話そう、その潜水艦の所在を示す地図がある場所を。
だが、
「くー、今の効いたぁ」
「しっかたないわねぇ。それじゃあ、今度はジープを探すわよ」
「なんで、ジープ？」
「ふふふ、前にちらっと見たんだけど、そこに、管理者が作った、この島の地図が入っていたのよ」
「すごいじゃない。それで、そのジープはどこ？」
「え、えーと、たしか、あの基地の前に置いてったけど、出てくるときには無かったから……」
「もしかして……」
「あはは、どこにあるか分からないわ」

ドカッ

だが、地図の場所も不明だった。
右拳に全体重を乗せ、まっすぐ目標をぶちぬくような右ストレートを放った七瀬留美は大きくかぶりを振った。
しかし、心中はそれほど暗澹としているわけではなかった。
落ち込んでいるわけにはいかなかった。なぜなら、折原と約束をしたからだ。
必ず生き残る、と。
そのためには、これぐらいのことは挫折でもなん

でもない。海岸線を全部まわって潜水艦を探してもいい、島を全部めぐってジープを見つけてもいい。
たとえ、泥水をすすっても生きて帰るのだと心に決めている。折原は乙女らしくない言葉だと笑うだろうが……。いや、笑ってくれた方があいつらしいと留美はそう思い、自分もまた心の中で笑う。
そして、右腕に巻いた瑞佳のリボンを見やる。
これを見る度に、彼女のことを留美は思い出した。笑顔も、泣き顔も、そして今際の顔も……。
そんな、楽しい想い出、悲しい想い出。それらすべてを含めて瑞佳が宿っている。親友はいつでも自分と一緒なのだと。そう思える留美は、もう心の中へ逃げたりはしないだろう。
だから、七瀬留美は誓う。必ず、帰ることを。
二人と出会った、あの町の交差点へ。
二人とおしゃべりをした、あの学校の教室へ。
二人と走った、あの公園の道へ。

「結構痛かったわよ。今のは」
「そう？　でも、これでおあいこよ」
「……。まあ、そういうことにしといてあげましょう」
「で、これからどうする？　海岸線を歩いて潜水艦を探す？　それともどっかに行ったジープを探す？」
「うーん。外から見て潜水艦がある場所を見つけるのは、難しいと思うわ。参加者に見られたら襲われるのは必至だからね」
「んじゃ、ジープ？」
「それもねー。おそらく基地の奴が乗っていっただろうから、駄目だと思うわ」
「じゃあ、いったいどうするのよ！」
「それを今、考えてるんじゃない。あそこはもう方角分かんないし……。そうだ！」
「なに、今度は？　木の棒を倒して決めるとか言わないでしょうね」

「違うわ。そういえば地図の上の方に一つだけ、ぽつんと印があったのを思い出したのよ」
「地図の上？　ああ、北の方ね」
「北の端にあるから、大体の方向で歩いていっても着けるはずよ」
「なるほど。で？」
「で？　なに？」
「北ってどっち？」
「磁石は？」
「ないわ」
「……」
「……」

ドカッ
バキッ

クロスカウンターで倒れた二人が起きあがったとき、傾いた太陽は影を少し伸ばしていた。

二人は、なんで気が付かなかったのか……、と文句を言い合いながら、影に導かれて歩いていった。

712　まだ見ぬ敵

彰は外を見ていた。
窓から外を見ていた。
しかしそれは見張りとは名ばかり。
初音のことをボーっと考えていた。
（初音ちゃん……。愛してるよ……）
この思いは大きくなっていく一方。
独占したい。誰にも触らせたくない。自分のことだけ見ていて欲しい。
彼もまた、普通の男だった。
「……!!　耕一さん！」
彰の目に飛び込んできた『映像』。
武器をもった誰かが、森の中にいるのが見えた。
「どうした!?　彰君！」

「誰かが森の奥に！　武器も持っていたように見えました！」
　一同に緊張が走った。
　彰が武器の隠し場所に走る。
「北川君といったね。俺と彰君で様子を見てくる。もしかしたら怯えている人かもしれないからね」
「もしものためにこっちにも男手を……か。信用してくれたと思っていいのかな？」
　北川は言った。もちろん裏切る気など毛頭無かった。
「裏切る気が大きいようには見えない。そして裏切る気が少しある程度なら、女の子を手にかけたりはしないだろ」
　耕一が微笑んだ。
　北川もそれに答える。
「まかせときな！　リーダー！」
　女の子達は……。
「あなたに守られなくても自分で身ぐらい守れるわ」
「魔法使いをなめないでよ。逆に守ってあげるわよ」
「私も……戦えますから……」
「彰お兄ちゃんと、耕一お兄ちゃん……。気をつけてね……」
　北川はこけた。

「あそこの辺りです……」
　彰が森の奥を指差す。
　小屋から見えるぎりぎりの位置だろうか。
　二人はそこへ向かってゆっくりと近づいていく。
「おい！　誰かいるのか！　こっちから戦う意志はない！　島の脱出を考えている！　信用して協力してくれ！」
　耕一が声をあげる。
　返事は無い。
「あそこ！　耕一さん！」

彰がさらに奥を指差した。
「どこだ⁉」
「あの辺りに、また『見え』ました」
耕一の目には、木の裏に隠れようとするウサギが映った。
「あの木の裏です」
(ウサギの隠れたあの木か……)
遮蔽物を利用しながら、徐々に徐々にと近づいていく。
ここから小屋は遠い。まわりこまれたら小屋に侵入されてしまうかもしれない。
(北川君。その時は頼むぞ……)
耕一はその可能性は頭のすみに追いやり、目の前のまだ見ぬ敵に意識を集中した。
(相手はどういうつもりなんだ?)
彰も頭を働かせる。二対一なのは相手も気づいているだろう。なのに、こちらの呼びかけに反応しない。投降が最善と思えるのに。
(よっぽど強力な銃器でも持っているのだろうか?)
少々不安になるが、耕一が勇敢な戦士であることは分かっている。
そして二対一だ。
「少し先行する。周りに気をやっておいてくれ」
耕一が彰の先に出る。
彰は周りを警戒。
「おい！　誰かいるのか！　こっちから戦う意志はない！　島の脱出を考えている！　信用して協力してくれ！」
また返事が無い。
『あるはずがないのだ』
記憶をまるまる捏造するには大量の力がいる。
なら少しだけ改竄してやれば良いのだ。
『うう……。初音ちゃん。いい子だ〜。がんばり屋

さんめ～』
　初音を抱きしめ、ほお擦り。そして――耕一は初音の唇を無理矢理奪った。
『耕一お兄ちゃん！　私には彰お兄ちゃんがいるのに!!』
　――再会はそこで訪れた。

713　狩人の視界

　たぶんそれは、よほど注意していないと解らない程度の、小さな変化だった。茂みが風以外の何かで揺れる、微妙な動き。そこから人影を認めることは、至難の業であろう。
　気配を消して、ただそこにあること。フランクは人生のほとんどを、そうして過ごしてきた。特に意識してのことではなく、生まれついたときから存在を押し出すことなく、それを当然のこととしていた。要するに、彼は天賦の才として、隠密の技を身につけているのだ。
　大きく重い、ひとつの武器がそこにあった。誰かに取られることはないだろうと思いつつも、急いでここまでやってきた。幸いにして予想通り、誰にも発見されなかったらしく、フランクは無造作に置かれたままの狙撃用ライフルを拾い上げる。
『あなたは責任をとらなければいけない。この島に死んでいったすべての人々に対する責任を』
　武器の点検をしながら、少年の言葉を思い出す。漠然とした決意ではあったが、フランクはそうした考えを確かに持っていた。だが実際に何を為すかと考えると、死人を生き返らせることなどできない神ならぬ身としては、死んで詫びる程度がせいぜいだろう。自殺したところで、他に救われる者など居る

筈もないのに、である。
ならば全てを滅ぼさんと暗躍するであろう少年という神奈の端末を打倒するために、この拾った命を使うことの方が、よっぽど罪滅ぼしになるというものだ。
不思議なことに、今や少年に対する憎しみは消えていた。代わりと言っては何だが、恐怖という毒蛇がぐるりと心臓に巻きついている。そして、まともに戦って少年という存在にかなう筈のないことも、感じてはいる。
だが、それでも。あの一撃は、間違いなく有効だったと思う。遠距離から狙撃し、位置を特定される前に移動。そして、再び狙撃。これを繰り返すことができれば、いつかはあの少年とて倒れる日が来るだろう。つまり、一度は諦めた少年の打倒という無謀な挑戦は、この武器無くして為し得ない。
さっそく手ごろな木に登り、スコープで周囲を見渡す。少年が発見できればいいのだが、他の参加者に見つからないようにするのも重要だ。ひたすら影に隠れながら、ときおり周囲を警戒しつつ、フランクは少年の姿を求める。二、三度参加者とおぼしき声が聞こえたが、すべてやり過ごすことができた。
かなりの時間をそうして費やしていたが、目指す少年の行方はまるで判らない。張り詰めた神経に切れ目が入り、疲労に繋がり始める。そこまで来て、ようやくフランクにも運が向いてきたのだ。
『おーーーーーーーい』
『ここだよ！　ここーーー！』
風に乗って、遠くから声が聞こえる。また参加者に遭遇してしまうところだったか。そう考え、冷や汗をかきながらスコープを風上に向けると、肉眼でも鉄塔を捉えることができた。速やかにその鉄塔へ照準を合わせると、やはり頂上に参加者二人の人影があった。

──いや。途中に、もう一人。

あわせた照準を、つつつ、と戻していく。心臓の高鳴りは、恐怖との再会を意識してなのか、理想的な情況での発見に高揚しているのか。ぴたり、と止めたスコープの中央に、黒い人影が入っている。

（……よし）

だが、ここから少年や鉄塔までの距離は、確実な狙撃を期待するには遠すぎる。しかもこの森を抜ければ、隠れるところもない。

「……待つ、ことだ」

自分に言い聞かせるようにして珍しく声に出したあと、フランクは目を瞑り、再び気配を完全に殺した。猛獣に挑む狩人に必要なものは、技能と、冷静さに他ならない。そうして改めて考えれば、自分を見失っていた先ほどの戦闘で、結果が出なかったのは当然なのだ。

再び静かに目を開いた時。

鼓動は常と変わらぬ平静さを保っていた。

どのような形であれ、少年を打倒することが出来さえすれば、もはや死んでも、悔いはない。

決意とともに両手に構えた銃を天に向け、静謐な空気に溶け込んでいくフランクの姿は、まるで祈るようであった。

714　霧中

戦いは終わったものと思っていた。

今、自分がすべき事がなんたるか。柏木耕一はよく理解しているつもりだった。人をこれ以上死なせない事。仲間を増やし、ここから脱出し、日々の生活に戻る事。簡単に言えばこういうことだった。

「俺達はもう戦うつもりはない」

再度、耕一は呼びかけるが返事はない。慎重な足取りで森の奥へ足を踏み入れつつ、もう一度。
「脱出出来る方法があるんだ！　ならもう、殺し合いなんてしなくてもいいよな？」
返事がない。気配は確かに感じるのだ。この森の何処かに誰かがいる、そんな感じはするのだ。
自分の少し後ろを歩いている七瀬彰が、この森の中に人影を見たというのがほんの少し前のことだ。そのほんの僅かな時間に、それ程遠くまで動けるわけがない、という考えもあった。
息を吐く。すぐ、ほんのすぐ近くに気配を感じる。感じている。間違いない。薄暗がりの中に、影がどよめく錯覚さえ覚えた。じりじりと暑い。その滴る汗が耕一を蝕む。少しずつ焦り。自分の声が届きもしない精神状態で、一歩踏み出して襲い掛かってきたら。自分は相手を傷つけることなく止めることが出来るか。掌が汗ばんできて、額から流れる汗が目に入る。小さく深呼吸しつつ汗を拭う。
「彰、横にも気を遣ってくれ」
「判った」
また一歩、森の深くに入る。
また一歩。
だんだん、深い深い森の中に沈んでいく。沼の中にもう腰まで漬かっている感じがして、あまりいい気分はしなかった。耕一はもう一度掌の汗を拭い、口の中で落ち着け、落ち着け、と呟く。腐りかけの落ち葉を音もなく踏みつぶし、入り組んだ枝の間をくぐり抜ける。葉が自分の頬を傷つける。痛みも感じない。感じるのはおかしなくらいに大きな焦燥だけだった。そろそろ相手の姿が見えてもおかしくない。気配はもうほんのすぐ近くにあると思った。相手が動いている感じはしない。こんないびつな森の中ならば、走ればきっと派手な音がするだろう。すぐ横で発砲音が聞こえるかも知れない。意識を集中しろ。目を閉じ、風のほんの揺らぎにも気を払う。何も感じない。呼びかける。

「誰かいるんだろう？」
背後で僅かに大気が揺らぐ。冷静な彼も、その冷静な性格なりに焦っているのだろうと思う。耕一が小さく伸びをして、後ろに振り返ろうとしたところで「耕一」という声がした。紛れもなく彰の声だったのだが、その静かな声が不可思議に冷静すぎた。耕一はそう思った。
「――どうした？」
息を吐いて尋ねる。気付くとほんの五メートルばかり後ろ、自分のすぐ後ろを歩いていた彰は少しばかり肩を竦めて、
「少し歩くの早いよ。危険だと思う」
「そうか？」
「うん。これ以上ふたりで先行しすぎると、どんな目に遭うか判らない。中華キャノンもあるしベレッタもある。けど……」
「……そうだな。取り敢えず一旦戻ろうか？」

――つい先刻。彰は中華キャノンとベレッタを武器庫から持ってきて、こう言った。
「キャノンだと後ろからの援護が難しいし、耕一がキャノンで僕がベレッタ、って事で良いよね？」
……いや、別に腰を振らなくてもキャノンは使えるんだけどさ、やっぱ印象深いわけじゃない、あの俺の姿ってばさ。
きっとあの時俺の姿を見ていたものはこう思っているのさ、中華キャノンは柏木耕一にこそ相応しい武器だ！　ってな。
千鶴さんたちに見られたら俺はどうするというのだ。きっと軽蔑のまなざし、或いは偽善者のまなざしで、
千鶴さんはきっといろいろ呟くのだろう――。
まったく、この世で一番乙女に相応しくない武器だよ。……乙女？　まあそれは……いいけれども。
だが、そう言いながらも、右手に握ったキャノンが何故、これほどに愛しい。

また局部に装着して腰を振りたいと願っている俺がいる。
　俺ってやつは――。
　そんな事を考えている耕一を、しかしまるで構いもせず、彰も言う。
「うん。今は僕、防弾チョッキを着てないし、武器はナイフと拳銃だけしかないんだ。慌てちゃってさ。――ごめん。やっぱり僕、少し怖いみたいだ。相手が混乱してマシンガンでも乱射したらお終いなんだ」
　耕一は小さく息を吐く。森の中の気配の正体を確かめられなかったのは残念だが、やはり今は慎重に慎重を期そう。森の中には物音一つなく、霧がかったように何も見えない。
「よし、戻ろうぜ」
　足の向きを反転させ、立ち止まったままの彰の横を通り過ぎようとしたその時、彰が左腕を動かした。

　疑問符が頭に浮かぶ前に、切り裂くような痛みが耕一の身体を走った。叫び声をあげる暇も無かった。声にならない言葉が胸の底で暴れる。何が起こったのかと思う。この鋭い痛みは間違いなく刃物か何かで切り裂かれた痛みで、しかしこの場にそんな刃物など存在しない筈だった。肩口から肘を越えたところまで痛みは走り、やがてやられた箇所が判らなくなるくらいの真っ赤な痛みが全身に広がった。
　まさかさっきの気配がいつの間にかこんな近くまできていて、そして高速で攻撃してきたのか？
「ぁぁぁぁあっっ、あぁ、」
　やっと声になる。意味を為さない呻き声、混乱する。何が起きた、何が、辺りを見回す、気配はまるで感じない。あるのは自分と七瀬彰の気配だけだった。見えざる殺人者、そんな言葉が頭に浮かんで打ち消す、落ち着け、気配がないだけできっと何処かにいる、辺りに気を配れ、

――駄目だったのだろう。耕一の頭は、事態を受け入れることを拒絶していたのだ。この状況で、自分に危害を加えられる人間は一人しかいない。
漸く事態を悟ったのは。
自分の横で薄気味悪い笑みをたたえた、七瀬彰の黒曜石のような瞳を見た瞬間だった。

一瞬の間もおかず、彰の右拳が自分の顔面に襲いかかる。口の中が切れる痛みを感じ、軽い眩暈を覚え、思考が混乱し、思考を放棄したくなる衝動に捉われ、そして本能で辛うじて受身を取ろうとしたものの、拳の勢いに逆らいきれずに、後ろにあった大木の幹に後頭部を叩きつけられた。
脳震盪が身体の自由を奪い去る。世界が二重に重なって見えて、全身の筋肉が一瞬弛緩した。手に持っていた中華キャノンを取り落とし、彰がそれを足で蹴飛ばす姿を見た。首を傾げ、うっすらと笑う七瀬彰。耕一の頭は、まだ何が起こったか認める知性を再獲得することが出来ない。
そして、自分の襟元を掴みながら上目遣いで睨む。自分より一回り小柄な体格の彰は、乱暴な手つきで、力の抜けきっていた耕一の身体を、信じられないことに片手で持ち上げると、狂ったような早さで大地に強く叩き伏せた。
再び脳震盪が自由を束縛する。知性が戻らない。何があったかを冷静にまとめる思考が浮かばない。自分の上に馬乗りになり、その黒曜石の瞳で自分を睨み付ける七瀬彰。奪われた知性が戻り、耕一はやっと事態を把握した。
自分の左腕を切り裂いたのは七瀬彰だ。そして今、自分よりも十五センチは身長が低く、体重に至っては二十キロ程も違うだろう小柄な体格の彰が、その腕力でもって自分を制圧しているのだ。

「――耕一」
耕一の上にまたがりながら、何かの冗談のように

低く暗い声で七瀬彰は言った。「彰っ、何をッ!!」
耕一は叫ぶが、その声がまるで届いていないかのような顔をして、彰は再び「耕一」と呟く。自分の腕から噴出した血が彰の顔を汚している。殆ど真っ赤になった頬と上着が、彼の『異常さ』を耕一に認識させた。いつか感じていた脅威。「こいつはどうしてこんなに暗い眼をすることが出来るのだろう」。何かを、大切な何かを忘れてしまった人間の顔だった。——そして。もっと言うならば。
人間には見えなかった。
まさか、と思う。初音は先に、彼に鬼の血を飲ませた。鬼の血を制圧できなければそいつは狂う。自分の父親がそうだったし、耕一自身も血に支配されかかったことがある。
鬼が彰を支配してしまったのか。
だとすると、敵が近くにいる事などは狂言だったのかもしれない。あの診療所にいた面子の中で一番戦闘力が高い俺を単独行動させ、不意打ちを混ぜて攻撃することで撃破する。確実に勝てる戦いをする。それが正しい獣の習性だ。
だが、彰の口から紡がれたことばは、鬼の思考とか、獣性だとか、そういうものからはどうしようもなくかけ離れているように思える言葉だった。
意味のわからない言葉だった。
「この、泥棒が」

——何を、言っている?
冷静になっていた筈の耕一の心臓が再び鼓動を高める。泥棒？　俺が？　何を、
無理やり思考をシャットダウンする。そんなことはどうでもいい。自分のするべきことは目の前の狂気を止めること。脳震盪は殆ど治まった。左腕に激痛はあるものの、彰との腕力差を考えればいいハンデと言ってもいいくらいだ。今自分の身体を押さえ付けている腕力は、鬼のものにしてはあまりにか細い。先程は、油断していたからやられただけなのだ。

例え鬼に覚醒していようとも、体格で優る自分が負ける筈がない。耕一は強引に身体を起こそうとし、
　自分の誤算を思い知った。
「動くな‼」
　身体を起こそうとした瞬間、彰は化け物のように叫びながらナイフを右手に持ち替える。そして一瞬の躊躇もなく、左腕に、先ほど自分が傷つけられた場所に、もう一度それを突き刺した。一瞬力が抜ける。同じ傷を抉られるのは想像を絶する痛みだった。左腕が切り落とされるかと思う。どうしようもない痛みが走る。耐えろ、悲鳴をあげれば相手の思う壺だ、耐えろ耐えろ耐えろッ、
　耐えられない痛みがやってくる。ナイフが左腕を、骨の間を通すようにして貫通した。
「ぁぁぁぁッ！」
　悲鳴を聞いても彰は表情一つ変えなかった。口の開いた顔に左拳をぶつける。食いしばることが出来なければ痛みは増す。骨が曲がるかも知れないほどの打撃が顔面を襲う。舌を噛み切りそうになる。左の打撃の傍ら、右手の動きも止めない。ナイフを一旦抜き去ると、再び体重をかけて、今度は肩に近い辺りの筋肉に突き刺した。
　耕一はそれでも雄の鬼だった。もう声にもならなかった。抵抗する気力を失うような痛みを与えられても、それでも眼前の敵を倒しつくそうとする本能は消え去らない。両腕の自由は奪われているが、まだ自分には足がある。この体勢ならば背後は死角だ。制限されているとはいえ自分の筋力は充分にある。上半身しか押さえていないのは失敗だったな、思いつつ耕一は彰の後頭部を蹴り飛ばそうと足をあげた。しかし、彰が、目に見えない筈の攻撃をゆるやかな動作でかわした。「動くなっていっただろッ‼」叫んで、彰は再びナイフを左手に持ち替え、今度は右肩の上、鎖骨の辺りに向けて刃を振り下ろした。一瞬の躊躇も無かった。
「やめろッ――、やめろっ、彰、」
　血が噴出した。全身の筋力がぶち壊されるような

痛みで、足を振り上げることさえも出来なくなった。抵抗する力がこの瞬間完全に失せた。出来ることはやめてくれと哀願することだけだ。
ナイフが抜き取られる。哀願が通じたわけではない。彰は一瞬の躊躇もなく、同じ場所にナイフを突き刺した。今度こそ耕一は死ぬと思った。噴き出た血が彰の顔の血化粧を濃くする。自分の身体の血の半分以上が噴き出たのではないかと思う。全身から力が抜けていく。——血化粧の奥で、
彰は笑っていた。
誰にでも優しい目をしていた頃が嘘のように、今まで共に戦ってきた戦友に見せていた表情が全て冗談だったかのように、戦慄に満ちた顔だった。
ナイフが再び抜かれる。何が起こるか一瞬で理解する。耕一は叫ぶ、
「やめろ、——やめてくれッ!!」
彰は三度。同じ場所にナイフを突き刺した。哀願の言葉は失せ、ただそこには絶叫が残った。

耕一の心は折れた。
その声を聞いて彰はナイフに興味をなくした。ナイフは鎖骨に刺したままにして手を離す。小さく息を吐き、真っ黒な瞳と真っ赤になった顔で笑い、そして彰は次の行動に移った。最も原始的で、最も凶悪な攻撃が、彰の拳から繰り出される。
それは単純な殴打だ。上から下に叩き落される拳の攻撃力は、殺傷性こそナイフに劣るものの、相手の意識を奪う能力においては遥かに上を行き、そして相手を征服した、と実感することが出来る一番の攻撃だった。彰は右の拳と左の拳を交互に、耕一の顔面に叩き付けた。ぐしゃぐしゃと鈍い音がして、耕一の顔面はどんどん平らになっていく。
「ぐぁ……ッ」
自分に比べれば弱い腕力だ。けれど。人を殺すには充分な腕力だった。脳が揺れ、耕一の身体は抵抗というものを忘れた。両腕を動かすことが出来ない

ので防御も出来ず、一切の手加減のない打撃を、一切の抵抗もせずに受け続けるしかなかった。
「……やめろッ、……彰ッ！」
声で哀願。けれど彰の攻撃は止まらない。首がずれるかと思う。右、左、右、左。両の拳が雨のように降る。口の中が切れた。口を開けば間違いなく血が噴き出る。きっと鏡を見れば、自分の顔は紫色になっているのではないかと思う。必死に歯を食いしばる。リズミカルに繰り出される拳の一発一発に出来る、唯一の抵抗だった。
しかし、彰はその抵抗すら奪う。リズムを突然崩したのだ。一拍おいて、彰は右の拳を振り下ろす。耕一は抵抗する術もなくその打撃を受ける。叩きつけられた拳の痛みはここまでで最大で、耐え切れず耕一は口を開いてしまった。血が噴き出る。噴き出た血が彰の拳にかかる。真っ赤になった拳は、すごく満足そうに見えた。
「うぁっ……!!」
まだ彰の攻撃は止まない。再びリズミカルに、拳の雨が音を立てる。先の攻撃で奥歯が折れてしまったのだろう、食いしばる力が弱っている。先よりずっと凶悪な痛みが耕一を襲う。いつまで続くのだろう、と思った。もう何度殴られたかも覚えていなかった。感じる。彰が少しばかり手加減している、と。
それは慈悲でも躊躇でもなんでもなく――
自分の意識を失わせないために。
意識を失わせず、そして耕一に抵抗の意志をなくさせる。完璧なバランスの攻撃力だった。
「くそッ！　やめろっ――!!」
怒りが頭の中で爆発する。その熱が耕一の抵抗力となって形になった。最後の力を振り絞って耕一は身体を起こそうとする。逆の体勢になればこちらの勝ちだ。そう思った。
しかし、彰は。
耕一が力を入れた瞬間に立ち上がって。耕一が身体を起こそうとしたそのタイミングを見計らって。

首元に足を振り下ろした。
一瞬で呼吸困難になり、起こした身体がふら付き、何より死にそうな激痛に襲われ、やっと立ち上がれそうだったのに、立ち上がる前より酷い顔をしていた。耕一がやっと呼吸を取り戻し、再び身体を起こそうとしたところで、彰の前蹴りが顔面に飛んできた。鼻が潰れる音がしたのと、後頭部が地面に叩きつけられる音がしたのが殆ど同じ瞬間だった。
彰は再び倒れた耕一の上に乗り、拳に力を込め、真っ赤に汚れた耕一の顔に地獄のような打撃を打ち込もうとして、しかし耕一が既に泡を吹いて失神している姿を見て、やっとやる気を失った。
彰はやっと、拳に込めた力を抜いた。漸くにして、その拷問は終わった。

気を失ったのは殆ど一瞬だが、耕一は完全に彰に打ちのめされた。それこそ、泡を吹くまで。
自分の胸の上に彰が足を乗せて立っている。耕一はふと自分の身体が何処までひどいことになったか確かめようとして、絶望的な気持ちになった。
少なくとも腕の方は動脈をやられているだろう。今なお血がどくどく流れている。身体にはもう、一粒の力も残っていなかった。常人なら既に死んでいるだろう。それでも、鬼の血を体に宿した耕一は、意識を失わないで彰の姿を見る事が出来た。
もう、ただ生きているので精一杯だったけれど。
「どうして、彰、何が……」
「泥棒め、まだそんな口を聞く余裕があるんだな」
彰は――心底、悔しそうな顔で言う。何故そんな表情をする？　その顔をしたいのはこっちだ、
「どろぼう、だと？」
「人の大切なものを――ッ」
何だ、それは？　大切なもの。泥棒。導き出す。さっき初音ちゃんを抱きしめていた事か？　なあ、彰、あれは違うよ、全然違う、
「おかしな話だよ、人の大切なものに手を出せるよ

うな奴と、一緒に戦っていたなんてな」
「――何を。何を、言ってる――」
判らない、彰、何を、
「黙れよッ！　……僕だって、なんでこんな事してるか判んないんだよッ！　お前が変なことをしなければ、僕だってお前をこんな目に遭わせなかった！　お前のせいなんだよ！　全部お前のせいだッ!!」

ふと、彰の興味が――自分から失せた。
真っ赤に染まったナイフと中華キャノンを森の中に放り、そして拳銃を右手に強く握ると、
「初音ちゃん、初音ちゃんが待ってる――」
立ち上がってそんな事を呟いた。
だめだ、今の彰をあそこに向かわせるわけには、
「やめろッ……」
身体を起こすことも出来ず、耕一は声で制止する。
だが、彰は心底不愉快そうな目で睨むと、
「黙れよッ」

傷ついた耕一の左腕を、その足で無慈悲に踏みつぶした。耕一が何度目かの絶叫をあげるのを聞いて、彰は今度こそ完全にあさっての方向を向き、
「はつねちゃん」
そう呟いて、駆け出していってしまった。
止めないと、
そう思うのに身体が動かない。落ち葉の絨毯の上で、耕一は口の中を蹂躙している赤を舐めながら、真っ赤に晴れ上がった顔をぐちゃぐちゃにしながら、
「なん、だよ、畜生、何なんだよ、ちくしょう」
ただ、そう吐くことしか出来なかった。
初音ちゃんが、診療所が危ない。そう判ってはいるが、耕一は動くことが出来なかった。結局、その訳の分からぬ混乱の中、耕一は意識を失った。深い霧の中に耕一の意識が沈んでいく。

715　発見

「……と、いうわけで。わたしたちには、いくつかの選択肢が残されているの」
　ぱんぱんと手を叩き、集まってきた梓とあゆちゃん、詠美ちゃんを相手に、小会議を開く。
「まず当初の目的どおり、初音と耕一さんを探すこと。ただし、いまレーダーで確認した限りだけれど、初音と耕一さんは一緒に行動しているようだし、急務ではないと思うわ」
「なんだか同じ建物に、大勢出入りしているみたいだしね」
　梓が付け加え、わたしも頷き返す。街角の一室に、ここ同様の安全地帯を構築できたのだろう。
「次は残り二枚のＣＤを探すこと。ただしこれは、初期の保持者が死亡してからかなりの時間が経っているので、追跡は困難だと思うわ」
「正しくはさらにもう一枚、ＣＤがあるらしいけどね」
　梓の補足が入る。
「最後に、セイカクハンテンダケを求めて、北川潤、来栖川芹香、スフィーの三名を探すこと」
「ふみゅ？　どういうことなの？」
　繭ちゃんの豹変と、キノコの効能を説明し、彼女にも納得してもらう。
「……あたしは、キノコだと思うね。せっかく仲間が増えても、一緒に動けないんじゃ無意味だしな」
　数的優位を絶対のものとする方向へ、梓が主張する。深く考えるまでもなく、五人全員が銃器を携行していれば、たいていの危険は排除できる。しかし一方で、今の繭ちゃんを連れて歩くよりは、ここに篭っていた方が安全なのも確かだ。
「ねえ、この三人の情報更新、してみてくれないか？」

梓がメイドロボに注文する。
「はいー。北川さん、芹香さん、スフィーさんですよね。この三名様は、一度二手にわかれてから、もう一回合流していますぅ。画像、出しますかー？」
「うん、そこの一番でかい画面に映してよ」
三人一緒というのは、ラッキーと言えるだろう。
ヴン、と軽いゆがみを起こした後、画像が大きく出力された。
「まあ……」
「ふみゅ？」
「うっわ……モロだ……」
「みゅー？」
「うぐぅ、痛そうだよう」
真上からの画像なので、想像でしかないのだが。
そこには、降りしきる雨の中、的確な一撃をお見舞いされた、実に痛々しい北川潤の姿が写っていた。

犯人は来栖川綾香……いや、芹香のはず。
来栖川家の二人のご令嬢の噂は千鶴も知っていた。
格闘好きでお転婆な綾香、そして飛び切りのお嬢様と評判の芹香。噂が間違っていないなら、彼女がこのような挙動を示す可能性はゼロに近いだろう。
「ちちちっ、千鶴姉！　これって!?」
「ひょっとして……!?」
二人顔を見合わせる。

「「見つけたーーーーーーーーー!!」」

二人の脳裏に過る過去の記憶。セイカクハンテンダケを食べた初音の凶悪な表情と禍々しい叫び。ありえないが当たり前になるそのキノコを、私達は必要としていた。

716　狂走

——……美咲さんを奪われ、由綺や冬弥達を奪わ

れ、みんなを奪われた。その僕からとうとう、初音ちゃん迄を奪おうというのかい？
そんなことって許せるかよ……。
……そうだ、許せない。許せるわけがない。
だから、耕一さんを刺した。僕は悪くない。
もうこれ以上、僕からは何も奪わせやしない。
僕だって男だ。
自分の意地を通すにはどうすればいいのか、そんなこと、分かっている。
耕一さん。
あなたは、やってはいけないことをしたんだ。
……もういい。もう、これ以上奪われるだけでいるのはまっぴらだ。
奪われ続けるくらいならば、僕も……。
僕もただ……。
僕も奪う側にまわるだけさ……——
何処で歯車が狂ってしまったのか。それは冷静な彰の思考ではなかった。
かつて、共に戦ったときに得た信頼感はかき消えていた。
かつて、彰が覚えた耕一への憧れは微塵も残っていなかった。
嫌がる初音の唇を奪った悪漢に対しての憎悪。
そして嫉妬。
このたった二つの感情が、それだけが彰を走らせていた。

——家屋内。
パァーッ!!
それは、武器を行き渡らせようとしてそれらを吟味しようとしていた時だった。
初音の胸元に僅かな光が宿ったかと思うと、心安まるような、透き通るようなその蒼い光は、部屋いっぱいに広がった。
「な、なにっ？」

慌てて襟元を広げる初音。
その瞬間、一同を閃光が襲ったかと思うと、間もなく、その光は収束し、僅かな燐光を残すのみとなった。広げられた襟元から漏れる燐光に、四人の視線が注がれる。
『なんだか、ＣＭで見かけるディズニー映画みたいね……』
『ラピュタにこういうシーンがあったような気がする……』
『なんでしょう、これは？　不可視の力とは異なる、何か不思議な力を感じますが……』
『うおっ‼　ナディアみてーだ……！』
スフィー、マナ、葉子、そして……北川潤。
六つの目がジットリと潤を睨み付けたが、覗かれてしまった当人には、それ以上の関心事があった。
「これは、賢治叔父さんの形見の……」
襟元から服の外に取り出されたそれは……。
それは、サファイアのような蒼い石のペンダントだった。
キバのように先端の尖ったそれは半透明で、中には大理石のように乳白色の筋が幾つか入っている。
耕一の父であり、柏木四姉妹の叔父に当たる柏木賢治。
この首飾りは賢治の生前、初音がお守りとしてもらった物だった。それを身につけて以来、初音は大きな怪我や災厄に見舞われたことがなかった。
初音は、今でもそれはお守りの効果だと信じている。もっとも、この島に連れてこられた時点で、その御利益とやらも怪しい物だが。
まぁ、今まで死んでいないだけでも効果はあったと考えて良いのかも知れない。
「今まで、こんなことはなかったのに……」
トーンの落ちた声で首飾りを見守る初音。

1991
2001
1986

「初音ちゃん……」
一同が初音を落ち着けようと、何か言葉をかけようとした瞬間、首飾りの先端が、くるくると回り始めた。
「今度は何っ⁉」
驚く一同の中、初音は言いしれぬ不安に襲われていた。
『いったい、何が起きているの？　……嫌な予感がする。三人で此処を出ようとしたときよりも、確実に嫌な予感が――』
初音の悪い予感は、既に的中していた。

717　望まれざる再会

「で、その、神尾さんがいるところはまだなの？」
もう、何時間歩き続けただろう。私は苛立ちを往人に投げる。そのいらだちの元凶は先ほどから探知機と無制限一本勝負を繰り広げていた。
「くっ、この、くそ、なんでだ、この、これか、それとも、ここか」
探知機は往人の執拗な攻撃を受け流しているようだった。
そもそも、往人は機械の操作は苦手なようである。住所不定な旅人を職業としている（無職とも言うが）往人は、日頃から機械に接していないから、至極当然である。
さすがに自動販売機を使うことやテレビを点ける程度はできるが、パソコンを使うことも、ビデオで留守録する事もできない。今どきの若者にしては珍種に分類されるであろう。
「うるせぇ！　珍種言うな‼」
往人はついに切れた。実に大人げない。
いや、だって、ほら。名簿にそう書いてあるんだもの。そう言って、名簿を往人に見せ、そこを指で指し示した。

「どれどれ……な、ひとを、としている、ともいうが……」
お約束だ。そう心の中で私は呟いて空を見上げた。さて、私がなぜ、このバカと一緒に歩いているかというと……。
「おい、小さい声で言っているつもりだろうが、聞こえてるぞ」
聞こえるように言ってるのに決まってんじゃない。何、当たり前なこと言ってるの？
「……どうせ、俺は普通の奴とは違う根無し草だよ。ビデオどころか、テレビやパソコンの操作もわからない機械音痴さ。あんたみたいなお嬢様とは住んでる世界が違うのさ。そもそも、高校に行ってる奴がそんなに偉いのかよ。生きていくのにたいして役に立たない知識を詰め込んでるだけだろ、どうせ……ぶつぶつ」
あ、いじけた。でも、家すらないんだから、家電製品を持ってないのは当たり前じゃない。
「グサッ」
えー、バカはほっといて。なぜ、私たちはこうも、さまよってるかというと。
「しょうがねーだろ。探知機が使えなくなっちまったんだから。ちょっとつけっぱなしにしただけで、電池が切れるなんて全く根性の無いやつだ」
それぐらい、少しでも考えれば分かるでしょう？想像力のない人ね。まったく電池切れと気付かずに猿のようにカチカチと動かして……。
「……」
ああ。また、いじける。もう、話すすまないんでシカトしていくわよ。
探知機のバッテリー切れの前に、024の観鈴さんと003が一緒で、023の晴子さんが単独行動している、ということは確認した。
名簿によると003は天沢郁未さん。何人かいる不可視の力の持ち主の一人。
もしかしたら、彼女たちが結界を破る鍵になるか

もしれない。そう思って、往人と同行してるんだけど。

まあ、法術はショボイんだけど、反射神経とか体力とかはケダモノ並にあるから一緒にいる方が安全、っていうのもあるしね。

「ショボイ……。ケダモノ並……」

ああ、まだ落ち込んでる。まったく見かけによらず根性無いんだから。

で、まあチマチマと歩いてると。正面になんか鉄塔らしいものが見えたのよ。ただ、深い木々の隙間からなんでよく見えないんだけどね。

「なんだ。ありゃ。櫓か？」

櫓なんて古風な。

「古風って。あのな、都会の方じゃもうほとんどないが、地方だとああいう火の見櫓はまだ残ってるんだぜ」

へー、そうなんだ。さすが自由人。で、緑の帽子はかぶらないの？　ギターかハーモニカは持ってないの？

「うるせえ。ハーモニカは邪道だ」

ああ、左様で御座いますか。

なんて、バカなことを言いあってると。

「ん？　なんだありゃ？」

どうやら、往人がなにかを見つけたらしい。

だが、目を凝らしても何も見えない。巧妙に隠れているのか、ただ小さくて見えづらい小さい獣なのかは分からない。

そして、

少しペースを落として、注意深く進む。

「また、動いた。獣か？　人か？」

そのときの私が運が良かったのか、悪かったのかは分からなかった。

でも、私は目が合ってしまった。

そんなに近い距離ではないのに、彼もまた驚いている顔が見えたような気がした。

そこにいたのは、懐かしい顔だった。

まだ、自分が幼かった頃、何度も会った顔。そして、もう二度と会えないと思った顔。
「あの、おっさんは確か……。おい、ちょっと待てよ。あいつは!!」
この人は敵じゃない。
そう思い、私は走り出していた。
だが、私は知らなかった。
彼が狙撃銃を構えていることを。

718　ふたつの奇跡

わたし達は反転しているであろう芹香さんと交渉し、セイカクハンテンダケを入手すべく、出発の準備をしていた。残留するメンバーに指示を与え、食料や飲料水の分配を行うだけでも、それなりの時間を要した。
行儀よく座る繭ちゃんと一緒に、食料を整理する。
わたしの背後から、残る三人の激しく言い争う騒がしい声が聞こえてきた。
「な……なんでよっ！　このくぃーんをカンヅメにして、かつやくさせないなんて、どういうつもりよっ！」
「うぐぅ、ボクも一緒に行きたいよっ！」
「くぃーんとか、うぐぅとかって……お前ら普通に日本語話してくれよ……」
激しく常軌を逸した口論に、梓が珍しく言葉を詰まらせていた。
小さくためいきをついて、わたしは立ち上がる。助け舟を出さなければならない。いや、事実を確認しなければならない段階に来たということだろう。むやみに心配させるようなことはしたくないが、情況を正しく理解しないことには、生き残ることもかなわないのだから。
「……ちょっといい？」
「ふみゅ？」

「こんなことは言いたくないのだけど……わたし達は御堂さんほど、強くはないわ。だから、今の繭ちゃんを連れて歩いた場合、生き残る自信はないのよ」
「そ、そんなこと……わかってる……わよ」
「うぐぅ」
強弱はともかく、御堂さんでも今の繭ちゃんを連れて歩けるかどうかは疑わしい。神頼みのような幸運にすがる気もなければ、試してみる気もまったくなかった。

——結局のところ、キノコ捜索隊に割けるメンバーは、梓とわたししかいない。どちらか片方が残ることも考えたが、戦うつもりならば戦力を分けるのは愚かなことだし、逃げるつもりならば残る必要はない。今までどおり、あゆちゃんを連れて行くことや、詠美ちゃんを連れて行く選択もある。
ところがその場合、残る繭ちゃんの監視役がいなくなるし、侵入者への対処に不安が残る。しかし詠美ちゃんならば、ここで何かあっても、最初から逃げるつもりで行動するなら、どうにでもなる。モニターによる監視と、独特の構造を利用すれば、初めて侵入する相手ぐらいは、問題なく回避できるはずだからだ。
そんなわけで、詠美ちゃんにはCD解析の続行と管理を任せ、あゆちゃんに繭ちゃん（と動物たち）の面倒を任せることにした。
「……だから留守の間、よろしくお願いね？」
「ふみゅーん」
「うぐぅ……（ってボクの台詞こればっかりだよっ!?）」
「じゃ、雨が小降りになるのを待って出発するから。詠美、あゆに繭、あと頼むよ」
一転して気楽そうに鞄の中身を整理する梓と、頭を抱える詠美ちゃんが対照的だ。

残るあゆちゃんは、ひとり静かにどこかを見ていた。この情況での心理的閉塞感は、近いものがあるのかもしれない。同情を覚えながらも、振り返り繭ちゃんに声をかける。
「繭ちゃん」
彼女は相変わらず動物たちを従えて、手には丸い機械を持っている。
「あゆちゃんの言うことをよく聞いて、動物さんたちの面倒を見てあげてね」
「みゅー、これ、あげる」
晴れやかに笑いながら、その機械を手渡してくれる。先ほどから気になっていたので、チラチラ見ていたことを知っていたのかもしれない。
「……いいの？」
こくん、と繭ちゃんが頷く。なぜか確信めいた行動だった気がする。
この機械を持っていく意味はあるのだろうか？
そう思いながらも、彼女の瞳に気圧されて、わたしは機械を受け取った。あとで調べればいい、と考えながら。

期待に反して、全ての用意が整った頃には、雨足はより強くなってしまった。
洋上に浮かぶこの島を滅ぼそうとしているかのように、雷が丈の高い大樹を選び、轟音とともに焼き尽くしてゆく。あまりの天候変化に呆れながら、待ち時間をデータベースの閲覧に費やすことにした。
偶然開いたデータの×印が、ふと目に入る。死亡を示す、その不吉な記号が、件の機械の持ち主に重なっていた。
そうだ、この機械は彼女が持って……いた、のだ。
「秋……子さん」
思わず呟いたが、他の皆に聞こえないように語尾を濁す。彼女の死亡地点である教会では、多数の参加者が戦闘しており、しかも現在の生き残りはほとんどいない。なんの偶然だろうか、その中に繭ちゃ

んも入っている。あくまで可能性としてだが、反転した彼女ならば、あの秋子さんを打倒する勇気があったかもしれない。

わたしは、秋子さんと並んで歩いてきたはずだ。その距離は遠く、決して交わることはなかった。しかし、目指す方向は同じだったのだ。

視線を天井に泳がし、しばし呆然としていたが、そこで同様に天井を眺めている人影を見つける。

(……あゆちゃん?)

そう言えば雨足が強くなった頃から、何か遠くを見るような目をしている。声をかけようと立ち上がり、彼女の方へ歩く。

「……千鶴さん?」

振り向きもせず、視線を動かさないまま、あゆちゃんが先手を取って言い当てた。にわかに鋭い挙動を示した彼女に、全員の注目が集まる。

「……もうすぐ、晴れるよ」

あゆちゃんを除く全員が、思わず顔を見合わせる。外部モニターに移る光景は、いまだに雷雨であり、暗く、とても晴れるだろうとは思えない。

「ここを出たら、あっちに行かないと……間に合わない、よ」

そう言いながら、振り向いて指し示したのは、確かに芹香さんがいる方角だ。先ほど調べた、あの画像の時点で集合していた参加者たちは、今や二人組にばらけている。

「芹香さんを探すのだから、そうなるわね」

「ううん、もっと、先の方だよ……」

まるで、その〝もっと先〟を見据えるかのように。彼女は、西の方角を見つめていた。

「あ……あゆちゃん……?」

様子のおかしい彼女に、その言動を問いただそうと発声した瞬間。まぶしい光が、サーチライトのように外部モニターから投げかけられていた。

「なななに!?」
「みゅー！」
「攻撃されたの!?」
「いえっ！　熱エネルギー反応では、ないみたいですう！」
「じゃあ、なんだってんだ!?」

光が弾けた一瞬の間を境にして。
稲妻は陽光に変わり、地を流れる水音だけを残して、雨雲は消え去っていた。
果てしなく青い、嘘のように晴れ渡った空が、画面一杯に広がっている。

それが何かと問われれば。
奇跡だと、答えるしかない。

「千鶴さん」
「あゆちゃん、どうして……？」

何から聞けばいいのか、解らない。
言いよどむ私に、あゆちゃんは静かな一言。
「お願いだよ、ボクも連れていって。急がないと、間に合わないいんだよ——」

あの光が、ひとつの奇跡とするならば。
それを感知した、彼女の言動も。

間違いなく、もうひとつの奇跡だった。

719　誇りを捨てない僕らのために

神尾晴子はその惨劇を森の陰の一番深くから見た。
七瀬彰の発言も、柏木耕一の感覚も、実は正しかった。彰は口からでまかせを言っただけだが、嘘から出たまことで、晴子はそこにいた。事実彼女は、森の奥深くで戦闘の準備をしていたのだった。

晴子は銃火器の調整をしていた。
　いざという時に武器がうまく動かなかったら、それだけで自分の死は確定する。この鉄の塊どもが自分の命綱だった。詳しい知識はないものの、機械いじりがどうしても駄目という訳ではない。ある程度は感覚で調子が判るものだ。
　晴子は溜息を吐く。
　それでも構わない。そう思ってはいた。武器の欠陥のせいで自分の命が落ちようとも、それで構わないと。どうせ最後には、自分が守りきれなかった宝――愛娘・観鈴のところに行くつもりなのだから。
　けれど、晴子はやっぱり無駄死には嫌だった。愛娘を殺したこのゲームを全て破壊しつくして、地獄の業火すらも恐れずに破壊しつくして、最後に観鈴のところに行きたかった。晴子は天国も地獄も信じていない。死んだら皆同じ場所に行くのだと信じている。そこにはきっと観鈴がいるだろう。
　殺して殺して殺しまくってやる。重い鉄の感触が少しずつ理性を奪っていくような、そんな錯覚を感じる。冷めた目で銃火器を弄る。鉄は冷たくて、夏の日差しの中では少しだけ心地よかった。
　晴子が大体の武器の調整を終え、そのうちのひとつであるニードルガンを手にとって、殺人鬼になる覚悟を決めようと目を閉じたその瞬間。落ち葉を踏む音、そして、男の声が聞こえてきたのである。
　晴子は慌てて木陰に身を隠す。
　ニードルガンを握り締める。冷たい鉄は、けれど体中に走る緊張までも奪い去ることは出来なかった。心臓の音が身を支配する。落ち着け、と必死に心臓に言い聞かせても駄目だった。言えば言うほど心臓は暴れた。近づかれたら聞こえるくらい、心臓の音が高い。自分には武器がたくさんある。不意をつけば負ける可能性は低いし、たとえ負けたとしても、自分には何もない。観鈴の元に行くことが出来るのだし、何を恐れることがあるのだろう、そう思うのに心臓の音は晴子の身体の自由を奪って鳴り続ける。

なんとか武器を静かに鞄の中にしまうと、音を殺して晴子は後ずさりをする。離れているから音は聞こえない筈だ。そう判っていても晴子の身体は小刻みにしか動かない。
「俺達はもう戦うつもりはない」
はっきりと聞こえた。
「脱出出来る方法があるんだ！　ならもう、殺し合いなんてしなくてもいいよな？」
意味が理解できるまでに、かなりの時間を要した。
「――帰れる、やて？」
もう戦闘をしなくても帰ることが出来る。誰も傷つけなくても安全な場所に戻れる。男の声はそう言っていた。その声を、もう少し早く、観鈴と共に聞くことが出来たなら。
その声が本当であれ嘘であれ、もしも二人で一緒にいられたならば、きっと疑うことなく自分たちは飛び出して、彼らと共に行動をしただろう。
その時、晴子はやっと自分の行動理念に小さな疑問を覚えた。「生き残りたい、殺し合いなんてもうしない」。そう言って走り回る彼らの姿を見て――思う、なぜ自分は人殺しをしようと思っているのか。
観鈴を失った。このゲームのせいで、何より大切なものを失った。だから、他の参加者を殺す。はじめからゲームに乗っておいて、観鈴を害するものをすべて殺せばよかった。そういう後悔のために、自分は今から人殺しをしようとするのか？
(うちは、アホやないか)
彼らはなんとかここから脱出して、なんとかして日常へ続く細いか弱い橋を渡ろうと努力しているのだ。自分は何だ。観鈴と一緒にがたがた震えるばかりで、脱出する方法も模索せずにいて、そして観鈴を失った悲しみを八つ当たりで埋めようとする。
(日常がなくなったんなら、八つ当たりなんかせんでさっさと自殺なりすればよかったやないか)
何もしないでいて、失った悲しみを八つ当たりで

埋める。それこそがこのゲームを企画した人間の狙いで、その狙いに自分は乗っているのではないか。失った娘の元に、友達を送ってあげよう。娘を失った瞬間、自分はそんな事を考えた。だが、考えれば考えるほど馬鹿げている。そんなくだらない事をする前に自分が逝ってやれば良かった訳だ。
　彼らは、自分たちと違って、希望を捨てなかった。神様に祈って救ってもらうことだけを信じて、何も考えなかった自分たちとは、根本から違うと思う。
　晴子はやっと、そのことに気づいた。

　彼らの仲間に入れてもらおう、というつもりはなかった。観鈴のいない世界――寂しい世界に生きていける自信はない。彼らと知り合うことは、彼らに迷惑をかけるだけになると思う。
　晴子は少し笑って、木陰で息を吐く。
（あんたら、がんばって生き残るんやで。あんたらみたいな子らがいる、ってだけで、うちは大分救われたわ。がんばってな）
　そう思って木陰の間からその彼らの顔を見ようとしたところで、晴子は異変に気がついた。
　二人の男がそこにいた。一人はぼろぼろになったファミレスの制服を着た立派な体躯の青年。もう一人は、一見大人しそうな雰囲気をした小柄な体躯の青年だった。
　その貧相なほうの青年が、左手に持ったナイフを、相方に向けて上下に振るったのだ。
「なっ――!?」
　思わず大きな声を漏らしてしまう。だが、幸い争う二人にはその声を聞きとる余裕は無かったようだ。貧相な方の青年の不意打ちで面食らった巨漢は、あっという間にねじ伏せられていた。争う声は聞こえない。ただ、倒された男の絶叫だけが周囲に響いている。
　小ぶりのナイフが何度となく振り下ろされる。雨上がりの湿った空気の中で、噴出す血のにおいがひどく禍禍しい。やがてナイフを放り出すと、小さな

方の青年はその拳で、相方の顔面に攻撃を始めた。馬乗りで、無機質な動きで拳を振り下ろす。殴られている方が叫ぶ、

「……やめろッ、……彰ッ！」

殴っている青年は、アキラというらしい。アキラは相方の顔面に拳を全力で振り下ろし続け、その抵抗する意志を奪う。必死の呼びかけにも応じず、攻撃を続ける。そして抵抗力を失った相方に向けて、首が吹っ飛ぶような蹴りをぶつけた。

晴子は思わず眉を顰めて目を逸らす。あの角度で入った蹴りは、命を奪うほどの破壊力があると思った。仲間に向けて放たれる攻撃では、なかった。一体何が起こっているのだ。彼らは脱出をする為に手を組んでいたのではなかったのか？

一方的に叩きのめされた男を横目に、アキラは、何かしらを呟いて、森の奥へ走り去っていく。倒れた男は、それでも意識が辛うじて残っていたのだろう、追いかけようと何とか身体を起こそうとするが、すぐに力尽きて倒れた。

裏切り。そんな言葉が、晴子の脳裏を過ぎる。唾をごくりと飲み込んで、真っ黒な思いで胸を染める。

（——やっぱり、皆乗ってるんやないか）

きっと彼——アキラは、体よく他人を利用して、そして生き残ろうと考えているのだと思う。今まで共に戦ってきただろう仲間を殺してまで、ひとり生き残ろうとしているのだ。

先までの自分と、何も変わらなかった。

自分は全てを皆殺しにして自殺する。

アキラは全てを皆殺しにして帰還する。

いったい何が違うのだろうか、と思った。

憎むべきは一体何なのだろうか、と晴子は考える。

身体が震えているその原因を、晴子は考える。

思った。憎むべきは、主催者だけではない。自分の弱さを誤魔化す為に、他人を傷つけようとする人間だ。自分のことで、アキラのことで、そしてこの

島にいるあらゆる殺人者のことだ。
　この島で行動を共にした人達。あさひ、智子、往人、観鈴……誰もが、強くて優しかった。
　けれど、皆がそうである訳じゃない。自分の為に他者を傷つける人もいっぱいいた。いや、先程までの自分もそうだった。
　晴子は自分のことを恥じながら、けれど、今更だけど、優しく、強くあろうと思った。

　晴子は恐る恐る、その死体に近づく。めった刺しにされ、血をだらだらと流して倒れているその青年の傍に近づいて、聞こえる筈もない言葉をかける。
「あんたも——災難、やったな」
　顔を歪め、晴子はその身体に触れようとして——殆ど聞こえないほどの薄い薄い呼吸が、しかし確かに自分の耳に届いたのを確認する。
　——生きている。
「あんた……大丈夫か」
　声をかけるが、まるで反応がない。大丈夫なわけがない、これほど傷ついてそれで意識があればそれはもう人間ではない。けれども。
　彼が生きていることには間違いがないわけだ。
　自分は大切なものを守ろうとした。そして、守れなかった。そして、今目の前で息を引き取ろうとしている男もまた、大切なものを守ろうとして、こうして走っていたのだろうと思う。
　今、この男に向けて銃の引き金を引くのは簡単だ。こんなゲームに巻き込まれているんだ、殺されたって文句は言えまい。自分だって大切なものをなくしたんだ、運が悪かったんだ、どうせ助からないだろう。理由はいくらでも付けられる。
　だが、——陳腐な言葉で言えば、
　それを観鈴が望んでいる訳がないのだ。
　晴子は、やっとそのことに気がついた。
　あの子が願うこと。そして死んだ友達が願っていたこと。やさしかった彼らが望むことを。

やさしくあれ。
晴子はその大きな青年を背負い先ほどまで居た喫茶店に向かうことにした。食べ物もあったし、何かしら治療に必要な道具もあるかもしれない。あそこならこの男を治療することができるかもしれない。
「……まだ、ゴールしたらあかんで？」
ピクリと体が反応した気がした。
「すぐに助けたるからな」
返事はない。だが、全身に体の熱を感じる。
晴子は歯を食いしばって歩き出した。

神尾晴子は大切なものをひとつ取り戻した。それは、人として見失ってはいけない大切なもの。それは、観鈴が大切にしていた想いのひとかけら。
「……見ていてや、観鈴」
晴子はもう二度とそれを捨てることはないだろう。
それは、優しさであり強さでもある。
そしてそれらは、誇りとも言うのだ。

720　合言葉は

「なぁ、千鶴姉」
梓が声をかけてきた。
「何？　梓」
「繭達をここに置いていくのはいいんだけどさ、誰かここに来たらこいつら危険じゃないか？」
梓の指摘はもっともだった。
確かにこの殺人ゲームに乗った誰かがここを訪れないとも限らない。
かといって連れて歩くのはもっと危険だ。
私は少し考えてメイドロボに声をかけた。
「この施設で鍵をかけられるような場所は無いかしら？」
「え～とですね～、ちょっとお待ち下さい」
そう言ってパソコンで施設内を調べ始めた。
「え～とですね～、ここ以外には無いみたいです～」

「そう。それじゃあ繭ちゃん達にはここに居てもらって鍵をかけておけば大丈夫ね」
「あ、でもですね～」
「何？」
「ここのロックはパスコード式になってますからパスコードを設定しないといけないんです～」
「パスコード？」
「はい～、キーワード入力式か応答式でパスコードを設定できます」
「そんなのなんか適当に決めればいいじゃないか、千鶴姉」
「ダメよ。簡単に分かるようなパスコードだと意味がないでしょ」
「う～ん……、でもさぁ、あんまりややこしいのだとこいつらが外に出たときに困らないか？」
「あら？　外に出ることがあるかしら？」
「確かここトイレ無かったはずだけど」
「そうなの？」

私の質問にぽややんとした雰囲気のメイドロボが答えた。
「はい～」
「そう、それは困ったわね……」
簡単なパスコードだと他の人にすぐに分かってしまうから意味がない。
かといってあまりにも難しいのだとこの子達は間違いなく覚えきれないだろう。
「何か良い言葉はないかしらね」
「う～ん……」
私と梓がそろって頭をひねっていると私達の頭を悩ませている張本人が近づいてきた。
「ふみゅ～ん、どうしたのよ～」
「……いいよな、お前は。気楽そうで」
「なによ～、したぼくのくせになまいき～！」
「げぼくだっての。それにあたしはあんたの下僕になった覚えは無いんだけどね」

二人が言い争っているのをため息をつきながら見ていると詠美ちゃんが一枚の紙を落とした。
詠美ちゃんはそれに気付いた様子は無かった。
私はそれを拾い上げてみた。何か文字が書いてあるようだ。
「かゆ……うま？」
「ふみゅ？」
「千鶴姉、ボケたか？」
私は梓を一睨みすると詠美ちゃんにこのメモ書きの事を聞いてみた。何でもどこかの施設を襲撃したときに兵士の死体からパクッてきたものらしい。
「千鶴姉、こりゃ単なる落書きだろ」
「そうね、でもちょうどいいわ。これをパスコードにしましょう」
「ハァ!?」
「こんな言葉普通は思いつかないでしょ。第一覚えやすいし」
「まぁ、確かにこんな言葉普通は考えつかないよな。それにこれ位ならこいつらも覚えられるだろ」
「ふみゅ〜ん！　ばかにして〜！」
「それじゃあお願いできるかしら」
私はまた言い争いを始めた二人をほっといてぽややんとしたメイドロボに頼んだ。
「はい〜」
「そうね。『かゆ』と表示された後に『うま』って入れたらいいようにしてくれるかしら？」
「はい〜、お任せ下さい」
「それじゃ、お願いね」
私はメイドロボにそう頼むと後ろで騒いでいる二人を止めに行った。

721　夕べの祈り　序曲

予感は静かな確信へと。
青く輝く石が、初音の意識にある存在の接近を知らせる。

言葉やイメージではなく、それはただの感覚。
それでも確かな感覚。

――『鬼』が来る――
――人の中に、静かに確かに潜んでいる――
――攻撃本能剥き出しの、『鬼』が来る――

参加者の中でも鬼の血を引いている者は僅か。
初音の知りうる限り、全員『鬼』は制御できているはずだった。ということは、この悪の『鬼』はあの人しかいない。
消えようとしていた命の灯火を、自分のエゴで引き延ばしてしまった。その罪が罰となり遂に自分の身に帰ってきたことを、初音は認めざるをえなかった。
そして、あの時固めた一つの誓い。
もしもの時は、自分の手で愛する人を殺す。そして自分も。

予測できていたことなのだ。今、その時がやってきただけなのだ。運命に抗おうとする意志を、今の初音は持ち合わせていなかった。

精算しよう。
「皆、これから話すこと、真剣に聞いてくれる？」
ここにいる皆に示す確証は何もない。あるのは真摯な決意だけ。
「実は――」
お願い、どうか信じて……。

「初音ちゃん！」
ドアを開けて彰が叫ぶ。
室内には初音しかいなかったが、彰には構うことではなかった。
初音しか、彼の目には映らないのだから。
「早くここから逃げよう！　敵は今、耕一さんが足留めしてる。彼ならきっと大丈夫だから早く安全な

ところへ！　あの男はただ者じゃない！」
早口でまくし上げる。
初音の反応は、ない。
ただ冷ややかな目で、彰を見つめるだけ。
「初音ちゃん？」
「その血は……」
冷たく通る、澄んだ声で、初音は喋った。
「耕一お兄ちゃんの返り血？　彰お兄ちゃん、怪我してないもんね？」
「あ、あぁ、最初は二人で戦ってたんだけど、耕一さんが……」
「それだけの怪我だったら、耕一お兄ちゃん無事じゃすまないよね？　その敵が彰お兄ちゃんを追ってきてるなら、今頃追い付いてるはずだよね？」
「初音ちゃん？」
「もう、終わりにしようよ……彰おにいちゃぁん……。耕一お兄ちゃんを殺したの？」

朝に響く、鳥の初音のように。
哀しい意味を持った言葉が、小屋の中に響いた。
「あれはっ、耕一の奴が悪いんだ！　初音ちゃんを奪おうとしたからっ、だからっ！　初音ちゃんは僕のものだろ？　僕は初音ちゃんを愛しているし、初音ちゃんもそうだろうっ⁉」
「彰お兄ちゃん、自分が何を言ってるかわからないのっ⁉　本当にもう狂っちゃってるんだね⁉　戻れないんだね⁉　鬼の血なんてあげなければよかったよ……それでもお兄ちゃんが好きだったからっ！」
右手を上げる、銃を構える。
「死んで欲しくなかったんだよぉっ‼」
発砲。銃弾は、彰の右腕を貫いた。
彰から見えない位置で銃を構えながら、マナは思う。
どうしてこの島には、こんなに悲しい想いばかり

なのだろうかと。
　初音から彰はきっと狂っている、その原因は私にあると聞かされた。そして、それを償うためにも、自分の手で彰を殺してその後を追うと。
　とても嘘をついているようには思えなかった。
　初音の決意と想いが伝わって、それはきっと真実だった。
　マナの、スフィーの、北川の制止も聞き入れることはなかった。
　聞き入れさせるのは、所詮無理な話なのだ。
　北川とスフィーはここにはいない、初音の意向でマザーコンピューターへと向かっている。
　北川は最後までしぶっていた。これ以上、誰かが死ぬのは御免なのだ。
　しかし、彰がここに悪意を持って向かっているとすると、時間はない。
　人にはそれぞれの役目がある。
　彼は去り際に「後は頼む」と言い残した。
　涙をたたえて。
(残念だけど、無理みたいよ……)
　人にはそれぞれの役目がある。
　今のマナと葉子の役目は『初音がしくじった時に彰を止めること』。
　できるならば、『自殺する初音を止めること』。
　どちらにしても、死者が出る道は避けられそうにない。
　聖との約束を思い出し、自分の無力さに涙するしかなかった。
(無理そうでも。諦めはしないんだから。誰も死なない方法を……考えろ……考えろ……)
　実際、彰の攻撃の矛先は耕一だけだった。
　耕一を排除すれば、他の者に危害を加えるつもりは『今は』なかった。
　そんなこと、初音がわかるはずもなかった。

彰は右腕に痛みを覚える。
どうして、自分が撃たれるのだろう。
自分は何か間違っていたのか。
やはり彼女は、最初から自分のことなどどうでもよかったのか？

理性の混乱は、鬼につけいる隙を与えるだけ。
初音と過ごした間の彼女の瞳は、いつも違う所を見ていた。
再会シーン。耕一と、初音。
偽りの記憶の洪水。
初音よりも強い力を持った同族がいることがわかった今、鬼にとって初音の存在はどうでもよくなった。
犯し、殺すだけの対象。
壊せ、壊せと、鬼の意志が彰の心に潜む疑惑と偽の記憶を活性化させる。

——僕だけが何も知らず、道化だったということか——

「初音ちゃん、信じていたのに……。こんなにも君のことを想っていたのにっ！」
彰は銃を、初音に向けた。
自分が狂ったという自覚もないまま、初音の想いもわからぬまま。

「彰おにいちゃん、私は、あなたを——」

——殺します。

夕べにはまだ少し遠い。
哀しい序曲は、始まったばかり。

722　嵐のあと

高さと広さと、迫力に。
思わず目を瞠り、大きく息を吸い込む。
何処を向いても、視界の全ては青と白に埋め尽くされて。
見上げれば吸い込まれそうな空。そして雲。見下ろせば目が眩むほどに深みのある海。そして波。
それ以外に感じられるのは、潮の香りと、風の音だけだった。
……あら、お久しぶり。
乙女の七瀬よ。元気にしているかしら？
あたし達は、ついに島の最北端まで到達したのよ。
ちょっと早いと思うかもしれないけれど、急がないと、何故だかあたし達の美しい顔がみるみる破壊されていくの。それは言うなれば、世界全体にとっての損失なのよ。

「……ねえ、晴香」
「ん……なあに？」
ようやくたどり着いたそこは、数十メートルの断崖だった。打ち寄せる波に応える様子もないまま、ただただ静かに切り立つ崖の上から、あたし達は青と白の世界に囲まれて立ち尽くしていたけれど、二人して腰に手を当て仁王立ちしている姿は、いかにもスポコン漫画といった風で、我ながら乙女離れしたたたずまいだったわ。
夕日じゃなくて良かったわ、なんて思いながら、誰に見られているわけでもないけれど、慌てて姿勢を崩し、晴香に声をかけてみた。
「す、凄いわね」
「そりゃ、さっきまで大荒れだったからね」

確かに突然晴れたからと言っても、海が平穏を取り戻すのには少々時間がかかる。真下を見れば、自殺の名所のように見えなくもないほどの波飛沫が舞っていたわ。断崖絶壁に、数メートルの大波がうち寄せているのは、ちょっとした見ものなのよ。
「空はもう、こんなに穏やかなのにね」
「この時期アラシは憑き物だから、仕方ないわ」
（……なんか発音が変な気がするけれど、多分気のせいよね？）
そう自分に言い聞かせて、水面を見つめる。波に紛れてはっきりとは判らないが、一部分だけ青色が濃い気がした。底が深くなっているような……つまり、穴が開いている感じが……する。
「晴香、あそこ……深くない？」
「七瀬？　飛び降りは、一人でやってよね」

シャキン！

ガキン！

「何であたしが飛び降りなきゃなんないのよ！」
「じょじょ、冗談よ！　アンタの刀は毒塗ってあるんだから、やたらと抜かないで！」
「だったら煽るんじゃないわよっ！」
（まったく、こいつ折原と同じくらいバカだわ。煽りは常に、厳禁なのよ？）
そう思いながら、あたしは真後ろにそびえ立つ灯台へと向かった。歩き、そして考える。
（……そうだ、最初に床を調べてみよう）
もしも海底に繋がっているのなら、きっと地下への入り口があるはずだから。穴の大きさから考えると、思った以上に小さな潜水艦なのかもしれないけれど。
一人だけでも脱出できれば、きっと助けを呼べるのだから、それはそれで構わない。
願わくば、この白く巨大な塔が。
あたし達の、希望になりますように。

723　優しい手当て

晴子は焦っていた。何故なら消毒液が見つからないからだ。
「くそ、いったいどこにあるんや！」
焦るのも無理は無い。今の耕一の状態はかなり危険である。
晴子も運んでいる最中には『着くまでに死ぬのではないか？』という危惧がまとわりついて離れなかった。
だから喫茶店について耕一を寝かすと、すぐに手当てをするために救急箱を探した。
救急箱自体は運良くカウンターの棚を探したら見つかったのだが、必要な物が一つ欠けていた。それは消毒液である。
「消毒の一つぐらい残しとき！　ケチは嫌いや」
誰に言うわけでもなく、晴子は愚痴をこぼす。しかし、隈なく店の中を探しても、ついに消毒液は見つからなかった。
途方に暮れかけた時、晴子の頭の中に、ある一つの解決案が閃いた。代用品の存在を思いついたのだ。

耕一の意識は朦朧としていた。
目の前の人らしき物は誰で何をやっているのか。
自分が何故こんな所にいるのかも理解出来なかった。
ただ漠然とした思考が頭の中を渦巻いていた、それは自分のことではなく他人のこと。
(みんな大丈夫かな……)
けれども考えがまとまらない、なんだか夢の中にいるみたいだった。
――このまま夢で終われば、何故だか楽になれる気がする……
いきなり夢が終わった。
体に激痛が走り、急に意識が覚醒したからだ。
「うがあああぁぁアア‼」
あまりの痛さに耕一は叫び、周りを見回した。

そこには霧状になって空間を彷徨っているアルコール臭い液体と、「残りは勿体無いから飲んどこか」とかのたまいながら、一升瓶をラッパ飲みしている女がいた。

724 長い道

日本酒の仄かな匂いがただよっていた。激痛で飛びそうになった意識を繋ぎとめたのは、「おはよーさん」という、どこか暢気な女の声だった。

俺――柏木耕一は、自分のおかれた状況がまだ認識できずにいる。今までの殺し合いが夢でないことは怪我をしていることから判るし、自分が先ほど七瀬彰に殺されかけた記憶も残っている。どうして自分はここにいるのだろう。冷静に考えれば判る。自分の目の前にいるこの女性が、ここまで連れてきてくれたのだ。

その女は一升瓶を片手に持っていた。まだ中身はたっぷり入っているようで、こんな島の一体何処で彼女はそれを見つけたのだろうか、と心底疑問に思う。自分の身体から漂う匂いからして、酒は自分の身体を走っている傷の消毒に使われたのだと思う。その酒をごくごくと飲みながら、彼女は目を覚ました自分の顔を見てすごく満足そうに笑っている。

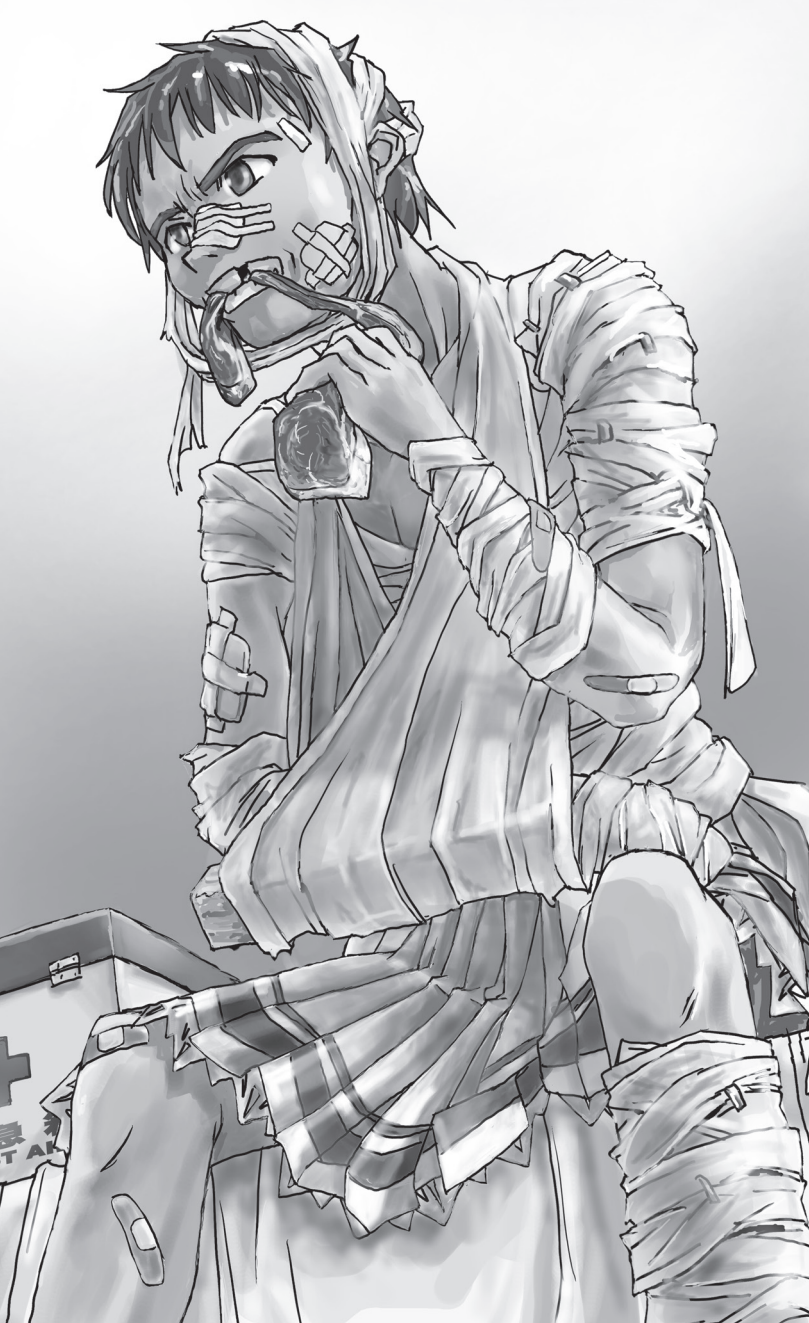
呆然として見返す俺を見て、彼女は「おとなしいいや」と呟き、傍らに置いてあった救急箱の中から塗り薬と包帯を取り出すと、容赦のない手つきで薬を自分の傷口に塗りたくった。筋肉のピンク色が裂け目から見えるくらいの深い傷で、残虐すぎるくらいのその手つきは俺の身体に電撃のような痛みを走らせた。思わず漏れる「痛っ」という無様な呻き声に、女は呆れた――ちょうど母親がイタズラ息子に見せるような優しい優しい顔をして、溜息交じりに言う。「男の子やろ、我慢せぇ」本当に子供を嗜める母親のようだった。もう少し優しくやってくれませんか、という、言葉にしてしまえば僅か十数音

の文が何故か口に出来ない。そういう風に頼むことがどうしてか少し恥ずかしいことのように思えた。
何も言わなかったので彼女の手つきは変わらない。傷口をむしろ抉るように薬を塗る。痛い。死ぬほど痛い。拷問をされているような痛みで、自分がもう少し分別のない人間だったりしたなら大声で泣き喚いていたかも知れない。けれど俺は唇を噛んで必死に痛みに耐える。声を上げては負けだ。何と戦っているのかわからない不思議な勝負が心の中で展開されていた。
薬を塗り終えると、彼女は今度は包帯を手に取った。「動いたらあかんよ」と言う彼女の言葉に従って俺は停止する。くるくると器用な手つきで彼女は包帯を俺の身体に巻きつける。巻きつけながらふと彼女が口を開く。
「こらーなかなか深い傷やな。けどまあ、あんたは男の子やし、これくらい我慢出来るよな」
肩を竦めて笑う彼女の顔は本当に母親のようで、自分とそんなに変わらない歳に見えるこの関西弁の女性が一体何者なのか見当も付かなくなる。
彼女の為すがままになっている間俺に出来ることは思索のみで、思索が俺に与えるカタチは、意識を失う直前の戦いのことだけだった。早く行かなければ自分の大事な人や仲間たちの身が危ない。そう思うのに身体が動かないのは、果たして身体が傷ついているというそのことだけが理由なのか。
思索にふけっている間に包帯が巻き終えられた。
「君、災難やったな」と溜息のような呟きが自分のすぐ横に座った女の口から漏れる。俺は返事もせずにぼうっと天井を見る。四角い筈の天井が楕円形に潰れて見える。そのままぐらりと身体が揺れて、俺はベッドに倒れこんでしまう。その様子を見た女は慌てて立ち上がり、「なんか精が戻る食い物探してくるわ」と部屋を出ていく。慌ただし過ぎて呼び止めることも出来なかった。

溜息を一つ吐くか吐かないかという短い時間で女は肉の塊を持って戻ってきた。「こんなんしかないけど我慢しい。冷蔵庫の中にあったから鮮度の点は大丈夫やと思う」と女は歯を見せて笑った。その笑顔はまるで女学生のように若々しい爽やかな笑みで、どうしてこの島で彼女はこんな顔が出来るのか、と思う。笑顔のまま彼女は俺を見つめる。どんと置かれた生肉。食べられません、なんて言う余裕があるほど今は恵まれた状況にない。長らく自分は肉なんて食っていなかった。血と肉の塊。体力を取り戻すために不可欠なエネルギーが目の前にある。俺は彼女に小さくお辞儀をして、肉を手に取った。

歯に力が入らない。肉とはここまで歯ごたえのあるものだったか。或いは自分が肉を食えないほどまで弱っているのか。全身の力を歯に込めてなんとか噛み切り、乾いた喉に肉を無理やり詰め込む。胃が弱りきっている状態と生臭い匂いとが相俟って吐き気が胸の底からあふれ出る。逆流しそうになる肉を、しかし俺は死ぬ気で噛み、噛み、噛み、噛み、そして死ぬ気で飲み込む。もう一口。噛み、飲む。もう一口。噛み、飲む。

生まれて初めて見るものを目の前にしたかのように、気づくと俺は肉の味に夢中になっていた。胃が少しずつ調子を取り戻していく。こうなると元々食欲旺盛な俺には少ないくらいの量だった。一抱えはあった大きな肉塊がみるみる小さくなっていく。ふと顔を上げると、女は笑顔で自分の顔を見ている。

肉塊が綺麗に消え去ったところで、俺は一息ついて言う。「――おばさん、本当に有難うございました。よろしかったら、あなたの名前を教えてくれませんか？」そう言うと彼女は天使のように笑いながら「……おばさん？　わはははは。面白い事ゆーの、君は」と拳を振り上げ、俺の頭にものすごい勢いで叩きつける。傷口が開くかと思ってしまうくらい派手な音がした。俺は苦笑いしながらすいませんと頭

を下げる。「まあええわ」と肩を竦め、彼女は頬をぽりぽりと掻く。「まあなんや。普通は人に名前を尋ねるより自分が名乗るほうが先やない？」その通りなので俺は逆らわず、「俺は柏木耕一と言います」と頭を下げる。
「本当にありがとうございました」
と俺が顔を上げると、彼女は少し笑みを崩し、
「その耕一君は、どうしてあのアキラ君と殺しあってたん？　見たところ、殺しあうような関係やないように見えたんやけど」
そう言った。
「あの子、すごく危険な感じのする顔してたわ。あんたはあの子を止めなくてええの？　あのままやったらあの子、本当に人を殺すと思う」
俺は彼女の言葉を自分の中で反芻する。俺が止めなければ、彰は自分の仲間を殺す。島を脱出しようとしている他の参加者を殺す。全てを壊してしまう。俺が止めなければいけない。

反芻するだけで、どうしても身体が動かない。今すぐにでも立ち上がって走らなければいけないのに。判っている。この感情の名前は恐怖だ。
彰に骨を抉られた瞬間を覚えている。彰に筋肉を切り裂かれた瞬間を覚えている。拳を叩きつけられ、鼻を折られ、意識を失う瞬間を覚えている。そしてその痛みは、俺の心臓に恐怖の文字を埋め込んだ。
鬼の血を飲んだというその一点だけでは、恐怖の文字は埋め込まれない。自分の身体にも鬼の血は流れていて、単純な腕力においては俺が七瀬彰に負ける道理はないのだ。なのに自分は捻じ伏せられた。腕力だけで説明できない気力の差。狂気という力に、俺の腕力と気力は捻じ伏せられたのだ。
もう一度あいつと対峙して、自分はあいつに勝てるのか。恐怖に心を支配された俺が、あいつに勝てる道理はあるのか。

「行かんのか？」

女は尋ねる。答えることのできないままいると、女は少しずつ不機嫌そうな顔になっていき、やがてその顔は怒りの色を携えていく。
「なんや、あんた？　行かんのか？　あの子が人を殺すのをぼうっと眺めとるつもりか？」
答えることが出来ない。自分が行ったところであいつを止めることが出来ない。多分俺はやっと、死ぬということの恐怖が判ってきたのだ。唇を噛み、歯軋りをし、けれど俺は動くことが出来ない。
女は声を荒らげる。顔を怒りに歪ませて叫ぶ。
「さっき、うちに呼びかけてたことは嘘やったんか！」
立ち上がり、俺の肩に両手を乗せて乱暴に体を揺する。目の前で、天まで届くような声で叫ぶ。
「脱出できる手段があるんやなかったんか？　ここから帰るんやなかったんか？　そんな希望が、あんたの心の中にあるんやなかったんか！」
女は俺から離れ、怒りに満ちたまなざしで手を上げる。「いい加減にしい！」と、平手を俺の頬に振らせたのだ。先のげんこつと違って、その手からは燃えるような痛みが広がった。彼女の怒りが熱になったのかもしれない。
「――！」
「あんたなあ……ぬか喜びさせんといてや。――あんたきっと怖いんや。あんな貧弱な子の事が。そんなでっかい図体して、あんな小さい子が怖いんか。は。惨めやないか？」
ずきずきと頬と胸に痛みが走る。そして痛みが俺の心に熱を与える。間違った方向に熱が向かっていることが自分でも判るのに、それを止めることが出来ない。止まらない口から出たのは、ただの八つ当たりの言葉だった。
「……――そうだよっ！　俺は怖いんだよ、あいつが、彰がっ！　判るのかよあんたに、知り合いに殺されかかったってことが、どれだけ怖いことか！」
心の中で渦巻いていたものは、言葉にすると本当に空恐ろしいものだった。もともとこの島は、そう

いう道理で出来ている。親友を疑え、恋人を疑え、全てを疑え。それがこの島でのルールだった筈だ。けれど、自分の命を救ってくれた人に対して吐くべき言葉ではなかったと思う。
　俺の無様な様子を見て、女は心底つまらなそうな顔をした。「はぁ……」という呆れと落胆が一杯に詰め込まれた溜息を吐き、そして俺の目を真っ直ぐと見やると、真っ直ぐな声でこう言った。
「あんたがどれだけ怖かったなんかは知らんけどな。うちが怖い目におおとらんみたいな言い方をされるんはむかつく。うちかて君がどんなに怖かったかなんて想像しか出来へんよ。けどな。うちは臆病風に吹かれたあんたと違って、この島から脱出するために何かしたいと思うてるんよ。一緒にせんといてな」
　真っ直ぐで、強くて、俺の心を貫くには充分に冷えた言葉の槍だった。
　女は肩を竦めて立ち上がる。「――……悪かったな、耕一君」と言って自分に背を向けた。嘲りがこめられた笑顔と、同情が込められた視線が俺に降ってくる。「まあ、君に期待しすぎたんやろな」と、小さく伸びをして女はドアノブに手をかけた。
「ああ、ここ自由に使っててええよ。うちはどうせやることもないし、守るもんもない。アキラ君を殺しに行くわ。君はそこで、放送が流れるのを待ってるとええ」
　何も君には期待していない。彼女の背中はそう言っていた。ぶっきらぼうにドアを開け、女は部屋から出ていってしまった。

　俺はベッドの上で最後の思索を始める。

　彰がああなってしまった以上、もう全員が無事に帰れることはないだろう。自分たちが掲げていた目標はもう、遠い闇の彼方に霞んでしまった。もうきっとあの診療所にいた全員が、彰の手によって制圧されているだろう。想像も出来ない凶悪な風景が俺

の目に浮かんでくる。弱りきった自分、恐怖に歪みきった自分では、その風景を明るい風景にすることは出来ない。そうに決まっている。もう全てを諦めて、眠ってしまえばそれでいい。俺に出来ることは何も無いに決まっているのだ。

俺はベッドの上で最後の思索を終えた。

俺はゆっくりと身体を起こし、眩暈のする頭を押さえて、そしてふらつく両の足で、しかし立ち上がった。身体の調子はけして良くないけれど、走れない程ではないと思う。例えゆっくりでも走りきれば、まだ間に合うところにいる。

恐怖を制圧しきることは出来ない。俺の心の中にあるのは二種類の恐怖だけだった。彰に殺されるかもしれないという恐怖と、全てのものを失ってしまうという恐怖だった。そして二つの恐怖の戦いを、――後者が制したのだ。

長く考えすぎて、間に合わないかもしれないけれど。守るべきものを既に失った彼女の、その声に応えないで何が男だ。彼女の吐いた言葉は、全てが彼女の傷跡から漏れ出したのだ。

ドアノブに手をかけて乱暴に開き、部屋を出て、そこで「見込んだ通りやったな」という女の声を聞く。体操座りで一升瓶を抱えた女は、本当に嬉しそうな笑みで佇んでいた。

女は尋ねる。「もしかして、便所に行くだけとかってことやないよね？」俺は、胸を張って答える。

「――勿論です」

「うちはあんたの、何があっても絶対にこの島を脱出するんだ、って意志を見て、少し救われたんよ」

俺は彼女の横に座る。自分より一回りは小さい肩が淡々と言葉を紡ぐのを、俺はただ聞いている。

「実はうちな、あんたの姿見るまでは、このくっだらん殺し合いに乗ろうかと思ってた。娘が死んでし

もうたんや」
一升瓶に口をつけ、飲み干し、息を吐き、
「大切なものを守れんかった不甲斐なさでな。もうどうにでもなれ、って思うた。馬鹿やろ？」
女は笑顔でそんなことを言う。俺には何も言うことが出来ず、ただその告白を聞き続ける。
「はじめから娘を守るために全員殺せばよかったとさえ思った。——そんなとき、あんたの叫んでる声を聞いたんや。脱出できる手段がある。殺し合いは止めるんや、ってな。正直、年甲斐も無く惚れそうになったで。あんた、死ぬほどかっこよかった。大切なものを守るために、必死で動いてた」
女は、急ぐんやろうけどもう少しだけ聞いてや、と頭を下げて、なおも言葉を続ける。
「うちは大切なものを守るために、まるで動こうとせんかった。きっと何とかなる、と思うとったんやろうな。いつかきっと神様が助けに来て、うちら二人だけが救われる——なんてな。最初から諦めきってたんはうちの方や。あんたにさっき言ったのは、自分に向けて言ったみたいなもんや。うちは——どうしようもないアホやったん。君に何か言う資格なんてない、最低のアホやってん。だから君が、もう全部どうでもいい、って投げ出した姿を見るのが、すごくつらかったんや。ごめんな」
謝ることではない。全然謝ることじゃない。俺はそう言おうとして、どうしても口が開かない自分に気づく。その言葉が彼女に何の救いも与えないことをよくわかってしまったからだ。大切なものを失ってしまってもなおこうして笑顔でいられる彼女が、信じられないくらい強い人間に思えた。
最後に、と注釈して。女は笑顔でこう言った。
「うちが予言したる。あんたが守りたいと思ってるもんは、まだ守りきれる場所にある。今すぐあんたが走り出さないといけないくらい、すっごい危険に晒されているとは思うけどな」

「はい」
「やることを決めたら、怖いことなんてないわ。うちは大切なもんを守れんかった。命を懸けることすら恐れてな。命懸けたいと思うてももう遅い。――けど君はまだ命懸けられるやろ。命を懸けてでも守りたいものがあるやろ！　な！」
大切な仲間。大切な家族。――大切な、友達。
俺は彼らと彼らの希望を守るために、この長い長い道を歩いてきたのだ。目を閉じ、精神の底に巣食う恐怖の色を見る。見えないくらい真っ暗だった心の中にあるのは、凶暴に暴れてはいるが、それでも目に入るくらいの大きさの獣だった。目を開き、横を見る。酔っ払ったのか、少し赤い顔になった女が、心底満足そうに笑っていた。
「そうや。良い目になったな、耕一君」
「はい」
「それでええ。よおし、約束せえ。必ずあんたは生き残り、守るべきものを守るんや。そいで、うちを迎えにきてえな。あ、変な意味ちゃうで。うちも脱出のために君に協力したいんや。そんだけやで」
笑って言うと、晴子は突然拳を握り締め、天井に向けて真っ直ぐ掲げた。しなやかな腕と、祈りの込められた拳で、俺はそれを美しいと思う。
「な、耕一君。君の拳をうちの拳に併せえ」
「――はい」
俺も同じように拳を掲げ、彼女のその拳に、まるで乾杯をするように、コン、と併せた。
「うちに誓え、必ず生き残って大事なもん守りきるって。次の死者放送ん時、君の名前が呼ばれたら、あんたは大嘘吐きやで。うち泣くで。ホントに」
「はい。あなたを泣かせるようなことは絶対にしません。絶対に、守りきります！」
「――よおし、よく言ったぁ！　うちの武器とあんたの武器、一階にまとめて置いてあるわ。好きなの持ってってええからな！　それでアキラ君を狂気から救ったれ！　うちは君の事を肴にして、ここで酒

呑んどるわ‼」
　そう言って、女は、本当に嬉しそうに笑って俺の肩を叩いた。俺は彼女のその笑顔で、やっと恐怖と立ち向かおうと思った。

　俺と彼女は立ち上がり、階段を降りる。まだ多少なり眩暈がするが、傷はだいぶ癒えた感触がある。さっきの生肉が徐々に血になっていっているのだろうか。階段を降りてすぐ右の部屋に、彼女の言葉どおり武器がまとめて置いてあった。彼女は手早く鞄をひとつ用意してくれて、それに入れるといい、と差し出した。俺は少し考えて、ニードルガンを手に取った。そして自分が最初から持っていたナイフとキャノン砲も鞄に放り込む。
「殺すんじゃないんやで。君は、止めるためにいる」
「はい」
　準備を整えて俺は鞄を担ぐ。今から走り出せばきっと全てを守れる。そう信じよう。諦めた瞬間に希望の光は消えるものなのだ。俺はもう。二度と諦めないと決めたのだ。喫茶店のドアを開けると夏にしては冷たい空気が吹き込んできて、俺はふと彼女の方を振り返る。
　彼女は少しだけ悲しそうに笑っていた。

　ああ、と俺は思う。

「本当にありがとうございました。——ああそうだ、忘れてました。あなたの名前教えてくれませんか？」
　この長い入り組んだ道の中で、
「神尾晴子や、柏木耕一君。あはは、今まで名前教えてなかったんやなー。おっちょこちょいやな、うち」
　俺は一体どれだけの人と出会い、
「あはは。——それじゃあ行って来ます、晴子さ

ん」
　こうやって別れて行くのだろうか。
「ああ。いってらっしゃいやな。君が帰ってくるのをここで待っとる。絶対に、笑顔で帰ってきいや？」
だが、今はまだ終わらない風の中。
「はい！」
振り返る間もないほどの、
「負けるなよッ！」
長い長い道の中で、
「——はいッ!!」
今は、ただ。
「負けるなよッッ!!」
——俺は、前だけを見つめていた。

725　ななせとはるかのぼうけん

「あ～、疲れた～」

あたし達はようやくその建物に到着した。
外見上は灯台のような建物。
でも、ここにあたし達が探しているものがあるに違いないとあたしは確信していた。
そう、言うなれば、これは乙女の勘ってヤツね。
「何、バカ言ってるのよ」
晴香は心底呆れた、といった顔つきであたしのことを見ていた。
「ア、アハハ、気にしない気にしない」
どうやら、口に出ていたらしい。これじゃまるで折原みたいだわ。
あたしは笑ってごまかした。
「さてと、ふざけるのはここまでにしておきましょう。敵側の施設なんだから何が起こるか分からないわよ」
晴香の顔つきが一瞬にして緊張感を持ったものに変わった。その手には既にワルサーが握られている。
「そうね」

あたしも刀を鞘から抜いた。
「それじゃ、行きましょうか」
「ええ」
あたし達は慎重に建物の中へと入っていった。

「……人の気配は無いみたいね」
「そうね、でも油断は禁物よ」
晴香もあたしも神経を集中させながら建物内を一通り見てみた。
「ふぅ、どうやら大丈夫みたいね」
「そうね」
あたし達は緊張を解いた。念のため武器は持ったままだけど。
「でも、一通りみた感じじゃどこにも潜水艦がある場所に行く通路は無いみたいだったわね」
「きっと、どこかに隠してあるのよ。というわけで探してみましょう！」
「ちょっと、七瀬。何そんなに張り切ってるのよ」
「あら、何かこういうのってワクワクしてこない？ＲＰＧの主人公になったみたいで」
「何か子供みたいね。まぁ、いいけど。それでどこから探すの？」
「そうね、さっき海岸で見た感じだと潜水艦があるなら多分地下ね。だからまず床を調べてみましょう」
「それじゃさっさと始めましょう」

はるかとるみはゆかをしらべた
しかし、なにもみつからなかった

「何も見つからないわね」
「そうね、ちょっと休憩しましょうか。ずっと四つん這いだったから腰が……」
「腰にくるなんてもう年ね、七瀬」

あたしは無言で刀の切っ先を晴香に向けた。
「ち、ちょっと！　それ毒が塗ってあるんだからむやみに人に向けないでって言ってるでしょ！」
「だったらさっきの言葉を訂正しなさい！　腰は単に昔痛めただけよ！」
「わ、分かったから！」
「全く、乙女であるあたしに対してあんまり失礼なこと言わないでよ」
「そのすぐ手が出るところ直さない限り乙女とは言えないわよ、あんた」
「うぐっ」
あたしは何も言い返せなかった。
あたしが床にへばっていると晴香は部屋の隅にあった本棚のところで本を手にしていた。
「あら？　あんた本なんか読むの？」
「別に。ただ手に取っただけ……」
晴香の言葉が不自然に途切れた。
「どうしたの？　晴香」
「七瀬、ちょっと来て」
「何よ」
「ねえ、七瀬。これ何だと思う？」
晴香が指さしていた本棚の奥を見てみると奇妙な出っ張りがあった。
「さあ？　何かしらね。何かボタンみたいにも見えるけど」
「そうね。私もそう思ってるのよ。押してみる？」

るみたちはきみょうなでっぱりをはっけんした
おしますか？
↓はい
　いいえ

「そうね、こういう怪しい物は取りあえず押してみ

るのがＲＰＧの基本よね」
「ＲＰＧなら何かの罠ってこともあるかもしれないわよ」
「う〜ん、でも、もう遅いわよ。もう押しちゃったもの」
「これで隠し通路でも出てきたら本当にＲＰＧみたいね」
晴香がその言葉を言い終わるのとほぼ同時に本棚が右に動いた。
その後ろには下へと続く階段があった。
「……」
「……」
あたしも晴香も驚きのあまりしばらくの間一言も発することも出来なかった。
「と、取りあえず見つかったんだから行こうか、七瀬」
「そ、そうね」
あたし達は武器をもう一度構えると階段を下りていった。

ここまでのぼうけんをほぞんしますか？
↓　はい
　　いいえ

726　――Ｋｉｚｕｎａ――

（今やもう、あと一歩の所まできた！）
よもや初音が彰に発砲するとは思わなかったが、それ以外はほぼ、〝鬼〟の思惑通りに事は進みつつあった。
彰の理性はもはやガタガタで、あと一歩踏み出してさえしまえば、粉微塵に散るだろう。
（その時こそ、己が完全なる自由を手に入れるときだ。さぁ、彰よ、早くッ。早く自分を裏切った醜い雌をその手に掛けるのだッ！　俺がこれ以上力を傾

けなくても、もうそれぐらいのことは自分の意志で出来るだろう、彰よ！）

右腕を左手で押さえるようにして構えた銃を、初音に向けて彰は立ちつくしていた。

（僕は初音ちゃんを撃つ。撃ち殺す。何故なら『彼女が僕を裏切った』からだ……。何もかもを失って、唯一残されたものにまで。その彼女にまで裏切られたら、許せるはずがない。だから、僕は。……初音ちゃんを殺す！）

（『また』撃ってしまった。いや、『今度こそ』撃ってしまった。千鶴お姉ちゃんの時とは違う。私は、私の意志で彰お兄ちゃんに向けて……）

震える手で拳銃を握ったまま、初音もまた立ちつくしていた。

（私は、彰お兄ちゃんを殺す。私が殺さなければならない。そして、その時には私も……）

そして、物陰では。

二人の女がそれぞれの場所でそれぞれの武器を手に、息を潜めていた。

（私は本当にこのままで良いのでしょうか？　自分が命を懸けて救った二人が、目の前でお互いを殺そうとしているなんて。こんな事が認められるのでしょうか？　初音ちゃんの真剣な訴えに気圧されて、一度は身を隠してしまったけれど、本当に良いというのでしょうか？　私はっ!?）

（初音ちゃんが……本当に撃った!?　あの優しい娘が自分の愛する人を……。こんなのって、ないよ。愛する人を自分の手で殺すなんて。何とか、何とか良い方法を……。でも、いい方法なんて考えつかない!!　聖先生。わたし、わたし……!!）

重い沈黙が場を支配していた。

一触即発とは、まさにこの状況を言うのかもしれない。

その中で、彰が唾液を嚥下する音が小さく響く。

未だ誰も動かない。

初音の銃は彰を。

彰の銃は初音を。
お互いに向けられた拳銃は、僅かに振れつつもそのままだ。
彰がゆっくりと口を開く。
「初音ちゃんが僕を受け入れてくれないのなら。君を殺して……僕も死ぬ！」
(何!?　それは違うぞ、彰！　それは断じて否だ！認められない!!)
初音の瞳から、涙がこぼれ落ちる。
(何でこうなっちゃったのかな……。エディフェルと次郎衛門は上手くいったのに……。でも、私、彰お兄ちゃんとなら……)
初音に向けられたままの銃。
引き金にかかった彰の指に、僅かずつ力が入ってゆく。
(本当にこれで良いのか、僕は……!?)
どこかに。彰のどこかには、迷いがあった。
まっすぐに自分を見つめる初音。
悲しいまでに澄んだ初音の瞳に吸い込まれそうになる。
しかし、彼女の手には銃があり、それが彰に向けられているのは間違うこと無き現実……。
その時、どれが最初に起こったのか、分かった者はいなかっただろう。
それらは本当に、ほぼ同時に起こったのだ。
「こんなこと、認められません!!」
「こんなの駄目ーッ!!」
各々叫んで飛び出した、葉子とマナ。
急激に光を取り戻し、部屋を照らし出した初音のペンダント。
そして、銃声。
……均衡は破られた。

727　旅の途中

「はぁ、はぁ、はぁ……」
　診療所を出発してから、スフィーはひたすら走った。
　どれくらい走っただろうか、長い坂道を駆け上がり、かつて神奈が封じられていた神社に辿り着いた頃には、すっかり息が上がってしまっていた。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
　ここまで一途に走ってきたスフィーも、思わず地面にへたり込む。しかしスフィーの目的地である祠は、ここからさらに山道を登らなければならない。
　こんな所で休んでいる暇はないのだ。
　数分後、スフィーの息もようやく整ってきた。
　そして立ち上がろうとしたスフィーは、その時上空に何かを見つけた。
「あれ、何だろう……」
　それは、上空に糸を引きながら少しずつ下界に向かっている様に見えた。
　スフィーはしばらくそれを眺めていたが、ふと我に返る。
「いけない！　早く祠へ行かなきゃ！」
　そして、スフィーは再び走り出した。
　進む道はただ一つ。

728　フランクの思い

　見つかった。
　フランクがそのことに気付いたとき、まず最初にしたのは逃げる事だった。
　木々に紛れて森の奥へじわじわと後退する。
　今となっては少年以外の参加者と戦うつもりはない。
　しかし、自分は長瀬なのだ。
　こんな馬鹿げた殺し合いに巻き込まれ、その首謀

者たる自分達を憎まないものなどあろう筈がない。
その怒りは当然だし、殺されるのもやむなしと思う。
だが、ここで戦闘になるのはまずい。
騒ぎを少年に嗅ぎつけられては元も子もない。
少年を、倒す。
それだけは。なんとしてもやらねばならない。
「……フラ……さ……！」
ふと。遥か記憶の底から、自分を呼ぶ声がした。
それは優しい記憶。
モノクロームの景色の中で、自分は一人の少女を見ていた。
「……芹……！　……危な……!!」
せり……
せりか。
そう。そんな名前の少女だったか。

フランクは思い出していた。
源四郎に連れられて店にやってきた、姉妹のことを。
元気に走り回っていた妹とは対照的に、姉はいつも源四郎の後ろに隠れて、伏し目がちにこちらを見ていた。妹に「このおじさんはこわくないよ」と促され、おずおずと前にでてきた姉。
自分の入れた紅茶を飲んで、穏やかに笑いあう二人を見ていると、こちらまで癒されているような気さえした。
不思議な少女達だった。
「フランクさん！　フランクさんでしょ!?」
はっ、とフランクは目を覚ました。白日夢でも見ていたのか？　いつのまにか、自分を呼ぶ声はかなり近くまでやってきていた。

フランクは思い出した。

来栖川芹香。あの姉妹の生き残り。
こちらに近づいてくるのは、あの子なのか。

少年を倒す、それが今の自分の全て。
だがもし自分が失敗したら。
自分の知りうる事だけでも、誰かに託すべきかもしれない。
それがあの少女にならば。
託せるかもしれない。

フランクは狙撃銃を隠すと、両手をあげて茂みから立ち上がった。

729　スタートライン

パスコードの設定はさっきのぽややんとしたメイドロボがやってくれた。
彼女にはＣＤの解析の続きも任せてある。
護身用に武器も残してあるが、とにかくいざとなったら逃げるように詠美ちゃんには言い含めてある。
詠美ちゃんなら今の繭ちゃんのことをちゃんと守ってくれるはずだ。
ようやく出発の準備が全て終わった。

「梓、そろそろ行くわよ」
「あいよ、千鶴姉」
私は梓にそう言うとあゆちゃんに話しかけた。
「あゆちゃん、本当に私達と一緒に来る気なの？」
「うん。お願いだよ。ボクも連れていって」
あゆちゃんの目には確かな決意の色が見えた。
「仕方ないわね、それじゃあ一緒に行きましょう」
「ち、千鶴姉!?」
「梓。多分あゆちゃんは一人でも行く気よ。それならまだ私達と一緒に行動した方が安心でしょう」
「でもさ」
「お願いだよ。梓さん。ボクも一緒に連れていっ

て」
　あゆちゃんのそのまっすぐなまなざしに梓も折れたようだ。
「じゃあ、詠美ちゃん、後のことよろしく頼むわね」
　動物達と戯れている繭ちゃんの方を見ながら詠美ちゃんに言った。
「だいじょーぶ！　このくぃーんにまかせて！」
　私達は詠美ちゃん達をその部屋に残すと施設の外へと向かった。

　外に出ると私は手元のレーダーを見た。
　そこにはハンテンダケを持っていると思われる芹香さんの居場所が示されている。
　私はこのレーダーの持ち主だった人の事を思い返した。
　私と秋子さんは思えばかなり似かよっていた。
　私達の根底に流れる物に違いはほとんど無かったはずだ。ほんの少しの違いが今の私と秋子さんの違い。
　秋子さんは私をこの世界に引き戻してくれた。
　私は秋子さんを引き戻せなかった。
　それでもお互いが目指していた方向は同じだった。
　だから私もこれからも自分が正しいと思う道を進もうと思う。
　家族を、守りたいと思える人を守っていく。その為なら私がどうなろうとも構わない。
　私は最後まで足掻き続ける。
　それは秋子さんへと放った言葉。
　それは私の誓い。
　私は改めてそのことをここで誓う。
　それが秋子さんへの、同胞への餞となると思うから。

　あたし達はようやく外に出てきた。
　何か、一ヶ月くらい中にいたような気がする。

横では千鶴姉がレーダーを見ながら考え事をしてる。
どうせ、また何か一人で抱え込んでいるんだろうな。
千鶴姉はいつもそうだ。
でも、あたし達は家族なんだぜ。
千鶴姉があたし達のことを大切に思ってるようにあたしだって千鶴姉のことを大切に思ってる。
だからあたしはこれからも千鶴姉の事を支えていきたい。
千鶴姉はこれからも何も話さないで一人で何でも抱え込むんだろうな。だったら、あたしも千鶴姉のことをずっと支えてやるよ。
でも、こんなことは絶対に千鶴姉には言えないけどな。
そんなこと言ったら千鶴姉は「そんなことしなくていい」って言うに決まってる。
だから、これは密かにたてたあたしの誓い。

雨はすっかりやんでいた。
やっぱりさっきボクが感じた何かが原因なのかな。
何か分からないけど、ボク、そこに行かないといけないような気がするんだ。
ボクは建物の方を振り返った。
ポケットの中から一粒の種を取り出す。
それはおじさんがボクに残してくれた物。
でも、ボクはおじさんからもう一つ大事な物をもらったんだよ。
ボク、おじさんの気持ちもちゃんとあの時受け取ったから。
おじさんが言ってた通りにちゃんと生き残るから。
今までボクのこと守ってくれてありがとう。
ボク、頑張るからね。
おじさんがいなくてもちゃんとやっていくよ。
だから見守っててね、おじさん。
「それじゃ、行きましょうか」

――彼女たちの胸に秘められた三つの思い――

「ああ」

――その決意を胸に彼女たちは再び歩き出す――

「うん」

――この場所が三人の新たなスタートライン――

730　遠い夢の中

優しいとは言い難い苛烈な日射しが、三人に容赦なく照りつける。

先ほどまで降っていた雨が乾き、湿気が肌にまとわりつくような感じがして不快感が増す。

なにより、彼女たちは数時間前まで地下にいた。急に高い温度と湿度の場所に出てしまえば、拭うのも億劫になるほどに汗が吹き出るのも当然だろう。

彼女たちは、寡黙に歩く。聖地に向かう巡礼者のように。

先頭の少女は首から下げているのはサブマシンガン。それを腰だめに構えながら歩く。そして、その後ろを歩く二人も日本で平和に暮らしていれば一生お目にかかることはない銃器を持ち歩いている。

髪がショートの少女が一番前を歩き。その後ろにセミロングの幼女。そして、ロングの女が続く。

真ん中の幼女がときどき、首のストラップに掛けられた丸い機械に手をやる。先頭の少女は前方を、後方の女は側面と背面に警戒する。

突然、正面の丈が長い草が揺れる。

三人は銃を構えながらも散開し、遮蔽物に向かって走る。木の陰に隠れながら何者かが潜んでいる場所を警戒する。

迂闊に発砲することを彼女たちはしなかった。それは、彼女たちが訓練された兵士だからではない。

彼女たちの戦いは人を殺すためではない。生き残るためにある。その為には、自分や身内だけではなく、会ったこともない他人も助ける必要がある。だからこそ、無闇な発砲は躊躇われる。

緊張が続く。
草が揺れる音は消えない。
暑さのためではない汗が彼女たちの頬を伝う。拭うことはできない。
銃を持つ手の平にも汗がにじんでくる。
不意に、何かが草の中から飛び出す。
彼女たちは、それに銃口を向ける。
その先には、まるで不思議そうな顔を彼女たちに向けるウサギがいた。

「ああ、疲れる」
ショートカットの女がそう言って地面にへたり込む。幼女はウサギに何とか近づこうとしたが逃げられてしまい、やはり座り込んでしまう。
ただ、最後尾にいた女は未だに周囲を警戒していた。
「千鶴姉。用心のしすぎだよ」
その言葉が聞こえたからだろうか、やがて千鶴と呼ばれた女は、地面に足を投げ出した幼女の手を引っ張り、立ち上がらせる。
「ボクも、梓さんの言うとおりだと思うなぁ」
そう言われた千鶴は苦笑いをする。そして、彼女の手を優しく握ったまま、梓の元に歩いていく。
そして、梓にも手を差し伸べる。梓はそれを握って、起きあがろうとした。
だが、それはかなわなかった。
「何やってるんだよ、千鶴姉」
千鶴は逆に梓に引っ張られる形で地面に転がってしまったからだ。
「うぐぅ」
そして、千鶴が片手を握っていた幼女もまた一緒に転がる。銃が暴発しなかったのは僥倖だった。
自力で立ち上がった梓は千鶴の顔を見るとその異常に気が付いた。
軽い過労、というべきものであろう。
梓はここで休憩すると言い、千鶴を木陰に休ませ

た。
極度の緊張の連続。溜まった疲労。それに急激な暑さに体内で温度調整が出来なかったのであろう。防弾服が体熱を発散させづらい、というのも原因のひとつだ。そして、施設内で摂取した毒もまったく効いていないわけでもなく、千鶴の抵抗力を奪っていた。
それらの要素が合わさり、現在の症状を引き起こした。だが、若い千鶴なら少し休息をとれば、すぐに元気を取り戻すだろう。
「千鶴さんって、すごいんだね」
空を見上げながら幼女が呟く。
「ああ、うん」
同じく、梓も空を見上げながら頷く。
もし、本人が目を覚ましていたら、梓は首肯できなかっただろう。
「ボクもお姉さんが欲しかったなぁ」
その視線の先には鳶が輪を描いている。
「そう……」
梓は曖昧な返事をしたきり二人は押し黙ってしまった。そして、風が流れる音と鳶が鳴く声しか二人の耳に入らなかった。
千鶴は夢を見ていた。
彼女の大切な妹たちの夢だった。
どこか薄暗いところに、みんなはいた。
ああ、そうだ、これからみんなで夏祭りに行くんだ。
友達と一緒に行く約束を断ったのはちょっと心苦しいけど。
遠くに見慣れた神社の鳥居が見える。そして、数多くの提灯と盆踊りの櫓も。
お祭りは賑わっている。沿道に連なっている屋台は多くの人で賑わっている。
リンゴ飴。かき氷。たこ焼き。ミニウサギ。ヨー

ヨー釣り。型ぬき。カルメ焼き。焼きトウモロコシ。金魚すくい。イカ焼き。ひよこ。スーパーボールすくい。おめん。輪投げ。お好み焼き。べっこう飴。射的。
　梓は金魚すくいが大好きだ。でも、あまりじょうずじゃないから、なんどもやろうとする。お小づかいが無くなるから、二、三回でやめさせよう。
　楓はつめたいものをよく食べる。特にブルーハワイのかき氷は屋台にしかないから、お祭りではかならずだ。食べ過ぎておなかをこわさないよう注意しなきゃ。
　初音とは、はぐれないように気をつけよう。まだ小さいし、目をはなすと、どこに行くかわからない。人が多いから手をしっかりにぎろう。
　わたしも、なにかやろうかな。ううん、でもいいや。梓のとなりで金魚すくいを見るのは楽しいし、楓といっしょにたこやきを半分ずつ食べるやくそくしたし、初音は……

あれ、はつねがいない。
どこに行っちゃったの？　あんなに、はなれちゃいけないって言ったのに……。
ううん、ちがう、わたしがわるいんだ。はつねの手をしっかりにぎっていなかったからわるいんだ。

はつね。
どこ、はつね。
おねえちゃん、おこらないから、帰ってきて。

あ。
はつねだ。よかった。こっちに走ってくる。
手になんか持ってる。おもちゃかな。きっと、あれがほしくって、どこか行ってたんだ。
なんだろう？
鉄砲？

私は初音に向かい手を振った。
しかし、走ってきた初音は私の横を通り過ぎた。
怪訝に思い、私は振り返る。なぜか、小さいと思っていた初音は自分よりも大きく見えた。
そして、私は信じられないものを見た。
セーラー服を着た楓の胸に初音は拳銃を押しつけ、引き金を引いた。胸が赤く染まり、定まらない視線で虚空を見ながら楓は倒れる。
驚愕し、目を剥く梓。
私は初音に言葉を投げることも体を動かすことも出来ない。
そんな私を後目に、初音は躊躇もなく梓の額に銃口を向け発砲した。梓の顔が風船のように爆ぜる。梓の制服が朱に染まる。
そして、私になにか生温かいものが降りかかる。
それが、かつて梓だったものだと理解するには時間が掛かった。
「あっ……ああ、あ」
私の口からはただ呻き声が。形になった言葉が出せなかった。
血溜まりの中に倒れている楓。
首から赤い噴水を流す梓。
「本当は、私の方が偽善者なんだよね……」
初音は私に銃を向けながら、そう呟く。
「は、初音。あなた、なにを……」
動転した私の問いに耳を貸さず、朗々と初音の声は続く。私が今まで聞いたことがない、冷たい言葉を。
「大切だった人を殺され、その人の思いを叶えるために同じくらい大切な人たちを殺したの……」
「な、なにを、言ってるの？　初音」
寒い、体が震える。これは恐怖？　なぜ？　初音が？
冷たい風が初音の方から押し寄せて来る。そして、私は見てしまった。初音のその目を。
それは狩猟者の目、だった。

「ソシテマタ、ツライ、ヘイワナヒビヲ、スゴスノ……」
「千鶴姉。千鶴ねぇ！」
　急に呻き声を発した千鶴に驚き、梓は体を揺り動かす。
　やがて、ゆっくりと目を覚ました千鶴を見て、心の底から安堵する。
「どうしたの？　千鶴さん。すごい汗だよ」
　千鶴は自分の体を見回す。首筋や脇の下にかなり汗をかいている。
　梓はバッグからタオルと水を取り出し、千鶴に渡した。
「で、千鶴さん。どっか体の調子が悪いの？　あの、もしかして、ボクが、ボクが……」
　両手をふさがれながら、千鶴は、その泣きそうな頭を優しく抱いて、大丈夫よ、と言葉を投げる。
「じゃあ、なんか変な夢でも見た？」
　意地の悪い笑みを浮かべ、梓はそう言った。だが、その問いに千鶴は曖昧な返事をした。さすがに、あなたが死ぬ夢だとは言えるわけがなかった。

　夢。
　たかが、夢。
　夢だと一笑に付して片づけるのは簡単だ。
　だが、それが一部真実を含有することがあることを、千鶴は耕一の経験から知っていた。
　そして、初音の言葉もかつて、自分に投げられていたものに似ていることも覚えている。
　千鶴は自問する。では、どうするか？　初音に会いに行くか？
　いま、千鶴が初音に会っても事態は好転するとは思えないが、いつまでも初音に嫌われたままではいたくはない。
　だが、芹香に会いに行くという目的を放り出すわ

けには行かない。繭たちも自分たちの帰りを首を長くして待っている。

「……千鶴姉」

「千鶴さん……」

思考の淵に入ってしまった千鶴に二人は心配げな顔を向ける。

千鶴はあゆから丸い機械を借り受けて、あらためて、芹香と、耕一、初音の位置を調べる。

そして、千鶴は立ち上がり、二人に目的地を告げた。

731　相似性

風に揺れる枝葉越しに感じる。

厳しい表情と、冷えた拒絶の意志。

振り向かなくても解る。

トーンダウンしたその声と、鋭い殺気。

「……」

「おっさん、どういうつもりだ？」

「叔父様……？」

両手をあげた叔父様と銃を持った住人の、ちょうど中間で私は立ち止まっていた。いや、前後から感じる圧力に挟まれて、どこにも動けなかったと言ってもいい。ただその名を問うだけが、私にできる全てだった。

「……叔父様？」

「……？」

叔父様は、少々の疑問を含みつつ私の名前を呼んだ。今の私に疑問を感じるということは、私を知っている人物であることを証明している。そこには何の感動もなく、ただ事実を確認するだけの響きがあるのみだったけれど。

がちゃり、と銃器の金属音が聞こえる。

「芹香、その髭親父は——叔父様なんて、上品なもんじゃない」
「あなたに何が解るというの⁉」
往人に否定されたのが苛立たしい。だから私は、重ねて問う。
「叔父様⁉」
「……」
答えは〝去れ〟と一言だけ。否定も、肯定もない。
「ふん……あんたが芹香の何だろうと、だ。黙って去れるわきゃ無ぇだろうが。……あんたみたいな奴を、放っておくわけにはいかないんだよ」
再び殺気が迸り、往人が狙いをつけたのが感じられる。二人の間に何があったのだろう？
黒く横たわる怨恨の溝の深さは、私に測れるものではなかった。
「どうして？　どうしてよ⁉」
叫び、振り向いた私の視界に入ってきた往人の表情は、驚くほど叔父様に似ていた。もちろん髭もないし、顔つきは全然違う。
それでも、似ていると思ったのだ。どちらも初めて見る、恐ろしく厳しい顔だった。
「……」
「芹香、どけ」
二人は同時に、命令した。
叔父様と往人を交互に見ると、射線の半ばに私の頭があることが判る。
「どかないわよ！」
意地ではなく、憤りがそう叫ばせる。
往人から返ってきたのは、食いしばる歯の隙間から漏れた、冷たい怒りの声だった。
「……どういう手段を使ったのかは、まるで解らん。だが間違いなく、俺を撃ったのは……お前の〝叔父様〟なんだよ」
「——そんな⁉」
「お前にも見えてただろうが！　そこの茂みに、ライフルを隠していたのをよ‼」

往人の怒りが弾ける。
「……」
否定も肯定もなく。叔父様の警告が聞こえる。ただ〝去れ〟と。
それに対して往人が、荒ぶる意志を抑えて尋ねた。
「どういう心境の変化だ？　何を見ていたか知らないが、なぜ俺を撃たなかった？　どうせお前らは、皆殺しがお望みなんだろう？」
……返事はない。
その問いが、宙に浮かぶ。
「往人……やめてよ……」
私は彼を咎めることしかできない。だから彼に声をかけようとした。
ちょうどそのとき、動きを見せることで沈滞を破ったのは、叔父様だった。
往人がびくり、と銃に緊張を伝えたのが見え、どうにか発砲を抑えたのが解る。叔父様は静かに手を上げて、遠く櫓の方へ指をさしていた。

「……俺は、あの少年を殺す」
あとは、お前の好きにしろ。そんな風に続ける。
叔父様がはっきりと話すのを、私は初めて聞いた。
それだけ言うと、驚く私と戸惑う往人を無視して振り向き、再び茂みに入っていく。
「あの……少年……って？」
私には何の事だかまるで解らない。櫓の人影も、はっきりとは視認できない。しかし往人には見えたのだろうか。何かを悟ったらしく、厳しい表情を崩さないまでも、緊張を解き始めていた。
銃を下ろし、そして叫ぶ。
「……あいつは……あの小僧は、何者なんだ？　何故あんたは、あいつを付け狙うんだ？」
叔父様は立ち止まり、少しだけ考えてから、背中越しに答える。
「……」
私たちに向けて、話題が飛躍したような答えが返ってきた。

「……神奈備命の長き腕？」

「ああ？　神奈備命？　そいつはなんだ？　そんなんで納得できると思ってんのか！」

　往人が叫ぶ。当然ながら、私にもさっぱり理解できない。

「……」

「翼を広げ魂を啜るもの？」

「普通に話せ！　普通に……ちょっと待てコラ！」

　往人が更に声を荒げる。

「あんた〝翼〟と言ったか？　まさか、白い翼のおっかねえ女だ、とか言うなよ!?」

　……この時点で私には解らなかったのだが、往人が見せた奇妙な戸惑いようは、夢の中の抽象的なイメージだと思われたそれが、唐突に現実味を帯びてきたためのものだった。叔父様が若干驚いた顔をして、体ごと振り返り、小さく、だがしっかりと頷いた。

「……」

「〝翼人〟神奈備命の分身……？」

「マジか」

　往人が夢の中で見た〝翼人〟と、木の上に転移する直前に出会った〝少年〟という存在から受ける威圧感は、どちらも同じ物に感じたために、往人の理解は早かったらしい。

　往人の理解を感じた叔父様は、再び踵を返し、歩を進め茂みに入っていく。

「おっさん！　もう一つ教えろ。……あいつは、何をしようとしているんだ？」

　また足を止め、背中越しに振り向く。そして今度は、私の方を見た。

「……」

「神奈を滅ぼす〝魔法使い〟を……狙っている？」

「おい、魔法使いって……」

　私はぎょっとして、往人と顔を見合わせる。話題の輪から弾き出されていたと思っていた私が、知らないうちに中心に据えられていた。

「叔父様、さっきの閃光は魔法なのね？」
「つまり、あの小僧は羽根女の、子分って事か？」
二人同時に発した疑問に目だけで頷いて、茂みの中からライフルを拾う。叔父様と往人が、私を挟むように銃器を手にして相対する。
だが二人とも、先ほどのような殺気は帯びていなかった。
「最後に、もうひとつだけ教えろ」
往人が脱力しながら、溜息混じりに尋ねる。
「……あんたが、俺たちの背中を撃たないって保証はあるのか？」
問いを受けて、叔父様はただ片眉を上げた。そしてにやりと笑い、肩を竦める。合わせるように、往人も笑う。
「……負けたぜ、おっさん」
僅かに歯を見せながらも、口唇の片端だけを吊り上げた、悪人笑い。私だけをのけ者にして、二人はいつの間にか手を組んでいたのだ。

その目的は、ただひとつ。
『……俺は、あの少年を殺す』
それは、私の知らない叔父様。
そして、私の知らない往人。
呆然とする私を残し、叔父様は木に登り、往人は林を出て櫓の方へ歩いて行く。
「……どうなってんのよ……？」
そこに答える者は、誰もいない。
釈然としない気持ちに不満を募らせて、私は往人を追いかけることにした。
「もう、待ちなさいよ!!」

風が、吹いている。
揺れる木々の囁きの中に、叔父様がいる。
そして先行く往人の、遥か向こうに。
ようやく私にも、人影が見えた。

732　侵食、『痛み』

「大丈夫？　郁未さん」
私、観鈴の問いに郁未さんは、軽くうなずく。
でも、すごく痛そう。ひどいケガだもん。普通だったら、歩く事だって出来ないと思う。でも、郁未さんの足取りはしっかりとしていて、視線も口調もしっかりしていて。
すごいな、って思う。私だったら、絶対くじけてる。
私たちは今、町に向かっていた。
郁美さんていう人の初期武器が救急セットだったおかげで、応急処置だけは出来たんだけど、やっぱりそれだけじゃ足りないもん。もっとちゃんと治療しないと。
ほんとに、それぐらいひどいケガなんだよ、郁未さん。
私、心配になってもう一度声をかける。
「ねぇ……少し休んだほうがいいんじゃないかな？」
「必要ないわ」
郁未さんの声はそっけなくて、観鈴ちんちょっと落ち込み。
郁未さん、私のそんな様子に気付いたみたいで、
「本当に必要ないの。それに、早く落ち着ける場所を探したほうが安全だしね」
ほんのちょっぴり優しい声で、そう続けてくれた。
そういうときの、郁未さんの目は優しくて暖かい。
うん、郁未さん、いつもそんな目をしてくれてたらいいのにな。
でも、そういう目をしてくれるのはほんのちょっぴり。
すぐに、怖い目に戻ってしまう。
その目は何かをにらみつけるようで。何かに抵抗しているようで。

すごく強い視線なんだけど、その視線には、なんていうかな、余裕がないよ。
そう、それは綱渡りをしている最中、そんな視線。
表情は無表情なのに、目だけはぎらぎら光ってて、……正直、ちょっと怖い。
「郁未さん……」
「ん？」
「何か、思いつめてるのかな？」
「別に」
か、間髪入れない即答に、観鈴ちん、びびり。
け、けど、ファイト。
「あの、郁未さんてとってもしっかりしていて、すごいと思う。だけどね」
にははって笑ってみる。
「何か辛いことがあったりしたなら言って欲しいな。そしたら、楽になるかも」
「……辛いことね」
フッと一瞬だけ、郁未さんが笑ったような気がした。
「ほら、ケガだって痛いんだったら、頼って欲しいな。私のこと。観鈴ちん、結構頼りになるかも」
「……頼りになるの？」
が、がお。郁未さん視線が冷たいよ。
「な、ならないかな？　やっぱり。でもね、なにか思いつめてることがあったら、吐き出しちゃったほうがいいと思うんだ。お母さん、そう教えてくれたんだよ」
「お母さん……か」
けど、郁未さんは何かを嘲るようなの笑みを浮かべるだけだった。
実を言えば、この子が心配していることは的外れだった。
怪我はそれほどには『痛く』ない。
いや、この言い方には語弊がある。
痛覚はある。足を動かすたびにある感覚が情報と

して脳に伝達されている。だが、それは辛くない。苦しくない。感覚に付随するはずの感情が極端に薄れてしまっている。
それは、ほとんどただの情報だ。
私が『痛み』にさほど邪魔されることなく歩けるのはそのおかげだった。
そして、私から消えようとしているのは感覚的な『痛み』だけではなかった。
観鈴から放送のこと、由依が死んだことを聞いたとき、私は泣くと思った。泣くのをこらえなきゃいけないと反射的に思った。
……けどその必要はなかった。涙腺なんてまるで刺激されなかった。
悲しくなかったわけじゃない。けど、それは予想していたよりもずっと弱くて。
しかも、今やそのときの悲しみすら薄れてきてしまっている。
まるで、何かのお涙頂戴な映画を見た後。そんな感じ。
(ゴメン、由依)
本当にすまないと思う。でもそれが真実で。
晴香の事もそう。本当だったらもっと心配しなくちゃおかしいはずなのに。
水瀬秋子のことも放送に流れていたらしい。
あの時感じた彼女に対する怒りや憎しみも、もうどんなものか思い出せない。
そう。思い出せない。
水瀬秋子との戦いも、
どんな風に殺しあったかも、
由依との出会いも、
どんな風に笑いあったかも、
もう思い出せない。
記憶は確かに残っている。だけどそのとき感じた感情は別の人間のもののようで。
消えていく。薄くなっていく。飲み込まれていく。
私が私であるためのものが消えていってしまう。

そして、その隙間に呪詛が流れてくる。
侵されてしまう。犯されてしまう。あいつが経験したように。
それが、侵食だった。
「辛いことね……」
だから、私は自嘲した。
あいにくだけどね。観鈴、私のそういう『痛み』は薄れていってしまうみたいだよ？
まだ、辛い。
お母さんのこと、あいつのことを考えるのはとっても辛い。
まだ、苦しい。
お母さんのこと、あいつのことを考えるのはとっても苦しい。
まだ、悲しい。
お母さんのこと、あいつのことを考えるのはとっても悲しい。
けれど、

——好都合じゃない。

『痛み』が消えてくれるなら。それは好都合だ。
『痛み』なんて戦いには邪魔なものだ。
呪詛ならば耐えられる。
さっきは負けてしまったけれど、戦う対象さえわかっていれば私はきっと耐えられる。
私は強いから、お母さんが言った通り私は強いから。
『痛み』なんていらない。感傷なんていらない。
私に必要なのは意志。戦うために必要な意志。
『だから、あなたを助けるわ。それが出来ないのなら、あなたを殺してあげる』
その約束を守るための意志。
このまま侵食が続けば、きっとあいつを、姫君を感じ取れるときが来るだろう。

今、この胸にある感応が、もっとはっきりとしたものになるだろう。
そのときが勝負だ。
そのときまでは決してこの意志だけは消させない。
「なにか思いつめてることがあったら、吐き出しちゃったほうがいいと思うんだ。お母さん、そう教えてくれたんだよ」
「お母さん……か」
私のお母さんはそんなことは言わなかった。
強くあるように。お母さんが私に願ったのはそういうこと。
——どうしてなんだろう？
ほんのちょっとだけ、どうしようもなく醜い感情が私の胸に突き刺さる。
——どうしてこの子は守ってもらえるんだろう？

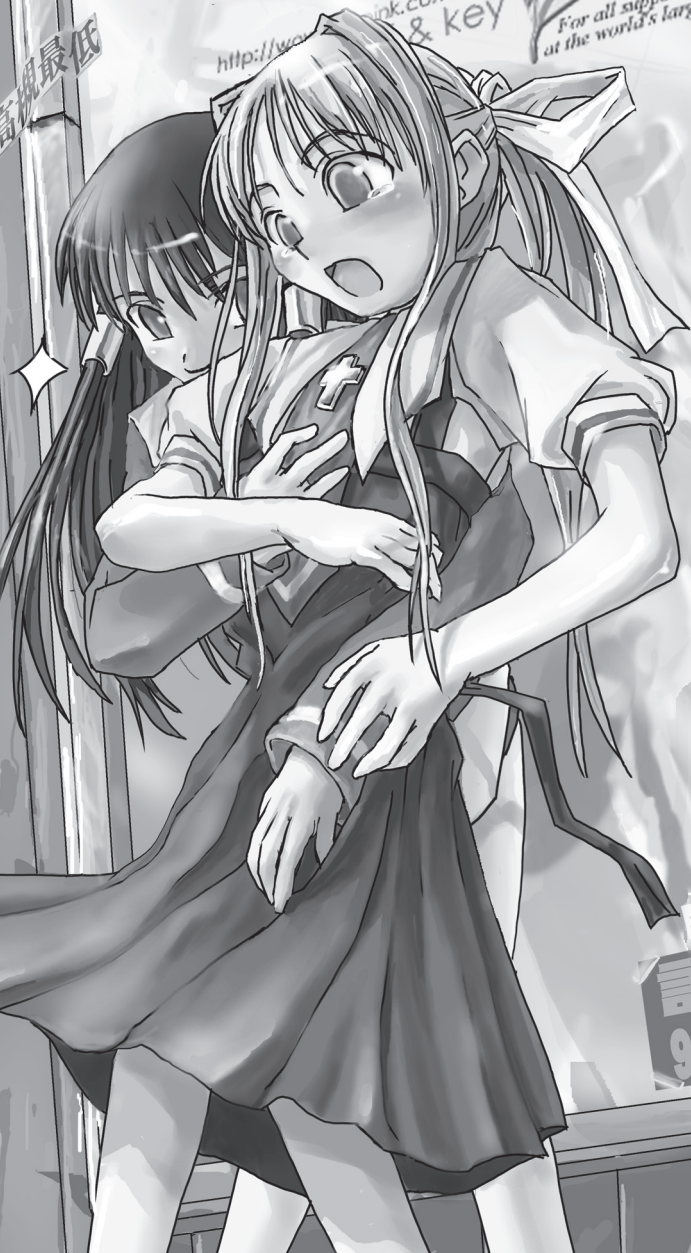
母親に、恋人に。
——どうして私は守ってもらえないんだろう？
誰も、誰も。
——どうして、なんだろう？
それは、本当に醜い感情で、なのに、それなのに、
「ね？　ダメかな？　郁未さん」
「……大丈夫よ。観鈴。思いつめてなんてないってば。でも、ありがと」
なぜ、私は、この子に優しい言葉をかけているんだろう？
——『痛み』なんてなくなるはずなのに、
——どうしてこの子に癒されていると感じてしまうのだろう？

733　女と女の子

「ねえ、郁未さん……少し休もうよ？」
観鈴は〝心配だよ〞を顔中で、いや、体中で表現しながら、そんなことを言ってきた。
それは本当に、必死といった感じで。
だから私はしょうがなく「……五分だけよ」とため息まじりに言った。

腰を下ろしてからも、ずっと私は考えていた。どうしてこの子に癒されていると感じてしまうのかを。
やはり家庭が原因だろうか。そもそも何が原因で、私の家とあそこまで違うのだろうか？　観鈴の母親は見たところ若かったけど、本当に娘のことを大事に思っていた。そして、観鈴も負けないくらいに母親のことを大事に思ってる。
幼い頃に私を残して宗教団体へ蒸発し、この島では敵同士のような形で再会した。そんな母を持つ私とは、違って当たり前なのだろうか。
そんなことを考えていたら、不意に私の中に少量の嫉妬の炎が湧き上がってきてしまった。
つまり、今の状況とかそんなことを差し置いて、ちょっと困らせてやりたくなってしまったのだ。
だから、いじわるな質問をしてみた。
「ねえ、観鈴って処女？」
「……」
予想通りに観鈴は固まった。顔からは汗がどんどん出ていき、顔は気の毒なほどに瞬く間に赤くなっていくのがわかる。
その様子を見て、何故か私はもっともっと赤くさせたくなってしまった。
「ここはね……」
「がお……」
「こういう事すると喜ぶ……」
「が、がお……」

「終わりが近づいたら……」
「がががががががががががが」
こちらの知識のフル動員した話をしてしまうと、壊れたように「が、がお……」を連発し、顔を〝ゆでたこ〟と見分けがつかないくらいの真っ赤にしたかと思うと、俯いたままで顔を上げることが出来なくなってしまった。
やりすぎてしまった。
でも、何故か後悔はしていない。
あと、観鈴は性の知識も無茶苦茶だった。母親に教えてもらったという知識は何からなにまで変だった。何故か妙に親父くさいし。
おかげで私は一から性教育を施さねばならなかった。それに加えて少々人生で培った色々なテクニックも。その最中に観鈴は急に質問してきた。
「は、初めての時ってどうだったの?」
私はちょっと固まった後に答えた。
「忘れたわ」
「ど、どして?」
「だって今の私にとってはどうでもいいことだもの、覚えてるのは苗字だけ。……それだけのことよ」
何故か涙がこぼれた、痛みを感じないはずなのに。けど、それはその時のことを思い出してではない。
――そう、今の彼氏、アイツを思い出してしまっての涙。
「大丈夫、生きてるよ。あなたとわたしの好きな人は」
気がつくと、観鈴はそう言いながらハンカチを私に差し出していた。自分もつらいだろうにそれを押し隠しながら。
どうやら観鈴は私より少し大人らしい。まったく処女のくせに。
呪詛も姫君も家庭環境も何も関係ない。
この子はいい子だから、好かれているんだ。
「そうね……もし生きて帰れたらダブルデートでもしましょうか」

国崎最高
高槻最低
& key
98.7%

私が冗談でそう言うと観鈴は真っ赤な顔をして、
「い、郁未さんと？」
「うん」
「え、え」
何故か観鈴は困ってしまった。
「？　何か変かな？」
「だって郁未さんとデートなんて……」
その時、懸念が生まれた。
「ダブルデートの意味ってわかってる？」
「い、一日に二回デートすること」
「誰と？」
「い、郁未さんと。で、でも私は往人さん……」
頭を撫でてやりたくなってしまった。しかし、それは中断になった。
元、パンツ無しスカート男。
現、包帯男を私が見つけてしまったからだ。

734　微笑と嘲笑

開いた窓から吹き込む風が、おざなりな掃除を咎めるように、大きく埃を巻き上げる。空気が入れ替わり、差し込む光が明るく、そして暖かい。
放送室は、今までと同じものとは思えないほど希望に満ちていた。マイクの前に立つ蝉丸に、ぶらさがるように月代が抱きついている。
「(･∀･)蝉丸、ドキドキするね！」
「うむ。これが生き残った者たちの、脱出へのきっかけとなる事を祈るばかりだがな」
遅れて入ってきた少年が、部屋の荒れ様に少々驚く。
「これは……凄い有り様だったのだね」
「(･∀･)うん、たーいへんだったんだよ！」
「しかも、お互い機械には疎くてな……難儀したよ」

成功者のみが持ち得る達成感を胸に、苦労話など漏らしてみる二人。
「仲間のなかに、機械に詳しい人はいなかったのかい？」
月代の誇張に満ち満ちた大冒険を片耳に任せて、少年は蝉丸に話を振る。
「居る事には居たのだが……放送することで居場所は知れてしまうため、死の危険を呼び込むことにもなりかねん。だから連れて来なかった。月代は、もしもの時に俺の死を知らせるために、同行してもらったのだ」
大真面目に答える蝉丸。
（……ふうん、なるほどね……）
少年は意外に思いながらも、蝉丸と月代の関係を修正した。そして、心に秘めていた計画も修正する。
（……思ったより、楽かもしれないね）
蝉丸という人物から受ける印象は、有能さに裏付けられた、人間的迫力の強さだ。

だが、もしもこの少女を失ったなら、心の動揺はいかばかりだろうか。以前遭ったときは、そうした効果は期待できない程度の関係だったように感じた。
——もちろん少年自身が、そんな効果を求めてもいなかったのだが——いまは、違うと見た。一方的な庇護ではなく、互いの間に信頼が成立しているようだった。

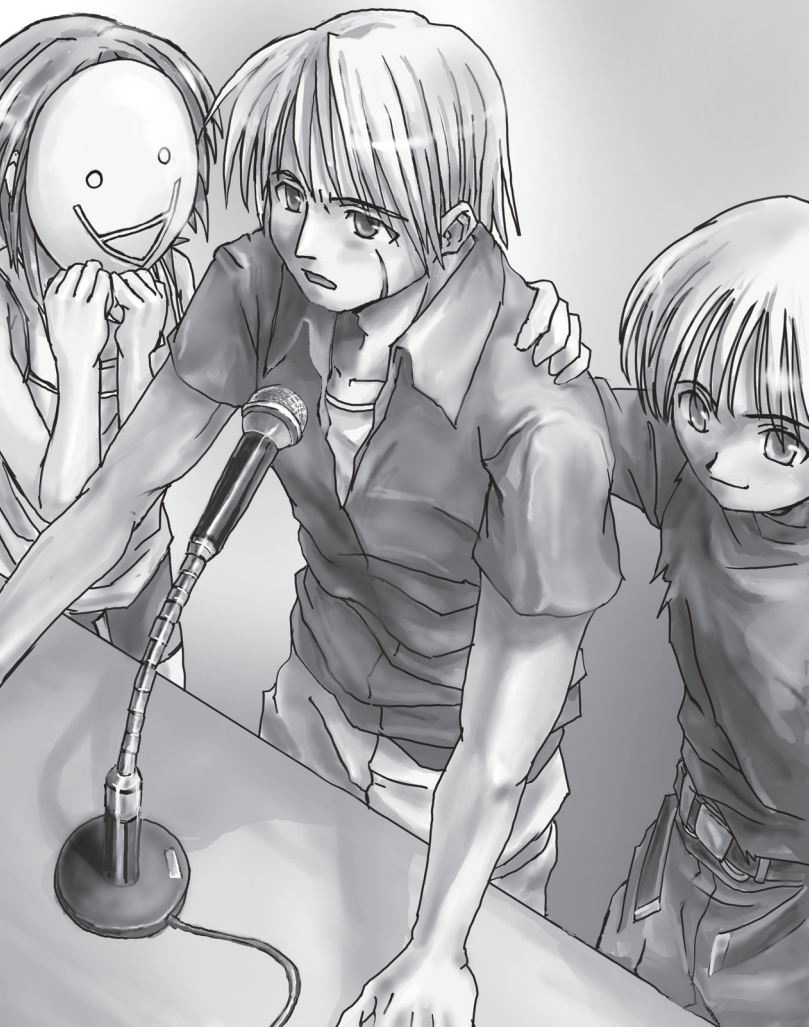
「あそこに……端っこだけだけれど見えるのが、学校なんだ。ホラあそこ。解るかい？」
開けた窓の隅に、特有の白く巨大な建物が見える。ベランダが無く、規則的に大きな窓が付いているのが見て取れる。
「なるほど、たしかに市街地からなら、山側を見て左だな」
蝉丸がスピーチに含める時のために、簡潔にまとめた。
「ところで放送が終わったら、どうするんだい？」

少年はいつもの調子を崩さず、何気なく尋ねる。
「(・∀・)終わったらって？　学校、行くんじゃないの？」
「無論、学校へ向かう」
二人同時に、同じ答が返ってくる。
(……これほど共鳴しているとはね)
心の中で、ひそかに苦笑する。
「街中にいるという君たちの仲間には、小学校に集まることにした訳を説明に行かないのかい？　君たちを知っている人であるほど、集合場所を小学校にしたことを、不審に思うかもしれない。少なくとも僕なら、どうして君たちから小学校という発想が出てきたのかを、疑うと思うね」
「(・∀・)……あ」
「む」
またも二人で答える。心の中の笑いを収めず、少年は畳み掛けた。
「方向が違うから寄り道するのは効率が悪いし、学校を偵察する必要があるかもしれない。最初の予定通り、月代さんにメッセンジャーをやってもらっても構わないとは思うけど……一人では、危険かもしれないよ」
「うむ……確かに、そうだが……」
蝉丸が言い淀む。先のことを考えれば、この反応は当然なのだ。地下施設のときも蝉丸は慎重だったし、少年のことを気にかけていたのだから。
「なんてね。大丈夫、僕が一人で学校を偵察するよ」
最後の一押し。いつもの微笑を浮かべて、そう言いきる。
(ちょっとした、賭けだね)
失敗したら、放送直後に背後から蝉丸を襲うしかない。成功すれば……二人同時に相手にする必要がなくなる。
(さあ、どうするかな？)
しばしの沈黙ののち、蝉丸が意を決して口を開く。

「いや……いつも君だけに危険な役を任せるわけにはいかない。君だってずいぶん傷ついているじゃないか」
「うん？　これかい？　……少々、無理もしたからね。これくらいは、必要経費というものだよ」
(我ながら……しらじらしいね。もともとの僕が、こういう口調で助かったよ)
　成功を確信しながらも、少年は肩をすくめて返答する。
「今度は、俺が行こう」
　蝉丸は決定を印象付けるように、はっきりと言った。
　……この答えは、少年の予想通りであった。
「(ﾟ∀ﾟ)え!?　でもでも、みんなは、彼のこと知らないよ？」
　ちょっと寂しそうに、控えめな不満を漏らす月代。
「いや月代、お前も彼と一緒に行ってもらう。……少年、月代を頼めるか？」
「(ﾟ∀ﾟ)ええー!?」
　蝉丸としても、月代と別れたくはない。だが心構えとして心に留めている、自らへの厳しさが、そうした甘えを許さなかった。
　自分に。
　そして今は——月代にも。
　外に微笑を絶やさずに。
　内に嘲笑を含ませて。
　少年は答える。
「ええ——こう見えても、腕には自信がありますから——」

735　導く声〈前編〉

ガピィーーーーーーーーーガガ・ガ!!

櫓の頂上に設置された巨大なスピーカーたちが、共鳴と接続音を撒き散らす。隣の室内では、緊張した面持ちで三人の男女が声を抑えていた。少しばかりの時間をおいて、その中の一人がマイクを握り締めると、演説を始める。
『島内に生き残る、全ての善意ある参加者たちよ！　聞いているだろうか？　俺は坂神蝉丸。最初に断っておくと、管理側の者ではない。諸君らと同じ、被害者である参加者だ』
「(･∀･)蝉丸、かっこいい……」
「ぼくにはできない演説だね」
『もはや体内の爆弾に危険は無く、我々の同志は管理側の拠点に攻め入ることさえ始めている！　参加者同士で殺しあう愚を悟り、今こそ手を組んで立ち上がるときなのだ！　怯え隠れる者も！　後悔を胸に血塗れた腕を抱く者も！　仲間と共に脱出を願う者も！　全ての者を、俺は歓迎する!!』
「(･∀･)なんか決めた内容より、すっごく熱いね」
「この情況でのアピールは、過剰なほど効果があるかもしれないね」
『繰り返す！　俺は全ての者を歓迎する！　今こそ我々は手を組んで立ち上がるべきなのだ!!　我が意に賛同する者は、学校に集って欲しい。そして我らが希望に反する者どもよ、決着をつけようじゃないか！　現在俺と志を共にする仲間は……』
「(･∀･)……そう言えば、敵も来るかもしれないんだね」
「君は……気付いて、なかったのかい……？」
『学校は、市街地南部に広がる山の東側にある！　市街から山を見て、その左だ。繰り返す……』
　一気にまくしたてて、さすがに息を乱した蝉丸が振り向く。
『……ふう』
『(･∀･)せみまるっ！』
　離れていた月代が駆け寄り、少年がその後を追う。
『(･∀･)お疲れさまっ！』

『もう一言、魔法使いの件もお願いできるかな』
『ん？　……ああ、済まん、そうだったな』
　やはり自分の意志から出た物でない情報は、忘れがちなのだろう。
　蝉丸は苦笑して、改めてマイクに向き直る。
『（む……電源を入れたままであったか……）あー……追加の情報だ。集合にあたって現状の打破のため、諸君にお願いがある。恐らく既に知らぬものはいないだろうが、我々の中には多くの異能者が存在する。中でも現在求められているのは〝魔法使い〟だ！　心当たりのある者は、是非とも名乗り出て欲しい。その知識と、能力に期待する！』
　蝉丸は今度こそ全てを語り終え、電源を切った。
　これで当初の目的は達成されたということだ。
「では早速、移動するとしよう」
「そうだね。〝敵〟が音源を聞きつけて、ここに来る可能性も無視できないからね」
　真っ先に少年が外へ向かう。
（……お別れの時間くらいは、残しておくよ）
　少年の顔は、いつものように笑っていたのだろうか。
　それは、誰も知らないことだ。
　少年自身にすら、解らなかった。

　月代が蝉丸を見上げ、その袖口を掴んだまま、ぽつりと呟く。
「(･∀･)……蝉丸……」
「月代、そんな声を出すんじゃない。初音君やマナ君をはじめとして、他の皆を思えば俺たちはよほど幸運だろう？　その幸運を、全ての参加者に分け与えるつもりで、俺はここに来たんだ」
　いつになく多弁な蝉丸。演説気分が残っているのかもしれない、そう思うと口元が緩んでくる。それがなんだか照れ臭くて、月代は下を向き、こくりと頷いた。
「(･∀･)……うん」

「大丈夫、すぐに会える」
「(・∀・)……うん」
照れ臭いだけのはずなのに。
何故だか涙が出そうになる。
「心配、するな」
「(・∀・)……うん」
「皆で帰るために、俺はこうしている。もちろん、俺とお前も、一緒に帰るんだ。……そうだろう、月代？」
「(・∀・)……うん」
蝉丸の言うことは間違っていない。
それでも涙が止まらなくって。
月代は、思わず蝉丸に抱きついていた。
「(・∀・)蝉丸……学校で、会おうね」
「ああ、学校でな……」

736 導く声〈後編〉

丸く狭い視界が、左右に揺れる。少年が、ついに動き始めたからだ。
「……」
スコープ越しに五人の行動を監視しつづけたフランクは、気持ちを入れかえて再びライフルを構えなおした。
放送に足を止め相談していた芹香たちも、再度動き始めようとしている。
放送施設から出てきた三人は、二手に分かれて行動することにしたようだ。男が一人、こちら側へ向かってくる。
はずれだ――少年は、市街地の中へと向かっていく。
「……」
人知れず悪態をつき、木から飛び降りる。このま

ま林の中を迂回して接近し、市街地で改めて狙撃するしかない。幸い少年に同行する少女に合わせてだろう、移動速度は極めて遅い。無謀な攻撃は避け、ひたすら位置取りを考えるべきだ。
思考が沸騰しないように自分を戒めながら、フランクは林の中を駆け抜けていった。
遠く櫓の方から歩み寄る影を見つめ、芹香は尋ねる。
「……あれが坂神蝉丸さんってわけ？」
「当然、そうなるな。用事があるのは……あっちの小さい方なんだが」
つまらなそうに遠くを見ながら、往人は言った。いや、苦々しげにと言ったほうがいいだろうか。
「……どうしたのよ、渋い顔して」
「ふん……考えてもみろ。露骨に魔法使い探しを演説に挟むよう要求されて、素直に受けてただろ。あの坂神ってのは、小僧を信用しているんだよ」
「たしかに、そうなるわね」
当然の分析に、素直に頷く私を、往人は呆れ顔で見つめる。
「……下手すりゃここで、殺し合いになるだろうが」
——考えてもいなかった。
放送を聞きながら往人から教えてもらった少年の凶暴性は、にわかに信用できる物ではない。遠くで少女を道連れに歩く姿からは、全く想像がつかなかった。私がその話を信じる気になったのは、叔父様と往人の態度が一致しているからに過ぎない。
「そっか……普通にしている限り、相手にボロは出ないのね……って、どうするのよ⁉」
「林を背にしているとは言え、向こうもそろそろ、こっちに気が付いているかもしれんな。不自然な話だが……街に用があるとでも言って、すれ違うしかないか？」
「……あからさまに怪しいわよ、それ」

「くそ、やっぱりか。まじいぜ……」
進退窮まった、というところだろう。
この情況を動かし、覆すことができるのは、皮肉なことに敵とみなした少年だけなのだ。

蝉丸と別れてすぐに、月代と少年は市街地のはずれを歩いている。
「ここから遠いのかい？」
「(・∀・)ううん、そんなでもないけどね」
ふうん、と無感動に答える少年。
実際、特に興味はない。蝉丸の仲間達に魔法使いがいないことは判っているからだ。
「……ところでそのお面だけど」
「(・∀・)……うん？」
「どうあっても、取れないのかい？」
「(・∀・)うん……色々試したんだけど……」
それは残念だね、と少年はそう言いながら本を開く。
仮面とその本に、関係でもあるのだろうか？
そう思って月代が覗き込む。興味津々というやつだ。
「なあに、その本？」
「……いや、これで仮面を外せないかと思ってね」
ぴり、と少年がページを破る。
月代にとっては、何のことだかさっぱり解らない。
どうしてページを破く必要があるのだろう？
「(・∀・)なんで……？」
そう尋ねようとした月代に、少年が言葉をかぶせる。
「……最期くらいは、綺麗に死にたいだろうからね」
「(・∀・)……え？」
驚き、見上げたその眉間に。
すとん、と硬質化した紙片が突き立った。
「(・∀・)……!?」
かくん、と右膝の力が抜けて、斜めに倒れこむ月代。

ぱかり、と割れ落ちる仮面。しかし紙片は、そのまま彼女の顔から離れることはなかった。
どさり、と重い音が響いて、少女が倒れる。少年はほとんど感情の動きを見せないまま、割れた仮面を拾うと、蝉丸の姿を求めて移動した。
「少々、忙しくなるね」
市街地から出て、林側を観察する。まだ林には入っていないはずだ、そう思いながら遠くを見る。
蝉丸を探しながら無意識に割れた仮面を重ね、左手に持ったそのとき。

『蝉丸……』

声が、響いた。
先ほどの放送にも劣らぬ、大きなささやき。
そして声の主は、もはやこの世にいないはずの月代。

『……ごめん、学校……行けないよ……』

少年は驚き、左右を見る。
いや、原因は手の中にあった。
「そうか、この仮面は……」

『……せみまる……』

この仮面は、人格操作か何かの研究用に宗団によって作られた物だったのだろう。
今では仮面そのものに、月代の意識が投影されている。
「……ご同類ってやつだね」
擬似人格を貼り付けられた自分とは、親戚のようなものだ。

『……さよなら』

ぱきん、と小さな音がして、仮面が砕ける。握り締めた少年の手の中で、外れた仮面はプラスチック

板のように簡単に割れていた。
（もしもこの仮面を、僕が付けていたなら。……もう少し長く、郁未と居られたかもしれないね）
ようやく、蝉丸がこちらへ走ってくるのが見えた。
しかし仮面は、もはや何も話さない。
溜息をついて、少年は苦笑いをする。自分が何を求めているのか、解らなくなってしまった気がする。
（……考えている暇はないね）
少年は蝉丸の進路を予想し、月代の遺体より先に発見できるよう計算して、仮面の破片を置いた。そして建物の影に隠れ、蝉丸の到着を静かに待ち受ける。
彼女の死を確認した瞬間こそ。
その一瞬こそが、彼の隙となるだろう。

八十三番　三井寺月代　死亡
【残り21人】

737　別れを告げる僕らのために

自分たちには時間がない。大切な人を早く探さなければならない。そんな時に知り合いが自分の目の前に現れた。このゲームが始まった初期に、私、天沢郁未が行動を共にしていた青年だった。
「耕一さん？」
こうして彼の無事を確認することが出来たのは僥倖だが、私はしかし、彼の様子から別のものを感じていた。彼は本当に自分が知っている柏木耕一なのか。どこかのほほんとして、全てを包み込むような大らかさを持った人。そういう風に私は思っていた。目の前の青年は、その定義の上では柏木耕一ではなかった。
「――郁未ちゃんか？」
違う生物だ。私はまずそう思った。彼の目には、何か別のものを思いやる余裕があるようには、到底

見えなかった。それは彼の目が冷たくなった、という訳では勿論なく、
——真っ直ぐな決意の力を帯びている、と思った。
こちらが彼の本当の姿なのかもしれない、と思う。一緒に過ごした時間は至極短いものだったのだ。
右手には銃を、左手にはナイフを。背負った鞄とおかしな服装。ぐるぐる巻きにされた包帯。傷だらけの顔、そしてそんなボロボロなのに、それでも決して失われない光を持った、太陽のような瞳。
彼は今から、殺し合いをしに行くのだと判った。
握った手を通して神尾観鈴から震えが伝わる。その決意に満ちた姿は、勇敢であるというよりは、ただ恐ろしかった。共に時間を過ごした私でさえも。
「本当に久し振りだね。無事だったか？」
「……うん」
耕一は少しだけ表情を崩して言ったが、すぐに表情を戻し、そして少しだけ申し訳なさそうな声で、
「だけど、再会を喜ぶ時間もないんだ。ちょいと急いでてね。また会おう。絶対に生き残ってな」
そう言って自分たちに背を向けた。
勿論再会を喜ぶ時間もない、というのはこちらも同じである。早く自分の相方を見つけなければならないし、観鈴の母親も見つけなければいけない。しかし、頷いて手を振ろうとする気持ちと、首を振って呼び止めようとする気持ちが戦い、後者が勝った。
「耕一さん！」
「大丈夫。心配はいらないよ」
耕一はこちらを振り向きもせずに言った。
「頭も身体も、正常そのものだよ。怪我はしてるし体力はなくなってるけどな」
「あなた、今から人を殺しに行くんでしょう！」
殺しに行く、という叫びに、観鈴がびくりと震える。無理もないと思った。彼の姿は殺人鬼像そのままに見えるのだ。大きな身体と武器と、その目。観鈴には酷すぎるくらいに酷なことだろう。
「違う。俺は、戦いに行くんだ」

耕一は、しかしきっぱりと言った。
戦いと、殺し合い。この島ではこれは同義ではないのだろうか。私は思う。他者を殺し切ったものが勝つ、それのがこのゲームのルールなのだ。
けれど、耕一は、人を殺すのではない、と言った。
けれど、私の知らない顔をして、耕一は言うのだ。
「──判った」
違うのだ。彼は自分と一緒にいたときと何も変わってない。彼は最後まで、他者を守り抜いて生き残ろうとする。その気構えを決して忘れていない。その姿勢が──剥き出しになっただけなのだ。
だから私は、頷くしか出来なかった。
話はもはやこれまでだった。「じゃあ、先を急ぐから。またな」耕一は言って、自分たちの行く方向とは違う方向に進んでいく。先を急ぐのは自分たちもなのに、私は「待って」ともう一度彼を呼び止める。もう一度彼の声を聞きたい、と思ったのだ。

予感。
剥き出しになった意志は、きっと何かの崩壊を招く。それがいい方向に働くか、悪いほうに行くかは判らない。けれど大抵は後者だ。
もう二度と会えなくなるかもしれない、と思った。彼が『戦い』に赴いて、その結果、命を落とすかも知れないと思った。彼の背中を見ることがもう叶わないかもしれない。『また』はないかも知れない。そう思うと私の喉は勝手に震えた。
少しだけ困った顔で「なに？」と訊く耕一は、あの時一緒に時間を過ごしたあの柏木耕一と同じで、どうしてか切ない気持ちが溢れ出てくる。
何でも良かった。何でも良かったけれど、選択肢が多すぎてどうしようもなくて、結局出たのは事務的な質問だった。
「一つ聞きたいことがあるのよ。人を探してる。高校生かそれより少し上くらいに見える黒服の男の子と、背が高い二十代半ばの女の人。見なかった？」

「お、お母さんを探してるんです」
事務的で、無機的で、けれど、会話のネタとしては適当な質問だった。後ろにいた観鈴も便乗して話しかける。
耕一はこちらを振り向き、答えた。
「——そんな少年は見てないかな。けど女の人ならさっき会ったよ。あっちの喫茶店にいる。そいでその人は、娘さんを亡くしたって言っていた。——君のお母さんかどうかは判らないけど」
そう言うと、「それじゃあ今度こそ行くわ。またな。探してる人に会えたらいいな」と耕一は再び私たちに背を向けた。
「待ってっ!!」
どうして呼び止めたのか自分でも判らなかった。何を言うか考えてもいないのに。耕一はちょっと呆れた顔をして再び立ち止まる。
「——今度は？」
出た言葉は。
「——ひとつ言いたかっただけ。グッドラック」
耕一は一瞬きょとんとした顔をして。
だけど、笑顔で親指を立て、
「——ああ。グッドラックだ」
一瞬で考えたにしてはいい言葉だったな、と思う。
互いに親指を掲げ、また会おうねと約束をして、私も彼に背を向けた。単なる予感だ。きっとまた彼に会う時が来るだろう。だって彼も私も、互いに幸運を祈る——他人に幸運を祈る余裕があったのだ。
「取り敢えず行ってみようか、喫茶店」
「うん」
私は彼女の手を引く。喫茶店にいるという女の人は晴子さんで、もしかしたら何かの事情で『観鈴はもう死んだ』と思い込んでいるのかもしれない。耕一に名前を聞いておかなかったのが悔やまれる。
とにかく今は喫茶店に行こうと思う。
歩きながら耕一のことを思う。

彼と出会えて本当に良かった、という、そんな思いが胸に浮かぶ。楽しかった。彼といて本当に救われた。恋とはまた別物だけど、彼に生きて残って欲しいと思うし、そして彼に生きてまた会いたいと思う。

——また会おうね。

グッドラックを祈ったのに、何故か涙がこぼれた。観鈴に見えないように涙をぬぐって、今度は頑張って笑顔を作って空を見上げた。

————こうして私たちは別れを告げた。

738　神様なんて信じていない僕らのために

銃声。鼓膜が破けるような衝撃で誰もが目を瞑った。その引き金を引いたのは誰だったか、果たして誰も判らなかった。誰が引き金を引いたか、最初に理解したのは勿論、引き金を引いた当人だった。

閃光と爆音の消え去った後、そこにあった光景は一つ。七瀬彰が血を流して蹲る様だった。

自分の胸元で輝き続ける朧の光。ぼぉとそれを眺めながら、柏木初音は、次の瞬間ぶるりと震えた。上手く事態を呑みこめないのは当然だった。

自分は、引き金を引いていないのだ。

なのに、何故彼は苦しそうに蹲っているのだろう。それは、他の二人も同感だっただろう。彼らもまた、構えた銃の引き金を引いた覚えは無かったのだ。

何が起こったのか誰も判らなかった。

勿論答えはすぐに出た。

粉々に砕けているのは、初音の後ろの窓ガラスだった。初音の頬を濡らすのは、紛れもない彼女自身の血だった。やっと幽かな痛みが初音の神経に走る。流れた血が唇に至って、初音は漸く、自分が撃たれたのだという事を自覚する。硝煙の匂いが彰の手から立っていた。そして彰はこうして蹲っている。

彰は、撃たれたから蹲っているわけではないのだ。流れている血は自分がさっき銃弾を撃ち込んだ場所からのもので、けれど彰は腕の怪我を構いもせずに

蹲っている。彰は撃たれたから蹲っているのではない。彰は、撃ったから蹲っている。

わたしは、ゆっくりと崩れ落ちた。銃を取り落とし、膝を突いて、呆然と、自失して、座り込んだ。

――結局わたしは、撃てなかった。震える指先は、引き金を引くには至らなかった。わたしは、結局そんな人間だったんだ、と思った。

自分の脇で待機していた二人――鹿沼葉子と観月マナに、自分がしくじった時の事を任せていた。自分が彰より先に引き金を引けなかったら、その時、二人に撃ち殺してもらおう。

――馬鹿な話だ。

自分は、こんな小さな銃の引き金すら引けなかった。大切な人を失う事が怖かった為に。大切な人を自分で壊すのが嫌だった為に。偽善者じゃないか。わたしはこの島にいる誰よりも、偽善者だ。わたしに銃を向けるくらい彰は壊れてしまっているというのに、まだ『優しい彰お兄ちゃん』が帰ってくるかもしれないと、そんな夢想を抱いて、銃を撃つことが出来なかったのだ。自嘲気味に笑って、わたしは、拳銃を拾うと、その銃口を彰に向けた。

もう、わたしは。

偽善者であることを止めなくちゃいけない。

この引き金を引いて、彰を狂気から解放してあげなければいけない。それは、わたしの罪だから。

自分とほんの二メートルも離れていないところで、わたしの腕でさえも外す筈がない距離で、手を伸ばせば届くような距離で、七瀬彰は、一人――激しく息を吐いている。

どうして彰は弾を外したのだろう？

外す筈もない距離だったはずなのに、どうしてわたしはまだ生きているのだろう？　死んでいれば、あなたに殺されていれば、仕方ないと諦めがついたのに。あなたを殺さないですんだのに。

――君を殺して僕も死ぬ。彰はそこまで言ってい

た。なのに彰は自分の頭を撃ち抜けなかった。そこまで考えて、わたしはある当然の論理に行き着く。
　彰は今、自分の中に生まれた鬼と戦っているのだ。自分を撃ち殺せなかったのは『優しい彰お兄ちゃん』が『鬼』と格闘しているからだ。
　けれど、だとしたらどうすればいい。
　そこまで考えたところで、彰がゆらりと立ち上がった。初音の思考は停止し、ただ呆然として胸元で光り続けるお守りを再び握り締める。光り続けるのは、自分に、マナ達に、そして彰自身に、まだ災厄が訪れる未来を意味している。どんな事が起こるというのだろう。もう一方の手も銃を握り締めていて、滲む手のひらの汗を拭うことも出来ない。額からもだらだらと汗が流れる。
　けれど、均衡を破るべきなのは自分なのだと思う。
　自分の手の中にある銃は彰に向けられたまま。指で引き金を後少し引けば確実に彰の命を奪うことができる――この島で出会った大切な人の命を。
　さっきは撃てなかった。今度こそ撃たないと駄目だ。自分勝手でわがままでエゴイストのわたしが彰お兄ちゃんに生きて欲しいと願った結果、彼はこうなっているのだから。
　さあ、柏木初音。
　引き金を引け――自らの責務を果たせ。
　目を開き、ゆらりと立ち上がった彰の、その震えた身体に銃口を向け、引き金に人差し指を当てたところで彰が顔を上げ、
　そこでわたしは驚愕した。

　――僕は、変わったのだと思う。心底そう思う。この島に来る前の自分と、島で戦ってきた自分。これほどに自分の意思で何かをやろうとした事など、今までの自分の人生ではなかった。人をたくさん殺して、一つの施設を破壊した。他人を守るために、人に向けて銃を撃った。すべてを他人の為にやってきた。自分の身など一度も顧みずにだ。自分が死ん

ででも他人を守ろうとした。
　そんなのは、ここに来るまでの自分からは考えがつかない。僕は変わりすぎた。今、自分の中で獣が暴れている。けれど、そんなものは正直大した変化ではなかったと思う。この島に来て、自分が変わっていくと実感している時に比べれば、全然だ。
　ふと思う。たぶん僕がはじめて愛した人間は、自分自身だった。そして、きっとこの島に来てから初音に出会うまで。僕は僕自身しか愛してこなかったのだと思う。
　美咲さんのことを愛していたのなら、その気持ちを即座に彼女にぶつければ良かったのだし、あの雨の降る彼女との出会いの日、あの耳鳴りのする中で、すぐにでも抱きしめてしまえば良かったのだ。
　なのにそうせず、「ああ、良いなあ」というそんな憧れだけを抱いて暮らしてきたのは、結局何よりも、自分自身が可愛かったからなのだろう。拒絶されることを恐れて、自分の弱い心が傷つくのを恐れて、僕は逃げ回っていた。
　一方で、僕は他人の事が好きだったのかもしれないと思う。自分の心に優しく接してくれようとしてくれた友人たちのことが好きだったのかもしれない。はるか、冬弥、由綺、そして、美咲さん。
　けれど、それは一般で言われる好きとは違うと判る。判ってしまう。僕は、彼らのことを、一般的な意味では愛していなかった。彼らに愛されていた実感はあるのに、どうして彼らを愛せなかったのか。答えは見つかっている。きっと僕は、誰よりも誰よりも弱い、最低の人間だったのだ。
　愛さなくても、愛されてさえいれば、人は――幸せなのだ。
　彼らの笑顔の中にいる間、自分の気持ちが安らぐような感触を得たのは、彼らのことが好きだったからではなく、彼らと一緒にいるのが自分にとって、居心地が良かったからだ。結局、自分の事しか考えず、生きてきたんだ。

きっと、彼らがここにいて、今の自分の愚痴を聞いていたならそれを否定してくれるだろう。冬弥辺りはきっと言うだろう、人を愛せない人間なんてない、と。「美咲さんへのお前の気持ちが紛い物だとは思えない、単にお前が意気地なしなだけさ」なんて、そんな風な一般論を並べるだろう。はるかも美咲さんも由綺も、きっと同じような事を言うと思う。

けれど違うんだ。僕は、最低の奴だから。

この島に来て——自分が死ぬかもしれない、そんな状況に立たされて、何故、その時になって初めて、他人のことを心底で守ろう、そういう感情を持ったのだろう。こういう島だからこそ、僕は自分の身だけを真剣に考えるような性質だった筈だ。それが不思議でならない。

あの時、茂みがざわめく音を聞かなかったならば、初音を見つけなかったならば、きっと僕はもっと簡単に死ねていただろうし、こんな気持ちになることもなかった。他人への嫉妬、そんな感情も一度も覚えることもなく、僕は死んでいったのだろう。他人を愛するという気持ちが、良くわからないままに、僕は死んでいったのだと思う。きっとその方が幸せだったのだろう。今では、僕は素敵な愛を心から憎むような道化を演じている。生きることが苦痛になっている狂人だ。もっと早く死ねばよかった。

——ああそうか、とふと思う。

他の人に愛されていなくちゃ、僕は駄目な人間だったんだ。だから、初音を求めたに違いないんだ。こんな場所じゃ流石に、愛さなくちゃ愛されないから。だから僕は、初音のことを愛してみたんだ。は。僕は相変わらず最低だな。

だけどさ、

愛するってのは悪くない。

勝手な話だが、僕はそう思ってしまった。

彰が、茫洋とした目つきでわたしの横を通りすぎる。なのに全く身体が動かない。何故か彰の顔は涙でぐちゃぐちゃになっていた。そしてわたしは、彰のその表情を見て初めて、自分の仮説が間違っていたのかもしれないと気付かされた。ひょっとしたら、自分は大きな勘違いをしていたのではないか。
あの茫洋とした表情も、あの狂ったような眼差しも、夢中になって物事をやる没頭性も、自分を守るために人を殺すような暴力性も、すべて、
自分が血を分け与える以前から、彰がその心に持っていたものではなかったか。
彰お兄ちゃん。そう呼ぼうとしても声すら出ない。振り返る事すら出来ない。立てる音で、彰が割れて壊れた窓を無理やりに抉じ開け外に出ていったのだと判った。粉々に弾けている窓ガラスを踏みつけた音がした。たん、と音を立て、家の外に飛び出した音がした。そしてゆっくりとした歩調で歩き始める音がした。動かない。動けない。わたしに許されるのはただ考えることのみで、その思考さえも混乱で脅かされる。そして混乱した思考を必死で纏め、そしてその『混乱』こそがすべての真実なのだと、わたしはやっと判った。
鬼っていうのは結局、
そこでやっと身体が感覚を取り戻す。殆ど同時にマナと葉子も息を吐く。まるで金縛りにあったように皆動けなかった。動こうと思えば動けた筈なのに、理性が動くことを許さなかったのだ。皆が彰の表情に釘付けになっていた。彰が遠くに行ってやっと、理性は動くことを許した。そして遠くに行ったということは、自分たちは完全に後手に回ったということだ。
多分。
自分以外の二人はまだ真実には至っていない。
「初音ちゃんっ！　彰さんがっ」
マナの呼ぶ声、
判ってる。もう判ったんだ。止めなければすべて

が終わってしまうことは判ってる。そして、何が真実なのかもわたしは多分判った。鬼なんてものは、少なくとも彰の中には『はじめからいなかった』。

自分が与えた血は、きっかけに過ぎなかった。鬼の血は、彰が持っていた、そして間違いなくすべての人間が持っている二面性を際立たせただけなのだ。それですべての事象に説明がつくわけではない。自分の推論は間違っていて、本当に彰の心には鬼が巣食っているのかもしれない。

だが、少なくとも、かつての次郎衛門のような劇的な変化は起こらなかった。

鬼の持つ回復力、そして筋力の増加も発現しているように思える。それにしても、人の雄生体が鬼になったとき程の驚異的な能力には程遠い。鬼の影響は少ない、そう考えるのが自然だろう。

結界の影響もあるのだと思う。

人は誰しもが『鬼』を持っている。それは、自分たち一族の事を指す意味での『鬼』ではない。人なら誰だって持っている荒ぶる衝動のことだ。

――それを、便宜的に『狂気』と呼ぼう。

犯したい。殺したい。壊したい。そんな狂気を、人は誰でも持っている。彰は、自分が血を与えた事を知っていただろうと思う。そして、彼は自分がその血を得たことで、肉体が活性化したことに気付く。その結果、彰は、錯覚してしまったのだ。

――『自分は、人ではなくなった』のだと。

これほど傷ついていてもまだ動ける。それは自分が人外のものと化したからではないか。化け物でなければ、今こうして生きていて、なおかつ、今まで以上に速く、強く動けるのは異常だ。そうだ。自分は化け物になったのだ。

そして、彰は自分が人外になったと思い込み、

――もはや化け物ならば、何をしても構わないじゃないか。

血の力で強まった、温厚な彰の裏にあった狂気が、

そう促したのだ。それは声のように聞こえたかも知れない。そしてその声は、彰自身の声とまったく同じものだっただろう。
彰が耕一を殺そうとした理由は何故か。初音には想像することしかできないが、推測するに耕一が自分のことを奪おうとしたから——だと思う。だが、そんな事はありえない。本人であるわたしが保証する。だが、狂気に犯された彰には、それが真実であると思い込んでしまったのだろう。
それで全部が上手く説明できるかどうか判らない。すべてを狂気の所為にするのは強引かもしれない。だが、『狂気に落ちていきたい』と願う彰の心は、自分の見た景色を、記憶を改竄してまで、『大切なものを奪われた』という印象を自らに圧したのだと考えれば、彰の誤解を説明できなくはないだろうか。
そして、わたしは、ここで大切なことを理解する。
彰は。
ちっとも変わってなんていなかった。

自分のことを一途に守ってきてくれた、優しい彰お兄ちゃんのまま、ちっとも変わっていなかった。
全ての諍いは、彰の裏側の性質が暴走してしまったことから始まった。けれども、彰の行動の全ては、結局、
わたしを守ろうとする思いから起こっていたのだ。
彰お兄ちゃんは、わたしを撃てなかったのだ。
「初音ちゃんっ‼　早く行かなくちゃっ‼」
「わかってるっ‼」
わたしはたまらなくなって立ち上がり、既に部屋の外に出ているマナと葉子に続き、彰を追って走り出した。

——市街地をいつのまにか抜けて、僕はいつしか、街の東の端にある高い金網の前に至っていた。がしゃり、と金網を掴み、その遠くに見える景色を見た。
指に入る力が、次第に強まっていく。
まるでわがままな子供がおもちゃをねだるように、

がちゃがちゃと音を立て――僕は無心に金網を揺り動かした。早く。早く。早く。
――僕は何を待っている。
どれだけの時間、僕はそこで、ぼおとしていたのだろう。金網越しの風景にはまるで変化がない。あまりに変わらない風景は時間の流れを忘れているかのようで、目に見えない風の動きだけが、時間の流れの存在を告げていた。
初音達の声が、街の真ん中の方から聞こえる。どうにも見当違いの方向を探しているようだった。彼女らには、僕が何処へ向かうかなど判るまい。彼女らには、僕が何を待っているか判らない。僕もまた、自分が何を待っているか判らないのだから。
――初音ちゃん。
本当に、愛していたんだ。愛していたんだよ。僕が狂っていたとしても、きっとそれは変わらない。
今から僕は、本当の奈落に落ちていく。
そして僕はやっと。

自分が何を待っているか判った。
――こちら側からあいつは来る。自分が殺しきれなかっただろう男が。自分を殺しにやってくる男が。
風景が何かに怯えるように揺れた。風もまたその存在に気付いたように揺れた。ざわめきが大きくなる。心臓の音が高くなる。『その気配』で揺れた僕の心の湖の、一番深い底から声が聞こえる。僕とまったく同じ声をした誰かの声が聞こえてくる。
殺してしまおう。すべて。目の前にある、すべての障害を殺しきろう。
――言われなくても判っている。
僕は神様なんて信じていなかった。信じていたのはただ一つ。目の前に広がる世界だけだった。そして今の僕はもう、自分の頭すら信用することが出来ない。だから僕は目を閉じて、真っ暗な世界に落ちていこう。
何も信じないで、ただ、拳銃の引き金を引こう。
右手に剣を、左手に枷を。

僕は目を開けた。

そして僕の目の前に、金網越しの風景に、あいつがやってきた。ひどくゆっくりとした歩みで、柏木耕一が僕の前にやって来た。

739　サヨナラ

『島内に生き残る、全ての善意ある参加者たちよ!!』

私と観鈴がその放送を聞いたのは、耕一さんから教えてもらった喫茶店までもうすぐのところだった。

「郁未さん……今の」

そう問い掛けてくる観鈴に対し、私は手で制して放送に耳を傾ける。

『今こそ我々は手を組んで立ち上がるべきなのだ！　我が意に賛同する者は、学校に集って欲しい』

「郁未さん、これって！」

目を輝かせて観鈴が弾んだ声を出す。

その気持ちは私も同じだ。こういう人がいるというのは、それだけで希望が湧いてくる。

だけど。

(手を組んで、か)

私は、それに参加してよいのだろうか？　私の心はいつ消えるともわからないのに。いつ姫君の手先になるともわからないのに。

だが、それでもこの放送が明るい材料であることに変わりはなかった。

希望があるということはいいことだ。

だが、私のその気分はあいつの声で一瞬にして消し飛んだ。

『もう一言、魔法使いの件もお願いできるかな』

……あいつの声。懐かしいその声。私の好きだったときのままのその声。

でも私には、継嗣である私にはわかるのだ。

普通の少年のものにしか聞こえないその声の裏に

は空虚、そして殺意しかないということが。
「グッ……」
痛みを感じないはずの私なのに、ずきりと胸に痛みが走る。
熱い、とても熱い。
感応しているのだ。継嗣たる自分が、主たる者の分身の声に。
「？　どうしたの郁未さん……!!」
うめき声をあげた私に観鈴が振り返り、そして息を呑んだ。
さぞかし凄絶な顔をしていたのだろう。私は。
「郁未……さん」
だが、それでも観鈴は私におずおずと声をかける。
「……なんでもないわ」
「で、でも」
涙ぐんで観鈴は言ってくる。そこまですさまじい表情をしてるらしい、私。
（……また、泣かせちゃったわね）

チラッとそんなことが頭を掠める。
「お願い、観鈴。静かにして。放送を聞かせて。大事なことなの」
そう、これは大事なことだ。おそらくあいつは……。
『……心当たりのある者は、是非とも名乗り出て欲しい。その知識と、能力に期待する！』
その声とともに放送は終わった。
だが、それでも胸の奥は熱いままだ。
「……大変ね」
「え？」
「あの、放送の中に男の声が二人あったでしょ？」
「あ、うんあったね」
「そのうちの一人、後ろで喋っていたほうはね、管理者の手先なの」
「そ、そうなの!?　じゃ、それって……」
「多分、このままだったら放送をしていた男はだまし討ちされるわ。あの放送を信じて学校に集まった

人たちもね」
「そ、そんな……」
「私は、一刻も早く警告をしにいかなければならない。あいつと対決をしにいかなくてはならない。だから」
私はそこで言葉を切って、そして、観鈴から目をそらして、
「ここでお別れよ。観鈴」
そう、言った。
「……が、がお……お別れ……」
私の言葉に、観鈴の目が丸くなる。
「だから、お別れよ。観鈴はお母さんに会いに喫茶店に行くんだから」
「で、でも急すぎるよ……こんな……」
「観鈴」
私は、今度はまっすぐに観鈴の目を見た。
「お母さんのこと、好き？」
「うん……好きだよ」
「そう。私もよ。私もお母さんのことが大好き。いいものね、お母さんって。お母さんといることって本当に素敵な事だもの」
今の私にはお母さんの思い出は辛いものだけど。
「だから、お母さんのこと大切にしないと駄目。耕一さんが言ったこと覚えてるでしょ？　あなたが死んだと思っているって。だったら、早く安心させなくちゃ」
「それは……そうだけど」
「それにね、いい機会ではあるわ。どの道、いずれは別れようと思っていたんだし」
「え……なんで……そんな風に思ってたの……？」
「私は侵食されている。だから。この先どんな風になってしまうか判らないの」
侵食のこと、姫君のこと、あいつの事は観鈴に話していなかった。
話すことが辛いことだったのもあるし、多分、この子に恐れられるのが怖かったこともあったかもし

れない。
けど、もうそれも終わりにしなくてはならないだろう。
だから、私は、今私の身に何が起こっているのか、この島でなにが起きているのか、知っていることを全て手早く観鈴に話した。
「……このままだと私はあなたに何をするか判らないわ。だから、お別れよ。気をつけてね」
喫茶店にいるのが観鈴の母親かどうかはわからない。けど、きっと信用できる人なんだろう。少なくとも私よりは。
「郁未さん……」
ようやく事態を理解できたのだろうか。観鈴の目から涙が零れ落ちる。
(最後まで泣かせちゃったわね)
私は、唇でそっと観鈴の涙をぬぐう。
「観鈴、あなたに会えてよかった。あなたに会えて、晴香や由依とすごした日々が思い出せそうだった」
……それは結局無理だったけれど。
「さようなら」
笑顔でいられただろうか？　優しい声が出せただろうか？
そうだったらいいな、と思う。
もうそれがわからないぐらいに侵食は進んでいるけど。
そうして、一方的な別れを告げて、私はまだ呆然としている観鈴から背を向けて、私は全速力で走り始めた。
きっとあいつのところに辿りつける。放送によって場所はだいたい判った。後はこの胸の感応があればきっと辿りつけるだろう。
だから、私は後ろを振り返らずに走りつづけた。

740　礼

耕一の背中は、あっという間に小さくなっていっ

た。
「行ったな」
傷だらけで脅えていた耕一の横顔を思い出す。
だが彼も最後には、立ち上がって晴子をまっすぐに見据えていた。
「あの調子なら大丈夫やろ。きっと」
晴子は踵を返すと、喫茶店の中に入っていった。
一つ、確認したい事があったのだ。
喫茶店の最奥の部屋。
先ほど耕一の手当てをするために薬を探し回ったとき、そこで〝それ〟を見つけた。
そのときは怪我の手当てを優先するため、後回しにしたのだが。
部屋に足を踏み入れる。
そこには、一人の少年の亡骸が安置されていた。
晴子は躊躇うことなくその横にまで歩み寄ると、かがんで亡骸の顔に掛かっていた布切れを取り除く。
「やっぱり、あんただったたか」
氷上シュン。
出会うなり逃げていった観鈴を、優しく諭してくれた少年。
彼が居なければ、観鈴に再び会うことも出来なかったに違いない。
晴子はどっかと腰をおろすと、横に一升瓶を置いた。
「あんたには本当に感謝してる。……放送聞いたときは悔しかったわ。最後まで礼のひとつも言えんかった」
持ってきたコップに酒を注ぎ、亡骸の横に置く。
「それで愚痴を聞かされるのは、割に合わんと思うかもしれんけど……ちと付き合ってや」
彼と出会った時のことを、彼の言葉を思い出す。
――そうすれば全てがうまくいくはずです――
「あんたの言うほどには上手くいかんかった。観鈴

は、観鈴は……居なくなってしもた」
『それが、あなたのせいだとでも？』
　誰かの言葉が聞こえたような気がした。はっ、と晴子は頭を上げ、彼をみる。
　しかし、そこには穏やかな死に顔の亡骸が一体、あるだけだ。
「酔ったんかな……この程度で酔うなんて、うちも相当弱ってるんやな」
　ははっ、と自嘲気味に笑って、手元の一升瓶に視線を戻す。
「うちは観鈴を守りたかった。でも、どうしたらいいか解らなかったんや」
『そんなことはだれにだって解りません。でも、あの子は、あなたと共にいることで随分救われていたはずです』
　また声が聞こえたような気がした。しかし、もう晴子は気にしなかった。酔って聞こえた幻聴が、愚痴に付き合ってくれるのならありがたいというものだ。
「そうかな。そうだとええんやけどな」
　そう呟いて一升瓶をあおる。
『あなたはこれからどうするつもりですか』
「……はじめは、残ってる奴みんな殺して観鈴のとこに送ったろか、思たんやけどな」
『やめたんですか？』
「そんなこと、観鈴が望むわけないい。向こうにいってあの子に嫌われたくないしな。それで、次は自殺しよかと思たんやけど」
『それもやめたんですか？』
「耕一君見つけて、色々やってるうちにすっかり忘れとったわ。……まあ、死んで観鈴と同じ所にいけるならええんやけど。自殺すると地獄に落ちるとかいうしなー。それが一番心配や」

晴子は苦笑する。
『生きていくつもりは、ないんですか』
「生きていく、か。どうやろな。観鈴はうちの全てやった。あの子を失って生きる意味も——ああ。脱出したい連中がたくさんいるんやったら、手伝ったるのもいいかもしれんな。観鈴もきっと喜ぶし、死んでも神さんが天国へ行かせてくれるかもしれへん」
苦笑いのまま、晴子はそう続ける。
「さっきの耕一君は——」
そのとき。突然スピーカーがガリガリと音をがなりたて、やがて呼びかけが始まった。
「……」
放送は、脱出への誘いだった。
今となっては殺しあおうとする者も大分少なくなっているという事だろうか。
だが、それはいい。それは今の晴子にとって些細な問題に過ぎない。

あの少年。
観鈴が死んだ、いや死んだと思っていたあの爆発。それに巻き込まれたはずのあの黒い少年が、生きている。ならば。
「観鈴……！」
生きているかもしれない。いや、きっと生きている。観鈴が、生きているのだ……！
「今度は間違えんで。観鈴……一緒に、こんな馬鹿げた島からはオサラバするんや！」
晴子は慌しく立ちあがると、急いで部屋から出ようとして——ふと気付いたように立ち止まり、振り返る。
視線の先には、シュンの亡骸。
「……おおきに、な」
そして、部屋を出た。

741　斜陽——なんだか、ショックを受けてるみたいだけど——

「月代ーっ！　何があったのだ!?　少年ーっ!!」
叫びながら走る蝉丸。
蝉丸が学校に向けて歩き出してから間もなく聞こえてきた、あの声。
己の耳に届くはずのない、あの悲痛な声。
(何故聞こえてきた？　いや、何があったというんだ!?　月代、月代ッッッ)
蝉丸が元来た道を走り出すのに、時間はかからなかった。
消防団の詰め所は目指さず、声の聞こえた方向、つまり北西に向けて進路を取った。市街地の外れと、その南に広がる森林の狭間を蝉丸は走った。
かつての戦場でも、これほどの全力疾走はなかったであろう必死さで駆ける蝉丸。
(月代、月代、月代っ)
未だはっきりとした形を持たぬ焦燥感に襲われながら、蝉丸は声が聞こえたと思える地点にたどり着いた。
「月代っ、何があったっ！　何処にいるんだ二人ともッ!!」
叫べども、返事はない。
「まさか、二人とも、放送を聞きつけた奴に殺されてしまったのでは……？」
何か手がかりはないものかと、蝉丸は速度を緩めて辺りを見て回る。
(俺は……いい気になっていたんじゃないのか？年下の者達に囲まれて、一団の中心人物気取りで。仕舞いにはあんな、殺人者を挑発するような言葉まで発して……。その結果で月代と、少年の命を失ったのだとしたら……)
「俺は何という愚者なのだ！」
叫び、立ちつくす蝉丸。握り締めた拳から血がにじむ。

しかし、蝉丸はそのままでいることを良しとしなかった。
何とか己の納得がいく理屈を組み立てる。
（いや待て、蝉丸。そう決めつけるな。落ち着くんだ。まだ希望は……ある。襲撃者の危険に晒された二人が、息を殺してその脅威をやり過ごしている可能性だって……）
「……だとしたら、落ち着かなければならないのは俺の方なのか？」
可能な限り周囲に気を配りつつ、小声で二人の名を呼びながら、蝉丸は再び周囲を捜索しはじめた。
「もっと、目立つところに置くべきだったかな？」
物陰に隠れたまま少年は一人ごちた。
先程まで割りと無防備だった蝉丸を見るにつけ、何度襲いかかろうという誘惑に駆られたことだろう。
しかし、気付かれずに襲いかかるには少々距離があったし、決定的瞬間を待った方が成功率は高まるだろう。
「狩りのチャンスは一度きり……。慎重にならざるを得ないね」
自らを狩人になぞらえる少年が、既に別のハンターに狙われている皮肉。神の視点を持たざる少年がその事実を知らなくとも、それは仕方のないことであった。
「ん。やっと餌に食いつきそうだ」
蝉丸は今や、仮面の破片が視界に入る位置に立っていた。間もなくそれに駆け寄り、そして次に、倒れている月代を発見するだろう。
「さて、そろそろ決めなくては……」
「これは、月代の!?」
視界に仮面を捉えた蝉丸。
その動揺は大きかったが、しかし、本人を見つけたわけではない。
蝉丸は改めて周囲に視線を投げた。

結果、うつ伏せに倒れ込んだ月代を見つけるに至り、蝉丸は慌てて駆け寄った。
「しっかりするんだ、月代！」
そう言って月代を抱き起こし、その顔を自分の方に向け直した。
「む！」
月代の顔面は綺麗なものだった。しかし、額からは血が流れ出している。
「む⁉」
地面に目をやれば、相当量の血が流れ出した形跡がありありと分かる。
「しっかりするんだ、月代。まだ何も終わっていない。全て、これから始まるんだ。これからはじめるんだ。お前と、みんなとで！」
まだ温かい月代の体を揺すって叫ぶ。
しかし、月代が言葉を返すはずはなかった。彼女は即死だったのだから。あの不思議な仮面がなければ、死に際の言葉一つ残せずに、死亡していたはずだった。
「ぐおおおぉぉぉーっ！」
それでも蝉丸は、月代の体を揺することをやめなかった。
「月代、月代、月代ッ‼　俺と結婚するのだと、言っていただろう！　さあ、目を開けるんだ月代！開けてくれ、月代……」
次第に温度を失っていく月代の体をかき抱いて、蝉丸は泣いた。
「あれは嘘だったというのか⁉　違うッ。違うだろ、月代……」
夏にしては早い夕暮れの中、月代を抱いた蝉丸の慟哭が周囲に響いた。
悲しみに囚われた蝉丸、その首筋に凶器が迫る。
それは、弾丸のような勢いで音も無く滑空する白い紙飛行機。
「う、ぐぅ！」
その身に迫る危機を、軍人ならではの感覚で察知

し、素早く身をかわそうとした蝉丸だったが、辛うじて首への直撃を免れたのみだ。
偽典から切り取られたページで作られた紙飛行機は、驚くべき速さで飛来し、その鋭さを十分に発揮して蝉丸の背に突き刺さった。
完全に月代に気を取られており、かつ仙命樹の効果が弱まっている中では、それさえも奇跡的な回避動作だった。
蝉丸は、同時に間近から聞こえてきた駆け足の音に振り返った。
「!?」
蝉丸が振り返るとそこには、今にも己に斬りかからんとする少年の姿があった。
(どういうことだ!?)
疑問はともかく、武器をかざしてそれを防ごうとする。しかし、武器をかざそうにも両手はふさがっていた。
(ならば!)
蝉丸は自ら、少年に肩を向けるようにして突っ込んだ。
少年の偽典が、蝉丸の右肩に深く切りつけられた。だが、骨がそれ以上の進行を止めたか、タックルで少年が弾かれるのが早かったか、斬撃は蝉丸の腕を切り落とすには至らなかった。
激痛に耐えながら、蝉丸は月代を抱く手を離さない。そのままに、少年と距離を取る。
少年は何事もなかったように立ち上がると、地に着いた際の埃を軽く掃った。
「何故だ。何故なんだ、少年……」
異常なほど低い声で蝉丸。
対する少年は屈託のない笑顔で言い放った。
「蝉丸さん。なんだか、ショックを受けてるみたいだけど……」
「貴様ッ!」
ギリギリの線で耐えていた蝉丸の、堪忍袋の緒が音を立てて切れた。

少年の顔に張り付いた微笑は変わらない。
(やれやれ。蝉丸さんの能力は十分に評価した上で完全な奇襲を仕掛けたつもりだったけど、それでも仕損じるとはね。しかも士気は十分ときている。でも、その代わり今の蝉丸さんは冷静さを欠いているはずだ。それにあれじゃ、右手は使いものにならない。彼の利き腕は右だったはずだけど、両利きだった可能性はあるかな？　手負いの獣を前にして、続けるべきか、続けざるべきか。……狩人としては判断に迷うところだね？)
暮れ始めた陽の光のもと、往人と芹香は走っていた。
急遽、方向を変えて走り出した蝉丸を追って。
フランクも走っていた。
誰にも気が付かれぬよう、市街地の南に広がる森林を縫うようにして。

郁未もまた、走っていた。
(放送がされた場所は本当に近くみたい。そこにまだ彼がいるのだとしたら。私が止めなくてはいけない。私が、私こそが……)
『なんだか、ショックを受けてるみたいだけど……』
やや遠くから聞こえてきた、懐かしい声と懐かしい台詞に、郁未の俊足が僅かに速度を落とす。
あまりの奇行にあきれる私に、その台詞をしれっと言ってのけた少年。悪びれたところの全くない、無邪気ともいえるあの笑顔が蘇る。
あの脱腸ウサギのぬいぐるみ。寝しなに語られた突拍子もない昔話。私の無理な注文に応えて作ってくれたひどく不格好な食卓……。それから、それから……。
非常識な隔離施設の中で、全く不条理な思考回路を持つ少年。

だが、その行動にはどこか愛嬌と温かさがあって……。
ＦＡＲＧＯでの懐かしい思い出に郁未の心が揺れる。
……けれども、と郁未は思う。
（さっき聞こえてきた女の子の悲しい声。そして今さっき聞こえた、男の人の怒声……。今、彼の手で起こされたショッキングな出来事っていうのは……）
人の死、なのだろうと郁未は悟った。しかも、自分と大して年の差も無いだろう、少女の死。
少年と別れて、どれだけの時が経ったのかは正直分からないけれど、それほど多くの時間を浪費したつもりはなかった。
しかし、その間にもう、少年は一人の少女をその手に掛けてしまったのだろう。
『私が助けてあげる』
少年に向けた約束の言葉が頭の中で空回りしていく。
発作はあれ以来まだない。今、少年の前に出ても、自我を失うことはなさそうだった。
（私が彼を助けなくてはいけない。彼を止めるのは私でなくてはならない。だって、約束したでしょう……？）
『だから、あなたを助けるわ。それが出来ないのなら、私があなたを殺してあげる』
（まだ感傷に浸れる心が残っている。約束を果たそうと動くことで心が痛む。こんな痛みが完全になくなってしまえば、躊躇なく行動が出来るのに……。こんな痛み、早くなくなってしまえばいい……）
しかし、その時こそ、郁未が神奈の完全なる影響下に収まるという瞬間でもあった。
郁未は駆けた。
惨劇の舞台へ。

郁未は駆けた。
銀髪の少年の元へ。
郁未の目的地は、もう目の前だった。

742　切り裂く閃光

林を抜け、風を抜き、階段を駆け上る。
踏み潰された雑草の悲鳴が、ほどなく鉄の硬い反響音に変わる。そこは五階建てのビルディング。まだ建設中の体裁を取った、赤い鉄骨の塔を、息も絶え絶え登っていく。フランクの濃い髭に汗が吸い込まれ、顎を伝い、そして喉から流れていく。
アイスコーヒーなど馬鹿が飲む物だ、と常々心の底では考えていたが、今なら悪くない。髭が無くては夏でも寒くてたまらないと思っていたが、剃ってみるのもいいかもしれない。
まるで関係ないことを考えながら、肺機能の抗議を無視してこの建物を選んだのは、訳がある。周囲で最も高く見晴らしが利き、壁が無いために僅かな死角をのぞいて、どこでも狙撃できるからなのだ。
三階まで上がったところで、ようやく満足のいく視界が確保できた。あの『声』の方向を聞き誤ったのでなければ、ここから見える範囲で少年は事を起こしたに違いない。
（…………!?）
少し頭を巡らすと、ライフルを構えるまでも無く、およそ百メートルの距離に標的を見つけた。
想像以上に、近い。だが少年と対峙する男が邪魔で、狙撃は困難だ。
スコープを覗く。やはり命中角度は狭い。狭すぎる上に、外せば男に当たるだろう。
いや、当てたとしても――前は意識してそれを狙ったが――。
フランクは、微動だにせず考え続ける。
……芹香たちの到着を待てば、動きがあるかもし

れない。
　しかし少年にやられたのか、男は既に右腕から派手に血を流し、左手に銃を構えている。
　……一発外して、無理矢理動かしてみるか？
　いや、履き違えるな。あの男を救う事が目的ではない。少年を殺すことこそが、最重要だ。大局的には、あの男を見捨てても、他の参加者を救う事になる。それでいい。
　……迷うことは、無い。
　あの男に当たろうが、外れようが同じことだ。要は少年に当たるか、当たらないか。ただ当てることだけを考えていればいい。
　意を決すると、そこからは早かった。そのまま両手をいつもの位置に据える。軽く息を吸い、少しだけ吐く。吸気を肺に幾らか残したまま、息を止めて微調整。風を感じながら、軌道をイメージする。
　ぴたり、と動きを止めて一秒ののち。

　フランクは、引き金を絞った。

　無人の街、偽りの建物の間を少女が駆けて行く。時々痛みに怯みながらも、かなりの速さで移動していた。脚を引き摺りながら、郁未は走る。声が近い。大きなホールの脇を抜け、その角を曲がったあたりに少年は居るだろう、そう予測して窓を覗き込む。
（……いた！）
　しかし方向も距離も、予想外だった。ホールのちょうど反対側。部屋を挟んで、窓の向こう。
　少年は、いつもと変わらぬ笑みを浮かべて立っていた。誰に話しかけているのかは判らない。
　声が近く感じたのは、ホールの共鳴のせい。少女の姿はなく、既に倒れているのならば、窓枠より下にいるのだろう。
『何故だ！　彼女が、月代が！　一体何をしたというのだ！』
『……何を、と僕に聞くのかい？』

（ん、もう！）
　情況がまるで判らない上に、思ったよりも遠い。
苛立たしさに地団駄を踏みたくなるが、今はそれどころではない。
　ただ、走る。そのまま直進し、角を曲がる。数十メートルを駆け抜けて、再び角を曲がれば、少年と正対するだろう。
　そう考えを纏めたところで、心臓が悲鳴をあげる。それは運動による身体的欲求なのか、心にかかる精神的重圧によるものなのか。
『そうだね、何もしてないんじゃないかな？』
『き……貴様っ！』
『強いていえば、あなたという実力者の行動を妨げた、というところかな』
　……相変わらず、耳に痛いことを平気で口にする。きっと、あの微笑を浮かべたままだろう。あの笑顔を思い出すだけで、脚の痛みがぶり返す。郁未は顔をしかめて、痛覚を抑えた。減速しようとする脚を、意志の力で鞭打ち、更に駆ける。
　ようやく角を曲がった、その瞬間。
右から、左へ。
　一筋の閃光が、郁未の目の前を切り裂いていった。
　紙切れを一枚持って、少年は遠くを見るような目つきで口を開いた。発する言葉は、自分を語るものでありながら他人事のような、奇妙な台詞。
「僕という少年は、死力を尽くして戦いました。その間、あなた達は何をしていたのかな？」
「くっ……」
　もちろん、蝉丸とて遊んでいたわけではない。主催者側の老人と拳を交え、少女のような機械を相手に、危うく命を落としそうにさえなった。しかし仲間を集めることを第一に考え、安全性を優先したのも事実だ。
（だからと言って、何故。何故、今になって……!?）

月代を失った怒りと、少年の豹変ぶりに、蝉丸は混乱したまま何も言い出せなかった。

一瞬の、無音。
それを待っていたかのように。

閃光が、貫いた。

郁未は光の筋を追って、しかし当然ながら遥かに遅れて、視線を左に流した。五十メートルほど向こうで、少年と男が同時に吹き飛ぶ。二人の間に少女が倒れている。
何があったのか、まるで判らない。あまりの異常事態に、郁未の行動も思考も凍りついていた。倒れた二人のほうへ駆け寄ろうとしたが、思い直して足を止める。
少年がうめき、転がっているのが見えたからだ。
もう一人の男は、そのまま。しかし少なくとも、少年は生きている。そんな最低限の余裕を得て、郁未は反射的に振り向いた。あの閃光が生まれた、呪いの発信源を認識するために。

少年と、自分を結ぶ線の延長上。
そこに、あの時の髭の男が居た。

「あいつ……！」
——思えば、あの状態にそっくりだ。一発の銃声が聞こえ、やはり少年が倒れ、同時にもう一人が倒れる。そして髭の男がいた。
全く、同じだった。頭に血が上り、殺意がみなぎる。
「……許せない！」
再び素早く振り返ると、少年がゆらりと立ち上がり、物陰に隠れたのが見える。狙撃されたという事実と、その方向を正しく認識しているようだ。
そこまで確認してから、郁未は髭の男に視線を移

した。男はビルを降りようとしている。耳を澄ませば、鉄筋の音が聞こえる。少年が死角に入ったため、狙撃位置を変えようとしているのだろう。
あの男に、少年を殺させるわけにはいかない。
ショットガンを手に、殺意を胸に――全ての引き金を引いたのは、あの男ではないだろうか。そんな確信を抱いて――郁未は駆け出していた。

銃弾の主から発せられる殺意は、恐ろしく高度に隠蔽されていたのか。それとも少年と蝉丸が、互いに意識を向け合わせていたためか。この狙撃を、二人は全く予測することができなかった。
さらに蝉丸にとってのみ言えば、殺意の対象ですらなかったのだから、少年以上に感知できなかっただろう。
（なるほど、さっきのは……こういう事だったのだね）
少年は左肩の激痛に怯みながら、どうにか狙撃手の射線から身を隠した。骨が砕けたかもしれないな、と考えながら蝉丸を見る。
蝉丸は倒れたまま、ずるずると少年の所に近付いて来ている。その鈍い移動に合わせて、帯状の血痕が地面を塗りつぶしていく。
「……聞こえているかい？」
少年は荒い息のまま壁に身を任せて、なんとか声を出し、尋ねた。
「ぐ……」
蝉丸の意識はあるのだろうか。うつ伏せのまま胸を抑え、片肘で這っていた。
偽典の恩恵を得ている少年でさえ、かなりの痛みに耐えている。防御のないまま、ほぼ同等の運動エネルギーを反射された蝉丸が、ただで済むはずはない。ライフル弾がどこか重要な血管や内臓に命中したのだろう。出血は酷く、長くはないかもしれない。
「……つまらない愚痴をこぼしてしまって、済まなかったね。だけど、もっと早くに全ての決着がつい

ていれば……」
そう言って右腕を上げる。手には偽典の一ページ。
「僕もこんな事はしていなかった、と思うんだよ」
腕を、振り降ろす。
そして紙片は、吸い込まれるように。
蝉丸の首をかすめて地面にすとん、と突き立った。

……最期にひゅう、と耳障りな音がした。

蝉丸は、何かを話そうとしたのかもしれない。だが首から抜け出る空気の音は、既に言葉ではなく。人には意味の聞き取れない、風の音だった。
振り降ろした腕を前方に向けたまま、少年は斃れた蝉丸の姿をじっと眺めていた。
「――なるほど。僕を見て、こちらへ来ていたわけでは、無かったのだね――」
少年は目を閉じてそう呟くと、蝉丸の銃を拾い、よろめきながら街の暗がりへ身を隠した。戦いは、まだ終わらないのだ。

「急げよ、芹香！」
銃声に反応し、往人は更に速度を上げた。恐ろしい速さで駆けて行く彼を追うには、芹香の脚は遅すぎたのだ。事ここに至っては、彼女に合わせて走り続けるわけにはいかない。
「俺は先に行く！」
そう言い残し、全速で駆け出す。速度を上げ、そのまま角を曲がった瞬間。何かをパキンと踏み潰し、驚いて立ち止まる。
「……なんだ、こりゃ？」
踏み潰した物体は、おどけたような仮面の破片だった。
拍子抜けして、ふと視線を流したところに――それは、あった。

併走を振り切られたのが僅かの時間であったにもかかわらず、大きく引き離されてしまった芹香は、大慌てで角を曲がった。
「待ってよ往人……きゃっ!?　何よ、いきなり立ち止まるんじゃ——」
　曲がってすぐのところに、往人が立ち尽くしている。そしてただ呆然と、地面にある何かを見ている。
　そこには手を重ねて眠る、二つの死体があった。
　そして背後に光る、二つの瞳の存在に、二人は気が付いていなかった。

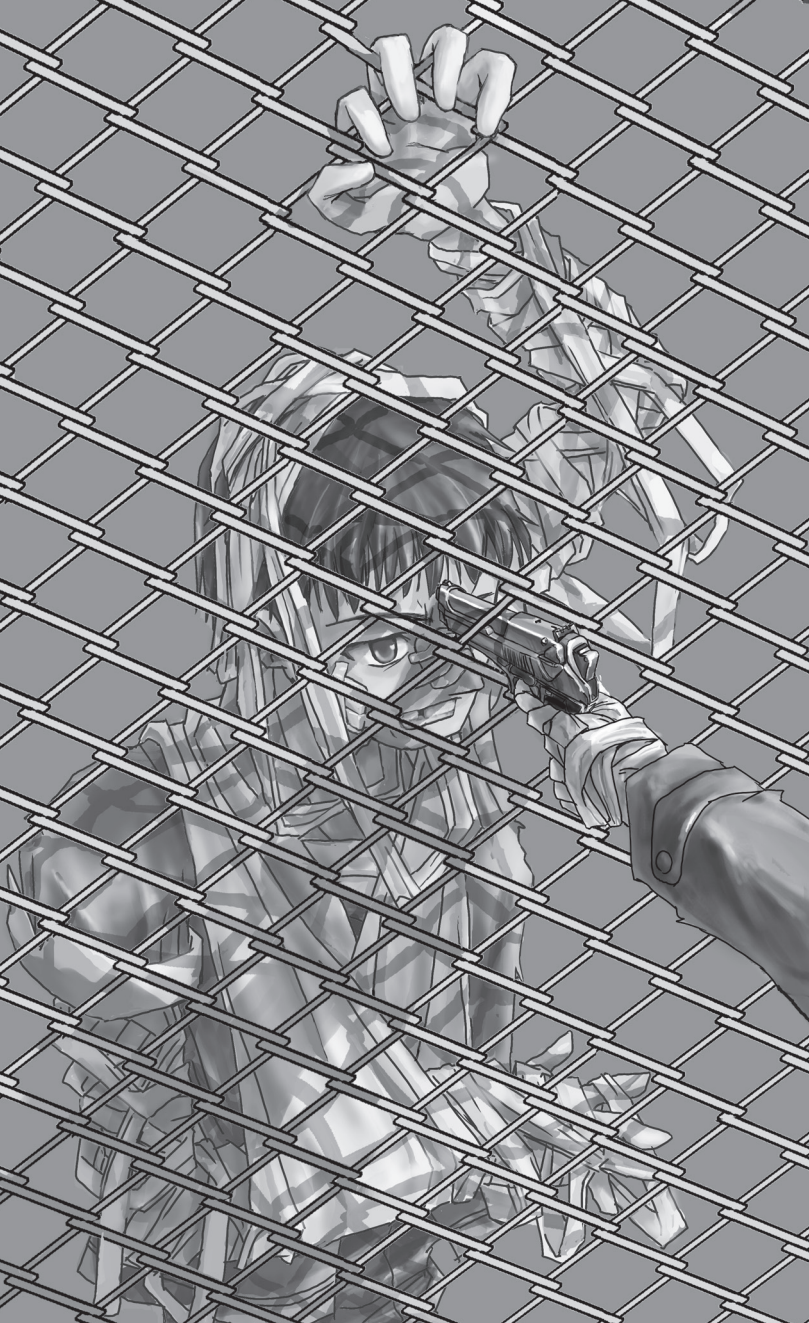
四十番　坂神蝉丸　死亡
【残り20人】

743　やわらかな傷跡

　互いの歩み寄る音で風が少しだけ揺れた。それが二人の、二度目の対峙の始まりとなる。草の踏み潰れる音までが耳に届く。それ程に、何も聞こえない。石が転がる音もする。風が頬を切り裂くかのように鋭い音を立てる。後は何も聞こえない。
　何も聞こえない。
　——そこで当然のような顔をして待っていた七瀬彰を見ても、柏木耕一はまるで驚くことはなかった。何も言わず二人は近づいてゆく。十メートル、九メートル。
　そして、手が届くような距離に至る。
　耕一は、がしゃり、と音を立てて金網を掴む。目の前の彰がそうしているように。その彰は、耕一の顔を見ると少し気まずそうな顔をして——だが、すぐに微笑った。耕一は笑い返さなかった。金網越しに、二人は対峙する。手が届くような距離にいるのに、それでも届かない場所に対峙する。耕一に与えられた使命は、この金網を打ち破り、彰との距離を詰めきること。けして簡単なものではない。

やがて「生きていたんだな」という無粋な台詞で彰は沈黙を破り、金網の向こうで笑った。その一方「ああ」と溜息のような言葉で耕一は返す。笑う事こそ出来なかったが、穏やかな口調でそう返せた。
「誤解で殺されるのなんて、まっぴらだからな」
そう冗談めかして言うと耕一の心に多少の余裕が出来る。思わず笑みが漏れていた。それを見た彰は、金網の向こうで怪訝そうな顔をしている。そして次の彰の動作は簡潔だった。「僕を殺しに来たくせに何故笑っている」と言いながら拳銃を構えたのだ。
「お前は何も判っていない」と彰は呟いた。
「僕は引こうと思えばすぐにこの引き金を引ける」
少し不愉快そうに、彰は耕一を睨む。人差し指は引き金にかかったまま、だが、凍ったかのように動かない。「お前も何も判ってない」、彰は繰り返す。
しかし耕一は目の前の銃口にも彰の脅し文句にもまるで動揺する様子を見せず、まだ笑っている。
「何がおかしい」
「なあ、彰？　わざわざここで俺を待っていてくれたのは、何でだ？」
耕一の問いかけに彰は答えない。数秒、迷うような表情を見せた後で彰はやっと吐き捨てる。
「――お前を、ここで殺す為だよ」
歯軋りが聞こえた。彰は不愉快な表情をし、力任せにその銃口を、耕一の額に抉るようにおし付ける。銃口の長さ、わずか十数センチの分しか与えられていない命の猶予にも関わらず、耕一は、その笑みを崩さずに言った。
「銃を下ろせよ、彰」
びくりと彰は震えた。果たしてそれが畏怖による震えだったのか、それともまったく別の種類のものから来たものだったのかは判らない。しかし、完全に臆した訳でもない。彰はそれでも銃を下ろそうとしなかったし、その震えも一瞬で止まっていた。
「下ろせ」
もう一度、耕一は言った。その笑顔を崩さずに言

う様子は、余裕があるというよりは、狂気の沙汰にしか見えない。命を放り出しているようにしか見えないのだ。その狂気に彰は確かに怯えている。それでも彰は銃口を下ろさない。不愉快そうな表情を隠さず、吐き捨てるように言う、
「お前を殺さなくちゃさ、僕は駄目になるんだよ」
小さく息を吐いて、耕一はもう一度言った。今度は笑わなかった。ただ射抜くような視線で、彰の手の先を見つめている。まるで魅入っているような、そんな眼差しだった。
「銃を、下ろせ」
——何かの放送が聞こえてきている。多分坂神蝉丸の声だった。だが、そんなものは今の自分達にとって、どれだけの意味もない。何も聞こえない。聞こえるのは風の音と、木々のざわめく声だけだった。
彰は、小さく溜息を吐くと、
「——判っている」
と呟き、その構えた銃を下ろした。

激昂に任せて引き金を引くなどというつもりは元々無かったのだろう。あまりに超然とした様子の自分が、ひどく不愉快に感じられただけだったのだと思う。銃を下ろした彰を見て耕一はまたも笑う。彰はやっぱり不愉快そうな顔をしたが、それは我慢したようだった。
金網越しに、二人は改めて対峙する。
僕は。七瀬彰は。どうしてここに来たのだろうか。ただ呆然と、耕一が倒れている筈だった方へ向かっていたのは自分でも判っていた。町の端、人の影のない、風と森と金網だけの場所に。初音達がこちらに来る気配は無かった。きっと見当違いの方向を捜しているだろう。
どうして僕はここに来たのだろうか。耕一と二人きりになりたかったから？　それも理由の一つだろう。というよりは、理由の側面の一つだ。
僕がここに来た理由は。

——決まっている。耕一と、戦うためだ。
包帯をぐるぐる巻きにした耕一は見ていて痛々しい程だった。今も少し観察していたが、左腕を動かす様子は殆ど見受けられなかった。動くことは動くのかもしれないが、無理はさせられないということだろう。そして耕一は右肩に鞄を背負っている。先は持っていなかった筈の鞄だ。あの中に武器が入っているのかもしれない。
とにかく、耕一はボロボロだった。紛れもなく自分がやったことで、自分が柏木耕一という男に勝利したことを示す傷跡だ。
しかし、今の耕一にとってそのような傷跡は大した問題ではないようにも、彰には思えた。
耕一の目は、先程、自分に打ちのめされた時のものとは、まるで違った。決意と勇気に充ち満ちた、強い目だった。

自分の内側の一番黒いところから声が聞こえてくる。その声がずっと僕に語り掛ける嫌な言葉。その言葉がひどく嫌に聞こえるのは、その言葉が、耐えられない程の誘惑が秘められている、甘美な誘いだったからだった。
堕落させるためには、壊せば良い。
大切なものを一つ、壊せば良い。
僕は。
僕の眼前にある、決意と勇気に充ち満ちた目が、ひどく鬱陶しかった。
柏木耕一の何を壊そうかと思った。

結局僕が殺しきれなかった耕一。あの時、どうして殺しきれなかったか、その理由は判っていた。僕が完全に甘さを捨てきることが出来なかったからだ。
甘さは捨てようと思う。僕は、今度こそ柏木耕一を殺し切る。今度こそ、全てをかなぐり捨てて、僕はあいつを殺す。

彼を殺す事が出来たなら、今度こそ、僕は本当に

落下していける。
　しかし。僕は小さな矛盾に気づく。先ほど、耕一の声になど惑わされずに引き金を引けば、それですべてが終わりになっていた筈だ。満身創痍の耕一に、弾丸をかわす術も、それ以上の傷に耐えられる肉体もないことは判っていたのに。殺すためにここに来たのに、何故僕はさっき殺さなかったのだろうか。
　実のところ、その理由は半ば判っていた。あそこで引き金を引いて耕一を殺しても、僕は落ち切れなかっただろう。僕は、すべてをなくした事にはならなかっただろう。
「——で、耕一。お前はここに何しに来たんだよ？　僕にさっきぼろぼろにやられた事も忘れて、性懲りも無く、殺されに来たのかよ」
　挑発するように、僕は言った。微動だにせず見詰め合う時間に、多少なりの窮屈を感じたからだった。
「その鞄の中に武器でも入ってるんだろうけど、お前が鞄に手を伸ばした瞬間に、僕はこの拳銃でお前を撃つ。この距離なら、絶対に外さないよ」
　だが、そんな脅しの言葉を聞いても、耕一は肩を竦めて笑うばかりだった。そして向き直ると、耕一は意味のわからない言葉を呟いた。
「そんなつもりはないよ。——俺は、お前を止めに来たんだから」
　僕はその言葉を聞いて、思わず吹き出した。
「お前、自分の状態見て言ってるのか？　その傷、誰にやられたんだよ。——やったのは僕だろうが。止める？　殺し合わないで？　何言ってるんだよ。そんな寝言を言う暇があったら」
　吹き出したのはおかしかったからではない。呆れたからだ。どうしてこの男はそんなことを真顔で言えるのだろう。再び僕は拳銃を耕一に向け、
「僕を殺せよ。僕を止めるには、殺すしかないぜ。その前に僕がお前を殺してやるけどな」
　沈黙が訪れる。手に汗が滲み、歪んだ緊張が場を支配する。「良く判らないんだよ」。沈黙を破ったの

は耕一だったが、聞き手の僕はその言葉の意味が判らない。耕一が続けた言葉で僕は意味を理解する。
「何故、俺を殺そうとした」と、耕一は真剣な顔でそう言った。
「――お前が、泥棒だからだよ。人の大事な初音ちゃんを奪ったんだからな」
「それは誤解だ、俺はそんな事をしていない」
吐き捨てるように僕が言うと、耕一はすぐに反論の言葉を返した。眉を顰めて、何を言っているのだ、とでも言いたげに。
「俺は何もしていない。お前が外に出てる時に、怯えていた初音ちゃんを励ましてただけだ。それをお前が勝手に勘違いしたんだよ。初音ちゃんを守るのはお前の仕事で、俺の仕事じゃないことは判ってる。――誤解だと判ってくれたか？　お前も誤解なんじゃないかって実は判ってたんじゃないか？　まあともかく、それならもう戦う必要はないよな」
僕の表情が嵐の海のように揺れたのを、きっと耕一も見逃さなかったことだろう。耕一は笑っていた。
「思ったより理性的で良かった。拳銃も引いてくれたしな。――俺が初音ちゃんを奪おうとするわけがない。信じろ、俺は人のものを奪おうなんて、けして思わない」
耕一は説得するように言う。両腕を広げ、無抵抗のポーズで笑っている。僕は拳銃を下ろし、そして考えていた。耕一は何か勘違いをしている。僕がここに来た理由を勘違いしている。
僕は今、初音のことなど直接的にはどうでもいいのだ。心底に耕一を殺す為に、引いては自分が落ちていくために、ここにいる。どうして耕一を殺そうとしたか。そんな命題にはもう、意味がないのだ。
一方耕一は、僕が改心し、暴力を振るった耕一に謝るためにここに来ていたのだと――そう考えているのだろうか。だとしたら耕一は優しすぎる。そして甘ったるすぎる。
きっと耕一はこう考えているのだろうと思う。

〈まだ彰は正気だ。先程自分を殺そうとしたのだって、一種の気の迷いのようなものだ。結局自分を殺しきれなかったのがその証拠だ。彰はこっちに戻ってこれる〉

そう、多分僕はまだ、ぎりぎりのところで戻る事が出来るのだと思う。耕一は僕を許しているし、きっと初音達も許してくれるだろう。そして全員で力を合わせて大団円を迎える事も出来るのだろう。

しかしそれは、僕の意志を無視した場合の話だ。

僕の心には傷跡が増えすぎた。大切な友達を失い、好きだった人を失い、そして、数え切れないほどの多くのものを失った。そんな中で――僕はただ、落ちていきたいと願うようになった。

そして今は、落ちようと思っている。

いつからだったのだろう。

この島に来る前から、落ちていきたいと思ってずっと生きてきた事は否定しない。日々恙無く暮らしていながら、いつも『堕落したい』と思って生きてきたのだ。それでも僕は我慢することが出来る人間だった。だからこうして我慢し通して、普通の人間として生きてくることができた。

いつからだったのだろう。

この島に来て、はるかが、美咲さんが、冬弥が由綺が死んだことを知ったときに、僕は確かに嫌気がさした。どうして僕だけが生きているのだろうと思った。けれど、その時じゃない。

判っている。初音に裏切られた瞬間だ。

初音の事を抱きしめている間は、自分が死んだとしても、彼女を守りたいと思っていた。自分は自分であろうと思い続けることが出来た。その愛する人が自分に銃口を向けた瞬間。彼女が、僕に狂っているんだよ、と言った瞬間。

その瞬間に、きっと切り替わったのだろう。

初音の――愛する人の裏切りに遭った瞬間が、その機会だった。あの瞬間、僕はきっと、裏返ってし

まったのだ。
　落ちていこう、と思う。

　耕一が笑っている理由は、彼がすべてを許そうとしている事を表しているのだろう。理不尽な暴力で傷つけた事も、先程自分が彼に拳銃を向けた事も、今さっき彼に拳銃を向けていた事も。僕の目が、意外に理性的に見えた事も関係しているのだろう。初音の名前を出したときに、確かに僕の目の色は落ち着いていた。
　僕の目が、『自分のした事は悔いている、反省している。許してほしい、だからまた一緒に戦わせてくれるか？』と、そういう風にでも言っているように見えたのだろう。
「さっき、俺がここに何しに来たか、と言ったな。お前を止めに来た。そして、――お前は、止まっただろう？　拳銃を下ろしてくれたよな。これで目的は一つ達成だ。――そして、二つ目。俺は帰ってきたんだよ、護らなくちゃいけない人たちのところに。俺はもう迷わない。皆で帰るんだ。勿論、お前も一緒にな」
　耕一は僕に手を伸ばし、
　そこで僕は思いついた。
――堕落させるためには、壊せば良い。
――大切なものを一つ、壊せば良い。
　耕一を堕落させ、僕を墜落させるための言葉を。
「さあ、初音ちゃんのところに帰ろう」
　耕一もきっとこの言葉だけは許せないだろう。
「もう無理だよ、耕一」
　一瞬呆然とした耕一の顔を見つめて、僕は言ってやった。全てを壊す言葉だ。全てを終わりにする、魔法の言葉だ。はじめからこう言えば、自分と耕一の殺し合いはすぐに始められたし、そして、喪失の瞬間もすぐにやってきたのだ。すぐに思いつかなか

った自分の頭の悪さを呪いたい。
「だって僕は初音ちゃんを殺してしまったんだから」
　耕一の表情が急変するのを見て、やっと僕は笑う事が出来た。これでやっと心置きなく僕は耕一を殺せるし、耕一は——僕を殺せる。
「——彰、」
　絶望を浮かべ、しかし薄ら笑いを浮かべて、冗談だと思い込みたい、そんな表情で耕一は吐く。
「冗談なんて言うものか。——僕は、もう戻れないし、戻らないんだよ。愛する人を殺してしまった」
　——僕の心には、小さな小さな傷痕がたくさんあった。痛みも感じない、苦痛も感じない、けれど蓄積されて僕の命を削っていく傷痕。それは誰の心にもある傷痕だ。耕一にも、初音ちゃんにも、誰にでもある傷痕だ。それは僕の場合、人よりも目立たない、小さなものだった。そして、きっと誰よりも深い傷痕だった。
　僕は、呆然と立ち尽くす耕一を尻目に、すぐ横にある金網の向こう側へ出る扉に手を掛けた。僕と耕一を隔てていた脆弱な金網は用を成さなくなった。
「僕が憎いだろ、耕一。さあ、始めようぜ。——殺し合いだ」
　その瞬間、僕の短い生涯で最後の、やわらかな傷痕が一つ、音を立てて僕の心に刻まれたに違いない。

744　応用と実戦

「チッ……！」
　往人はいち早く気を取り直し、いまだ呆然としたままの芹香の腕を掴んで建物の影に転がり込むと、すぐさまアサルトライフルを構え直して通りの方を覗きこんだ。
「どっ、どういうことよ、あれは！」

ようやく気を取り直した芹香が、往人に食ってかかる。
「知るか。『あいつ』がやったんだろ」
対する往人の答えはそっけない。
芹香の方を振り向きもせず辺りを警戒している。
ただでさえ悪い目つきがますます険しい。
その真剣な様子に、思わず芹香は黙り込んだ。
(倒れていた男はさっきの蝉丸とかいう奴だった。やられたのはおそらく俺達が来る直前。なら、あいつはまだ何処かに隠れて獲物を狙っているに違いない……)
こちらの居場所も知れているのかもしれない。先ほど撃たれなかったのは幸いと言えるだろう。
往人の頬を嫌な汗が伝う。
「くそっ、ヤバイぜ……これが使えりゃな」
往人は探知機を取り出してスイッチを動かした。
だが、そこには何も映らない。ただカチカチという音だけが空しく響くだけだ。
「こんな大事な時に電池切れなんて、これだから機械は嫌いなんだよ」
そうボヤくと、足元にそれを投げ捨てる。
「あ、こら。そんな乱暴に……」
(電池……?)
そのとき、芹香はふと思い当たった。
手元の電動釘打ち機を見る。
電動。
それには当然ながらコンセントはついていない。
ならば、どうやって動いているのか。
グリップの辺りを探り、そこにあった蓋をあける。
その中の、線に繋がれた黒い箱に収まっているものは――
「……あ、乾電池」
正確には充電池であるが。
「ってことは……!」
芹香は急いで往人の投げ捨てた探知機を拾い、それを探った。

「おい、あまり音をたてるな」
後ろでなにやらゴソゴソやりだした芹香に声をかける。
「ちょっと待って。もしかしたら、探知機が使えるかも」
それを聞いて往人は思わず振り返った。
「なに？　本当か？」
「ええ……んと、＋がこっちだから……よし、はまったわ。映すわよ」
探知機を覗き込む。そこに映る光点は――
「……あれ？」

その瞬間、あたりに銃声が響き渡った。

郁未は思わず足を止める。
(今の音……さっきの場所から？　他に誰かいたの？)
誰が撃ったものかは解らない。
しかし、それが誰であろうとあいつは戦うだろう。殺そうとするだろう。
それが『今のあいつ』の全てだから。
あの髭の男は放っておくわけにはいかない。
けれど……脳裏に、重症を負ったあいつの姿が浮かぶ。
「どうすれば……」
どうすれば。
郁未は立ち尽くしていた。

745　使徒

「彰さーんっ！」
葉子は彰の姿を求め市街地を彷徨っていた。
すぐ近くから、初音とマナの声が聞こえてくる。
お互いの声の届く範囲で行動することに決めていた。
満足な武器もない三人だったから、出来れば少し

でも離れない方が望ましかった。
けれども、それでは人捜しに不向きすぎる。
苦慮の末、出されたのがこの結論だった。
しかし、依然として彰の姿は見つからない。
姿を隠しているのか、それとも見当はずれの方向を探しているのか。
それすらも見当が付かない。
（こんな悲劇が、起きてはいけないんです。なんとしても、彰さんを見つけませんと……）

ＦＡＲＧＯでは感じることのなかった、人々の喜怒哀楽。季節の変遷。
様々な事象の移り変わり。
郁未と出会えて良かった、と葉子は思った。
あの時、外の世界を知りたくて、葉子は宗団を飛び出した。
葉子はその外の世界で、郁未から感じ取った様々なものを肌で感じ取った。

なんて刺激的で、素晴らしい世界なのだろうかと、葉子は思った。無論、素晴らしいことばかりでないのも分かっていたが、それでも葉子はそう思った。
しかし、身よりもなく、無一文の人間が暮らしてゆけるほど世の中は甘くなかった。
葉子は程なくして、ＦＡＲＧＯに逆戻りする事になる。Ａクラスで唯一の生者である葉子は、宗団を脱した事を咎められることはなかった。
ただ、元の生活に戻っただけだった。
元の、窮屈で退屈な生活へ。
葉子の毎日はかつての通りに過ぎていった。
そのあまりのひどさに、外の世界のことなど知らなければ良かったと思うときもあった。
しかし、総じて葉子は郁未に感謝していたのだった。
ずっと母に縛られて宗団の教え以外に興味を持たないでいた自分を開放してくれたのは郁未だったと。

母がその価値観において葉子よりも優先した、不可視の力。
不可抗力だったとはいえ、母を自らの手で殺してしまってからというもの、葉子にとってＦＡＲＧＯ、ひいては不可視の力が唯一にして最高の価値観だった。
己のエゴが許されない。許すことが出来ない。
その呪縛を解いてくれた郁未と再会したい。
今は自由に動くことは叶わないけれど、決して諦めはしない。
郁未によって霧は払われたのだから。
彼女との邂逅で、得たものを絶対に忘れない。
そして、いずれまたＦＡＲＧＯを出て郁未と過ごすのだと、葉子は決めていたのだった。

このプログラムに郁未と自分が組み込まれると知ったとき、葉子は複雑な思いながらも郁未との再会の機会が到来したことを僅かに喜んだものだった。
しかし、未だ再会は果たされていない。
再会に逸る気持ちもあったが、その障害になるであろう高槻らの抹殺が重要事だったということもある。
それに、一時的にとは言え、行動を共にした人間を見捨てられるほど、他人に無関心にもなれなかった。
（郁未さん。あなたがこの心を下さったのですよ？　そして私はそのことをとても嬉しいことだと思っているんです。だから……。ですから、もうしばらくの間、待っていて下さいね……。そして再会がなったとき、無事に島を出ることが出来たなら、あの時のゲームを二人でやりましょう……）

その頃、晴香は七瀬と二人、灯台のような施設の奥深くに潜入していた。
『冒険を続きからはじめる』よ、と七瀬の言葉が何

処からか聞こえてくるようだった。
　行けども行けども、人の気配が無く、二人がやや気抜けした頃だった。
「ねぇ、あんた。何か嫌な感じがしない？」
　晴香が小声で問う。
「今さら怖じ気づいたって訳？」
　腰に手を当てて七瀬がやや小馬鹿にするように問い返す。
　質問に質問を返すな！　と、突っ込みたいところを晴香は堪える。
「……。違うのよ。なんかこう、すっきりしないと言うか……」
　そう言いながら、視線を中に泳がせて、適切な表現を探す晴香。
「大げさに言えば、『頭の中がざらざらする』って言うか……」
　表情を曇らせる晴香。
　しかし、七瀬はそんな晴香を笑い飛ばした。
「ここに侵入した緊張感で、ちょっとばっかり参ってるのよ。あちら側の施設って事で、随分と緊張してるのは私もそうだから」
　今度は晴香を安心させるような微笑みを見せて七瀬は付け加える。
「もうちょっとだけ、気楽に行こうよ。何かが起こる前に参ってるんじゃしょうがないからね？」
　晴香は七瀬の笑顔につられて頷く。
　そして七瀬に心配をかけぬよう、晴香は笑顔を返して言った。
「分かったわ。先を急ぎましょう」
　しかし、晴香の疑問は消えなかった。
（本当にこの感覚は杞憂に過ぎないのかしら……？）

　さらにその頃の郁未は……。
　目まぐるしく変わる状況の中で自らの取るべき行

動を決めかね、逡巡していた。

——何か奇妙な物に守られている者が一人おるの？　じゃが、今一人は少しずつ余の影響を受けつつある。

そして、もう一人じゃ。

あの時のは半ば偶然じゃったが、しかし、二人が場所を同じゅうしておったのが良かったの。

アレがどれほどに強い意志を持とうとも、さほど時をおかずに『できあがる』じゃろう。

なに、今はまだ己が意志で動いておるがよい——

746　道化

赤色灯と警戒音が充満する中。飛空艇の乗組員は緊張と焦燥を抱えて走り回る。

「長瀬老はどうした!?」

「それが、お部屋にお籠もりになられたまま、ご返事もされぬ様子で！」

「ならば捨て置け!!　もともと俺は、この話には乗りたくなかったんだ！」

「し、しかし!!」

「ええい、そんなことよりも自分の命を心配したらどうだ!!」

追いつめられた者達の怒号が響きわたる艇内。

刹那、またどこかで大きな爆音が響く。

「駄目です！　どの脱出口も火が回っていて、パラシュートが!!」

「馬鹿な！　どこか無事なところがあるはずだ！　俺はこんなところで死なん！　死んでたまるか!!」

そして、手近にあったドアを開けた瞬間。猛り狂った炎の精霊の舌が彼らを舐め回し、あとには何も残らなかった。

飛空艇は炎を身にまといながら、徐々に高度を落としている。
この飛空艇は上部にヘリウムが詰まった気嚢で浮力を得ている。いわば、飛行船の小型なものである。
安全性で言えば、飛行船が空を飛ぶ乗り物では一番である。
だが、飛行船というとヒンデンブルグ号の大惨事を思い浮かべる人もいるかもしれない。
あの事故はヘリウムの代用として水素を使っていたために引火し爆発をしたのである。
現在の飛行船は例外なく不燃のヘリウムが使われているために、あの惨事が再発することはまずありえない。
もっとも、この船は源之助の魔法と結界の影響で電気系統に狂いが生じ、監視装置や防火設備が作動しないまま火災が発生、延焼している。つまり、通常ではあり得ない事故である。
「長瀬老のご様子は!?」
「意識ありません！　それと爆発時に受けた傷で大量の失血です」
「クッ、艇内はどうなっている！」
「機関室で爆発！　第三艦橋大破！」
「機関室近辺の隔壁を閉め、防火装置を作動させろ！」
「了解！」
「無線はどうなっている！」
「だめです。発信はできますが、受信できません！」
女性オペレータの悲鳴のような報告と船長の怒声がブリッジの中を行き交っている。
「整備班から報告です。……えっ！」
「どうした!?」
「おやっさんが……、いえ、整備班長が死にました……」
「……」
「停止しなかった給油装置を手動で止めにいったそうです、それで……」

「……そうか」
この船の整備を統轄する班長を乗組員は親しみを込めて、おやっさんと呼んでいた。
寡黙な職人気質だが面倒見がよく、整備班だけでなく、すべての人に慕われていた。
そして、この船のことを一番に愛していたのは彼だったのかもしれない。この船に殉じたことはおやっさんらしい、とこの場にいる全員が思った。
「船長！　乗組員の一部に混乱が生じています！　ご指示を！」
しばしの熟考の後、船長は遂に苦渋の選択を下した。
「総員、退船！」
「はっ」
「巡視艇に打電。我、操舵不能。脱出を試みる、回収を頼む」
「了解」
船を放棄することは、それを統轄するものにとって、最大の屈辱である。
そしてなにより、おやっさんが命懸けで守ったこの船を捨てたくはなかった。
しかし、船長は乗組員の命を預かる者だ。船に拘って乗組員の死者を増やすことはできない。そうなってしまってはおやっさんにも申し訳が立たない。
「副長、君は生存者を捜して脱出してくれ」
「ですが、船長は？」
「私は、この船に残る。万が一、島にこれが落ちたら大変なことになる」
島にはまだ哀れな参加者がいる。森が多いこの島に火の固まりとなったこの船が落ちれば……。
「しかし、舵はもう……」
「まだ、方法はある。だが、もし駄目だった場合確実に死ぬんだ。おまえたちを道連れにすることはできない」
それは嘘だった。もはや、この船の墜ちる先は神にしかわからない。

船長は死ぬ気であった。彼にはもう、なにも残されてはいない。妻も子供も皆、過去に行われたプログラムで散っていた。
「そんな。私も残ります！」
オペレーターの声にブリッジクルーから次々に同意の声があがる。
そんな彼らの存在を船長は嬉しく思った。しかし、実際に出た言葉は違った。
「馬鹿者ッ！　おまえたちには、やることがある‼」
そして、そこにいるすべての者の顔を見わたす。
「長瀬老は倒れた。だから、プログラムは中止させる」
船長の言葉に一同は驚愕する。
それもそのはずだ。実際に一介の船長でしかない彼にその権限はない。
だが、『長瀬』がいなくなれば積極的にこのプログラムを進めようと思う者はいなくなる。金銭で仕事をしている者はパトロンがいなくなったことを知れば職務を放棄するだろう。
それに、本人もしくは親類をプログラムに参加させると言われて仕方なく管理者になった者も多い。
オペレータの彼女は親が残した多額の借金を返済するために仕方なく参加した。もう、自分は汚れているからと、悲しく微笑みながら。
副長は妻と子を守るために、誰にも言わず人殺しの手伝いをしている。たとえ、家族に駄目親父と罵倒されていても。
他にも多かれ少なかれ理由があって彼らは管理者となっている。その人々を糾合すれば、この馬鹿げたゲームを終わらせることが出来るかもしれない。
「わかりました」
そう言ったのは船長の右腕といえる副長だった。
「必ずや、このプログラムを終わらせます」
最も船長を尊敬している彼がそう答えれば、他の者も是非はない。駄々っ子のようにごねても時間を浪費するだけである。

「うむ、よろしく頼むぞ」
胸にこみ上げるものを堪えながら、船長は絞り出すようにそう言って再び全員の顔を見渡す。
そして、誰ともなく手を差し出して、やがてクルー全員ががっちり手を合わせて決意を固めた。
だが、
「脱出されるのは一向に構いませんが、プログラムを止められるのは」
入り口から聞こえた声が、その場にいた全員に冷水を浴びせた。
「ちと、困りますな」
その言葉と共に入ってきたのは長瀬源之助であった。
足元はふらつき、口の端から血を流し顔色は悪い。
だが、その威圧感はブリッジにいた全員を萎縮させた。
「そ、そんな……」
先ほど長瀬の様子を見に行ったクルーが青ざめた顔で呟く。
意識がなかったのは念話をしていたからだということは、さすがにわからない。
緊迫した空気の中、一人の男が腰のホルダーから拳銃を取り出す。
「だが、あなたが死ねばプログラムは終わる。いや、終わらせる！」
そう言って銃を源之助に向けたのは副長であった。
普段は見せることのない感情を露わにして。
オペレーターも銃口を振るわせながらも銃を構える。以前に人殺しの道具なんて持ちたくないと言っていたのに。
他のクルーもそれに倣う。怯えた砲列が一人の死にかけた老人に向けられる。
だが、源之助はそれらを意に介さず、無感動に眺めて軽く首を振る。
「やめ！」
そして、一人銃を取らなかった船長がなにごとか

叫んだとき、風船が破裂したような音がいくつも鳴った。
それは、

彼らが破裂した音だった。

源之助は懐から小さい機械を取り出し、それをもてあそぶ。
それは、スイッチ。付近にある小型爆弾を作動させるためのスイッチ。
結局、彼は誰も信用していなかった。ただ、利用するだけで。
自らの手駒も。
旧知の青年も。故郷から来た少女も。
源之助は愛用のパイプを取り出し、火を点ける。
『終わらせるわけにはいかないのだよ、神奈』
紫煙を吐きながらコンソールパネルに何事か命令を入力した。

【疑似人格　G．N．実行】

それは源五郎が作ったメイドロボの疑似人格の応用である。
もし、『長瀬』が全滅したとき、残りの管理者が職務を放棄しないよう、あらかじめプログラムされた指示を彼らに流す。
そして、『長瀬』たちがあたかも生きているかのように見せかけ、生者たちに戦いを強要する。
飛空艇は島の北西に着水に成功する。船長の遺志が通じたのだろうか。
だが、そのときバランスを崩し、源之助は床に倒れた。
足を痛めたのか、もはや、彼は立ち上がれなかった。
だが、それでも彼は最後の仕上げのために飛空艇

の通路を這いつくばって進んでいた。
　わずか、数十メートルだが、失った体力では何十倍もの長さに感じられる。
　多くの人々に与えた苦しみに比べれば、明らかに安易な道のりだが。
　何度も意識を失いそうになりながらも、やがて、通路が途切れ、海が見える所に着いた。

　海は変わりなく、青く。
　雲は変わりなく、白かった。
　彼がこの世界に初めて来たときと、変わりなく。

　源之助はそこら辺に落ちていた金属の破片を懐に入れた。
「道化、だな……」
　そう呟くと、長瀬源之助は海に飛び込んだ。
　そして……。
　二度と浮かんでくることはなかった。

747　幕開けは爆音と共に

　ふわり、と光が浮いてくる。
　番号で人物位置を表示するレーダーの光点を、芹香は食い入るように見つめている。往人がその後から、被さるように覗き込む。
「……あれ？」
　中央に二つの番号。033と037は往人と芹香のものだ。
　往人が暗記しているのは023と024、晴子と観鈴だけ。
（おい、あいつの番号は何番だ⁉　そもそも、あいつの名前は何ていうんだ！）
（私に聞かないでよ！　えっと、たしか……少年、だったかな？）
（はぁ⁉　そりゃ名前とは言わないぞ……）
　しかし考えるまでもなく、すぐ隣に一つの光点があった。
　……048。近すぎる。

すぐ、隣。だが姿は見えない。それは、ホールの中だからだ。往人は鋭敏に殺気を感じとり、芹香を突き飛ばす。
「あいた！　……何す……!!」
そして、銃声。
抗議をしようとした芹香の脚に、赤い液体がぱたたっと音を立て、生温かい斑点を付けていく。
芹香のいた位置に置かれた往人の腕が、真っ赤に染まっていた。
「……往人!?」
びゅう、と大きな音がした。
街の外では心地よかった風が、ビルディングに乱され、郁未の長髪を流している。銃弾がかすめた跡をなぞるように、強く激しく吹きつけていた。
（どうすれば……）
銃声を聞いて生じた一瞬の迷い。その結果、千載一遇の機会を逃してしまった。郁未が鉄骨の構造物を振り返ったときには、既にもう人影も物音も消えてしまっていた。
……つまり全ての元凶の、少なくとも一端を担うであろう、あの髭の男を見失ってしまったのだ。
小さく舌打ちをして追跡を諦めた時、ふと違った考えが浮かぶ。
髭の男の銃弾によって、少なくとも一人は倒れていた。実は髭の男と少年は組んでいて、二人で参加者を狩ることにしたのだろうか？
（ああもう、考えても、仕方がないわ！）
少年の敵であろうと味方であろうと、髭の男が危険な存在である事には変わりない。常に遠距離から狙われる恐怖を感じたまま、今は少年のところに向かうと決める。
二発目の銃声は誰のものだったのか？
現在重要なのは、それだけだ。

……多くの迷いを両手一杯に抱えて、それらを保留したまま、郁未は走った。
芹香は驚きに震える脚を、どうにか制御して立ち上がろうと、そして駆け寄り無事を確認しようとしていた。
「往人、ちょっと……!?」
しかし、往人は彼女の立ち直りを待つことなく、何の迷いも見せぬまま、ひとことも発することなく、ただ素早く行動した。フランクとの邂逅で見せた狼のような眼をして、血に染まった腕で芹香の襟首を掴むと、凄い速さでビル影に引き摺って行く。まず芹香を投げ飛ばし、続いて自分もそこへ転がり込むと、ようやく声を抑えて叫んだ。
(くそったれ、銃まで持ってやがったのか!)
(往人……)
(悪ぃが文句は安全になってからにしろ! 方向からして……あのホールの、二階か三階から撃ちやがったな)
(違う、傷! 腕は大丈夫なの!?)
(派手に血が出てるが、動く。今はそれで、じゅうぶんだろ)
そう言いながら、ホールの様子を見ようと顔を覗かせる。だが少年の姿を認める前に、往人は一人の少女を発見してしまった。
(おいおい……あいつは、小僧と一緒にいた女じゃねぇか!)
いつの間にやら接近していたのは、たしか郁未とかいう女。死体に驚くこともなく、きょろきょろと何かを探している。
郁未の視線がこちら側を向きそうになるのを感じ、往人は慌てて顔を引っ込めた。そのまま肩口を芹香に引っ張られ、往人は彼女の膝の上に後ろにごろり、と倒れ込む。
(うお、何しやがる!)
(いいから! 腕! 見せなさい!)

いつの間にか開いた鞄から、包帯を取り出して往人の腕に巻く。
(……)
柄にもなく、無言の二人であった——本来片方は、無言の人なのだが。
(こんな時に、何考えてんだか……)
照れもあって、ふい、とずらした往人の視線が、何かの視線と重なる。
(……おい……こいつは、何者だ?)
(え? ああ、小屋で荷物を分配した時に余ってた、クマ爆弾よ)
(不思議な踊りを踊ってみたり、「ぴこ」だとか「ぴっこり」だとか、奇声をあげたりはしないんだな?)
(ぴこって……あんた何言ってるの?)
冗談だ、と言いながら起き上がり、治療を終えた腕でクマ爆弾を掴む。あぐらをかいた脚の間にクマ爆弾を置いて、芹香のレーダーを見ると、003が光っている。
(そうそう、もう一人お客さんがきたようだぜ。ああ、これだ、これ)
(003……ほんとだ。それで、この人は味方なの? 敵なの?)
(どっちかと言えば敵くせぇが……いや、なんとも言えないな。あの小僧を探しているのかもしれないから、会わせてやれば判るだろ)
(どうやって、よ?)
クエスチョンマークを頭に浮かべてしかめっ面をする芹香に、にやりと笑みを投げかけて、往人はクマ爆弾を手にとった。
そっと顔を出して、郁未の位置と方向を確認する。少年の気配を感じたのだろうか、彼女はホールのほうを向いていた。
幸運に小さく頷き、背中のタイマーを操作して無造作に放り投げると、ホールのある建物の、郁未と反対側の端に落ちた。

（ちょ……何してんのよ！）
（なあに、手前の位置は知られてねぇと思っている、あの糞ったれに見せてやるのさ……得意の、人形劇をな！）
最後は半ば叫ぶように言い放って、頭を引っ込める。
耳をふさぎ、小さく縮こまる往人を見て、芹香も慌ててそれに倣う。
ドカン！
バクン！　ドドドドドン！
ガシャン！　バリバリバリン！
爆発音。続いて壁の抜ける衝撃と、天井の落ちる音。吹き飛ぶ硝子と、それが地面に降り注ぐ音。一瞬にしてホールは半壊し、今や火の手が上がっていた。
二人同時に顔を出して、様子を窺う。
（ちっ、思ったより大した事ねぇぞクマ……それでも、上手くいきゃこれで死んだだろ）
（どこが人形劇なのよ馬鹿！　もっと凄かったら私達まで吹き飛んでたわよ！）
ぺちん、と往人をはたく芹香。
（そりゃそうだがよ……あいつの相手は、正直、荷が重いんだぜ……）
……ぼやく往人の希望は、かなわなかった。
爆破したホールの反対端、郁未の立つ正面に非常階段がある。きい、と小さな音がして、三階の扉が開いたのだ。
姿を現したのは、もちろん少年。三階までは抜けなかったのだろう、見たところ大きなダメージを負っているようには見えない。
往人は歯を食いしばり、再び狼のような笑みを浮かべて、銃を手に持ち立ち上がる。
（さあ、楽しい人形劇の始まりだ）
（もう、悪趣味よ）

自分の事すら操り人形に例える住人を、ぴしゃりと芹香がたしなめた。
そしてその頃、少年と郁未は燃える炎の音だけを聞いて、静かに対峙していた。
見下ろすのは少年。
「……久しぶりだね、と言うほど時間は経っていないかな？」
見上げるのは郁未。
「……」
いつになく多弁な少年が、階段を降りてくる。
「具合はどうだい？　見たところ元気そうだね」
対する郁未は、無言のまま立ちすくむ。
「……」
郁未は、迷っていた。
私は彼を、救えるのだろうか？
私は彼を、殺せるのだろうか？
そもそも私は、生き残れるのだろうか――？
――答えが出るのは、これからだ。

748　観鈴の決断、北川の迷い

「……どうしよう……」
見る見る遠くなっていく郁未さんの背を見ながら私はつぶやいた。
ちらっと後ろを見る。
耕一さんの教えてくれた喫茶店はすぐそこだ。
まだ決まった訳じゃないけど、きっとお母さんにすぐ会える。
けど、だけど。
それでいいの？
観鈴ちん、それでいいの？
郁未さんは私に言った。
お母さんの事は大事にしないとだめって。

お母さんといられる事はとてもすばらしい事だって。
とっても優しくてそして悲しい顔でそういった。
それは正しいと思うんだけど、でも私その時気づいてしまって。
もしかしたらって思ってたけど、放送で呼ばれた天沢未夜子さんは郁未さんのお母さんだって事に、郁未さんのお母さんはこの島で死んでしまったという事に、私は気づいてしまって。
あさひちゃんの事、思い出す。
この島で出来たお友達のこと思い出す。私の前で死んでしまって、私、何もできなくて。
智子さんもお母さんも必死に戦っているのに、私突っ立っているだけで。
そんな私だから、往人さんなにも言ってくれなくて。
きっと何かのため人を殺してしまったのだろう、何かとても重いもの背負っているようなのに、私にはなにひとつ言ってくれなくて。
茜さんの時も私何もできなくて。
私、もっとしっかりしてたらあんなことにならなかったかもしれなくて。
お父さんも、あさひちゃんを守るために戦ったのに、私だけ、私だけどうしようもなくて。
お母さんの事思い出す。
「もう大丈夫や、観鈴。うちはずっと、あんたと一緒や……」
そう言ってくれたお母さんの事思い出す。
安心させてあげたい。
顔を見せてあげたい。
抱きしめて欲しい。
抱きしめてあげたい。
今すぐ、会いたい。
お母さん、お母さん、お母さんお母さんお母さんお母さんお母さん……

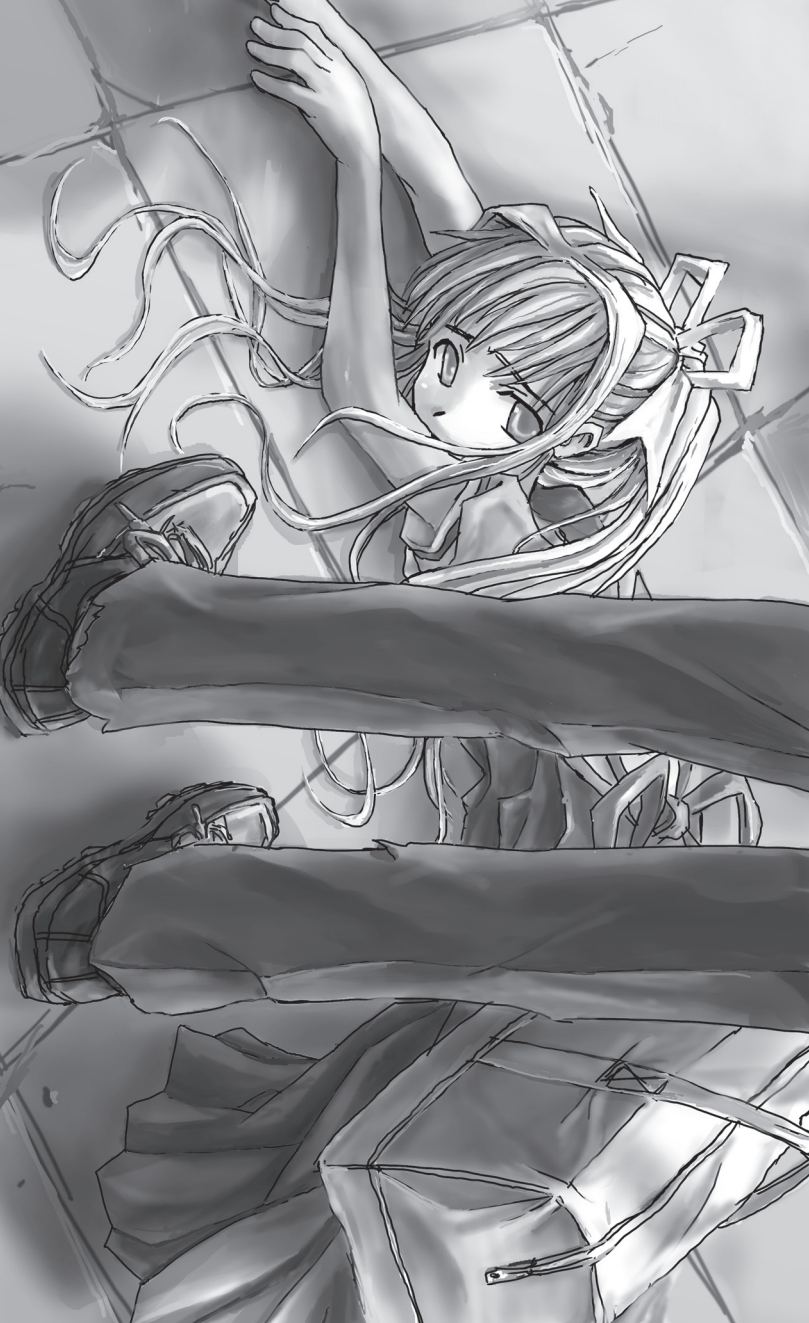
決めなくちゃならない。今、すぐに。もう、郁未さんの背中は随分小さくなってしまっている。
　このままじゃ見失っちゃう。

「ごめんなさい……！」
　喫茶店の方むいて、私叫んだ。
「今すぐ会いたい……でも、お母さんに会うと、わたし、弱くなっちゃう……!!」
　ここから、声なんて届くかなんて分からないけど、私叫んだ。
「お母さんに会ったらわたし、きっと甘えちゃう！　きっと安心して、お母さんから離れたくなくなっちゃって、もう……戦う事なんてできなくなる……!!」
　嗚咽とともに、声を嗄らして叫んだ。
「もう……いやなの……それだけは、いやなの……友達が、危ないの……あさひちゃんのときのようなの……もういやなの……だから!!」

　郁未さんが友達なんて私の一方的な思いかもしれないけど。
　私、郁未さんの方に振り向いて、
「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……!!」
　そう叫びながら走りはじめた。
「郁未さん、待って！　待ってよ!!」
　前を走る郁未さんに私必死で呼びかける。
　けれど、距離がありすぎて。私が迷ってしまった分の距離が開いてしまって。
　集中しているせいなのかもしれないけど、郁未さんちっとも気づいてくれない。
「待って、待って……」
　私、もう息がきれてしまって。
　どうしてだろう。怪我しているのに郁未さんの方が足が速い。
　このままじゃ見失っちゃうよ。
　そう思ったとたんに、わたしは転んでしまった。

「が……お……」
痛い、痛いよ。走っていて転んだだけなのにとても痛いよ。
「見失っちゃう……立たなくちゃ」
でも、そう言っている間にも、郁末さんはずっと先に言ってしまって、ついに視界から消えてしまった。
「うっぐ……うう……」
痛くて、立てなくて、私泣いてしまって。
……情けないよ……
郁末さんはあんな怪我でがんばっているのに。
情けなくて、どうしても涙が出るのを止められなくて。
郁末さんにはもう、こんな痛みすらなくなってしまっているというのに。
どうして、私は……
だから、私立ち上がろうとして、
そこで急に肩を貸してもらった。

「大丈夫かよ！　あんた⁉」
そんな言葉と共に。

ちわーす。目的のためなら仲間も見捨てるニヒルなナイスガイ、北川潤でーす。
皆さんお久しぶり！　ほんと久しぶり‼
はい？　こんなところで何してるのかって？　施設に行ったんじゃなかったのか？　ですか。
ああ、はい、行こうとはしたんだけどね。ほら放送かかったじゃん？
あの蝉丸さんて人の。
いや、直接会った事はないけどさ、一応初音ちゃん達からその名前は聞いていた訳だし、ま、診療所の事言いに行ってもいいんじゃないかとか思った訳ですよ。一応は気にしてるんだぜ？　診療所の連中、見捨てた事。
で、ちょっと回り道になるけど顔ぐらい見せに行くか、とか思っててちんたら歩いてたら。

なんか目の前でずっこけられた訳。
思いっきり全速力で頭からズシャーと。
なんかその女の子必死に立ち上がろうとしてたけど、ありゃ痛いでしょ。下コンクリートだし。
で、思わず肩を貸してしまった訳ですよ。
ん？　ああ、はいはい。そりゃごもっとも。
銃持ってる知らないやつに手を貸すなんて愚の骨頂。
いきなり撃たれても文句言えないですな。
状況分かってんのかっていわれても仕方がない。
だいたい、こんなことしている場合じゃないだろって？　まあ、そうなんですけどね。俺、なんかCDとかレアアイテム持っているらしいし。
さっさと施設にでも行けって感じだよな。そのために仲間とか見捨てちゃった訳だしさ。
それで、こんなとこで女の子に声かけるなんて、たいしたナンパ君ですよ。
ほんとに全く御説ごもっとも!!
けどさ、まああれですよ。あれって言うかなんて言うか。つまるところまああれで。
……レミィに似てるんだよ、畜生。
反則だぜ、おい。
レミィに、数時間前に死に別れた好きな子に似てる子が、苦しそうな声あげて、立ち上がろうとして。
……畜生。反則だろうが。そんなの。
「大丈夫かよ！　あんた!?」
だから、俺はそう言って手を貸してしまう。
「えっ……!?」
その子は、やっぱり驚いたみたいだな。それでも、その子はすぐ笑顔をこっちに向ける。
「う、うん、大丈夫。にはは」
その子は結構かわいい子で（レミィに似てるんだから当然だよな）、そんな子に笑いかけられたら、

普通喜ぶ所なんだろうな。
普段だったら俺も小躍りどころかランバダにリンボーダンスをはしごするぞ。
けどさ、やっぱ辛いわ。
どこか儚げな笑顔で笑う彼女は、やっぱりレミィではなくて。そんな当たり前のことに胸が痛くなる。
「そうかよ。そりゃよかったな」
そんな訳で俺はついそっけない声を出してしまう。
「うん、平気。観鈴ちん強い子」
……観鈴だと？
その名前には聞き覚えがあった。
たしか、国崎さんがそういう名前の子を探していたはずだ。
「おい、今あんたなんて……」

ターンッ

だが、そこでそういう音が鳴り響いた。銃声だ。
「……クッ!?」
俺はその子、観鈴を引っ張って身を隠そうとしたが、手を振り払われてしまう。
「わたし、行かなくちゃ」
「おい、そっちは銃声がした方だぞ!?」
軽くびっこをひいて、観鈴は行こうとする。その膝は擦り剥いて血が流れてきている。
「うん、だから、行かないとダメなの……あそこには友達がいて、管理者の人と戦おうとしていて、わたし、助けなくちゃいけなくて」
管理者って。さっきの放送に管理者側が何かやらかそうとしたのか？
「……見失ちゃったから、探さないと。ありがと、助けてくれて」
そういっているうちに、もう一発銃声。
「待てよ！　おい、ちょっと……!?」

バアアアアアウウウッッッッッッン

今度は爆発かよ⁉　何が起きてるんだ⁉　やばくないか⁉

観鈴も驚いたようだが、黒煙が上がった方へ歩いていく。

そこまではまだちょっと距離があるようだが……

どうする？　どうしたらいい？

相当あそこはヤバイ事になっているみたいだ。

そんなところにこんな女の子を一人でいかせちまっていいのか？　どう見たってこの娘、戦い慣れてなんていない。銃を持つ手もおぼつかない。

そんな女の子を行かせてしまっていいのか？

じゃあ、何か？　俺もあそこまで行けってのか。

ほとんど見ず知らずなこの娘のために修羅場に飛び込めってのか？

命はもちろん惜しい、そんなことは恥ずべき事じゃない。

命をかけることがかっこいいだなんてこれっぽっちも思えない。

でも、それだけじゃない。責任の問題もある。

何のために診療所の連中を見捨てた？

おそらく切り札であるＣＤを危険にさらす事のないように。そのためだ。

そういう理由で小学生の女の子に説得させられた。

確かに、危険な事はさけるべきだ。今俺が持っているアイテム、情報は貴重すぎる。

それなのに危険に飛び込むのか？

それとも……いっそのこと力づくで引き止めるか？

そんなことができるのか？

こんなに必死に前に行こうとしている子なのに？

それでも、この子の安全のためにはそうするべきなのか？

畜生。
畜生、畜生、畜生。
畜生畜生畜生畜生畜生。
畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生、
畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生……!!

どうすりゃいいんだよ、俺はぁっ!!

749　まだ癒えぬ傷跡

「いつまでも落ち込んでないでさ。顔を上げろよ、耕一。そうしたらその頭を撃ち抜いて、お前の人生も終わりにしてやる」
　言いながら彰は泣いていた。涙のひとつもこぼしていない。声も笑っている。けれど、どこからどう見ても七瀬彰は泣いていた。
　彰は——全てが終わってしまえばいいと思った。
　自分が死ぬか、耕一が死ぬか。どちらにしろ、この戦いが終わった時点で、七瀬彰の人間としての命は終焉を迎える。鬼畜になるか、屍骸となるか。
　どちらも自分にすごく相応しいものだと思った。
　柏木耕一は動かない。何の抵抗もしていない体で、ただ俯いて黙っている。彰は耕一の頭に拳銃を向け、
「返事しないなら頭のてっぺんをブチ抜いてやる」
と呟き、その引き金に人差し指をかけた。
　そこに至って、やっと耕一が顔を上げた。
「あきら」
　ゆっくりと顔を上げながら耕一は彰の名前を呼んだ。刹那、身体中がぞくりと震えた。魂が掴まれた、と思った。心臓の鼓動を確かめる。ちゃんと動いていることを確認すると、思わず息が漏れる。
　相手が自分を殺す事を厭わないよう、あんな言葉を吐いたのに。殺される事など怖くはない筈なのに、何故これほどに恐ろしい。二十歩ばかりは距離があるのに、喉元に刃物を当てられたような

緊迫感。
そこで彰は、耕一の異変に気づく。
耕一の頬に、一筋の真っ赤な血の筋が流れていた。
先ほど自分が与えた傷が破れて血が漏れたのかと思ったが、そうではなかった。
それは真っ赤な色をした涙だ。
耕一はゆらりとこちらを見つめ、小さく呼吸をした。その呼吸だけで彰の心は折れそうになった。
——鬼神。ソレは、とても人の姿には見えなかった。今の僕の肉体と同じで、人とは違うものなのか。いや、自分などと比べるのも烏滸がましい。目の前にいるのは、自分より遥かに高次の生物。出来損ないの自分とは違う、天然の化け物。
真っ赤な涙を流しながら自分を見るその目は、怒りと表現するべき色ではなかった。それは悲しみの色に違いなかった。大切な人を護れなかった悲しみ。大切な人を失った悲しみ。自分の無力さへの悲しみ。それがきっと、あんな表情を作っている。
——そうに違いない、と思う。
耕一の視線の先に見えるのは、自分ではなくて、「自分に殺されてしまった」初音なのだと思う。
「判った」
耕一がそう、小さく呟いたのを、彰ははっとして聞く。それは確かめるまでもなく——了承の言葉だ。
「彰、俺がお前を殺してやる」
思わず震える。なんて声だろう、と思う。あんなに小さな呟き声なのに、鉄球のように重い。人の声だとはとても思えなかった。
アレは、人の姿をした修羅だ。
きっと、自分は殺される。肉片も残らないくらい、ずたずたに引き裂かれて殺される。それ程の事を自分は言ってしまったのだ。彼にとって、初音はどうしても護らなければならないものだったのだから。

怒りではなく、純粋な悲しみで。
悲しいと言う、その理由だけで。
アレは自分を、殺し切るだろう。
恐怖で、身体全ての体温が抜け去ったように思う。
——けれど一方で、心の一番深いところに、奇妙な熱が生まれ、彰の身体に溢れている。
（——望むところだ）
恐怖とは反対の感情。どうしようもない恐怖の裏側に、自分は不思議な恍惚を覚えている。自分の身体に充足を感じる。貧弱だった自分を思い返す事すら出来ないほど、今の自分の身体は充実していた。
——肉片も残さないでくれよ。僕も、お前にもしも勝てたなら、ちゃんとばらばらにしてやるから。
乱れそうになる呼吸を抑えながら、高鳴りそうになる心臓を抑えながら、彰は薄く目を閉じ、開く。恍惚が恐怖に打ち勝った。彰は拳銃を構えた手が未だ震えているのに気づき、もう一度目を閉じて落ち着けと三回念じる。それだけで震えは消える。僕はもう昔の僕ではなくなってしまったのだと思う。
思う。
タニンと争うことなんて、僕は好きじゃなかった。けれど、そんな僕はもう——ずっと前に死んだんだ。
耕一は鞄の中から無造作に武器を出す。その手に現れたのは——ナイフだった。他にも武器があるだろうに、何故よりによって最も貧弱な武器を選ぶのだろうか。
手加減のつもりではない、と思う。
多分、今の柏木耕一にとって、これほどに適当な武器はないのかもしれない。射撃戦よりも接近戦。それが許されるだけの力が、耕一にはあるのだ。

望むところだ、と思った。近づけさせやしない。自分の射撃技術は正直たいしたものじゃない。所詮素人で、この島に来て色々銃火器を触ってきたものの、結局は付け焼刃だ。

けれど、自分は今、あの化け物に勝ちたい、と思っている。死にたいと思っている一方で、負けたくないという気持ちが強くある。

右手にその銀色の武器を強く握ると、耕一は胸がすくような声で言った。

「すぐに終わらせてやる」

彰も肩を竦めて返答する。

「こっちの台詞だよ」

それが契機となった。

破裂音。最初に攻撃をしたのは当然射撃武器を持った彰だった。耕一の足元を狙って彰は引き金を引く。練習のような射撃だった。自分の現在の腕力が、この拳銃をしっかり扱えるかどうか確かめるための練習射撃。手応えは十分だ。狙ったところに弾丸は飛んだ。十分に扱いきれる。彰は息を吐いて再び引き金を引こうとした。しかし引けない。耕一の姿が一瞬彰の視界から消えたのだ。

すぐに捕捉する。耕一は中空を舞っていた。信じられない事に、耕一は一メートル近く飛んでいる。飛んだ方向は当然自分の方に向けてで、一瞬にして間合いが詰められた。引き金を引く暇もなかった。この距離では自分が銃を撃つより耕一がナイフを振り切る方が絶対的に早い。一瞬でそう判断した彰は防御に思考を移行する。耕一のナイフは的確に自分の頚動脈を狙ってくる。力強く、そして正確な斬戟だった。その斬撃を当然彰は読んでいた。確実に戦闘不能に持ち込むならば、心臓を狙うより首元を狙ったほうがいい。彰は銃の背でその斬戟を受ける。受けきれると思った。

けれど見通しは甘すぎた。耕一の腕力のことを彰は過小評価しすぎていたのだ。防御している自分と

同じ片腕での攻撃だというのに、自分はその斬戟によって地面に押し潰されそうになる。銃を持つ手が震える。咄嗟に彰は銃を両腕で支え、腕力差を克服しようと防御に徹する。それでもまだ足りなかった。耕一の攻撃は自分の全ての力を使ってもまだ、完全に押さえきることが出来ない。

「はぁぁっっ!!」

檄。耕一が神様すらも黙るような大声で叫び声をあげ、なおも自分を圧し切ろうと力を込める。このままではやられる、思った彰は咄嗟に力を抜き、耕一の攻撃を『受け流す』ことに転じた。力を抜いて耕一の斬戟が振りかかった瞬間に彰は身を引いた。

甘かった。攻撃速度が予想を遥かに超えていた。完全にかわしたと思ったのに、耕一のナイフは自分の腕の先を微かに切り裂いていた。走る痛み。僅かな傷なのに身体が一瞬痺れた。

「くそっっ!!」

叫ぶ。叫びで痛みを誤魔化すのだ。彰は身を転がして後方に下がり、耕一との間合いを開く。すぐに詰められるだろう十歩分の距離。けれどこれでも充分だった。彰は転がりながら銃を構え、躊躇うことなく引き金を引いた。今度は当然殺すつもりでの、脳天めがけての攻撃だった。

「くらえッ!」

炸裂音。この距離なら外すことはないと思った。けれど見通しはやはり甘すぎた。耕一は反射神経のみで瞬間しゃがむと、その銃弾をかわした。なんて運動能力だ、彰は舌を巻きながら、しかし自分もまたそれに劣らずの速度で立ち上がって、今度は後方に向けて走り出した。耕一がそのしゃがんだ体勢のまま、こちらに向かって走りかかってきたからだ。距離を詰められたらおしまいだ。自分の判断が早かったためか、耕一との距離はまだ縮んでいない。攻撃するなら今しかない、彰は走りながら振り向いて銃を撃ち続ける、ガガガガンッ、四発分連射。まともに狙いをつけるには難しい体勢ながら、彰の放っ

た弾丸は的確に耕一の身体に襲い掛かった。けれども当たらない。一番かわしづらい筈の胴体に向かって襲い掛かった弾丸すら、耕一は神速のサイドステップでかわしきった。

「くっ——」

落ちつけ、クールに！　彰は口の中で呟き、自分が次に取るべき行動を模索する。この距離では何処を狙ってもかわされる。じゃあどうすればいい。決まっている。ゼロ距離射撃だ。彰は瞬間足を止め振り返り、二十歩の距離まで迫り来る耕一に銃を構え、しっかりと狙いを定めて、耕一が近寄りきったところで引き金を引いた。耕一の顔が一瞬驚愕に歪んだ。その速度で走ってきて急に止まることは無理の筈だ。この距離ならば例え化け物でもかわしきれない、頭にめがけて飛んだ銃弾が耕一を殺し切る。勝った、と思った瞬間、耕一は首を右に曲げた。

銃弾の当たった箇所は耕一の左頬だった。血が勢い良く吹き出たものの、耕一の命を取るまでにはいかなかった。彰はもう、下がることも出来なかった。耕一は吹き出た血を無造作に手の甲で拭き取る。赤く染まった頬が禍禍しい力を象徴するかのように耕一を彩る。そして耕一はまるで止まらない。

怯むことなく耕一はナイフを構え、ゼロ距離にいる自分に向けて高速でナイフを振り下ろした。彰は咄嗟に拳銃の先でナイフを受けた。ぎいん、と響く金属音。なんとか攻撃はかわした、このナイフを弾き返して引き金をひけばまだ勝機は、

考えている間に——手に抵抗がなくなっていた。そして、自分の目の前から柏木耕一が消えていた。自分の中にある全ての感覚を総動員して耕一を探す、そして、

耕一がいつの間にか自分の後ろに回りこんでいることに気づいて、背筋が冷えた。

振り向こうとしたが遅かった。その大きな手で首

を掴まれ、抵抗することも出来ない圧倒的な腕力で耕一は自分を持ち上げると、

「終わりだ、彰」

そう言って、そのまま彰の身体を勢い良く大地に圧し伏せた。軟らかな土に顔面を押し付けられる。下が軟らかな土だったから、それ程のダメージは受けなかった。ただ顔や服が汚れた程度だろう。

けれど、自分の完全な負けだということは判ったし、この状況が、自分と耕一の『最初の戦い』の状況を、配役を入れ替えて演じているようなものだということにも気づいた。彰の身体から完全に力が抜け切った。抵抗する意志は完全に折れた。

耕一は僕を仰向けにすると、その上に跨った。真っ赤に染まった柏木耕一の顔は、やはり悲しみに満ち切っていた。

これ程までに力の差があったということか。拳銃でナイフに敗れるほどに自分は弱かった。そして耕一が強かった。僕は自嘲気味に笑う。苦しい。喉が圧迫されて、声を出す事も、息をする事もままならない。ただ、その自嘲気味の目で、嘲笑めいた目で耕一を見上げることしか出来なかった。耕一の裏側には青空が見えて、皮肉なくらい晴れ切っていた。

自分はここで殺される。耕一の手によって、肉片が残らないほどに。だというのに、何故だろう。

これ程に感慨深いのは。

やっと死ねるのだ、という幸福。

僕は、その時やっと気付いた。ここに来たのは、耕一を殺すためではなく、耕一に殺してもらうためだったのだと。初めからわかっていたのだ、自分が耕一に勝てる筈もないということくらいは。そう、死にたかったのだ。耕一に殺されて、身体も心も死にきりたかった。自分が耕一をあの森の中で完全に殺し切らなかった時から。

――自分は、耕一に殺されたかった。そう思う。

そして、僕はある事実に思い至る。僕はずっと、

自分の事しか愛していないと思っていた。自分さえ幸せであればいいから耕一を殺そうとし、初音を殺そうとし、全てを壊そうとした。
けれど、それは間違いだ。
耕一を殺そうとしたり、初音を殺そうとしたり、全てを壊そうとしたりしたのは、きっと、自分自身を壊したいという衝動から始まっていたのだ。
誰よりも自分を愛していると錯覚して、本当は誰よりも、
——自分が嫌いだったのだ。
——は。よくわからないことを考えている。死ぬ間際になって、僕は何を勝手なことを考えているんだろうな。自分が大好きだから欲望のままに行動したんだろ、僕は。そっちの方がよっぽど救われる。狂人として死ぬ方がよっぽど楽だ。これだから僕は、僕が嫌いなんだ。
「さあ、殺せよ」
ひき蛙の潰れたような声で僕は言った。そこで喉にかかった力が抜ける。当然、右手にナイフを持ちかえるためだ。目がかすむ。脳味噌が揺れている。走馬灯を見ることもままならない。まあ、そんなものはちっとも見たくないけれど。ああ、
早く死にたい。
「ああ、殺してやるよ」
耕一の吐息が、頬にかかるまで近い。やがて耕一は右手を高く上げ、そのナイフを僕の喉に向けて振り下ろす、
筈だったのに。
「——どうして、殺さない」
言葉が無くなって、どれほどだったろうか。僕は、未だに死んでいない自分を見て、呆れの息を吐く。
「殺せないのかよ、意気地なしめ」
罵倒の言葉をぶつける。
「殺せよ！　憎いだろうが、僕が憎いだろうがっ‼」

「俺は、お前が、死にたがっているのが判ったから」
そんな言葉を呟いた。そうか。やっぱり見透かされていたか。これだからお前って奴は最低なんだ。
自分の真上に刃物があって、それが振り下ろされれば自分は死ぬ。耕一の右腕は動かない。なのに、時が止まったかのように結局ナイフは振り下ろされることなく、からん、と地面に落ちた。
耕一は。
僕を殺すことを拒絶した。
「なあ……僕みたいな狂人も殺せないで、どうして護りたいものを護れるというんだ？　だから護れないんだよ、大切なものをッ!!」
耕一は、僕の質問には答えなかった。
「お前は、俺を殺さなかった」
ぽたりと、僕の頬に雫が零れる。耕一の汗だろうか？　思ったが、耕一の顔を見て僕は驚愕した。透明な色をしたそれは、ぽたぽたと、耕一の瞳から零れ落ちていた。
「お前は、俺を殺さなかった」
その細められた哀しい目の先には、紛うことなく、自分だけがあった。
それじゃあ、あの血の涙は。
「だから、お前が、本当に初音ちゃんを殺したなんて思わない。絶対に思わないよ」
あくまで、僕の為に流していたというのか？
「……――殺したよ。――この銃で、初音ちゃんを殺した。心臓を撃って、一発で殺した」
「それが嘘だって事くらい、判る。俺みたいなのも殺せないで、一番大事なものを殺せるわけが無い」
僕はもう否定もせず、耕一の顔を眺めた。耕一は全てを知り切った上で僕と戦い、僕に殺されそうになりながら、こうして僕を諭している。

これだから僕は、お前みたいな奴が嫌いなんだ。
「嘘を吐いてまで、お前は死にたかったんだよな。俺に殺されて『人間』であることを止めるか、俺に殺されて『人間』として死ぬか」
耕一は突然笑顔を見せた。
「まあ、お前は俺を、殺さなかったにせよ、殺そうとしたよな。それは赦さない」
「――なら、殺せよ」
「殺すなんて死ぬほどつまらない。だから、俺は勝者としてお前に命令する。絶対に死ぬな。その手で、今も診療所で震えてる筈の、初音ちゃんを護りきれ」
「――ッ」
「それから――絶対に嘘を吐くな。初音ちゃんに新しい日常を与えると言った、あの言葉を反故にするな。絶対に俺は、それを許さない」
耕一はまた、笑った。呆然とした僕の顔が余程おかしかったのだろうと思う。笑いながら耕一は立ちあがると、黙ったままの僕の手を取り、無理やりに立たせた。
「帰るぞ、診療所に」
真っ赤に装飾された顔に、先程のような鬼神のような印象はかけらも無い。目の前にいるのは化け物でもなんでもなかった。
いや、ある意味ではこちらこそが化け物なのかもしれない、と思う。
たった今殺しあった相手に、こんな笑顔を見せて、全てを許す、と言えるような人間。まったく、化け物のように――優しい男だと、僕は思った。
そして、なんと甘い男なのだろう、とも。
「耕一。お願いだから――そんな、酷な事を言うな」
背中を向けた耕一に、僕は持っていた拳銃の先を向けた。瞬間でそれに気付いたのだろう。耕一は振

り返るが遅かった。その背中めがけて、僕は弾丸を叩きこんでいた。あっという間に向き直ったためか、弾丸は耕一の腹に当たっていた。
「うぁッ！」
　腹を抱えて耕一は倒れた。防弾装備をしている筈だから死ぬことはあるまい。だが、防弾装備をしていたといっても、すぐに立ちあがれるほどの距離からの射撃でもない。
「彰っ——」
「僕はね。嘘を吐くほうが楽な人間なんだ。何かを守ろうとして信念を通すよりも、へらへらと嘘を吐いて生きる方が楽な、最低の人間なんだ。だから、初音ちゃんの傍にはいられない。僕は、生きていちゃいけないと思う」
　僕は無理矢理に立ちあがろうとする耕一に向けて拳銃を放った。もう必要の無いものだ。自殺するには必要だが、持っていたら今度こそ人を殺すかも知れない。僕は狂人なのだから。
「お前が殺してくれないなら、僕はもう行くよ。人を殺さなくてもいいように、遠くに行く。サヨナラだね、耕一」
　そう言い残して僕は森に入っていく。耕一が何か言う声が聞こえるが関係無い。自分でも何処へ向かっているかは判らない。けれど、少なくとも死の淵のある方向へ向かっている事だけは判った。誰の手も借りず、誰も傷つけずに死ぬ事が出来る場所。
　そこを捜して、僕は歩き出した。
　耕一の言葉は、酷すぎた。酷なくらい、嬉しかった。こんな自分をまだ許してくれる、というのだから。けれど、嬉しさ以上に恐怖があった。自分の衝動が、初音や耕一、他人を傷つけるのが怖かった。
　僕はただ、誰かの傷を増やすだけの人間だ。
　誰かの傷を癒すことさえも出来ない人間だ。

　歩きながら、ふと思う。
　この島に来て生まれた新たな傷痕は、一つ、二

つ、ゆっくりと心に深く刻まれた。この島に来た誰もが、その癒えぬ傷痕を抱きながら生きて、死んでいった。
どうか。ここで出会った優しい人たちへ。僕のように弱い心じゃない、逞しく生きていく人たちへ。
まだ癒えぬ傷痕は、
それでもいつかは癒える日がやってくるのだから。
だから。だから、だから――。

750 霊山

夏の象徴たる太陽もほとんど沈みかけている。
先ほどまでの銃声も離れすぎてしまったのか、決着がついたのか、遂に聞こえなくなってしまった。
私は幾度目かの休憩をとりながら翼人についての知識を思い出していた。
『唐天竺では鳳翼と呼びならわし、異名を凰司、古き名では空真理ともいう。肌はびろうど瞳はめのう涙は金剛石。やんごとなきその姿はまさしくあまつびと』
(よくもまあ美辞麗句を並べ立てたものね)
息は落ち着いたが足の震えがとれない。山を一気に登っているので当たり前なのだが。
蝉の音に包まれながら重い足を何とか動かしながら私はさらに翼人について考えた。
人に知恵と知識をさずけた、貴ぶべき神。
かつて地上に災厄をもたらし、人により掃討された悪鬼。
翼人がそして神奈備命が何者なのかははっきり分からない。真の神であったのか悪鬼であったのか。
ただ一つ言える事がある、この山の上にいる者は好奇心と欲望にもてあそばれ、歪みきっている。
ふいに空気が変わった。重くどんよりした物に。辺りを見回すと幹に麻縄を巻かれた木がある。

そこから等間隔に、白い紙が垂らされていた。
「注連縄……結界が張られてるの？」
この程度の結界、私にはほんの少しの足止めにしかならない。さっさと一つ目の結界を越えた。
すると……。
森の様子が変わった。人が入った事の無い、原生林のようだった。
辺りを見回すと湿り気を帯びた靄、麻縄の残骸と捻じ曲がった木、そして死体。
結界は魔法の影響で外側を除いてバラバラに、そしてその中で警備していた人も。
「頑張るのよスフィー、ココからが本番なんだから」
自分自身に一喝して歩き出す、神奈の封じられた祠は近い。

751　擬似人格起動

ここはどこにでもある島。
ただ普通と違うところはそこで殺人ゲームが行われているということだけ。
そしてその島の中にある施設。
そこはマザーコンピュータが置いてある事から考えてこの島の中でも最重要拠点であろう。
これはそんな場所での出来事。
「ふみゅ～ん！　ひま～！」
「みゅ～！　みゅ～！」
「ちょっと～！　ここなんかひまつぶしになるものないの？」
「すみません～。そういうものは何も置いてないいんです～」
「つまんない。……そういえば、あんたさっきから

なにしてるの？」

「あ、はい～。千鶴さんに頼まれたＣＤの解析の続きと現在のＣＤの行方を捜索してます～」

「ふ～ん。で、それどのくらいかかりそうなの？」

「そうですね～、まだ結構かかりそうですぅ」

「う～。やっぱりひま～」

詠美はふと繭の方を見てみた。

「みゅ～♪」

「にゃ～！　にゃ、にゃ～！（しっぽを引っぱるな！　お、お前らも見てないで助けろ！）」

「ばっさ、ばっさ（いえいえ、お邪魔は致しませんよ）」

「しゃ～、しゃ～。しゃ～（そうね、その子凄く楽しそうよ。良かったわね）」

「にゃ～!!（俺は楽しくね～!!）」

「こどもはきらくでいいわね～」

詠美はため息をつくと一言そう言った。

どれくらいの時間が経っただろうか。

突然マザーコンピュータから電子音が発せられ始めた。

「な、なによ～！　ちょっとあんた！　なにしたのよ～！」

「え、え～と、私は何もしてないですぅ」

その間もマザーコンピュータから発せられる音はずっと続いていた。

突然音が止んだかと思うとマザーコンピュータの画面に

【疑似人格　Ｇ．Ｎ．起動開始】

という文字が表れた。

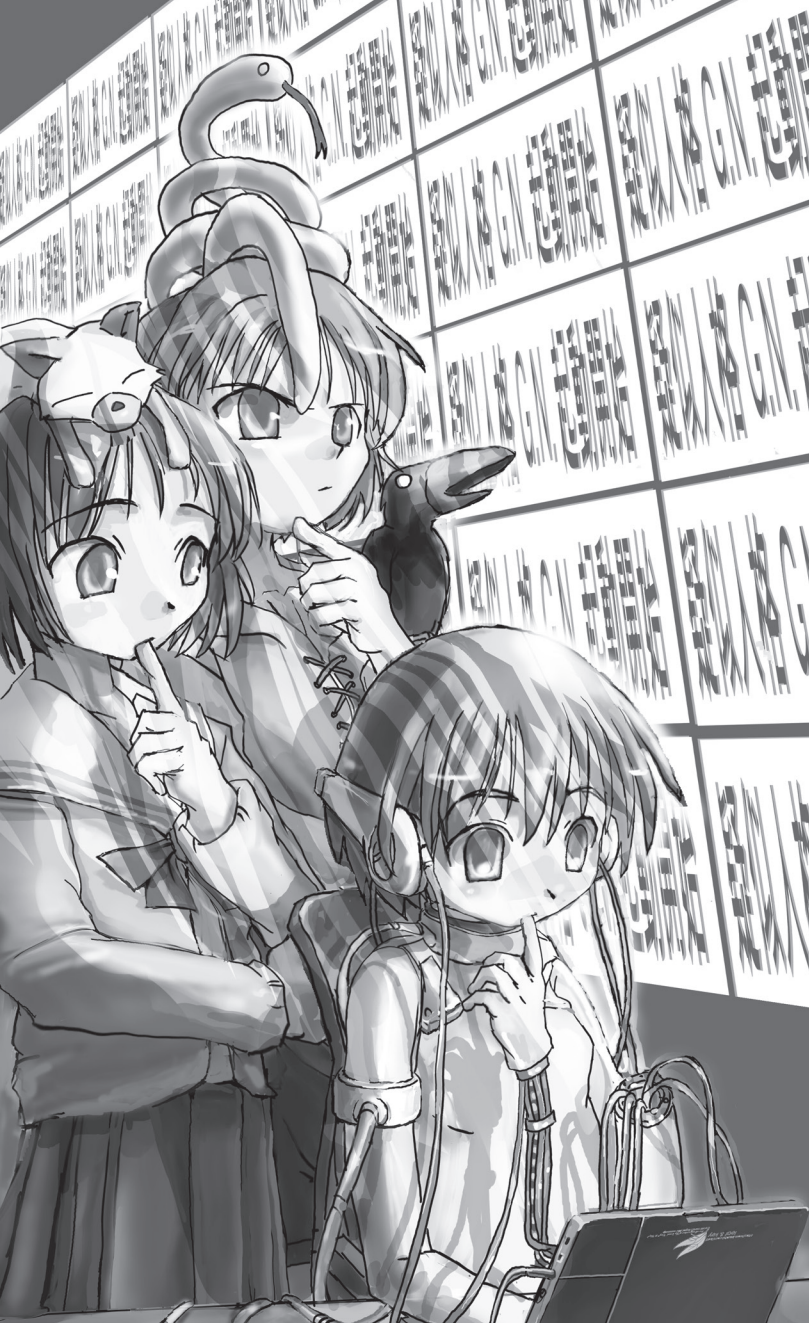
「ふみゅ～ん、どういうこと？」

「あ、あれはですね」

「ちょっと待った～！　そっから先はワシが説明しとこうか！」

「ふ、ふみゅ～！　コンピュータがしゃべった!?」

「ワシはこのコンピュータ上の疑似人格プログラム『グレート・長瀬』通称G．N．だ。よろしくな！」
「ど、どういうことよ～」
「全く理解の遅いやつだな！　要するにそこのロボットと同じようなもんだ」
「そ、そうなの？」
「はい～。私の人格プログラムと原理は同じですぅ」
「そういうこと。分かったか？　お嬢ちゃん」
「ふ、ふみゅ～！　このくい～んをばかにしないで！　ちゃんとわかったわよ～！」
「ほう、偉い偉い。ま、ワシの事は気楽にGちゃんとでも呼んでくれ」
コンピュータから発せられた声はそのままのテンション（？）で続けた。
「あ、そうそう。おい、そこのロボット。何かワシの体使ってたみたいだけど何してたんだ？」
「あ、はい～。このCDの解析と他のCDの捜索ですぅ。でもまだ終わってないんですぅ」
「そうよ！　あんた、ちょうどいいからてつだいなさいよ！」
「え～！　ワシが何でそんなことしなきゃならないんだ。めんどくさい」
「そんなこと言ってホントはできないんでしょ～」
「何だと！」
「いいわよ。むりしなくても」
「ワシの力をなめんなよ！　おい、ロボット！　終わったところまでのデータよこせ！」
「は、はい～」
「まずはCDの捜索からか。こんなもん過去ログあればすぐに分かるな。待ってな！　一分で終わらせてやる」
G．N．がそう言うやいなや部屋中のコンピュータが一斉に動き始めた。

疑似人格G.N.起動開始

752　思い出に縋る僕らのために

　鹿沼葉子はその放送を聞いて、脇目も振らずに走り出した。放送が聞こえてきた方向とは真逆の、北に広がる深い森の中へ向けて。
　柏木初音や観月マナ、その他の皆には勝手な行動を取ることを謝らなければならない。ならないけれど、今はその時間も惜しい。謝るのは帰ってからでも遅くはないだろうと信じたい。
　あの少年の声が聞こえたのだ。真っ黒で、真っ赤で、それでいて真っ白な色をした少年の声がだ。その声で葉子が連想したのは友人である天沢郁未の事だ。郁未も少年も生き残っていることは判っていて、それならばあの少年の傍に郁未がいるかもしれない、という連想は決して突飛ではないと思う。
　鹿沼葉子は。
　ずっと一人で生きてきたことを恥には思っていない。母を失ってから、誰よりも気高く生きようと決めて、孤独を孤高に換えて、生きてきた。その自分の人生は、けして他の誰にも判らない誇りに満ちていた。一生こうやって、孤高でいようと思っていた。
　それが彼女の勇気だった。
　けれど、その自分の人生の中に最初の異分子が現れた。異分子の名前は天沢郁未と言った。
　お前には無関心だ。そんな素振りをして、最初葉子は彼女を拒絶した。眩いばかりに見せる笑顔がすごく憎々しくて、無理やり傍に近づいてくるのがどうしようもなく煩雑だった。
　けれど、自分がどれだけ拒絶しても——彼女は自分に近づいて、笑顔を見せた。友達になりたいんだ。そんな風に郁未は言って。鹿沼葉子は彼女の差し出す手を、とうとう拒絶できなくなった。
　温もりを捨て、情愛を忘れ、ただ孤独であろう。

もう自分にはそんなことが無理なのだとやっと自覚する。彼女の眩い笑顔、柔らかなてのひら、
鹿沼葉子は。——熱を知ってしまった。

だから葉子は、郁未に逢いたいと思った。この島の中で展開される壊れきった世界の中で、葉子は疲れ切ってしまったのだ。自分に与えられた日常は、こうやって簡単に壊れてしまった。けれど、まだ郁未がいる。日常の残滓がある。自分に熱を教えてくれた友達がいる。そして今、自分の中には確信がある。放送を流したところに郁未がいる。

けれど、葉子の足はそちらへは動かなかった。何も疑わずにいられるほど葉子の判断能力は衰えていなかったのだ。間違いなくそこには、あの黒くて白い少年がいる筈だ。

あの時の少年の顔が、葉子の脳裏に残っているからだ。彼は既に狂っているのだと思った。あの時の笑顔が、今でも忘れられない。郁未が自分に向けた笑顔とは違う、爬虫類のような笑顔。——「人の多い場所は無いかい？」というあの質問の意義を考えて震える。今となって考えてみれば、あれは——皆殺しをする為にした質問だったのではないか。そして今の放送もまた、ミナゴロシを行う為にしたものではないだろうか。

葉子はほぼ確信と共にある考えを持っている。あの少年には、『多少』なりとは思うが、不可視の力が戻ってきている。

もし完全に力が戻っているのだとすれば、瞬きをする間にこの島は消し飛ばすことも出来るだろう。運動能力が、常人より幾分強化された程度。あくまで『すごい人間』といった程度だろう。彼程度の能力ならば、この島に今生き残っている面子でも匹敵するものはいるだろう。だがそれでも——ミナゴロシをするには充分なのだ。彼はアタリを引いている。彼は持っている。『偽典』という名の不思議な兵器を。ただの紙切れにしか見えないの

に、弾丸を弾き飛ばすだけの強度を持っていて、恐らく剣のように振り払えば人の首だって落とせるだろう。
　彼の優れた運動能力を考慮すれば。あの兵器は、それひとつだけでこの島に生き残った全ての人間を殺すことが出来る脅威を秘めていた。
　彼とともにいる筈の郁未。あの少年が狂いきっていなければ、まだ郁未は生きているだろう。けれど、いつ郁未が殺されるかも判らない。いつ彼の狂気にアテられて狂ってしまうかも判らない。
　時間はない。けれど、今の自分が身体ひとつで突っ込んだところでどうにもならないことは判るのだ。

　葉子はだから北に向けて走っている。高槻が死んでいる筈の——自分の力を極小に抑え切ったあの装置を破壊するために。目的はただひとつ。自分の運動能力を、せめてこの島に来た当初のそれに戻すためだ。今の自分は誰よりも脆弱で、何もすることが出来ない赤子と同じだ。せめて、まともに動く身体を取り戻さなければいけない。

　鹿沼葉子は。
　間違いなく天沢郁未のことが好きなのだと思う。
　自分に熱量をくれた彼女を、今度は自分が救ってやりたいのだと思う。だから自分はこうして息切れしながら走っているのだと思う。
　孤高であろうと思った。誇り高くあろうと思っていた。けれどそれはもう無理なのだ。葉子はもう、郁未の熱を、もう忘れることなど出来ないのだ。彼女が与えた熱は、今葉子の中で『思い出』として昇華され、永遠にその心に残るのだ。
　鹿沼葉子は思い出に縋って走っていた。

753　信頼関係

「私たちは……これから南東の方角に向かうことにします」
千鶴姉は唐突に言い放った。
「え？　だって、あゆは西の方に行きたいって言ってて、芹香さん達もその途中にいるはずだっただろ？」
「うぐぅ！　そうだよ、千鶴さん。おかしいよう！」
あまりにも予想と異なった千鶴姉の指示に、あたしは疑問を投げかけた。
あゆだってそうだった。
自分の意志と違う方向に赴くくらいならば、一人で駆け出しかねない勢いで声を上げている。
「それが……ごめんなさいね。私のせいで状況は変わってしまったみたいなのよ」
千鶴姉はあたしたち二人に見せるように、参加者の位置を示す装置を差し出した。
「あ、ほんとだ」
何処をどう移動したのか、芹香ともう一人のペアはさっき千鶴姉の言った方角へと随分移動してしまっている。
つまり……。
「南東に向かうことで初音達に会うことと、セイカクハンテンダケを手に入れることの、両方が達成できるってわけだ。だけど……」
あたしは視線を左に流した。千鶴姉もその視線を同じ方に流した。
当然、そこにはあゆが立っている。
「うぐぅ……。千鶴さん達がそっちにいくのなら、ボクはあっちに行くよ!?　わがままを言ってるんじゃないんだよ。本当に急いでいかないと駄目な気がするんだよっ」
あゆが西の方角を指さし、千鶴姉に必死の表情で

訴えかける。
　さっきの雨のこともあるし、あゆの勘もおいそれと放っておくわけにもいかないかもしれない。
　けれど、一つだけ分からないことがあるんだ。それは……。
「あゆちゃん、もう一度だけ聞くわ。何が間に合わないのか、教えてもらえる？」
　あたしの疑問を代弁するように千鶴姉が問う。
「そ……それはボクにもはっきりとは応えられないんだよ。でも、これは確かなことなんだよ。信じてよ、千鶴さん……」
　言いたいことを上手く言葉に表せなくて、あゆは涙目になってしまった。
　あたしは左手をあゆの肩に置き、落ち着かせようとした。
「あたしも千鶴姉も、あゆの言うことは信じてるよ。だけど、確実に出来ることが目の前にあるのなら、そっちから片付けた方が良いんじゃないかとあたしは思う。千鶴姉も……」
　そう思うだろ？　と続けるつもりだった。けれども、千鶴姉は首を横に振ったんだ。
　そして、またしてもあたしの予想外なことを言い放った。
「梓……。初音をお願いね？」
　あたしもあゆも、驚いて目を見張った。
「じゃ、じゃあ千鶴さん‼」
「お、おい、千鶴姉‼」
「梓、私はね。あの施設の中であゆちゃんと二人の時にもう一つ不思議な体験をしているのよ。施設を出るときにあゆちゃんの同行を許したのも、だからこそという部分もあるわ。それに……」
　脳裏に苦い過去をよぎらせたのか千鶴姉はそこで一度、言葉を止めた。そして僅かに表情を歪めながら続けた。
「初音と私がいま会っても、上手くいかないっていうのは梓にだって分かっているはず。だとしたら、

考えられる手は一つしかないわ」
「つまり、あたしが一人で例のキノコを手に入れて、施設の繭に食わせてやるってことなのかい、千鶴姉……？」
千鶴姉の言葉に、あゆは目を輝かせている。
自分一人の身ならばどうとでも出来る自信はあった。それに、施設にいるときに確認した限りでは、ここより西に参加者がいる形跡はなかった。
だから、あゆは千鶴姉がいる限り、まず安心だろう。
だけど。だからこそ……。
「西に何があるっていうのさ！　あゆには悪いけど、ここで別れるのには賛成できないよ‼」
あたしが叫んだことで、あゆは再び涙目になってしまった。
あゆには本当に済まないと思ったけれども、あたしは叫ばずにはいられなかった。
正直に言えば、あたしは怖かったんだ。
具体的に何が、ということがあったわけじゃなかった。
だけど、ここで別れたらまた会うことがもう出来ないような気がして。
何の根拠もないのに、あたしは怖くなってしまったんだ。
「しっかりしなさい、梓‼」
間髪入れず、あたしの左頬が千鶴姉の手ではられた。
気持ち良いくらいの音が辺りに響きわたる。
「あなたがしっかりしてくれていないと……困る。……頼りにしているのよ、梓」
「ち、千鶴姉……」
あたしはそれ以上抗議をすることが出来なかった。
日頃、憎まれ口をききあってる間柄だけど、それもお互いの信頼関係あってこそのものだ。
それをお互い分かった上で、それは口に出さないようにしている。

言わないでも分かってるからだし、気恥ずかしいからだ。
けれど千鶴姉はあえて、改めて口に出してあたしを頼りにしているのだと言ったんだ。
これ以上抗議するなんて、出来るわけがなかった。
それに、はられた左頬の熱が根拠の無い不安をどこかへ追いやってくれた。
今なら冷静に物が言えるよ。
「分かったよ、千鶴姉。あたしも千鶴姉を信じてる。初音はあたしに任せといて——あゆをよろしく」
「ええ、任せておいて」
千鶴姉が大きく頷く。
それを見てあたしはもう一度安心した。
深く深く安心することが出来た。
さすがは千鶴姉だと思った。
あたしを簡単に落ち着かせてくれる、立派な姉。
もちろん、口に出してなんか、言ってやらないけど。

あゆの頭を撫でながら、あたしは自分の気を完全に落ち着かせた。
「うん。じゃあ、善は急げだ。もともと短距離の人間だけど、別に長距離だって苦手じゃない。あたしはもう、お暇するよ」
そう言ってあたしは荷物を担ぎ、駆け出そうとした。
「梓、これをもって行きなさい」
千鶴姉があたしに声をかけ、爆弾感知型の人物探知機をかざすように見せた。
「これも併用して、出来るだけ危険な行動を避けてね。そして一刻も早く目的の物を手に入れて岩山の施設に戻ること。あたしもあゆちゃんの件が片付き次第戻るわ。それから……」
千鶴姉は万が一岩山の施設が合流場所に出来なかった場合は、施設内で見た『初音たちの居た場所』を次の集合場所とすることをあたしに告げた。
あたしは探知機を預かり、千鶴姉の話をあゆと良

く確認した上で今度こそ出発することにした。
「じゃあ、ちょっくら行ってくるから。あゆ、千鶴姉をよろしくな！」
「うぐう、任せておいてよ、梓さん。ボクだって何から何まで二人にやってもらってばかりじゃないんだよ。ボクだって、ちゃんとボクなりに……」
「うん、わかってる。あゆのことも、ちゃんと信じてるし、頼りにしてるから。……それじゃあ、二人とも。またすぐに会おうね!!」
「ええ。分かってるわ、梓」
「うぐう。梓さんも気を付けて!!」

あたしたちはこうして二手に分かれた。
正直に言えば、その時もまだあたしは二手に分かれるのが最善の策だとは思っていなかった。
けれども、千鶴姉の言うことと、あゆの要求をはねのけてまで一緒にいるべきだとも思わなかった。
だったら、あたしに出来ることは一つだ。
二人を、千鶴姉を信じて、自分は自分の最善を尽くすこと。
あたしはさっさと自分の役目を果たしてしまうべく、小走りに駆けだしていった。
太陽はさっきよりも傾き、幾分か過ごしやすくなっていた。
けれども、夕暮れにはまだ少し遠い時間帯だ。
あたしの足ならば、完全に暮れるまでには目標の人物に出会えるだろう。
セイカクハンテンダケを持つ、来栖川芹香に。

754　灯台地下にて

二人は薄暗い通路を歩く。
得物を構え、足音を忍ばせながら、点々と続く誘導灯のわずかな明かりだけを頼りに。
備え付けの懐中電灯は手に入れたが、点けてはいない。

足元が心許ないが、発見される危険を考えればまだましだ。
「それにしても、全然人がいないわね」
「油断は禁物よ」
「わかってる。ただ、おかしいなって」
今までいくつかの部屋を巡ってみたが、人がいる形跡は見当たらなかった。
「……そうね。警備の一人もいないなんて。たいして重要な施設じゃなかったのかしら」
やがて二人は『管制室』と記された部屋の前についた。
「ここなら何かありそうね」
「そうね。ちょっと待ってて。様子を見てくるから」
晴香は部屋の前まで忍び寄ると、静かに聞き耳を立てた。
人の声は無い。
建物全体を包むわずかな機械の駆動音を除けば、あとは静かなものだ。
（ここも無人？　鍵は……開いてる。とりあえず、大丈夫みたいね）
振り返って七瀬を呼ぼうと——その途端、部屋の中から声がした。
「っ!?」
とっさにドアの前から離れ、その横の壁に張り付く。
（まさか人がいたなんて。気付かれた？　にしては変化が無いけど……）
相変わらず声は聞こえてきているが、その内容までは聞き取れない。
（どこかで聞いたような声……）
「どうしたの？」
「〜〜ッ!!」
部屋のほうに全感覚を集中していた晴香は、後ろからいきなり声をかけられて思わず総毛だった。
そのまま声をひそめて怒鳴る。

「ちょ、ちょっと七瀬！　おどかさないでよ！」
「……あ……あんたこそ……なんのマネよこれはっ……！」
驚いた拍子に刀を振ってしまっていたようだ。
七瀬は目前に迫った刀の切っ先を、両手で必死に防いでいる。いわゆる真剣白刃取りである。
「あ、ごめんごめん。……えーと」
晴香は刀を下ろし、コホンと咳払いを（もちろん小声で）すると表情を引き締めた。
「中から声が聞こえるわ。どうする？」
「何事もなかったように言うか、あんたは。……で、踏み込むかどうかってこと？　数が多いなら危険よね」
飛び道具を持った集団相手では勝ち目が無い。こちらの得物は刀二本に拳銃一丁だ。
「手榴弾は……ここが最深部みたいだから、音で他の連中が寄ってくることはないと思うけど。でも、爆発で施設に影響が出たら困るわね」
「……そうね。でも他に方法も手掛かりもないわ。制圧しましょう。いい？」
七瀬が頷いたのを見て、先を続ける。
「幸いドアは内開き、鍵も開いてるから、まずドアを蹴りあける。次に敵を確認したら手榴弾を放り込む。
爆発したら私が突っ込んで残りを片付ける。これでどうかしら」
「それって晴香が危険すぎない？」
「私にはこれがあるから」
そう言ってワルサーＰ38を見せる。
「それに、どちらかといえばあんたの仕事のほうが重要なのよ」
「そうだけど……」
「あんまり長話もしてられないわ。……準備はいいわね？　いくわよッ……！」
七瀬が手榴弾の安全ピンを抜く。
チン、と音がした。

即座に晴香はドアを蹴り開け、すぐに飛び退いて突入の体勢を整える。が――
「……だれもいない……？」
拍子抜けしたように、呟く。
部屋の中に動くものの影はない。
あるのは薄ぼんやりと光を放つたくさんのモニター、そしてわけの解らない機械類。
そのうちのひとつから声が聞こえていたようだ。
「大丈夫だったみたい。やれやれね」
そういって立ち上がると、七瀬の方を向き、そして――硬直した。
七瀬も気が抜けたように肩の力を抜いていた。
……ピンの抜けた手榴弾を持ったまま。
「七瀬！　ちょっと、危ないって！　ピン！　ピン戻して！」
「……えっ？」
動揺した留美はうっかり安全ピンを離しそうになる。
（間に合わないっ……!?）
晴香はとっさに手を伸ばした。
しかし、それは届かなかった。
七瀬は手を滑らせ、安全ピンは弾けとび、死のカウントダウンが始まる。
あまりの事態に思わず立ち尽くしてしまう晴香と、現状を把握できない七瀬。
無情にも三秒の時は過ぎ――そして死神の鎌が振り下ろされた。
爆発と共に辺りに撒き散らされた破片は七瀬と晴香の体を所構わず射抜きその命を奪う。
施設は再び無人となり、そこにあるのはただ二人の乙女の亡骸のみであった。

六十九番　七瀬留美　死亡
九十二番　巳間晴香　死亡
【残り18人】

「……なんてことにならなくて良かったわね」
「あ、危ないところだったわ……」
　晴香は間一髪、七瀬の手ごと手榴弾を握り締め、爆発を防いだ。
　そしてゆっくりとピンを戻す。
「知らなかった。手榴弾って、どこかに投げつけなくても爆発するんだ……」
「今の手榴弾はみんな時限式よ。レバーを離して三秒で爆発……あんた、知らずに使おうとしてたの？」
「乙女の辞書に手榴弾の扱い方なんて文字は無いわよ、いくらなんでも」
「……そもそも、アイテムリストに説明が載ってなかった？」
「そんなの覚えてないって」
「はあ……ま、いいわ。確認しなかった私も悪いし。ただ、今度からは私に断ってからにしてね」
「うん、解ってる……」
　七瀬は思う。
　ここまで来て自爆で死ぬなんて情けなさすぎる。
　そんな理由で浩平に再会したら、あいつは腹を抱えて笑い転げるに違いない。
　それは避けたかった。
「それより、声ってなんだったの？」
　言われて晴香は思い出す。まだ声は聞こえ続けている。
　近づくと、はっきり内容まで聞きとれるようになった。
『ザザッ……り返す！　俺は全ての者を歓迎する！……』
「……蝉丸さんだわ、この声」
「どういうこと？」
　手元を見ると、〈三十八番マイク受信中〉と書かれた文字が点灯している。
「どうやら蝉丸さんが何処かで喋っているのを、この施設の耳が聞きつけたみたいね」

そして二人は、放送の内容に耳を傾けた。

755　死神と、天使と、

彼女たちは、七瀬彰を捜していた。
もう、どれぐらい前からだろうか。
彼女たちは今、町の東側にある森の中で、時間的感覚も希薄になるほど、彰を捜している。
三人を動かしているのは、後悔の念。
できるだけ広い範囲を、そしてお互いの無事を確認するために、声を張り上げながら、捜す。
殺人者と死神が大手を振って歩くこの島で、大声をあげることは誇張ではなく自殺行為。
だが、もちろん彼女たちは自殺志願者ではない。
なぜなら、それだけのリスクを負っても、捜さなくてはならない人だからだ。
「あきらさーん」
マナが叫ぶ。
「あきら、おにいちゃーん」
初音が叫ぶ。
「あきらさーん」
葉子が叫ぶ。
――島内に生き残る、全ての善意ある参加者たちよ!!　聞いているだろうか？
どこか、遠くから蝉丸の声が聞こえた。
呼びかけをすることによって、この戦いを終わらせる。
そう言って別れた蝉丸は、その言葉通りやってのけた。
彼女たちはしばしの間声をあげるのを止め、放送に聞き入る。
――現在求められているのは〝魔法使い〟だ！
心当たりのある者は、是非とも名乗り出て欲しい。
その知識と、能力に期待する！
魔法使い……

もしも、自分が魔法使いならば。
彰を簡単に見つけることができるかもしれない。
彰の所に飛んでいくことができるかもしれない。
彰の心の闇を晴らすことができるかもしれない。
そう、あり得ないことを初音は夢想する。
「あきらさーん」
遠くからマナの声が聞こえる。
初音はくだらない想像をしていたことに赤面し、あわてて同じように声をあげる。
「あきらさーん」
マナが叫ぶ。
「あきら、おにいちゃーん」
初音が叫ぶ。
違和感。
そして、二人は気が付いた。
鹿沼葉子の声がないことに。
「ようこさーん」
マナが叫ぶ。
「ようこ、おねえちゃーん」
初音が叫ぶ。
しかし、葉子の声が返ってくることはなかった。
「マナさん！」
初音がマナのもとに走ってくる。
「初音ちゃん」
マナも小走りに初音に向かって走る。
葉子の返事がない、ということは先ほどの放送の間に、彼女の身に何かがあったに他ならない。
だが、もしかしたら声が嗄れてしまい、休んでいるだけかもしれない。
そう思って、葉子の声が最後に聞こえた所に二人は向かったが、彼女の姿も、争った痕跡も見つからなかった。

二人は途方に暮れた。
彼女たちは服が汚れるのも構わず、地面に座り込む。

疲労と無力感が彼女たちを苛む。
彰は見つからない。
葉子も行方不明。
そして、なにより、耕一は死んだ。
今になって落ち着くと、その事実に体が震える。
実際にその死に様を見たわけではない。
だが、彰の言葉と、そしてなにより、浴びていた血が雄弁にそれを物語っていた。
藤井さんも、お姉ちゃんも、澤倉先輩も、先生も、きよみさんも、藤田も、長瀬さんも、天野さんも、佳乃ちゃんも。
みんな、みんな死んでいった。
そして、耕一も……。
もう、何もかもが嫌になった。
一人でも多くの人を助けたい。一人でも多くの人と島から抜け出たいと思った。
だが、それは無邪気な絵空事だった。
出会う人、出会う人、皆、死んでいく。

本当に、終わりがあるの？
すべての野が赤く染められ、白い骨の木が立ち並ぶまで続けられるの？
私が生きていても、他人を犠牲にしてぬくぬくと生き長らえているだけ。
そして、死んだ人を見て偽善的な悲しみをするだけ。
自分が生きている優越感に浸りながら。
『死んだ方がまし』そんな言葉を前に鼻でせせら笑ったことがあるけど。
確かに、あるのね。そんなことが。
自殺は根性なしの敗北者がするものだと思っていたけど……。
そうか、今の私みたいなのを指すんだ。
初音ちゃんに花を摘みに行くと言って少し離れる。
手には撃つことはないと思っていた銃。
適当に言い訳をして、初音ちゃんから借りた。
誰かが、頭を一発で撃ち抜けば痛みも感じず死ねると言っていた。

先に死んじゃうけど、初音ちゃん、ゴメンね。
でも、私が一緒にいると、初音ちゃんにも迷惑がかかると思うから。

セイフティーを外し、
こめかみに銃を押しつける。
そして、人差し指で引き金を……

ガァンッ！

えっ！
私はまだ、撃っていない。
そして、再び銃声が聞こえる。
そんなに、遠くではない。
もしかして……私は初音ちゃんの所に駆け戻る。
初音ちゃんも聞いたようだ。緊張した面もちでこちらを見る。
今度は三連発の銃声が聞こえる。
その方向を確かめて、私たちは走った。

走るにつれ、何度か銃声が聞こえる。
私たちの緊張が増す。
そして、森を抜けた所に、それはあった。
倒れ伏した一人の男。
近づくにつれ、その正体が分かってくる。
柏木耕一。
初音ちゃんの顔が泣きそうになる。いや、私も恐らく同じ顔だろう。
話に聞いていても、実際に死体を見て改めて認識させられるのとは、別だ。
もし、神がいるとしたら、なんて残酷なのだろう。
銃声をあと十秒、いや五秒遅らせてくれたら、また、こんな苦しみを味あわなくて済んだのに。
だけど、死体をこのまま放置して置くわけにはいかない。
私は運ぼうと思い、腕をつかんだ。
まだ、あたたかい……
そう思ったとき、耕一の指が少し動いた気がした。

私は腕の動脈をつかみ、そして口に耳を寄せる。
生きてる？
私は、軽く耕一の頬を叩く。
反応がない。
耕一の耳元で名前を呼ぶ。
返事はない。
まさか、と思い心臓に耳をつけてみるが防弾服が邪魔だった。
あせる気持ちを必死に抑えて、ボタンを外す。
そして、耳を胸に当てる。
命の鼓動。命の温もり。
それを感じて、自分の胸の奥が暖かくなった。
そんな気持ちの私を、誰かが頭を撫でていた。
耕一だった。
いつもは頭を撫でられるのが嫌だったが、今は不思議と不快感はない。
むしろ、心地良い。
「やあ……、マナちゃん」
耕一は絞るように、そう言った。
「バカ！　私、心配したのよ！　本当に心配したのよ！」
私は耕一の胸の中で、泣いた。
嬉しくて、いつまでも泣いた。

756　空の名前

傷つきながらも起き上がって健在を見せた柏木耕一にすがって観月マナが泣きじゃくっている。その様子を見ながら、自分の頬にも涙が伝っていた事に気付いて、わたしはゆっくり笑みを漏らした。
本当に良かった。自分は、大切な人を失わないで済む事が出来たのだ。
けれども、耕一の顔を見て安堵の息を吐いている事が出来たのも、ほんの束の間のことだった。
わたしの思考を次に襲ったのは、では耕一を撃ったのは誰か、という事だった。考えるまでもなかっ

た。耕一を襲ったのは七瀬彰だ。
　唇を噛み、目を閉じた。
　七瀬彰と柏木耕一が戦って、七瀬彰の姿はなく、柏木耕一は怪我をしながらも無事だ。彰はまたしても耕一を殺さなかった。——殺せなかった。それは彰がまだ——すべての人の心に巣食っている狂気という意味での、『鬼』に成り切っていない事を証明していた。
　彰はまだ、彰のままでいるのだ。それならばまだ、止めようがあるのかもしれない。
　わたしは、七瀬彰を止めなければならない。
　呼吸を乱しながら、耕一は顔を上げるとわたしを見て、真剣な顔でこう言った。
「——彰が、その森の奥のほうに行った。早く追わないと、手遅れになるかも、しれない。——あいつは多分、自殺するつもりだ」
　耕一は小さく呻き声を漏らしながら続ける、
「俺は、少し、休んでから行く。すぐ追いつくから、先に行ってくれ。あいつを止めることが出来るのはもう、初音ちゃんしかいないんだ」
　途切れ途切れに言葉を漏らしながら、耕一はそのままマナの身体に崩れ落ちる。
「耕一さんっ！」
　叫び声を上げるマナの上で耕一は薄く笑って言う。
「……大丈夫。ちょっと、まだ、血が、ちょっと足りてないだけだ。少し休めばすぐ治るよ。
　——初音ちゃん。彰はあっち——東のほうに向かった。俺のことは良いから、早く行ってくれ」
　そう言って耕一は、森の薄暗い闇を指差した。大丈夫そうにはとても見えなかったが、わたしに許される選択肢はひとつだけだった。耕一のことはマナに任せよう。全員が無事のハッピーエンドを迎えるためには——わたしは今すぐ駆け出して、彰を抱き止めなくてはいけないのだ。わたしはこくりと頷き、立ち上がって森の奥に向かって駆け出そうとした。
その瞬間だった。

奇妙なくらいに高い心臓の音がわたしの肉体を支配する。どくん、どくん、どくん。狂ったような心臓の鼓動。急に頭が痛くなって、視界がふらつく。感情が流れ込んでくる。

「――初音ちゃん？」

「初音ちゃん？　どうした？」

小さな身体で耕一を支えていた観月マナが、わたしの異変に気付き、怪訝な顔をして自分を覗き込んでいる。身体を起こした耕一も同じような顔をして自分を見ている。それにもまともに反応も出来ない。わたしの身体は動かない。何かの意識が流れ込んでくる感覚。わたし以外の何かがわたしの中にいる感覚。わたしじゃないわたし。混濁する記憶。哀しい記憶。わたしじゃないわたしが何かを訴えている。脳髄に響く言葉。強い、強い、感情。頭の中が揺さぶられてぐちゃぐちゃになっちゃいそう。

前にも何処かでこんな事を経験した記憶がある。そう遠くない昔、そう、この島に来てから、

ああ、そうか。

「初音ちゃんっ、どうしたの！　ねえ、」

マナちゃんがぼーっとしているわたしの肩を揺する。わたしの体がぐらぐらと揺れる。

「初音ちゃんっ、どうした、何か具合でも――」

耕一お兄ちゃんもわたしを心配して声を掛けてくれている。

ごめんね、二人とも。心配かけて。でも――

心配は要らない。

彰お兄ちゃんは、きっとあそこに向かったんだ。わたしと最初に出会った場所の、対岸。

西の海に彰はいる。

不思議な確信が、自分の脳髄に刻み込まれていく。

西だ。西に彰は向かったのだ。

耕一の言うことよりも。わたしは、この胸の中の言葉を信じようと思った。わたしはこの、自分の中で蠢く力のことを、よく知っている。もう一生起き

ることはないだろうと思っていた、別れを告げた筈のわたしの中のもうひとつの意志が、その名前だ。
リネット。
わたしはあなたの言葉を信じる。わたしの中でいつも反逆ばかりを考えていたあなたのことを、今は信じる。あなたはわたしのことを誘惑しようとするけれど、嘘だけは吐いたことがなかったものね。どうしてあなたがそんな確信を抱いているかなんてわからない。けれど、わたしは信じよう。
もしも間に合わなくてもわたしのせい。
だってわたしも、西の方に彰がいると思っている。
それは——考えている場合ではない。今は走り出さなければならない。
手遅れになる前に、大切な人を捜し出さなければならない。
「マナちゃん、耕一お兄ちゃん、もう大丈夫。それじゃあ——行くね」
そう言ってわたしは——西に向けて走り出した。

「初音ちゃん!?」
「初音ちゃん！　彰はそっちじゃないぞ、こっちの森に入っていったんだから！」
そんな声も無視して、わたしは反対方向へと駆け出した。私を止める声が後方に遠ざかっていく。
その根拠はひとつ。もし、彼が死のうとしているのなら、そして、彼にとってわたしが大切な存在だったのなら——彰お兄ちゃんは、西に居る。

僕——七瀬彰は、自分が何処へ向かっているのかも考えないまま、森の中を呆然と歩き回っていた。この森はあまりに深く、空を望む事が叶わない。ただ鬱蒼と茂る緑の葉蔦が空を覆っている。がさりと草を踏み、大地に足がついていることを確かめると、僕はやっと、自分が何処に向かっているのか考え始めた。思いついた。どうして自分が東に向かっているか。初音との出会いの場所——初音を最初に抱きしめた場所が、東の海だったのだ。朝陽を望みなが

ら、彼女を護るために戦おうと、最初に決意した場所。そこに向かっているつもりだったのだ。
初音にもう一度逢うために。
考えてみれば自分はさっき耕一と戦った時点で既に島の東寄りにいる筈だったし、それならば少し森を抜けて歩けば、目的の場所、東の海に至る事が出来る筈だった。それなのに、木々の隙間から覗ける風景に、まるで海は見えない。東の海に向かっている筈なのに、どうして。考えて、僕は息を吐く。
東に向かっても、初音に逢えないと思っているのだろうか。違う。そういう理由ではない。
——歩きながら考えて、自分が向かっている場所が何処だか判った。
自分は初音に逢って、言わなければならないことがある。僕はもう、これから生きていくつもりはないけれど、初音には、生き残って欲しい。その為に初音に言いたい言葉がある。
その言うべき言葉は。
東ではなく、西で。
陽が昇る場所ではなく、陽が落ちる場所で。
始まりの場所ではなく、終わりの場所で。
言うべき言葉なのだと僕は判っていたのだ。
眩暈がするのが判る。血はそれ程流れていないのに、身体が言うことを効かない。もし歩む事を止めれば、自分は多分二度と歩き出せないだろう。
——「これから先、生きていくつもりもない」などと言ったが、そもそも自分はすぐに死んでしまうのかもしれないな、という気もする。ともかく、生きていくには僕は駄目になりすぎた。
そして僕は森を抜けた。真っ青な美しい海と赤く焼けた空。今にも沈みかかっている陽。
僕は西の海に到達した。

わたしは市街地を全速力で抜け、西に繋がる森に入る。ここを一直線に抜けていけば、彰に逢える筈だ。初音がその確信を抱いていたのは、ただ一つの

理由。彰はこれから死のうとしている。そして死ぬ前に、自惚れでなければ、彰は自分に会いたがっている筈だ。あんな別れ方では、彰とて嫌だろう。
わたしたちの物語は東の海で始まった。
それならば、終わらせるのは西に決まっていた。
わたしは走る
身体の節々が痛む。この島でわたしはたくさんの怪我をした。だが、それでも自分はこうして生きている。自分自身で武器を持ったことなど数えるほどもない。他人を傷つけた事もない。ただ、彰を傷つけたのみだ。
それなのに、この殺し合いを強要される島で、誰も傷つけることなく、自分も死に至る傷を負うことなく、ここまで生き残っていられるのは、自分を護ってきてくれた人たちのお陰なのだ。
本当にたくさんの人と出会った。弱い自分を護ってくれた大切な人達。彼らがいなければ自分は、こうして無事にいられたかどうか。

そして、彰のことを思う。
彰との、この島での日々を思う。
茂みの裏で震えるわたしを見つけた彰お兄ちゃんは、にこりと微笑んで慰めてくれた。一人泣き出したわたしを、彰お兄ちゃんは抱きしめてくれた。体調が悪くなったわたしを、彰お兄ちゃんは必死に看病してくれた。殺されそうになりながら、彰お兄ちゃんは戦ってきた。危険に晒されたわたしを、彰お兄ちゃんは護ってくれた。そして、彰お兄ちゃんとわたしは肌を重ねた。そして、彰お兄ちゃんはわたしに優しいキスをくれた。
彰がいなかったなら。わたしは、どうなってしまっていただろう。想像をすることも出来なかった。
耕一は、彰は自殺するかもしれない、と言った。わたしにも、彰の心境の想像はついた。多分、彰はこんな事を考えているのだ。〈狂気に侵された自分が初音と共にいたならば、きっと自分は初音を傷つ

ける。傷つけるくらいなら、死んでしまったほうが良い。まだ、自分自身の理性が残っているうちに〉。
彰はとても優しい人だから。耕一を傷つけ、自分を傷つけようとした事が、どうしようもない罪に思えたのだろう。
それならば、自分がするべき事は一つだ。
傷つけても構わない、と抱きしめれば良いのだ。
傷つけても良いんだよ、と微笑めば良いのだ。
今までずっと護ってきてもらったのだ。彰がいなければ、わたしは当の昔に壊れてしまっていただろう。あの時、初めて出会ったときの彰お兄ちゃんの笑顔で、そして、今までずっと笑ってきてくれた彰お兄ちゃんの笑顔で、わたしがどれだけ救われたか、本人はわかっているのだろうか？

最短距離で森を抜けるつもりだったが、予想以上に道は困難だった。一つ勾配の急な丘を越えなければならず、相当の時間を尽くさなければならなかった。迂回していこうかとも思ったが、それにも時間がかかると思い、わたしはそこを登っていく。
身体が重くて、涙が出そうになったけれど、この丘は私と彰の前に広がる障害が形になって現れたものだと思った。これを越えれば、自分と彰の障害はなくなるのだと思った。
——太陽が傾くような時間までそこで時間を使い、わたしは乗り越えた。丘を越え、森を抜けるとそこには海が広がっていた。広がる海と、傾きかけた太陽。そこには七瀬彰が立ち尽くしていた。

わたしは夕暮れの海が好きだった。何処までも行けるような圧倒的な広さがあって、何よりも、その赤色がまるで別世界のように綺麗だったからだ。
この美しい空を飛ぶための翼は要らない。わたしはただ——この空の名前を考えながら、誰かと手を繋いでいたかっただけなのだから。
自分の目の前にいる彰も、同じであると信じたい。

757　禊

　階段を隔てて、天沢郁未と少年は対峙する。
「具合は、どうだい？　見たところ元気そうだね」
その少年の声に、だが、郁未は無言しか返さない。
「なんだろう、無愛想だね」
少年はヒョイと肩をすくめる。
「とにかくあがってきなよ。そこは狙撃される心配がある」
　確かにそれはそうね、と郁未は思った。
私は彼を、救うのか。
私は彼を、殺すのか。
どちらにせよあの髭面の男に邪魔をされたくはない。
　だから、郁未は既に手にしていた発煙筒と煙球（椎名繭のバックの中にあった花火セットのものだ）に火をつけて、そこらへんに放り投げた。
　無論、ベネリショットガンは構えたままだ。
たちまち、ホールに煙が充満し、往人の爆弾のせいで、ただでさえ悪くなっていたホールの視界がさらに悪化する。
流石に郁未と少年の距離ならばお互いの姿が視認できるが、外からの狙撃は無理だろう。
そうして、郁未は少年のほうへ銃口を向ける。
「あなたは、人を殺したの？　殺したのね？」

「……！」
ホール内にたちこむ煙幕にフランクは歯噛みする。
ようやく狙撃ポイントに着いたというのにこれでは……どうするか……煙幕が晴れるまでここに待機するか……だが、一度狙撃手の存在を明らかにした以上、狙撃の最も大きい利点、不意打ちはもはや期待できない。
　フランクは舌打ちをするとさらに移動をはじめた。

「ああ、殺したよ」
何ら変わることのない少年の声。
「僕がそうするって事は、郁未が一番良く知っているだろう？」
「……そうね……」
そう、郁未こそが一番良く知っていた。神奈に侵食されている郁未こそが、今、少年がどういう存在か一番良く分かるのだ。
「あなたは、空虚。我を持たない。ただ、姫君の望むように動く操り人形。そんなこと分かってた。でも」
痛い。胸が痛い。
「救いたかった。あなたを救いたかった。救いたかったんだよ」
泣き声にならないようにするのは大変だった。
「あなたのこと大切だったから……」
「救いたかったか……」
少年は一歩前に踏み出す。
「過去形なんだね。それじゃあ今は？　やっぱり殺すのかい？」
「……」
無言のまま郁未は引き金に指をかける。だが、その手はどうしても震えてしまう。
胸が……痛い……。
少年はその動きに頓着せず、一歩一歩階段を下りる。いつもの柔らかな声を出しながら。
「来ないで……撃つわよ……」
途切れ途切れの郁未の声はひどくか細く弱々しい。
「何のために？」
「……何のためって……それは……」
それは……なんだろう？
「何のために撃つんだい？　その胸の痛みと引き換えに、君はなにを得るんだい？」
「黙って……来ないでよ……」
どうしてこんなに胸が痛いの？　私には痛みなんてなくなっているはずなのに。

「郁未。救いが必要なのは君の方なんじゃないか？」

「黙って、って言ってるでしょ!!」

力を振り絞って叫ぶ郁未。だがもうそれは遅く。銃身を少年に払われるとその勢いで壁に押し付けられて両手首を握られてしまう。

「かわいそうな郁未」

まるで口付けを交わすような距離で少年は続ける。

「とても痛いんだね。伝わってくるよ。郁未の痛みが」

「いやだ……離して……」

身をよじらせるけれど、力が入らない。ただ、胸だけが痛くて、そこだけしか感覚がないみたい。

「郁未はずっと強くなければいけなかったんだよね。ずっと痛みに耐えなくてはいけなかったんだよね。本当にめったにいないんだ。いきなりAクラスに所属する女の子なんて」

ＦＡＲＧＯのクラス分けは精神力の強さ、過去にどれだけの痛みに耐えたかで決まる。

「この島に来てからも、郁未には辛いことだらけだ。母親の裏切り、死。親友の死。そして僕のことも」

「やめてよ……お願いだから……」

反則だよ。こんなの。こんなふうに……拘束するなんて。

まだ覚えているのに。少年のぬくもりも、抱かれた日のことも。

「そんな中でも郁未は強くあろうとした。それがお母さんが君に望んだことだから」

そう、お母さんは傷ついていた。そうして、そのことに耐えて行けるような強さを身に付けるためにＦＡＲＧＯに入信し、この大会に参加した。

そうして、お母さんは憧れていた。不可視の力を使えるような強さを持つ私に……。

「でも、それはとても辛かったはずだ。本当は誰かに頼って楽になりたかったんじゃないか？　本当は、侵食が始まった事に安心したんじゃないか？」

「そんなことない……」
　嘘だ。分かっていた。
　私はどこかで安心していた。侵食が始まったことに。私という存在が姫君に飲み込まれていくことに。痛みが徐々に消えていくことに。
　そうして、どこかで期待していた。侵食が進んで姫君に意識を飲まれることで、お母さんやこいつへの辛い思いも消えてしまうんじゃないかと。
　郁未の手からベネリが落ちる。
　もう少年も力を込めていなく、拘束しているというよりも抱いているといったほうがふさわしかった。
「本来、僕は我を持たない空虚な存在だ。だけど今は違う。僕自身誤解していたけど、擬似人格は消滅したわけじゃないんだよ。たしかに巨大な意識に吸収されて同一化してしまったけど、その中で確かに生きているんだ。郁未を大切に思う気持ちは確かにあるんだよ」
　その少年の言葉は嘘じゃなかった。侵食されていく郁未にはそれがわかる。
「郁未、僕と一つにならないか？　姫君という大きな意識に同一化する。それは確かに一つの救いだよ」
　痛みもなく苦しみもなく孤独に苛まれることもない。それは確かに救いの形。お母さんが望んだことそのもの。
「……ちょっとクサイかなぁ。流石に照れるや」
　少年は少しはにかんで。
「でも、郁未だって嫌いじゃないだろ。こういうふうに口説かれるの」
「う……ん……」
　そっと、口付けが交わされた。

「どうやら、あいつも敵みたいだな」
　ささやく往人の声に、芹香は黙ってうなずいた。
　煙幕のせいで中の様子はわからないが、途切れ途切れ聞こえてくる会話、一発も放たれない銃声、移

動もせず消えもしない人物探知機の二つの光点を考えるにそう判断するしかない。
「でもどうするの？　これじゃ叔父様の援護も期待できないわよ？」
「……いや、むしろこいつはチャンスだ」
問い掛ける芹香の視線に、往人は先を続ける。
「銃撃戦ってのは、初撃が勝負になる事が多い。だから、視界の効かない場所では相手の位置を先に発見できた方が勝つ。だが」
往人は人物探知器をカチャカチャとふる。
「こいつがあるなら、相手の位置を探す必要なんてない。あの煙幕の中じゃこいつはでかいアドバンテージだぜ」
「……一理あるわね」
煙幕が晴れるまで待つという手も確かにあるが……。
「じゃあ、踏み込むのね」
「ああ、ちょっと待ってろ。すぐ帰ってくる」
「な、なんでよ。私も行くわ!!」
慌てる芹香に往人は冷たい視線を向ける。
「武器もないのないのにか？　今からやるのは不意打ちだ。無駄に人数を増やしたら気配を悟られるだけじゃねぇか」
「だったら私が……あんた怪我してるし……」
「芹香」
芹香の抗議を往人が遮る。
「おまえは人を殺した事があるのか？」
その鋭い言葉、視線に芹香の息が詰まる。
「……無いみたいだな。だったら足手まといだ。躊躇なく敵を撃てるかどうかわからない奴なんてな」
「……そんな言い方しなくたって……」
「俺なら撃てる。ためらいなくな」
それだけいうと、往人は芹香に背を向ける。
「ちょっと、もう!!　もうちょっと言い方とかあるでしょう!!　か弱い女の子に向かって!!」
「誰がか弱い女の子だよ。その性格で良く言うぜ」

「……あのね……本当の私は……」
だが、そういったきり芹香は黙りこくってしまう。
「チッ」
なんなんだよ、調子狂うぜ。柄でもない。
「すぐ帰ってくる、おとなしく待ってろ」
それだけいうと、往人は身を低くしてホールに向かって走りはじめた。
「ほんと、もうちょっとまともな言い方できないのかしら」
走っていく往人の背を見ながら、芹香は呟く。
基本的に往人の言っている事が正しいというのはわかってはいるが……芹香がそう思っているうちに往人の姿は建物の中へ消えた。
(大丈夫だよね……!?)
不意に、芹香は背後に人が立っている事に気づいた。
慌てて振り替える芹香。そこには、
「叔父様!?」

フランクが立っていた。
ほっとする、芹香。だが、その腹にフランクの拳がめり込む。
「叔父様……なんで……」
何か熱いものが喉をせり上げてきて、芹香の意識は闇に落ちた。

芹香が胃液とともに吐き出したものを、フランクは摘み上げる。
それは参加者に仕掛けられた爆弾だ。
胃から摘出しても爆発しない事をフランクは当然知っていた。その起爆の方法も。
フランクはビルの二階のホールを見上げる。煙幕のせいで中は何も見えないが。
これを使えば、あの化け物を倒せるかもしれない。
それほどの威力のあるものではないが、先ほどの往人の爆弾で、ホール自体が半壊している。
もう一度爆発を与えたならば、うまく支柱を破壊

すればホールごと潰せるかもしれない。
　ここからでも、二階にこの爆弾を投げ込む事はできるだろう。
　だが、それはすなわち、既にビルの中には入ってしまった、往人をも巻き込む事になる。
　芹香を気絶させたのは、爆弾を取り出すためだけではなく邪魔されないためでもある。
　だが……、フランクは己の感傷を自嘲した。
　お笑い種だ。百人の参加者、多くのスタッフ、傭兵を巻き込んでいて、今更、感傷だと。偽善にもほどがある。
　何を犠牲にしても、かりそめの仲間、いや、己の命を犠牲にしても目的は達成しなくてはならない。彰を守るためならば。
　手段を選ぶ贅沢など許されるものか……。
　だが、その自嘲の裏には確かに動揺があったのだろう。
「動くなよ、おっさん!!」
　デザートイーグルの銃口がフランクの後頭部を小突くまで、
　北川潤、神尾観鈴という素人の接近にも気づかなかったのだから。

　一階をぬけ、既に停止しているエスカレーターから往人は二階に抜ける。
　予想通り、そこには煙の充満と炎の揺らめきのせいで視界が極端に悪い。何も見えないという訳ではないが……。
(奴等の位置は……非常階段の側か……)
　こちらの侵入、接近を悟られない事を祈りながら、往人は可能な限り身を低くして移動を開始する。
(落ち着け……有利なのはこっちだ……)
　額に汗が浮かぶ。
　人物探知器で相手の位置がわかっているとしても、この煙幕、炎はプレッシャーだ。
　だが、それでも往人は気配を消しながら、着実に

「敵だとは思うけど……この人に一度襲われているし……」
だけど……郁未さんが言った管理者とはこの人の事ではないはずで……。
「はっきりしないな。けど、確かにきな臭い奴ではあるよな」
フランクの足元には、芹香が倒れている。ほんの数時間前に蹴りをくれた少女だ。
彼女が殴られる所を北川たちは見ていた。
(くそ。やっぱりトラブルかよ……)
ある程度は覚悟していたし、それを分かって観鈴についてきたのだが……。
だが、まあ良しとしなくちゃならないかもしれない。
とりあえず、芹香の危機を救えたと思うので。
(ていうか、そう思わなきゃやってらんねぇよ)
どう決断したって、俺みたいな優柔不断なやつは後悔する訳で。

二つの光点に接近していった。
そして……。
(あれか!!)
煙幕の切れ目にみえる己と同じ銀髪の頭。
非常階段口からのぞくそれは、確かに光点と同じ位置。
まだ、こちらを向いていない。気づいていない。
(初撃が勝負。この距離ならいける)
確かに視界は悪いが……。
ゆっくりとアサルトライフルを構え、狙いをつける。
まだ、相手に動きはない。
悪く思うなよ……俺の勝ちだ!!
往人は引き金をひき、
そして、銃声とともに、銀髪の頭がはじけとんだ。
「観鈴、こいつが管理者なのか?」
北川の問いに、観鈴は首をかしげる。

だったら、いい事もあったと思うことにしよう。
「おい、あんた!!　天沢郁未ってのはあの中にいるのか？」
フランクは答えずにただ自嘲の笑みを浮かべるだけだ。
（くそ、どうするよ）
スナイパーライフルの方はもう捨てさせているが、握り締めたままの右手が気にかかる。
（だからといってここで撃っちまうのは、どうにも）
「とりあえず……」
観鈴に指示を出そうとして、そこでビルの中から立て続けに二発の銃声がこだました。
「……!!　郁未さん!!」
たまらず、観鈴は走りはじめる。
「おい、ちょっと待て!!」
北川の制止の声にも耳を貸さずに。

往人の目の前で銀髪の頭は確かにはじけとんだ。
やったぜ……俺は……
まだ、天沢郁未という潜在的な敵は残っているものの、とにかく最強の敵を倒した訳で……だが、そこで気づいてしまう。
光点の数が減らない事に、そして、今自分が撃ったものが首だけの存在という事に。
それが坂神蝉丸の頭部であり、本来ならフランクの狙撃に対するフェイクとして少年が用意していた事など、往人の知る由も無い事。
ただ、その異様な光景に往人の思考がとまってしまう。
そして、気づくのが遅れてしまう。
すでに己の銃声によって、人物探知器によるアドバンテージが失われてしまったという事に。
ドンッ
銃声、非常階段口に走るマズルフラッシュ、少年によるベレッタの一撃は、先ほど手当てしたところ

と同じ肩口を貫き、激痛が走る、それでもライフルを手放さずに倒れなかった往人は賞賛に値するが、射撃と同時に近付いた少年のスピードに対応できるはずも無く、その頬に拳がめり込み、往人は仰向けに倒されて、怪我している肩口と、右手を少年の足が踏み潰し、ついにライフルを手放してしまう。
「ガアッ!!」
　激痛にのたうつ往人。何とか立ち上がろうとするも、もうそんな力は入らない。
　致命傷ではないにしても、けっして軽い傷ではないのだ。
「郁未……大丈夫かい？」
　少年は往人を見下ろしたまま、優しく声をかける。
「うん……大丈夫……」
　煙の中、往人は郁未をみた。
　その目は虚ろだ。前に会った時のあの強い意志の光はもう感じられない。
「その人……」
「ああ、こいつ？　敵だよ。僕らの命を狙おうとしただろ」
「でも……その人は……」
「敵だよ、郁未。敵は殺さなくちゃ」
　往人のライフルを拾い上げると、少年は踏み潰している肩口を軸にくるっとまわって、郁未の方をむく。
「……!!　畜生……」
　激痛に往人は意識をつなぐ事しかできない。
「郁未がやるんだ。そのショットガンで」
「私が……？」
「そう、君が。そうして楽になるといい」
　これは、禊。今までの自分を断ち切る儀式。
　本来なら、神尾観鈴がこの役割を果たすはずだった。
　大魔法による神奈の弱体化さえなければ、すぐに侵食は進み、観鈴を殺す事で、郁未の侵食は完了するはずだった。

そう、これで侵食は完了するはずだ。殺人という罪を犯す事で。
「さあ殺すんだ。郁未」
その声に応じて、ベネリＭ３の銃口が倒れたままの住人に向けられる――

758　輝きと虚しさ

ただ巨木が、其処此処に立ち連なるのみだった。見上げれば、覆い被さるような高みに茂る、無数の枝葉があるだけだ。
傾き始めた太陽の光を遮断して、僅かに赤みがかった光を通している。湿気を帯びた空気が、暗い原生林を抜けて冷風をもたらしていた。
何よりも、其処を異様な世界に仕立てていたのは、眠るように倒れ伏した人々の姿。
その表情には、何もない。苦痛も、安寧も、後悔も、驚愕も……何も、なかった。おそらく誰も生き残っては居ないだろう、そう思いつつも、スフィーは生存者を探しながら歩いた。
その間に、遠くから聞こえてくる放送を聞いた。
二人の少女から聞いていた蝉丸という男が、戦いを止めての共闘を呼びかけていた。だが、今は彼らに合流はできない。神奈の善の心を探し出して説得する方が先だ。
(何よ、もう！　タイミングが悪いのよ！)
単独でこんな所まで来るはめになったのは、人数不足だから、と割り切った結果なのだ。
腹を立てながらも、死体調査を続ける。
(あれ……　〝死体〟？)
ふと、気が付く。いつの間にか、〝生存者〟ではなく〝死体〟を相手にしていた。
(あたし、この人たちの〝死に方〟を観察しているだけかもしれない……)
自分に対する苛立ちから、スフィーは憮然とした表情で大きく溜息をつき、天を仰ぐ。

……ひとりは、さみしい。
親しい人が全員死んでしまった今、生き残る事にどれほどの意味があるのか。木々に覆われた小さな空を流れる雲を見送りながら、スフィーは嘆息する。
そして、おもむろに雲へと手を伸ばす。
当然届かない掌を、ぐっと握り締める。
いつの間にか、大人のそれに戻っている大きなこぶし。
けれど、それはもう。
虚しさだけしか、掴めない。
「うりゅ……」
じわり、と歪んだ視界を振り切るように、目をしばたいて視線を地上に戻す。相変わらず死因の解らぬ人々が、芝居のようにばたばたと倒れている。まるで役者が観客に背を向けぬように、全ての人々が同じ方向へ同じように倒れていた。
(……お芝居、ね……)
ふと溜息をついた、その瞬間。虫の知らせだろうか。なんの気なしに、スフィーは振り向いた。
この芝居の観客は、ここに倒れ伏す人々や、その指導者だとばかり思っていた。
……最初はそうだったのだろう。
でも、今は。
ひょっとして、違うのかもしれない。
役者のひとりが、いつの間にか、全てを仕切っていたのではないか。
(それが、あなたなのね――)
ゆっくりと、その倒れた人々の脚の先へと、視界を巡らせる。
無数の巨木が遮る中、狭い狭い空間を。
遥か、遠くまで見通すと。
――何かが、ぼんやりと光っていた。
彼女は独り、立っていた。
輝きは、白い羽根。
夜闇のように黒い、二つの虚空。
そして、こちらを見返す瞳があった。スフィーが

目を合わせたのを確認すると、彼女は薄く笑った。
温かみの無い、純度の高い氷のような——透明な、透明な——微笑み。
ぞくり、とスフィーの毛が逆立つ。
……この感じは、冷気？
顔が、脚が、腕が、瞬時にこわばる。
刀の中に封じられ、祠に据えられた、目を閉じて座した翼ある少女。
そんなイメージを打ち砕いて。
彼女は独り、立っていた。
「あ……あなた……」
スフィーの口は、上手く回らない。
「存じておろう？　余は、神奈……神奈備命だ」

759　そして二人は再会した

少年に促され、ゆっくりとベネリの銃口が往人の方を向く。
うつろに冴え渡る瞳とは対照的に、郁未の手元は定まらない。
拮抗しているのだろう。理性と感情とが。
しかし、それも時間の問題だと少年は踏んだ。時が経てば経つほど侵食は進む。
そして、何より迷いは一時的にせよ、心を弱らせる。
「もう思い悩む必要はない。辛い思いをすることはないんだ」
どこまでも穏やかに、少年は語りかける。
「さあ郁未。共に行こう——」
「……郁……未さ……ん！」
彼方より、突如聞こえてきたその声に。
びくり、と郁未の体が震える。
「……郁未……さ……ん！」
声はわずかに近づき。そして震えが体全体に伝わっていく。
「……郁……未……さん！」

そう。その声は、突き刺さるような優しい記憶のかけら。
その痛みに、郁未の意識は激しく揺れた。
「……なんとまあ、困ったね。神尾観鈴……か」
少年は声の主を思う。観鈴はここに来るだろう。だが、今の郁未に観鈴はまだ殺せまい。
そして、観鈴がいては郁未に悪影響を及ぼす。
「郁未を困らせるいけない子には、とりあえず消えてもらおうか」
呟くと、足元の往人を一瞥し、えぐり込むようにその右肩を踏みつける。
ゴキリと音がして、往人の右肩が外れた。
「ぐあっ……」
往人の呻き声。
少年は往人の上から降りると階段の方へ歩き出そうとする。
(ぐ……観鈴、だと)
往人は激しい痛みの中、紙一重で意識を保っていた。
少年は観鈴、と言った。
目の前で銃を突きつけている女——郁未は、観鈴らしき声が聞こえ出してから様子がおかしい。
そして少年の行動。消えてもらおうか。その一言がリフレインする。
(あの馬鹿……なんでわざわざ、こんなところに来るんだ)
護りたかった者は次々に消えていった。だからせめて、観鈴だけは。
(殺させるわけには、いかない……)
そして、多分これは最後のチャンス。
少年に不意打ちを食らったとき、銃を最後まで離さずにいられた。だから仕込みができた。
何度も意識を失いそうになりつつ耐えた。だから、まだそれは生きている。
郁未を見る。心ここにあらずといった様子だ。今ならわずかな隙をつけるだろう。

少年を見る。そして彼の持つアサルトライフルに、念を集中する。
法術、それはほんのわずかな力に過ぎない。だが……ただ引き金を引くだけなら、それで充分。
(さあ……楽しい人形劇のはじまり、だ)
唐突に、少年のライフルが勝手に発砲した。
「な……これはっ!?」
立て続けにもう一度、発砲。
片手で、しかも不意を突かれては、発射の反動に耐えるべくも無い。
二度の反動で少年の上半身は回転し、大きくよろけた。
同時に往人が、全身の力を振り絞って跳ね起きる。
「うおおおおおおおおっ!!」
叫ぶ。そうしなければ、動くこともできなかっただろうから。
往人はすぐさま腰の後ろから弾切れのデザートイーグルを抜き放つと、少年に躍りかかる。
少年の体勢は崩れたまま。
立て直す暇を与えず、往人は一・八キロの銃床をその頭部に叩き込む――
――その途端、一発の銃声が横から聞こえ、二人はまとめて吹っ飛んだ。
銃声と叫び声に郁未の意識がはっきりしたとき、目に入ったのは襲い掛かられる少年だった。
操られた意識と郁未の心は同時に同じ判断を下した。
少年を救え、と。
そしてとっさに発砲した。狙いもろくに定めずに。
「……」
倒れ伏す少年に近づく。――息はある。
散弾は少年をも巻き込んだが、偽典の守りもあってか致命傷にはなっていないようだ。
気絶しているのは殴られたせいだろう。
往人を見る。――こちらも、まだかろうじて生き

ている。
直撃ではなかった。しかし、積もり積もった怪我はかなり深刻になっている。
放っておけば死ぬかもしれない。
「……」
郁未は少年を担いで引きずり移動させ、往人のほうを見る。
少し考えて、そしてベネリをゆっくりと——
「——郁未さん！」
すぐ近くから呼ぶ声が聞こえ、郁未は顔をあげる。
やがて煙の向こうから観鈴が姿を現して。
そして二人は再会した。

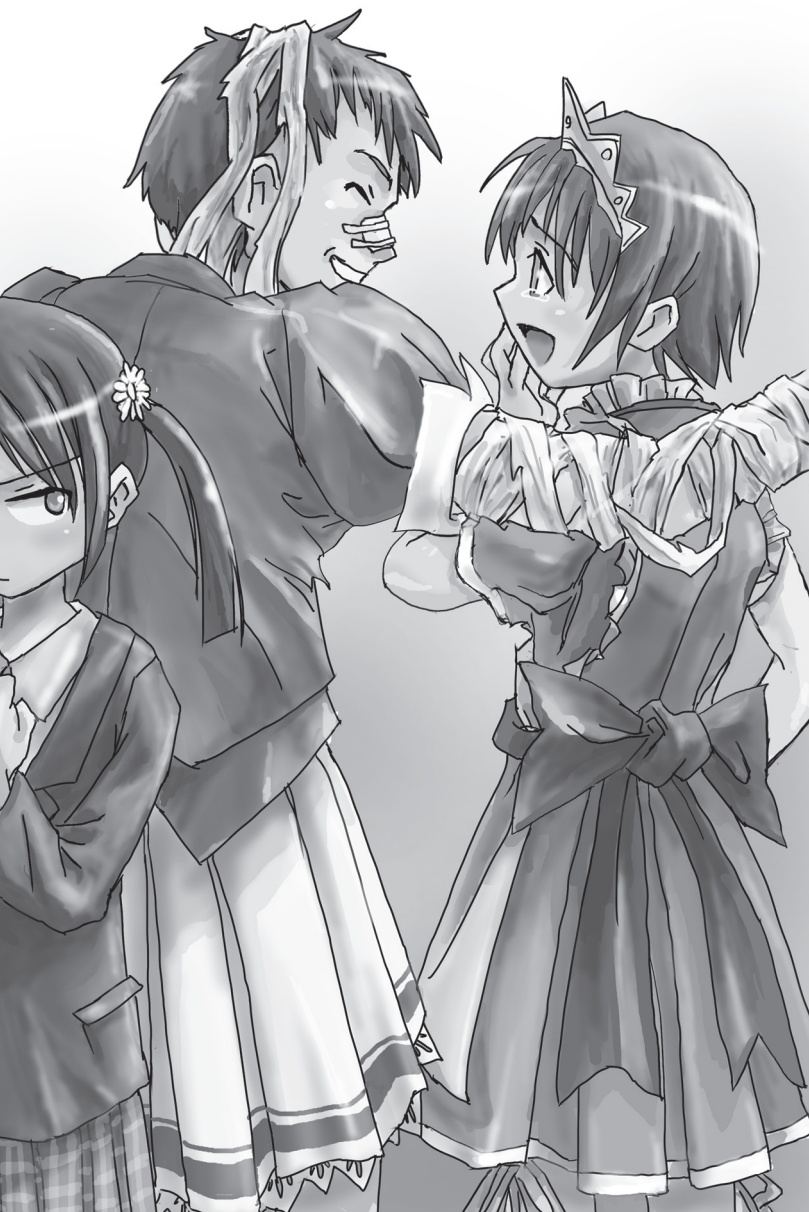
760　手を離さない僕らのために

七瀬彰は東に行った。彰を探しにいっただろうに、何故だか柏木初音はその正反対である西に向かって走っていった。どうしてなのだろうか。
——考えても埒があかない。初音が何を考えているかは判らないけれど、論理的に考えれば自分たちは東へ向かうべきなのだ。柏木耕一の言葉を信じるならば、東の方に彰はいる筈なのだから。
私、観月マナは、柏木耕一の身体に包帯を巻き直しながら、そんな事を考えていた。
考えながら、しかし、自分の中で展開される論理がどうしても形にならない。私は思う。きっと七瀬彰は、東にはいない。初音の向かった方に、彰はいる。そんな予感が私の中にある。まったく非論理的だ。非論理的なのだが、非論理的なものが許されるのが恋愛というものだ。
「初音ちゃんの向かった方に、彰さんはいると思う」
私はそんな淡い予感を言葉にした。
「どうして？　彰は東に行ったんだって……」
「——わからないけどね。乙女っぽく言うなら、恋する女の子のカン、っていうのかな」

耕一は疑念の目を自分に向ける。言葉にしてみるとちょっと恥ずかしい。というか、とても恥ずい。
「……乙女、ねえ」
「……ナニよ、その目は」
わかってる、柄でも無いってことくらい。でも、理屈じゃ説明できないんだから仕方ないでしょ。
「……そうだな。乙女の勘ってやつを信じてみよう。体が回復したら、初音ちゃんを追って西に向かう」
本当は今すぐにでも追いたいというのは、耕一の気配で分かる。けれど、大人しく私の治療を受けているのは、彼の体はぼろぼろで、直ぐに動けるような状態ではないと理解しているからだろう。
「彰は、自殺しようとする可能性が高い」
「……なんでよ」
どうして、どいつもこいつも命を無駄にしようとするの。ほんと、馬鹿ばっか。
「自分が暴走して大切な人を傷つけてしまうことが恐いから——だと思う」
「そんなの、自分勝手すぎるわよ……」
初音ちゃんから鬼という存在を聞いた。その血による暴走のことも。
「そうだな、俺もそう思う。だから、手遅れになる前に俺が必ず止める」
——それにしても、なんて深い傷ばかりなのだろう。相当量の血も流れただろう事が想像できる。簡潔な治療しか為されておらず、常人ならば気を失うどころか、死に至る可能性すらあっただろう。まったく立派な体躯である。この体格がなければ、きっと耕一は死んでいたのじゃないかと思う。私は小さく息を吐き、彼がこうして無事であったことに心底安堵していた。
微妙な雰囲気である。ぺたぺたと男の人の身体を触るのなんて殆ど初めてみたいなものだ。
「アンタ、それにしても、よくこんだけやられて無事だったわね。野生動物もびっくりよ。同じ人間なんて信じられないわ」

「丈夫だけが売り物だからね、……って、あうっ！　やめ、もう少し優しくっ、いたたたたたた」
それをごまかすかのように、私は憎まれ口を叩く。手つきもわざと乱暴になった。最低である。しかし耕一は苦しそうな顔をしつつも、優しく微笑んでいる。そういう顔するの止めてほしい。論理的じゃない。そして突然私の頭を撫でて、
「マナちゃん。――生きててくれて、ありがとうな」
突然そんなことを言い出した。まったく非論理的だ。これだから直感系は困る。だってのに、その言葉を聞いて、どうしてか私まで泣きそうになる。
「アンタこそッ!!　ホントに心配したんだからね!!　無茶ばかりやって!!　命はひとつだけなのよ!!」
泣くのを必死に堪えてまた憎まれ口。まったく非論理的だ。論理系を自称する私がどうしてこんなことを言わねばならないのだ。
「――大丈夫。これからは心配かけないようにするよ。ま、出来るだけ、だけどな」
何故か頬が赤くなる。耕一はもう一度私の頭を撫でると、にこりと微笑む。
……。変な気持ちになる。そう変わらない歳の男に頭撫でられてこんな気分になるなんて、普段の自分からすれば異常に奇妙だ。
なんでよ……。

「――そろそろ、大丈夫かな」
そんな事を呟いて、耕一は身体を起こす。手のひらを握りしめ、何かの感触を掴むような様子を見せた後、
「うん、眩暈は収まった。――そろそろ行こう」
耕一はそう呟いて立ちあがった。その目には穏やかさと強さが同居していて、今までに見た事もなかった、途方もない柏木耕一を私は目の当たりにした。おちゃらけてばかりだったような耕一の、本当の顔は実はこちらなのじゃないかと思う。私は慌てて立

ちあがると、西へ歩き出した耕一に追従した。
さて。
歩き出してすぐ、私はふと気配を近くに感じて振り返った。耕一も同じような気配を感じたのだろう、立ち止まって辺りを見回している。一瞬の緊張。あの放送を聞いて集まろうとした人間の一人だろうか。おそらくそうなのだと思う。何故なら『それ』は、気配を隠そうともしていなかったからだ。
一応警戒して私は後ずさる。耕一は自分の前に立つと「出て来い」と声を出す。右にあった茂みが動揺して揺れる。その動揺は、気づかれたことへの動揺ではなく、むしろ——耕一の声自体に対する動揺のように思えた。そして間もなく、茂みから『それ』は現れた。
「耕一っ！」
「——あずさ？」
長身でスタイルの良い、ショートカットの可愛い女の子だった。変な格好だ。いろいろ荷物を持っているが、手に持ったレーダーのようなものが特に目に付いた。というか、レーダーなのだろうと思う。あのレーダーで自分たちを探していたのだ。
「……やっと逢えた。レーダーで初音を捜してたら、あんたが近くにいるみたいだったから、」
ああ、もうっ——顔をくしゃくしゃにして、女の子は笑った。言葉を失い呆然とした表情の耕一と、涙を流して喜ぶ女の子。やがて二人は手を取り合い、無事でよかった、今は別行動してるけど。千鶴さんも無事なんだよな。ああ無事だよ、今は別行動してるけど。そんな風に明るい声で、私のことなどまったく気にも留めない様子で二人は二人だけの世界を作り出し、手を取り合って喜びあっていた。
……なんかむかつくのは何故だろう。
暫しのダンスの後。
「でだ。再会を喜びたいところなんだが、残念ながら時間がない。初音ちゃんは何処らへんにいるか判

るか？」
　耕一は我を取り戻してそう言う。少女は頷いて、
「わかってるよ。初音は突然西に向けて走り出した。まだ森の中だね。丘の辺りかな。芹香っていう女の子も捜さなくちゃいけないいけど、まずは初音に会いたい。急ごう」
　……結局千鶴姉達と同じ方向に行く事になるのか。少女の口からはそんな呟きが聞こえた。私には意味がわからなかったけれど。

　そうして私達三人は森の中を駆け出した。耕一の体調もあるし、私の足がそれほど早くないこともあるので、それ程の速度ではない。そういうわけで、多少は話をする余裕もあった。
「そういえば自己紹介がまだだったね」
　そう言って少女は笑う。その屈託のない笑みが私の苛立ちを助長する――という事は殆どなく、むしろ素直にいい人だな、という印象を覚えた。
「あたしは柏木梓。こいつの従姉妹だよ」
　そういって爽やかに笑う梓に、私も微笑んだ。初対面の人に素直に笑みが出たのは久しぶりだ。
　大人の女性だなあ。スタイルすごすぎ。人間じゃないわよこれは。信じられない。それでいて顔立ちは子供っぽいところがある可愛い系だっていうんだから有り得ない。耕一さんには勿体無い。いやむしろお似合いなのかも。ああ、何考えてるんだ私。
「私は観月マナ。よろしく、梓さん」
　――私がこの柏木梓と同じ年齢だという事を知るのは、残念ながらもっと後になってからである。

　ともかく、彰と初音の場所に向かうことが先決だ。私たちと彼らは遠く離れてしまったけれど、それでもまだ完全に離れきったわけではない。
　彼らともう一度手を繋ぎ、笑って帰ることが出来ればいいと思う。

761　魂食らい

斜面に、二つの人影があった。そこは山の中腹だった。
伐採されている様子もないのに、山頂に近づくにつれて木々の高さが増すという、奇妙な植生。それがこの山の異常性を雄弁に物語っている。肩の高さを越える木がちらほらと現れ始めたせいか、小柄なほうの人影が視界を狭められ、不快げな表情を作った。
「……うぐぅ」
この小さな人物は、月宮あゆ。何かに引き付けられるように、乏しい体力を振り絞って、この山頂を目指している。
大きなほうの人影が、腰に手を当てて一息つく。
「ねえ、あゆちゃん？　本当に、こっちなの？」
比べて大きな人物は、柏木千鶴。あゆの周辺で起こる怪奇現象を目の当たりにして、いつになく現実的な思考を捨てて、彼女の主張を優先させている。
先ほどの放送で、今後の方針は決定していた。
（施設に残った詠美ちゃんと繭ちゃんを回収して、梓と合流したら学校に行こう）
放送のあとに聞こえた声が、いまだに殺し合いの続いている事を知らしめていたが、一つの指針として学校を意識する人間は、結構いるのではないだろうか。そう考えての結論である。
……しかし、今は。
あゆの言う「間に合わない」という言葉に、背中を押されている。何故かは解らないが、千鶴自身も胸騒ぎのような、何かを感じている。あゆに投げかけた言葉は、「問い」ではなく「確認」なのかもしれない。
「うんっ、ここのっ、上、だよっ」
「……そんなに慌てないといけないの？」
登り始めはやたらと元気だったあゆだが、今では

肩で息をしていた。上に危険があるのならば、この状態で辿り着いても得るものはない。そう考えて、何度か休憩を提案したが、あゆは山を登り始めてからというものの、今まで以上に急いでいるようだった。
「そう、急がないと、駄目、なんだよっ……って、あれっ？」
断言したあゆが、言葉と裏腹に立ち止まる。
「……あら？」
千鶴も立ち止まって、あたりを見回す。木々は高さと密度を増す一方だったが、ある一線を境にして、全く生えていないのだ。
不自然に開けた視界の先には、再び林が見える。今までの雑木林ではなく、縄と紙を巻きつけた、異常に高い巨木が連なっていた。
「何かしら、これ？」
「うぐぅ？」
よく解らないが、何かある。そんな場所に到達したと二人は確信しながら、首を捻っていた。
暗い林の中で、二つの影は――いや、一つの影と、一つの輝きは――距離をおいて、見つめあっている。影は儚げで、輝きは誇らしげに立っている。
……寒い。それに、苦しい。
スフィーは酸欠状態の魚のように、激しく口をぱくつかせていた。ほんの数時間前には、暑ささえ感じられた空気が、今では真冬のように冷え込んでいる。
「……何を、恐れる？　お主は、余に会いにきたのであろう？」
親しげな口調。まだ幼さの残る声。先の放送よりも小さな声なのに、すぐ隣に居るかのように、明瞭だった。
神奈はあきれたように余裕をちらつかせて、言葉を続ける。
「都合よく、反りの合う人格を探しにきたか？

……よく、考えよ。今の余も、お主の期待した人格も、余の一部に過ぎぬ」
封じられ、動けぬはずの存在が、雄弁に物語る。
スフィーが何も応えないうちから、神奈は先へ先へと話を進めて行く。
「誰しも、心のかたちは平面ではあらぬ。複雑な多くの切り口を持った、巨大な多面体ようなものじゃ。お気に入りの一面だけを説得して、余という存在の全てを掌握できる、とでも思ったか？」
「くっ……」
強力な現在の神奈の意志の前に、スフィーの希望は儚いものであった。そして神奈にとっては、僭越な支配欲にしか映らない。
……いつの間にか、彼女が近付いていていた。
歩を進めることもなく、翼をはためかせることもなく。ただ事実として――近付いている。
「もっとも、着眼点は悪くなかったやもしれぬ。いや、惜しいところであった、かの？　先ほどの外法……あれで、消えたのじゃ」
無感動に評価を下す神奈。それに対してスフィーは、悲壮な顔で尋ねる。
「消えたって……どういうこと⁉」
「言葉通りだ。もはや、お主の期待する神奈は存在せぬ。今ここにある余が、唯一にして全てなのだ」
……寒い……こごえてしまいそう。
どうして彼女は、あたしのそばに来るのだろう？
「……お主がここに来たのは無駄足であったろうが、余は歓迎する。その甘美な魂の絶望を、差し出すがよい」
そう言って再び、あの氷のような微笑を浮かべる。
目の前に、彼女がいた。
そうだ、この感じは。
もはや冷気などではない。
「そして余の肉として――」
笑みが、無限に広がっていく。
これは、凍気だ。

顔が、脚が、腕がこわばる。
身体が、精神がこごえる。
「――余に、従え」
神奈が手を伸ばす。
スフィーは微動だに出来なかった。
寒い。寒い寒い寒い。
思考が。あたしの思考が。あたしの思考が、寒さの中で凍てついて……。
夕暮れの空に染みる微かな赤は、まだ予兆に過ぎない。
二つの影は――いや、一つの影と、一つの輝きは――今まさに、重なろうとしていた。

762　鏡合わせの二人

「……来ちゃったの」
呟きが、ぼそり。
覇気が消えて脱力した体が、辺りを巻き込んでセピア色に染まっていくような感じ。自分が自分で無いような感じ。
「……来なくてよかったのに」
だから、届かなかった。
「う…………え…………」
口元に拳を寄せていぶかしむ。今、なんて言われたんだろう、っていぶかしむ。白い煙に翻弄されながら、その言葉を手繰り寄せようと、ただその言葉を手繰り寄せようと……。
そして、ようやく観鈴の瞳は捉えた。彼女の混濁した瞳を。
「え…………」
煙の間隙から覗く彼女の姿は、それぞれにとって異様だった。
一方には、困惑。他方には、諦観。
混濁した郁未の瞳が、まるで壊れたおもちゃを懐かしむように観鈴をなめる。観鈴は、初めて見る彼

女の様相を前に、ただ動けない。
沈黙が、横行する。
「言うこと聞かない子なんだから……」
緩い言葉が漏れた。
観鈴はその言葉にほんの少し、ほのかな安堵を覚えた。でも、何かが違う。違うことが不思議と分かって、だから、その安堵も歪む。その言葉の本当はそんなところにはなかった。厳しいのでなく、優しいのでもなく、生温いのでもなく、ただ緩い。
……別に、どうだっていい言葉だから。
「いくみ……さん」
だから、観鈴にはどう返事していいか分からなかった。言葉どおりにたしなめられたのなら、ごめんなさいとでも言えばいいのだろうに、でも……そうじゃないんだって、何か、分かる。
思いつくことは、彼女の名前を呼ぶことくらい。
「……ホント、何しにきたのよ」
瞳は不安げに揺らいでいた。煙が刺したせいだろうか。それとも、本当に泣いていたんだろうか。
色鮮やかな彼女が、ずいぶんと私とは違う、そう郁未は思う。
「それを言うなら……私か。私こそ、何やってるんだろうね」
観鈴の返事は待たない。それを期待した言葉じゃないから。独り言だから。聞きたくなかったから。
おろおろする彼女は滑稽だけど、それは私に今は必要の無いこと。……だけど、それが出来ない私のほうが、余計に滑稽だと思える。
伸ばした腕の先に罪を隠している。これを覗いたら、観鈴はどんな風に反応するんだろう。
そんな邪悪な自嘲が、不意に口元から漏れた。
「ねえ、わたしを助けに来てくれたの?」
……これは迷いだ。それは何だろう。私が、私であろうとすることへの迷い。じゃあ私って何?　何が天沢郁未で、何が天沢郁未でないの?　それは過

去の私。少なくとも、正しく自分であっただろうもの、誰にも否定できない、私にも否定できない、既に起きてしまった存在のこと。どんなに醜くても、どんなに認めたくなくても。じゃあ、今の私は、この瞬間の私は、私でないのかな？

　そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。私は私だけど、私を認めたくない私がいる。なぜ？

　それは私が認めた私が、本当の私だから。私がこう在りたい、そう願った姿こそが、本当の私だから。……だから、今この瞬間を疑っている。ドッペルに突きつけられた過去を否定して、今この瞬間も否定して、そして未来まで否定して、何だ、私なんか最初からいなかったんじゃない、そう思うことがイヤだから。

　答えは分かっていたんだ。認めたくない私も、私にすぎない。でもそれを認めたくない私もいる。みんな私。それらを結びつける私がいることを信じることが、私が現実と向き合う方法だって、分かっていたんだ。私は……私を好きな私でいたいんじゃなくて、好きな私になりたいと思う私でありつづけようとしているんだ。認めたくないのも、認めたいのも、全部そのせいなんだから。

　揺れ続ける私を、まっすぐ見つめてくる目がある。混雑し翻弄され、途切れそうなほどに儚くても、何かを伝えようと、観鈴は私のことを一心に見つめている。

　それが観鈴の答えだった。天然色の瞳だった。

私が好きな私は、どんな私だろう。私が在りたいと思う生き方は、どんな生き方だろう。それが私であることの答えになるはずだ。

　……少年。

　彼と一緒にあることが、私であること。そんな感じ。うまく説明できないけど、それが多分、そうだ。

　欲しいものは、少なくとも私が考え始めたとき、もう一つに収まってたのかも知れない。色々なことを通り過ぎてきた。お母さんや、友達や、……敵と

か、変な人とか。みんな合わせて、未練だ。みんなにうまくやることなんてできない。後悔のしっぱなし。だけどそれがいい。後悔の無い生き方が欲しいんじゃなくて、私が私であるということが欲しいだけ。

　だから流れに身を任せよう。多少の傷は仕方の無いことなんだから、流れの大筋にさえ沿っているならそれでいい。

　だからもういいかな？

　溶けていこう。私という一つに収斂（しゅうれん）しよう。渦巻いているいろいろな思考も、感情も、一つである私に帰ろう。もともとそうであった、純粋な私に帰ろう。カラーは要らないんだ。セピアでいいんだ。私であることさえ分かれば、私であることさえ出来れば、彼と寄り添うことさえ出来れば。

　穏やかに融けていく。私が、私に溶けていく。

　――――気づかなかった。

　彼女の目は、確かに私を見ているのに、私のことを見ていない。届いていないんだ。じゃあ、今、何を見ているの。ああ、そうか――――私に反射した、郁未さん自身なんだ。

「それとも、止めに来たの？　私を」

　視線がずれて、断絶する。郁未の顔が、元いた何かの方へと向き戻る。そして、チャキッ、という小気味いい音を立てて、拳銃が構えられる。するとそれに呼応したように……煙が晴れる。

　荒い息。

　どす黒く滲んだ紅。

　すすに黒く汚れた衣服。

「――――――――――――え？」

　観鈴は声を詰まらせて、目の前に現れたものを凝視した。

　彼女が見ていたものは。

　彼女が銃を向けているのは。

　目の前に現れたものは。

目にしているこの情景は。
すっかり痛んでしまった彼は。
「――――――――――――往人、さん」
瞳孔が、キュッと萎んだ。

――穏やかな侵食、気持ちいい。
私のエゴを洗い流してくれる、気持ちいい。
少年が満たしてくれる、気持ちいい。
少年で満ちていく、気持ちいい。
私は今、溶けつつある。
少年との邂逅をきっかけに、消えつつある。
頭の中が、セピアに染まる。
うん、分かっていたもの。
いつかはこうなってしまうって。
ただちょっと早いだけ。
茫洋が私をうずめていく。
違う、私が私にまとまっていく、ただそれだけ。
――私じゃないものが、混じっている。

誰よ、あなた。
こんな気持ちにさせるのは、貴女？

瞬間、少年を救おうとして、発砲。

私のほとんどは彼の中。
とろけるように甘美な存在と共に在る。
それを激しく揺さぶる何かがある。
抑揚？
そう、――感情の。恐らくその反動なのね。
うるさいな。
黙っててよ、今、いいところなんだから。
誰よ、貴女。
私？
神奈？

滑らかに思考が流れ行く。唯一つの方向へ澄み渡っていく。自分への没入から齎（もたら）された理解――神奈

か、少年か、それとも彼女自身か——がベクトルを作り出す。
痛みが摘み取られていく。
それがどこへ向かっていくかは分からない。
分かるのは、私というベクトルだけ。
——————————禊が終わる。
観鈴は表情をこわばらせたまま絶句している。
死。眼前に突きつけられ、直視することを求められた——死。
誰のものであったとしても、その事実は心を深くえぐる。そして今回起こりえるだろうそれは、一際大きな痛みを彼女に残すだろうことは明白だった。
失う悲しみも、奪われる痛みも、もう十分に知ったというのに。
観鈴の瞳は、いつしか郁未に向いていた。そして、今度は郁未もそれを受け止めた。
「……カラーよね。うらやましいわ」
「え——」
観鈴には、その言葉の意味は分からなかった。
分かるのは拳銃を支えるその手の不自然な脱力と彼女の瞳の不透明が未だ続いていること、それだけだった。
——どうしよう、殺す？　あの子。
いつもなら、そんなことを考えなかった。観鈴を能動的に殺そうとなんてするわけがなかった。
本来なら、誰の命であっても奪おうなどとは考えるはずがない。
……選ぶことは、捨てることだ。
捨てる代わりに、拾えるものがある。
傷つけることで、守れるものがある。
守ることの裏で、傷つくものがある。
いつだって自分で決めてきたじゃない。郁未。
ＦＡＲＧＯに潜り込んだ時だって、お母さんが殺されたことを知った時だって、少年を見つけた時だって。

選ぶことは、捨てること。
指一つ動かさずに人を殺せる不可視の力ではなく、この重たい引き金を引く意味。
選ぶこと。それであってこそ、私はこの銃弾を放つことが出来る。
守ることも殺すことも、全て私が立てる誓い。
決意を、しよう。
私は――。
郁未の瞳に掛かっていた虚ろの影がスッと消えるとともに、再び光が灯る。全身に力がこもり、しなだれた右手が引き金の予感に軋む、手首が締まる。それは一見、かつての侵食される前の郁未のそれと同じように見える。人工の天然色で色付いていた。
「――――――わよ」
――――守るために、殺そう。
「ダメ!!」
間髪いれずに、観鈴のその返事が響いた。返事というより、叫びに近かった。
「だって、彼を殺さないと」
郁未は倒れている少年に目をやった。
「……彼が殺されてしまうわ」
「そんなことないよっ、往人さんがそんな人じゃないってことは、郁未さんも知って――」
「じゃあ、今の彼の姿は何？」
そういって、往人の姿を指す。
「既に血は流れている……これは紛れも無い現実なのよ」
観鈴はごくりと唾を飲み込んで、泣き出してしまいそうになるのを必死でこらえた。瞳だけは、ひるまずに郁未の目を見続けていた。
――――この子も、選ぶのかな。
「悪いけど、このまま放っておいてもいいのよ。それでも彼、死ぬかもしれないから」
ぎりっ、と我知らず観鈴が歯を食いしばる。
それを見て、郁未は不思議と笑みが零れた。

……なんか、誰かと似てるわね、と。

「助けたい？」

「………………………」

観鈴は無言で――――――逡巡の後に頷く。

ふと、感じたことがある。それはまるで私が彼女と魂で共振してるような、そんな親近感だ。それは何か超越的な……それこそ不可視の力のようなものに介在されているような気もするし、あるいは偶然がもたらしたこの状況にあるようにも感じられる。互いに誰かを、いや、たった一人の傷ついた男を守ろうとしている。互いに銃を携えている。互いに女である。互いに、ここに在る。まるで合わせ鏡のようだ。この共振はそのせいであるし、この反発もそのせいである。

私は、この子と重なれない。

でも、私はこの子を重ねている。

――――なんだろう、この子。

まるで、私の良心みたいだ。

別に正々堂々とやろうなんて気は無いけど。彼女がそれをやるというのなら、待ってあげてもいいかもしれない。それは彼女の心を挫いたことになるのだから、私の勝ち？　それとも――止めて欲しいの？

私は。

「――――撃てば？」

びくっと震えた。両手で握り締めた拳銃がカクカクと震えを伝える。

「その銃で私と彼を殺す。そうすればそっちの彼も生き残れるかもしれない」

観鈴は震える瞳で往人の姿を見た。傷ついたまま、まるで呼吸さえも止まったかのようにうずくまる彼の姿が目に痛い。答えも、与えてはくれない。

郁未は吸い込まれるように少年のことを見た。意識を失い倒れたままの黒い影。少年は黙したまま、

何も語らない――。
　煙が晴れていく。だが建物を包む炎は、次第にその勢いを増していく。いつ、この場を飲み込んでもおかしくない。
　時間は無い。
「選ぶことは、捨てること」
　迷うことを、否むこと。
　郁未はそう誰にとも無く言った。観鈴に言ったのかもしれないし、あるいは、自分に言い聞かせたのかもしれない。
　観鈴は硬く顔を強張らせている。逆転してしまった立場に恐怖していた。観鈴の立たされた状況は、先ほどまでの郁未のそれと酷似していたから。
　選びたくなんてない、こんなのイヤだ。でも、往人を殺されるのはもっとイヤだ。
　……じわじわと、両手が上がっていく。ゆっくり、ゆっくりと力がこもり、ひじが伸びていき、そして拳銃が自分の目の高さにまで上がる。

「――――いい子ね」
　口元の端をほんの少しつり上げて、郁未は穏やかな笑みを零した。
　観鈴は思わずそれに見とれた。なんていい笑顔なんだろうって思った。
　全ての方向にいい顔など出来るわけがない。思うだけなら高尚だが、実行しようとするならばそれは偽善だ。そんなものはもう通じない。何かを守るために何かを傷つけなければならないところまで、事態は進んでしまっている――そんなことは、もうみんな分かってると思う。でも、本当にそうなのかな。本当に傷つけあうしかないのかな。
　郁未の姿は、不思議に自信に満ち溢れて見える。左手を腰に当て、右手には拳銃。胸を張って、真正面を向いている。うらやましい。そんな風に、カッコよくいられるの。
　でも、やっぱり私にはあわないなって。

観鈴は拳銃を下ろそうとした。
「撃たないの？　——そう。じゃあ、そこまでね」
その言葉とともに撃鉄が落ちる。一瞬の刹那の後、轟音が耳を劈いた。

763　確信、そして……

スフィーの体の中を冷気が駆けめぐる。
そして、一つの影と二つの輝きは次第にその距離を狭めつつあった。
しかし、それは完全に重なる事はなかった。
「……邪魔者が来ておる」
相変わらず冷静な声が響く。
「お主も運のある奴よ」
スフィーは微動だにできない。
「その運の尽きるまで、せいぜい踊っておればよい。我が掌の中で」
捨て台詞を残して、その輝きはゆっくりと消えていく。
そして、その場には何も出来ずに立ちつくしたままのスフィーだけが取り残された。
やがてその地に新たな二つの影が現れるまで時間はかからなかった。

道の両脇に立ち並ぶ巨木。
そして道の上には数え切れないほどの死体。
その死体の群れに時折足を取られながらも、あゆはなお必死に足を進めている。
後ろを歩く千鶴共々、息はすでに上がっていた。
「あゆちゃん。いったい、どこまで行けばいいの？」
「よくわからない、けど……、すぐ近くのような気がするよ」
実は、千鶴も感じ始めていた。
背筋に感じるうっすらとした冷気を。
この先には〝何か〟がある。

それがあゆを急がせる理由なのか、はっきりとは解らないけれども。
二人が山道に分け入ってから何時間経っただろうか。
延々と続く道の向こうに何かを見つけたその時、
「あっ！」
図らずも、二人同時に声を上げた。
二人が見たものは、死体の中でただ一人立ちつくす少女。
ピンク色の髪が、周囲の景色とのアンバランスさを一段と際立たせている。
その少女へあゆが歩み寄ろうとした時、少女もまた地面に倒れ込んでしまった。
「……うぐぅ、だいじょうぶ？」
「……だめ……ここ……危ないから……逃げて……」
少女は、とぎれとぎれに話すことしかできないようだった。

764　凶刃

頂上部は、荒涼としていた。
再び巨木は姿を消し、祠のある岩場がぽつんと存在するのみである。しかも綿密に配置されていたであろう祭器の全てが、乱雑に転がっている。ある物は破壊され、ある物は転がり、既に封印の意味を為していなかった。
「ねえ、あゆちゃん……こういうのは、詳しくないのだけれど……危険な気がしない？」
遭遇後、すぐに気絶してしまったピンク色の髪の女性を背負い、その意に反して千鶴はここまで来ていた。あゆの意思を尊重するという方針を、今になって曲げる気もなかったからだ。
「……お化け出そう……ででで、でもでも、ここ、この中なんだよっ！」
右手と右足を同時に出し、なんば歩きで祠に突進

するあゆ。顔は仮面のように強張っている。それを見て苦笑しつつ、スフィーを安定した岩場に寝かせた千鶴が後を追う。
半ば破壊された祠は、とくに大きなものでも立派なものでもなく、ただその効力だけを期待されていたのだろう。すぐに封じられていた物品が発見できた。
それは、ひとふりの刀。以前の大会で振るわれ、参加者のうち四割と、その使い手を殺戮した凶刃。だが今は、静かに薄青く輝くのみだ。
もちろん、そんな事を知る由もない二人にとっては、ただの刀。場の雰囲気が、それを不気味なものに見せてはいるが、それ以上ではあり得なかった。
「……これが、あゆちゃんを呼んでいたの？」
「うん……たぶん」
なんとなく釈然としない気分で、二人は首を捻っていた。
「呪いの品ね」
ほどなく意識を取り戻したスフィーが、背後からなんの予兆もなく、不吉な事を口走る。
「わわわっ」
「きゃっ」
二人で持っていた刀を、思わず同時にお手玉する千鶴とあゆ。
「もう、大丈夫よ。〝元〟呪いの品、〝現〟魔法の品、だからね」
見かけも大きさも全く違う二人が、親子か姉妹かのようにシンクロしているのを笑いながら、スフィーが訂正する。
「それに、わたしの目的も見つかったわ。もうほとんど消えているけれど、ここに〝居る〟のね……」
穏やかな表情で、刀を抱くスフィー。きょとんとした表情で、その仕草を見守る千鶴とあゆ。
再び笑って、それからスフィーは考える。
「そうだ、説明しなきゃね。うーん、何から言えばいいのかなー……？」

込み入った事情に予測を挟んで、スフィーが現状から推理した結論は以下のとおり。源之助の魔法により、神奈のみならず神奈の封印も攻撃された。それは神奈の意図による現象なのか、魔法自体がそういうものなのかは解らない。その際に神奈の中の、突出した強い意識——すなわち悪意——は封印された刀の中から抜け出る事が出来た。
先ほどスフィーを襲った輝きは、悪意の顕現に他ならない。その悪意を封じ込めていたからこそ、刀は強力な呪いの品であり、今は意識を封じる力はあれど、ただの刀にすぎない。
「あの、スフィーさん……ちょっと、待ってくれる？」
千鶴が苦痛に耐えるかのように目を瞑り、こめかみに手を当てて、しかめっ面でスフィーの説明を止める。
「ハイどうぞ」
「スフィーさん達が先日接触した神奈という存在は、封印されていても大暴れしたのでしょう？」
「そうだね」
「そんな存在の、悪意の部分が抜け出てどこかへ消えたというのは、拙いのではないかしら？」
「そうだね」
「しかも、あなたを取り込もうとしたという事は、実体を得て行動しようと考えているのよね？」
「そうだね」
「そうですか」
「そうだね」
「……」
「……」
「……うぐぅ」
淡々とした口調で語られた厳しい事実に、がっくりとうなだれる千鶴とあゆ。それを気にしているのか気にしていないのか、スフィーはとにかく説明を続ける。
「だけど、あのとき暴れなかったという事は、神奈

はまだ万全ではなかったのだと思う」
先程の悪寒を思い出したスフィーは体を身震いさせる。万全だったらどうなっていたのだろう。
「全ての意識を統合できた訳ではないみたい。彼女が〝消えた〟と言っていた他の意識も、この刀の中で微弱に残っているみたいだし」
「そうだね、聞こえるよっ」
ころりと表情を変えて、あゆが笑顔で賛成する。あゆを呼んだのは、神奈の残された善意なのだろうか。
唯一漠然とした感覚でしか捕らえられない千鶴は、ほとんどお手上げ状態なのだが、一応の確認を取る。
「それで……出て行った神奈は今どこに行ったと思いますか？」
これには流石にスフィーも考えこむ。
「……たぶん、自分が取り憑ける誰かのところだと思う。例えば、自分との繋がりが強い人。もしくは、死んでたり意識を失ってる人とか。そんなところかな？」
不思議現象の理解に苦しみながら、千鶴はなんとか噛み砕いて理解する。
「あまり限定できていない気もするけれど……あと一つだけ。もし、その神奈に出会ったら、どうすれば良いの？」
――沈黙。
「あなたには、解っているのでしょう？」
「……うん」
溜息、ひとつ。
いや、スフィーのものと合わせて、ふたつ。
「……私にも、想像がつくわ」
「物品の中に隔離できたら、あたしでも封じられると思う。他に芹香っていう黒魔術師や往人っていう法術師もいるし。後はＣＤを集めて魔法陣を起動することができれば……」
二人で空を見上げる。
虚空を舞う神奈を睨むように。

いま可能な対処方法は、一つしかない。
実体のない神奈に対して可能な処方は――斬る、ことだ。
この刀で、彼女の存在そのものを斬る。それしか神奈を抑える術はない。
もちろん、意識だけが浮いている状態でＣＤによる攻撃をかけても、神奈は滅ぼせるかもしれない。それは、期待でしかないのだが。

「あら？」
数瞬の後、千鶴が少し驚いた顔をスフィーに向ける。
「ん？」
「ＣＤの存在、あなたも知っているのね!?」
「うん。三枚持ってる人と一緒に居たから。岩山の施設でしたっけ？　確かそちらに向かってたから、そのうち辿り着くんじゃないかな？」
「それなら神奈が、誰かに取り憑く前に処置できそうね」
にこりと笑う千鶴。
一抹の不安に眉をしかめるスフィー。
「そうだといいけど……」
「……？」
北川はちゃんと目的地に着いているのだろうか。

「ああ、それから！」
「はいー！」
固まりかけたスフィーにネタを振る千鶴。
「芹香さんと、知り合いなの？」
「ええ……と言っても、この島に来てからの知り合いだけど」
「何度かお話した事があるんだけれど、物静かな、いい娘よねー」
「物静かな……うりゅ……」
「……？」
芹香は、いま。

「それで！」
「はいー！」
再度硬直するスフィーにネタを振る千鶴。
「今ごろ、私の妹の梓が芹香さんのところに向かっているはず」
梓は、いま。

765　母

「撃たないの？　じゃあ、そこまでね」
そして、銃声が響いた。
弾丸を受けてよろけたのは、郁未。
撃ったのは——
「観鈴ッ！　伏せときや！」
「お母、さん……？」
——神尾、晴子。
時間は少し遡る。

それは放送を聞いて晴子が喫茶店を発ったあと。
放送とおかしな声に導かれ、辿り着いた先には死体が二つ。
（な……どういうこっちゃ、これは）
手近な建物に隠れ、しばらく様子をうかがった。
そこに現れたのはあの名も無き少年。
その少年が、死体から首を切り取って持ち去るのを見た。
（首？　何をする気なんや、あいつは）
なんにしろ、彼が危険な存在であることは間違いないだろう。
やはりあの少年は敵だったのだろうか？
観鈴も彼に……殺されたのだろうか？
（いや、まだ解らん。勝手に決め付けて絶望するのはもうええわ。この目で確かめる。まずはそれからや）
晴子は、唯一の手掛かりである少年を追った。
迷い、見失い、爆音と煙を目印にホールを昇る。

再び少年を見つけたときには二人の男は倒れ伏し、一人の女が立っていた。
「――郁未さん！」
そして、そこに観鈴が現われたのだ。

郁未と観鈴が語りはじめたのを聞いて、とりあえず飛び出すのはやめた。
(観鈴があんなに執着するなんて、いつの間に仲良くなったんやろ)
しかし、今は銃を向け合っている。
殺し合おうとしている。
(観鈴は……小さい頃からひとりぼっちで、ずっと苦しんできた。友達だって片手の指で数えられるほどしかおらん。なのに、それでも殺し合えっちゅうんか)
やがて、観鈴が残酷な二択を迫られる。
『その銃で私と彼を殺す。そうすれば、そっちの彼も生き残れるかもしれない』

郁未が、そして観鈴までもが引き金を引こうとするのを見て、たまらず晴子は発砲した。
銃撃をその身に受け、郁未はよろける。
「観鈴ッ！　伏せときや！」
「お母、さん……？」
観鈴のほうは、本当に発砲する気だったのかは解らない。
だが、もし撃つ気だったのなら、友達をその手で撃ったという事実はいつまでも観鈴を苦しめるだろう。
撃たなければ往人が死ぬ。どちらにしても観鈴は苦しむしかない。
(あの子は、なんでも一人で抱え込んでしまうからな……)
郁未は体勢を立て直すと、晴子に向かって散弾を撃ちこんだ。

散弾が晴子の隠れた壁の端を削り飛ばし、その破片で一瞬晴子の視線が遮られる。
その隙に郁未は少年を背負う。
晴子は舌打ちした。煙と破片に紛れ、壁の影からでは郁未を狙う事が出来ない。

（あの子はもう充分苦しんだ。それでもまだ苦しみが避けられないというんやったら、ウチが観鈴の代わりに苦しんだる。ウチが観鈴の代わりに手を汚す。エゴと言われても、過保護と言われても、自己満足と言われてもかまわへん。それで、観鈴がいつか笑ってくれるのなら――）
「ウチはエゴイストにでもなんにでもなったるわ！」
晴子は物陰から飛び出すと、郁未に三度発砲する。一発は外れ、残り二発は背負われた少年に命中し――そしてあらぬ方向へ弾かれた。９㎜ショートでは偽典に対して力負けしてしまうのだろう。だが、晴子はそんな事を知らない。郁未は振り向き様にベネリを撃つ。晴子は物陰に転がり込んでなんとか回避する。
やがて、回り始めた煙に紛れて、郁未は後退していく。
そして後を追おうとした晴子を牽制するように、一発、二発と散弾を撃ちこんだ。
晴子がなんとか階段まで辿り着き、下の階を覗くと、ちょうど郁未はこちらに銃を向けているところだった。
手すりが吹き飛び、晴子はそれを避けようと大きくのけぞって後ろに転がる。
もう一度覗いたときには、もう郁未の姿は見えなくなっていた。

（行ったか。……あとは、炎に巻かれる前にここを逃げ出さな）
振り向くと、観鈴がすぐ近くで晴子を見つめてい

た。
「お母さん……」
「観鈴……無事でよかった……」
晴子は観鈴を抱きしめたかった。だが、今は出来ない。
まだ自分には、郁未を――観鈴の友と呼べる人を撃った、その硝煙の匂いが立ち込めているから。
「なんや言いたいことがあるのはわかる。……文句は後で聞くわ。とりあえずは、居候をなんとかせんとあかんやろ」
「う、うん……そうだね」
ぱたぱたと往人の元へ駆けていく観鈴を見て、晴子は思う。
この先、観鈴が心から笑える日が来るだろうか？
「……それにはまず、生き残らんとな」
炎はますます盛っている。余裕はあまりない。
晴子は懐から包帯を取り出すと（耕一を手当てした余りだ）、往人のほうへ歩き出した。

ホールを逃げ出した郁未は、少年を背負ったまま街の裏通りを駆けていた。
「盾代わりにして、悪かったわね」
未だ気を失ったままの少年に話しかける。
（こいつを護る）
それが神奈の意志なのか、自分の意志なのか、もうはっきりとは解らない。
だが、浸食される前の自分は。
（こいつのことを大切に思っていた。愛していた。それだけは確か）
ならば、それでいい。
神奈など私は知らない。
自分の意志で、こいつを護る。
それでいい。
観鈴、そして耕一……今まで出会った人たちの顔が、浮かんでは消える。
なぜ、私は観鈴を撃たなかったのだろう。
期待していたのかもしれない。自分を止めてくれ

る事を。
（……でも、次に会ったときは、もう殺さなくてはいけない）
それを思うと、まだわずかに胸が痛んだ。
（もう銃で撃たれても痛みを感じないのに、そんなことで痛みを感じるなんて）
それはきっと、まだ自分の心が残っている証なのだろう。
ならば、それでいい。
この痛みもまた、私なのだから。
自分の意志でこいつを護っていける。
それは幸せなことなのだから。
気がつけば空は夕焼け。街並みをただ赤く照らしていた。
それは禍々しい血の赤とは違う、どこまでも穏やかな赤だった。

766 contradiction

「よっしゃ！　これでどうだ！」
Ｇ．Ｎ．が声をあげた。
するとメインモニターには「二十九番　北川潤」という文字と一人の少年が制服にカレーの汁を飛び散らせながらカレーうどんをすすっている写真が映し出された。
「どうだ！　参ったか！　ワシにかかればこの程度のこと朝飯前よ！」
コンピュータから自慢げな声が漏れる。
「こいつがＣＤをもってるわけ？」
「ああ、残りの三枚。全部この坊主が持ってるみたいだな」
「ふ〜ん、そうなんだ。じゃあそのひとをさがせばいいわけね」
「お嬢。『ありがとう、Ｇちゃん。あなたは素晴ら

しいわ！』くらい言えないのか。人が折角やってやったのに」
「ふみゅ〜ん！　なんでわたしがそんなことといわなきゃいけないのよ〜！」
「まぁ、それは冗談だけどな。あ、そうそう。お嬢ちゃん」
「なによ〜」
「ワシが起動する前に誰か知らないが参加者が島中に向けて放送をしてたが、そのこと知ってるか？」
「なんのこと？」
「あらら、やっぱり聞いてなかったか。ま、ワシの記録データに残ってるから聞かせてあげようではないか」
「いいわよ、べつに」
「遠慮するなって。う〜ん、やっぱりワシはいい人だねぇ」
「だから、いいっていってるでしょ〜！」
「それではスタート！」

『――心当たりのある者は、是非とも名乗り出て欲しい。その知識と、能力に期待する！』
「うわぁ！　すごい！　これでわたしたちかえれるんだ〜！」
放送を聞き終わった詠美は興奮した口調でそう言った。
「……おいおい、お嬢。それ、本気で言ってるのか？」
G．N．が呆れたような声を出した。
「なにいってるのよ、いまのきいたでしょ！」
「あ〜、お嬢。君はあの放送が何かの罠だとかそういう考えは持たなかったのか？」
「へ？」
「ハァ〜。やれやれ……」
「な、なによ〜！」
「この島で三日も生き残っているなら、普通はそういう考えに行き着くと思うぞ」

「ふ、ふみゅ〜ん……」
「お嬢。一言だけ忠告しておくが、そういう甘い考えは捨てないと間違いなく死ぬぞ」
「で、でも！」
「現にこの放送をした場所に三人いたんだが、そのうち二人はもう死んでるぞ」
「……」
「殺したのは残った一人のようだし、あの放送で出てきた奴を殺すつもりなんだろうな」
そこで一旦言葉を止めた。
詠美は言い負かされたのが悔しいのか既に涙目になっている。
「この島はそういう島なんだよ、お嬢。生き残りたかったら他の奴を殺すのが手っ取り早いしな」
「どうしてそういうことというのよ！」
「どうして、と言われてもなぁ。ワシが何か間違ったこと言ったか？」
「ふみゅ〜ん」
「ほれ、ワシとそこのロボットはCDの解析をしなきゃならんから。お嬢はあっちの子供の所にでも行ってきなさい」
子供をあしらうような口調でG．N．がそう告げた。
「ふみゅ〜ん！　むかつく〜！」
「みゅ〜！」
「にゃ〜……（いっそ殺してくれ……）」
「なによあいつ〜！　ちょっとあたまいいからってなまいき〜！」
「みゅ〜？」
「ばっさばっさ（ぽち君、何かあの子、僕たちの方を見てるんだが）」
「しゃ〜、しゃ〜（逃げた方が良さそうね。あいつみたいになりたくないし）」
「ばっさばっさ（賛成だな）」
「やっぱりコンピュータに、にんげんのきもちなん

かわかんないのね」
「みゅ〜♪」
「あ〜！　むかつく〜!!」

「お〜い、とっとと始めるぞ」
ワシはＣＤの解析を始めようとロボットに声をかけた。
「あ、あのですね」
「ん？　何だ？」
「どうしてあんな事言ったんですか？　詠美さんが可哀想ですぅ」
「ワシは事実を言ったまでだぞ」
「でも……」
ロボットは、まだ何かを言いたそうな様子だった。
「お前さんもロボットらしからぬ考えを持ってるのう。そう言えばＨＭＸ—12には感情があるらしいな。その影響か？」
「わ、分からないですぅ。スミマセン〜」

「ま、そんなことはどうでもいい。とっととＣＤ解析始めるぞ」
「は、はい〜」
「んじゃ、まずお前さんが解析した分のデータをよこせ」
「分かりました〜」
あ〜、そろそろ放送の準備も始めにゃならんなぁ。
同時進行で進めておくかな。
……にしてもワシも何であの嬢ちゃんにあんなこと言ったのかね。
プログラムされたこのゲームを取り仕切る、という任務からすれば、ああいう忠告を参加者にするのはよろしくない、と論理的に出てるんだがなぁ。
前に起動したときにはこういう思考矛盾は出なかったはずだけど、おかしいな。
何ぞバグでもあるのかねぇ。
後から調べてみるかね。

767　糸口

「我々は手を組んで立ち上がるべきなのだ!!　我が意に賛同する者は、学校に集って欲しい。そして我らが希望に反する者どもよ、決着をつけようじゃないか!!」

　島の最北にある灯台。その、最深部の管制室に人影が二つあった。

「蝉丸さんだね……」

　手近にある椅子に腰掛けながら七瀬は呟く。

　その言葉に晴香は無言で頷く。

『学校は、市街地南部に広がる山の東側にある！　街から山を見て、その左だ。繰り返す。学校は市街地の南にある山の東だ!!』

「学校？　そんなもんが、この島にあるの？」

　同じく適当に座った晴香が七瀬に尋ねる。

「あ、うん。まあね。私は行ったことがあるけど……」

　そう言って、七瀬は曖昧に微笑む。

　晴香はその表情と言葉のニュアンスから触れられたくない話題だと察し、それ以上突っ込んだ話は聞かなかった。

（死体を見て『ギャー』って悲鳴はないわよね。乙女として……）

『恐らく既に知らぬものはいないだろうが、我々の中には多くの異能者が存在する。中でも現在求められているのは〝魔法使い〟だ！　心当たりのある者は、是非とも名乗り出て欲しい。その知識と、能力に期待する！』

「異能者と魔法使いねぇ……。そういえば、一応、

晴香も異能者なんだよね？」
「一応って、まあ不本意ながらね……」
晴香がＦＡＲＧＯに入信したのは兄を捜すためであり、『不可視の力』を求めてではなかった。
『不可視の力』は兄が失踪する原因の一端を担った忌まわしい物。それなのに、自分が使うようになったことは運命とは皮肉なものだと彼女は思っている。
「そういえば、あんただって、なんか特殊な力があるんでしょ？」
晴香のその言葉に七瀬は大きく首を横に振る。
「まっさかー。私は普通の女子校生よ」
（普通の女子高生が鉄パイプやポン刀をブンブン振り回すの……）
晴香はジト目で七瀬を見ながら、彼女の『普通』という言葉を信じないことに決めた。
放送が終わり、二人は改めて管制室を調べた。
いくつものモニター、いくつもの端末。
そして、数多くあるスイッチ類。
コンピュータ関係に疎い二人は無闇に端末に触ることはせずに、まずはスイッチに書いてある文字を読んでこの施設の特性を把握しようとした。
「こんなことだったら北川を連れてくるんだったわ。あいつコンピュータに強いし……」
「Emergency Callか。きっと、非常警報のボタンみたいなものね」
もっとも、それらは欧文で書かれているために、ごく簡単な英語で書かれているものしか解読できなかったが。
「ちょっ、ちょっと七瀬、来て」
部屋の隅にある端末を調べていた晴香が興奮した声で手招きをする。
「なに？」
そして、晴香が指さしたボタンは他のものと違い、プラスチックの封で覆われていた。
簡単に使えないように、封を割らなければ押せな

いようになっている。それだけ重要なボタンだということだ。
「ふえー、なに、このボタン。さーふぇいす、とぅ、えあー？」
「Surface-to-air　日本語に訳すと地対空」
七瀬はその意味を察し、ギョッとする。
「えっ！　だとすると、これ……」
「そう、ミサイルよ」

二人はしばし言葉がなかった。
いくつもの銃器や数多くの管理者側の兵隊を見たが、まさかこんなものがあったとは……。
このプログラムは本当にただの金持ちの道楽なのだろうか？
そんな事が彼女たちの頭に浮かんだが、真相を予測することは、まず不可能であろう。
「これで、脱出の手段が一つ増えたわね」
晴香の言葉に七瀬は首を傾げる。

「どうやって？　まさか、あれに乗っていくとか言わないでしょうね？」
その的外れの言葉に晴香は『ふう、やれやれだぜ』、と言わんばかりに肩をすくめる。
「なに、頭あったかいこと言ってるの？　そんなわけないじゃない！」
「じゃあ、どうるのよ」
くちびるを尖らせて七瀬は反論する。
「いい？　この島がどこにあるか知らないけど。地球上にあるのは間違いないわね」
「当たり前じゃない」
「じゃあ、どこの国とも分からないミサイルが発射されたら、今の地球ではどうなる？」
「そりゃ、近くの国か、某大国が調べに……そうか！」
「そう、地面にＨＥＬＰかＳＯＳを大きく書けば、救助が来る」
出来の悪い生徒がようやく解答を導き出したこと

に、晴香は満足そうに頷いた。

思いがけず潜水艦以外の脱出法を二人は見つけた。だが、脱出の選択肢は多いにこしたことがないので、さらに探索する事を決めた。

そして、通路を先に進む。

管制室に人がいなかったからこの施設は無人かもしれないが、二人は慎重に懐中電灯を点けず、警戒して歩いていく。

「なんかジメジメしてきたわね」

「この先かしら、潜水艦は」

「そうね」

そう小声で二人は話し合う。

初期の目的である潜水艦を見つけることが出来そうなので二人の足取りは軽い。

やがて、潮の香りが匂い始め、狭い通路が終わった先には岩場をくりぬいたような天然の港があった。

そして、そこに一隻だけ係留されていたのは、

「あ、あれ？」

「なに、あのへちょいの⁉」

長さが二十メートルにも満たない丸く小さな潜水艇だった。

意気消沈する二人だったが、せっかくここまで来たのだから、と調べてみることにした。

「なんだか、三人か詰めて四、五人ぐらいまでしか乗れないわね」

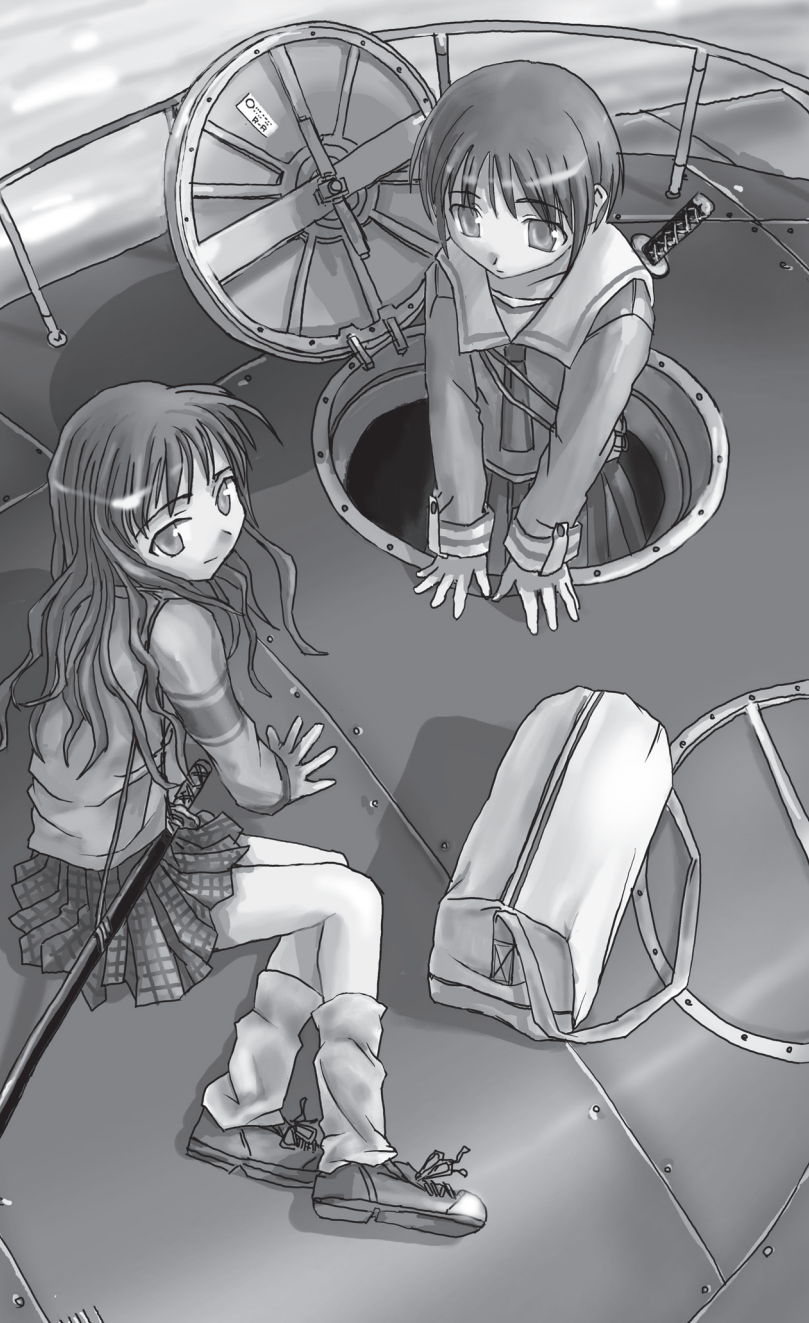
「でも、そんなに乗って空気は保つの？」

上部にあるハッチを開けると見かけ以上に艇内は狭かった。本来は二人乗り用なのだろう。

「えっと、動かすのは、どうすんだろ……」

「ちょっと、あんた。適当にスイッチを押さないでよね」

七瀬は操縦席を見渡したが、車の免許すら持っていないので、もちろん動かし方など分かるはずもない。

「分かってるわよ。ちょっと見てるだけだってば。

って、晴香押さないでよ」
「狭いんだからしょうがないじゃない」
「しょうがない、って言っても……きゃ！」
晴香に押され、七瀬は操縦席の右側にある黒いパネルを押した。
すると、
「指紋、照合できませんでした。お手を拭きになって、もう一度お願いします」
と、艇内のスピーカーから無味乾燥な音声が聞こえた。
「……出るわよ、七瀬」
「えっ？　あ、うん」
その合成音声の意味を理解した晴香はため息をつき、艇外に出ていった。
今までの通路をたどり、二人は灯台の入り口に戻ってきた。
もちろん、地下への入り口は開けたままである。
「ま、かなりの収穫はあったわね」
二人は久々に浴びた陽光の下で大きく伸びをする。
「そうね。でも晴香。あいつ、言うことが大げさだったね。潜水艦って言うから、みんなが乗れるぐらいのものかと思ったのに」
「まあ、あいつは物事を大きく言うのが好きそうだし。まあ、小人にありがちね」
そう言って、晴香は歩き出し七瀬も続く。
二人は別の所にある潜水艦ＥＬＰＯＤの存在を知らない。
「それに、あの船動かせないし……やっぱりミサイル撃つしかないのかな」
「でも、あれを動かす手は、あるにはあるんだけど……」
「手って。どんな手？」
七瀬が身を乗り出して聞く。
「手を持ってくる手」
「はあ？」
「あれのキーロックをはずせそうな人の手を持って

来るのよ」
「げ！」
　そして、二人は脱出についてあれこれ話しながら、事の成果を皆に話そうと学校へと向かった。
　呼び出した本人が、既にこの世にいないことも知らずに。

768 The day will birth again and again.

　風が吹いていた。ここ数日の暑さとは裏腹に、今は若干の肌寒さを感じる。夕暮れの海から吹き付ける微弱な風が、わたしの心まで、くるくると回す。風車が回るように。風鈴が鳴るように。弱い風は、――吹き付けることを止めようとしなかった。
　夕陽を背にして七瀬彰が立ち尽くしている。わたしは眩い夕陽も目に入らず、ただ目の前の愛しい人のことを見ている。西の空。この焼き付くような赤い空の下で、わたし達は再び、逢う事が出来た。自分に背を向けて立ち尽くして、言葉一つ発することなく七瀬彰は立っている。見るも無残なぼろぼろの姿で、そのくせ何も苦痛を感じていないように背中を見せて――屹立していた。
　風の冷たさとは関係なく、わたしの背中に寒気が走っている。そしてわたしは今、この寒気の理由をはっきりと理解している。自分の今感じているものの正体について完全に把握している。
　寒気の正体が「これ」である以上。
　わたしに出来る事は一つだけだった。

　当然僕は、背後に近づいてくる何者かの気配に気付いていた。鋭敏さを極め切った感覚は、それが誰であるかという事も手に取るように判らせた。感覚だけの問題ではない。ここにやってこれるとすれば、彼女以外には有り得ないとも思っていた。
　この思いを愛と呼ぶのは止めようと思う。

夕陽が眩しかった。赤く穏やかな光は、まるで僕の顔を見て哂っているようで、ここまでに僕が犯した愚行を嘆いているようで、僕たちがやってきたこと全てを見て泣いているようで、どうにも決まりが悪かった。太陽はずっと、僕のことを見てきた。
僕は振り向くことが出来なかった。顔を見たら泣き出してしまいそうだった。けれど、振り向かなければならない。この赤く染まった空の下で、僕は彼女に、柏木初音に送らなければならないものがある。
――逃げなんだとは判っているけど。
僕は君に『最後の言葉』を贈ろう。
ごめんね。ずっと護ってあげるって約束したけど、もう、約束守れないね。守る資格もないし、守る勇気も僕にはない。だから、君にあげるんだ。
弱い風が僕の身体と心に吹き付ける。僕は自分を見つめ続けてくれた太陽に、小さなウインクをして見せた。不器用なウインクは、きっと太陽には届かなかったんじゃないかと、後になって思う。

僅かの沈黙の後、躊躇うような素振りを見せながらもゆっくりと振り向いた七瀬彰は、鼻の頭を掻きながら、少しだけ微笑んで言う。
「よく、ここが判ったね」
こくりと頷いて、わたしはぎゅっと自分の両手を胸の前で絡め合わせる。まるで祈るような姿に見える。祈っても何も解決しないことは判っているし、そんなつもりで手を絡めたわけじゃない。
心に、勇気を。
「そういえば、初めて出会った場所にすごく似ているね、ここ」
彰はこちらを向いたけれど、自分の顔は見ていないようだった。自分の後ろの何もない空間を見て喋っているように見えて、初音は戸惑う。しかしすぐに理解。彰もまた、自分と向き合う勇気を振り絞ろうと必死なのだ。よく考えてみれば自分も彰の顔をまっすぐに見ることができていない。
心に、勇気を。

「でも実際は全然違う。あの時は昇りゆく朝陽を見ていたけど――今見ているのは、沈みゆく太陽だ。――考えてみれば、とっても短い時間だったね」
二人の間には手を伸ばせば届くほどの距離しかない。けれどどちらも歩み寄ろうとはしない。この距離が自分と彰の距離なのだ。高い崖の上、森と暗い空間を背にしたわたしと、海と赤い空を背にした彰。
「太陽が昇って沈む。その程度の、短い時間しか、僕たちは一緒にいなかったんだね」
わたしはやっと口を開く、
「でも、すごく楽しかったよ」
「僕も、楽しかった」
彰はわたしの声を聞くと、少しだけ笑ったように見えた。錯覚ではないと信じたい。
「――でも、終わりだ」
彰は手を伸ばしてわたしの肩に手を置いた。
「これ以上一緒にいる事は出来ない。僕の心はだんだんおかしくなってきている。こうやって君の傍にいるだけで、君の事を傷つけてしまいそうなんだ」
彰は笑う。すごく空虚な笑みで、わたしの目を見ようとせず、そんな風に言った。
「僕は君の盾になりたかった。君の事をずっと護っていきたかったけど、それも無理みたいなんだ。僕はもう死ぬつもりだ。君の事を傷つけて、殺してしまう前に。自分で始末をつけようと思った」
わたしもまた、彰の顔を見ていなかった。わたしは彰の背後に広がる海と空を見ていた。鳥の一羽も飛んでいない、雲の白と太陽の赤だけが輝く空だった。ただ、彰の吐く言葉だけを、砂を噛むようにして心で咀嚼する。
「何となく、僕らがここに集まった理由が判った。僕達は日が昇る場所で出会った。そしてほら、太陽が沈んでいくだろう？　――きざなことを言えば。この太陽と同じように、僕らの邂逅も終わりを迎えるべきなんだ」
そして彰は目を閉じ、言葉を止めた。

寒気の正体は、やはり。
彰が死ぬことへの恐怖だったのだ。

僕は目を閉じる。目を閉じて、一本だけ残った勇気の矢を握り締め――それを初音の胸にぶつける覚悟を決める。目を開き、逸らしていた目を初音の目に合わせる覚悟を決めた。
「さよならだ、初音ちゃん」
言うべき事は、彼女に送る最後の言葉だった。彼女がこれから、しっかりと生きていくために言わなければならない事だ。
勇気の矢を、僕は言葉にした。
「本当は――言うべきじゃないかも思ったんだけど」
言わなければならない。それが僕にとって身を切られるような嘘でも。どうせ僕は死ぬんだ。どうして傷つくことを恐れなければならない。
「君の事好きだと言っただろ。あれ、嘘だよ」
大好きな人に嘘を吐くのは。――そうすべきべきだと自分に言い聞かせても、すごくすごく嫌だった。
「君に新しい日常をあげるとも言っただろ？　言うまでもないけどさ、あれも嘘だ」
君は聡明な子だから、僕の言葉の意味もすぐに理解できているだろうと思う。
「君を利用しただけさ。貧弱な僕なんかがなんとか生き残るためにはね、そうでもしなくちゃどうにも出来なかったのさ」
君は聡明な子だから、僕のこの言葉がただの嘘だという事もすぐに判ってしまうのだろうと思う。
「大体さ、僕が君みたいな子供を相手にするわけがないじゃないか。ロリコンじゃあるまいしさ」
そして何より、君はすごく優しい人だから。嘘だと判っていても傷ついてしまう、優しい子だから。
「本当はこんな事言わないでさよならした方が、卑怯者の僕には相応しかったかもしれないね」
自嘲の笑いは、きっとそれは嘲笑の笑みとそれ程

違わない、虚しくて無様な笑いになるだろう。
「最後まで素敵なお兄ちゃんでさよなら。考えるだけで笑えてくる。茶番劇だね」
僕は自嘲気味に笑う。まるで彼女を嘲笑うかのような笑顔に見えていると思う。
「それでも、まあ、最後だから本当の事を言っとこうと思ったんだ、せめて最後くらい正直者になってさ」
初音ちゃん。君にどうしても言いたい言葉があるんだ。誰よりも優しい君に言いたい言葉が。けれど、けして言ってはいけない言葉なんだよね。言ってしまえば僕は今度こそ——最低になる。
「まあ、君がそんな事考えるわけがないとは思うけどさ。僕が死んだ後、後追いとかはやめてくれよ？」
人は、強くなくちゃ生きていけない。弱い人は、生きていく事も許されない。それはこの島だけじゃなくて、すべての場所で適応されるルールだ。
「そういうのって気色悪いんだよね。っていうか、君みたいなのに後追いされても何も嬉しくないんだ。勘違いで人のこと好きになって、勘違いで死ぬなんて馬鹿馬鹿しくない？　はは」
だけど。人間ってさ、優しくなければ、生きていく価値はないんだよ。君はすごく弱くて、これからの人生で苦労したり挫折したりすることがあると思う。けどさ。君以上に生きる価値のある人間なんていない。絶対に。絶対にいないんだ。
「まあ、そういうわけだからさ。君の事なんて好きでも何でもなかったけど、まあ、やっぱ結構な時間一緒にいたわけだから、情も少しはある。はは、卑怯者のくせに勝手な奴だなー僕は」
生きて欲しい。生き残って欲しい。優しさなんて覚えていない僕なんか忘れて、優しさを周囲に振りまいて、生き残ってほしい。
「こんな僕の事なんか忘れて。それで、——まあ、生き残ってくれると嬉しいかな。騙されて騙されて

騙され通して、そいで死ぬなんてのは流石にちょっと可哀想だしね。うわ、中途半端なところで罪悪感だよ。僕は相変わらず最低だな。――ま。僕はきちがいになる前に死ぬ事にする。君を殺す前に死ぬことにするよ。さ、判ったら行って。耕一だって怪我してるし、手当てしてやらないと大変なことになるよ」

君が生き残れば、それがこのくそったれゲームに対しての最大の勝利になるんだ。

「早く行けよ！　僕が死ぬところなんて見たくないだろ？　崖から飛び降りてぺちゃんこのトマトになった姿なんて見たくないだろ？　気持ち悪いだろ？」

――言わないといけない事はすべて言った。言ってはいけないことも言わないで済んだ。

微動だにしない初音をこれ以上見つめることがつらかった。もうどうでもいいや、そういう素振りを見せて僕は彼女に背を向け、赤く広がる空を見た。あと五歩。それで僕はこの赤い空と海の間に落ちていける。それはやっと訪れる解放だと思った。

「死ぬところ見るなって言ってるだろ？　僕のこと一時でも好きだったんならひとつくらいお願い聞いてくれよ」

最後にそう言って、目を閉じる。初音が歩き去ったあとで、僕は中空に身を放り出そうと思う。まだ初音は動かない。まるで動かない。もう何も言わずに待とうと思う。時間が過ぎれば、彼女はきっと自分の想いを汲み取って、歩き去ってくれると思う。初音は動かない。僕は溜息を吐きつつ座り込み、初音が去るのを待つ。早く行ってくれ。早く。僕はただ、その時を待つだけなんだ。

僕が通算三度目の溜息を漏らした、その時だった。今までずっと黙り込んでいた初音の、囁くような声が聞こえた。

「————————————————いいよ、殺しても」
確かに、そう聞こえた。意味が理解できなかった。
振り返り、その表情を見る。初音の表情は。
——完全なる決意に満ちていた。
「いいよ、殺しても。彰お兄ちゃんは、わたしを殺してもいい」
僕は溜息を吐いて立ち上がると、ゆっくりと初音の傍に寄っていった。大きな瞳は少し涙ぐんでいるようにも見えたが、それは恐怖の涙でも、失望の涙でもなく——
勇気の涙に見えた。
「人の話、聞いてなかったの？　殺したくないんだよ。もう何人も人を殺した。けどさ、君みたいな人のいい奴は殺してない。まだ僕は死んだら天国に行けそうなんだよ。殺したくないから死ぬって言ってるのに、何で殺してもいい、とか言うのさ。わっけわかんないよ」

「馬鹿だよ、彰お兄ちゃん」
初音は笑っていた。まっすぐに。まっすぐに——わらっていた。
「どっちがつらいと思う？　大切な人を失くして生きていく事と、大切な人に殺される事」
僕は目を細めて、その言葉の真意を確かめるように息を吐く。
「何を……殺されるほうが嫌に決まってるだろ——」
「だから彰お兄ちゃんは馬鹿なんだよ。わたしにとってはね、死ぬことなんかより彰お兄ちゃんを失くす事のほうが余っ程、嫌なんだ」
わたしは、呆然とした顔をした彰の顔を見つめて、少しだけ笑った。勇気の矢が形を成して、わたしに力をくれる。わたしはまっすぐに彰の目を見つめ、まっすぐに言った。
「彰お兄ちゃんがいなかったなら、きっとわたしは

ずっと前に死んでいたよ。誰かに殺された、って意味じゃない。もし彰お兄ちゃんに逢うのがもう少し遅かったら、わたしの心は死んでいたと思う」

　喉が涸れて、上手く声が出ていない。ちゃんとわたしの言葉は通じているだろうか。落ち着け。言いたいことはまだ、終わっていない。

「彰お兄ちゃんは、すごく優しかったから。震えているだけしか出来なかったわたしを、抱きしめてくれた」

　沈黙が訪れる。彰の顔は迷いに満ちていて、まだわたしが言ったことの意味を考えることに精一杯なのだと思う。彰は俯いて、俯いたまま言葉を吐く。

「抱きしめたのも、好きだといったのも、全部嘘だと、そう言っただろ」

「彰お兄ちゃんは、嘘吐くのが下手なんだよ。それにね、さっきのが嘘じゃなかったとしても、わたしは、どうしても彰お兄ちゃんの事が好きみたいだから。――わたしは、彰お兄ちゃんが好きなんだよ。――傷つけてもいい。殴っても蹴っても、殺してもいい。でも、どうしても死なないで欲しい」

　わたしはまだ言葉を続ける。彰のことを完全に打ちのめすまで、この口は閉じないのだ。

「死ぬのはね、自己満足だよ。わたしも、耕一お兄ちゃんも、誰もそれじゃ充たされないよ。絶対に。みんな優しいから、彰お兄ちゃんのことを許してくれる。でも、死んだらきっと誰も許さない。神様だって絶対に許さない。天国になんて絶対行けない。――それにね、さっき言ったよね？　太陽が沈むように、わたしたちの生活も終わらせるんだって」

「――ああ」

　彰は呆然とした顔で、しかし、何かしらを理解したような声を漏らす。今からわたしが何を言うか、想像がついたのだろうと思う。

「本当に馬鹿だね、彰お兄ちゃん。こんなの、当たり前の事じゃないか。何を勘違いしてるのかなあ、彰お兄ちゃん。――あのね。太陽は何度だって昇る。

何度でも朝はやってくる」
　夜は何度だって明ける。人が望む限り、永遠に。
「日々はいつか終わる。いつか太陽が昇らなくなる日も来るだろうと思うよ。でもね、終わらせる必要は無いんだよ」
　言って、わたしの身体から——力が抜けた。言いたいことは大体すべて言い終えた。彰は呆然と立ち尽くすばかりで、何の言葉も発しなかった。
「だからね、出来る限りわたしと一緒にいて。それで、わたしを殺したくなったなら。——殺せば良いから」
　言い終えると、今度こそ沈黙が訪れた。
　わたしはまだ何処かの風の中にいる。微弱に吹き付ける風が、沈黙に色を添えていた。わたしの表情も、彰の表情も、その風の中で、
「————————馬鹿だよ、初音ちゃん」
　その瞬間だった。
　一歩、彰が近づく足音がした。その一歩で、わたしと彰の距離は殆どゼロになる。そして彰は本当に悲しそうな顔をすると、
　——わたしの首に手をかけた。
「本当に殺してしまうかもしれないと言ってるのに」

769　赤い光

　ああ、神様。神様、聞いてください。そして願わくば、迷える子羊に啓示を頂きたく存じますですハイ。……嫌だなんて言わないで下さいよ。俺、マジ困ってんスから。
　えー、コホン。
　なにゆえ私北川は、斯様（かよう）な運命を背負わされているのでしょうか？　使命をひとまず退けてまで、あの婦女子を助けようとした事は、間違っていたので

しょうか？　神様、これはその罰なのでしょうか？　婦女子は無情にも私北川を置いて、さっさと行ってしまいやがったですよ。ええ、放置ですよ放置。
いかにも危険そうだったから、制止したんですけど……無視ですわ、ハイ。脇役はすっこんでろというか、アウト・オブ・眼中って感じでしたよ。庶民の言葉では、シカトとも言いますねシ・カ・ト。
……すんません、愚痴が長くなりました……それでですね。その後、建物の中はやたらと盛り上がってるんですけど……なにゆえ私は、かくも長時間ヒゲオヤジと静かに見つめ合ってなきゃならんのでしょうか？
しかもこのヒゲオヤジ、ブルーな顔してニヒルに笑ってやがるんです。もちろん、度重なる語りかけに対する返事は、全くありません。
うはあああああ！　怖えええええええ!!
何が怖いって、言葉がのやりとりが通じないって程、怖い事はありません。私北川、この喋りこそが自己確立の礎とでも申しましょうか、キタガワという名の分子活動集合体が織り成す最大の偉業と心得ておりますゆえ、何を語りかけても返事が返ってこないというのは、まさしく存在の否定なんですよ！　言わば、致命の一撃なんですよ！
誰だよ！　立ち絵の出番が薄いからセリフだけ、とか言ってるのは！　ていうか立ち絵って何!?
ああ、とにかく!!
俺からトークを奪ったら、ただの色男しか残らないんだ！　ん？
……それ、いいかもしんない？
はじめに長い沈黙があった。しかしその後、あまりに勝手な妄想を、延々と語り始めた北川の結論に耐えられなくなったのだろうか。
フランクが、遂に口を開く。
「……」
「……は？　なんだって？」

その独特の小声に、思わず耳を傾ける北川。
「……爆弾、だ」
ゆっくりと握った手を開くフランク。掌に収まる大きさの、ハイテクノロジーを尽くした見慣れぬ機械。吐瀉物にまみれ詳細は判別できないが、ダイオードの青い小さな光点が見て取れる。
「……爆弾？　……ってオイおっさん⁉」
思わずのけぞる北川。
「……！」
一瞬の隙を逃さず、フランクは後ろに転がりつつ北川の銃めがけて蹴り上げる。
「くそっ！」
フランクの額に合わせた照準がずれ、慌てて発砲する北川。
ガン！
ズドン！
――銃声、そして着弾音。
体術はさほど優れていないフランクだが、デザートイーグルの巨大な銃身を外す程、不得手ではない。銃の重さもあってか北川の発砲は僅かに遅れ、銃身を蹴り上げられた事により弾丸はあさっての方向へ飛んでいた。
「……ぐあ……っ！」
遅れて苦痛のうめきを漏らし、前かがみになった北川の手から銃がこぼれ落ちる。握りこみが甘いかたちで発砲した結果、右手の人差し指が妙な方向へと曲がっていたのだ。
「……！」
静かに立ち上がったフランクが、低くなった北川の即頭部に蹴りを見舞う。
「がっ！」
情況が確認できぬまま、鈍い音と共に、為す術もなく吹き飛ばされる北川。対するフランクは周囲を見回し、愛用のライフルと北川の拳銃を回収すると、掌の機械に注意を逸らした。
その機械は、芹香の位置を認識させていた爆弾で

ある。胃内でロックが解除しないように、複雑な手順を踏まないと手動の起爆は不可能なように作られている。もしもの時は投げたあとに狙撃するしかないと思って回収したのだが、幸いにして時間はできた。北川と芹香に動きの無いことを確認して、フランクはロックを解除しはじめた。
『お母さん……』
　作業中、聞き覚えのある少女の声が、ぽつぽつと耳に届く。あとは左右のパーツを押し込んで、手を離せばほどなく爆発する筈だ。
　そこまで来て、ようやく静けさが戻ってきた事にフランクは気が付いた。
『……それにはまず、生き残らんとな』
　そのとき耳に飛び込んだ、特徴のある方言に、フランクはぴくりと反応した。さすがにこれだけ印象が強いと、聞き覚え程度では済まされない。
『居候……生きとるか？』
　この声の主は、あの集団の中でもっとも好戦的な女。往人という男と違い、話の通じる相手ではない。右手にデザートイーグルを握り、左手の爆弾を押し込む。
　ピピッと電子音がして、握り締めた拳から赤い光が漏れはじめる。あとは手を放して数秒後に爆発するはずだ。
　準備を整えたフランクが、くるりと振り向いた、そのとき。
『いくらウチでも、死に損ないの兄ちゃんを――』
　――目が、合った。
「居候……生きとるか？」
　肩関節一個分長くなった往人の腕を、不安そうに見つめながら、晴子は尋ねる。返事を待つまでもなく、荒い呼吸音が聞こえ、ひとまず安堵の溜息をつく。
「……ま、耕一君よりは活きがエエな」
「お母さん、耕一くんって誰？」

観鈴が、聞きなれない名前に耳を立てる。
「ああ、もっとボロボロなんが居ったんや」
それと比べれば、この程度、とばかりにカラリと笑う晴子。
「……ちゃんと、手当てしてしてあげた？　いつもみたいに、乱暴してない？」
会ってもいない〝耕一くん〟のために、思いっきり不安そうな顔をして尋ねる観鈴。失敬な奴っちゃな、と自覚のない晴子は腹を立てながら答える。
「いくらウチでも、死に損ないの兄ちゃんを――」
言葉の途中で、晴子が固まる。ふとずらした視線の先に、男がいたからだ。
そこには、自分たちが離れ離れになった原因のひとつである、忘れもしない髭の男が立っていた。
(あいつは……！)
思考より先に、反応していた。向こうも同じであったかもしれない。
二人の殺気が交錯する。

「……お母さん？」
駆け寄ろうとする観鈴。
「来んなっ！」
叫ぶと同時に、晴子は素早く拳銃を抜き、横へ飛ぶ。着地すると同時に態勢を整えると、そのまま発砲した。
タタン！　ガン！
タンタン！　ガン！
四発の高い発砲音と、二発の地響きに似た発砲音が轟く。一瞬遅れて聞こえた着弾音と共に、ホールに異変が訪れた。
割れた窓ガラスのアルミ枠が、火花を散らしてバキンと吹き飛び、更にその下の壁面にひびが入った。もう一発は天井の石材に斜めの角度でめり込み、その影響で割れた石板がボロボロと崩れ落ちる。威力が並みではない。
「くそっ！　一発くらい、当たっとれよ！」
……からん、かつん。

そのとき、妙に軽い音がした。
壁を盾にして、文句をいう晴子の隣。すなわち、往人が倒れている場所。そこに、〝何か〟が投げ込まれていた。
それは赤い光を放つ、小さな機械。
ピ。
聞こえるのは小さな電子音。
ピピ。
(なんやねん、コレ)
ピピピ。
(ひょっとして――)
ピピピピ……
(――やばいんちゃうか――!?)
晴子は、思わず駆け出した。

770　崩れるものと始まるもの

ピピピピピピ!
往人のすぐ側に投げ込まれた爆弾がけたたましく電子音を鳴らす。
無機質に、だがそれは確実に、死神の鎌となって晴子達を消し去ろうとしていた。
「でえええええい！」
晴子がその電子音を出す物――爆弾を躊躇いもせずに拾い、先程の銃撃戦で割れた窓に放り投げ身を伏せた。
即座に投げる――その行動が晴子達にとって幸いした。
後、数秒でも時間に遅れがあったのならば。その爆発は確実にそこにいた人間をすべて葬り去っていただろう。
爆弾が外に投げられた直後、
ズガ――――――――ン!!
この島で二度目の体内爆弾の爆発が、あたりに響く。
バリン！　バリン！　バリン！　バリン！

衝撃で窓ガラスが敗れ、建物が更なる崩壊を始める。
「うっ……まあギリギリセーフってやつかい……」
頭を振りながらゆっくりと晴子が身を起こす。
「観鈴——！　大丈夫か？」
「う、うん……なんとか……」
「ふう……居候は……、大丈夫みたいやな」
「ああ……なんとかな……」
「ゆ……往人さん！」
「居候！　気が付いたんかい！」
突然の往人の声に、二人が驚きの声を上げる。
「あれだけ大きな音がすれば気が付くさ。二人とも……無事だったんだな……」
ゆっくりと上体を起こした往人が安堵の表情を二人に見せる。
「ウチらはなんとか無事や。居候の方はあんまり無事やなかったみたいやな」
「ほっといてくれ……」

ガン！　ガラン！　ゴン！
「アカン！　もう崩れるで、はよ逃げんと！」
そう言いながら、晴子が往人の体を持ち上げるのを支え、観鈴が散らばっていた武器を往人に渡した。
「手当てはとりあえず出てからや」
「すまない……が、こっちの方は、今、何とかしないとな……」
と、言いながら往人は自分の外れた方の肩に手をやり、思いっきり力を込める。
ゴリッ！
「ぐあああああっ……」
「往人さん！」
「居候！」
二人が声を上げる。当然であろう。あまりにも無理矢理な治し方だ。
「だ、大丈夫だ……それより行くぞ。この様子なら後、何分も持たないだろう……」

「……！」
ホールの外では予想外の状況にフランクが眉をしかめていた。
あの爆弾であわよくば当初の目的であった少年をも巻き込もうと思っていたのに、爆弾をまさか投げ返してくるとは思わなかったのだ。
フランクの顔は険しくなる一方だ。
なぜなら、これで自分からの攻撃は手詰まりなのだから。
一応ホールに突入して戦うという手もあるにはあるのだが、炎が燃え盛り、今にも崩れそうなあの場所に突っ込むのはどう見ても得策ではない。
「……」
フランクは顎に手をやり、どうしたものかと考え込む。
が、時は彼に味方をしない。
立ちすくむフランクに、更なる予想外の出来事が降りかかった。

ズゴオ――――ン！
すさまじい音を立てて、建物が崩れる。その何秒か前に住人達は脱出していた。
「あ、危なかったね……」
観鈴がぺたりと地面に座り込む。
「ったく！　ゆるさへんで！　あの髭親父！」
「その件に関してはおまえが先に撃ったんだろう？　だから、あのおっさんが銃を撃つのはいいとして。俺がいると知ってる場所に爆弾を投げ込むのは納得いかないな」
「それがあの髭親父の正体なんやろ、裏切られたたんや。居候は」
「さあな！　どちらにしろ、あいつに会えばはっきりするだろう！　行くぞ！」
その言葉と共に住人は観鈴の体を立たせ、北川達のいる方角に三人は駆け出した。

771　弓、折れる時

苦しい、苦しい、苦しぃッ！

わたしは何が起こったかまだ理解できず、ただ、頭の中が苦痛の色だけで染められる。すべての思考が放棄されようとするのを必死に堪え、

七瀬彰の指が自分の首を締め付けているのだ、とやっと理解した。身体中から力が抜けていく、

「死ぬってのは、こんなもんじゃない」

呟く彰の声を、わたしは一番近いところで聞いた。

「死ぬのは、これよりもっと苦しい」

息が出来ない、身体に力が入らない、思考が放棄される、右手に握った拳銃を取り落とす、

「肉体はすごく脆い。すぐに壊れてしまうんだ」

脳に血が溜まっていくような感覚、だめ、ああ、意識が、あ。

「その点——心はね、身体より丈夫に出来てるんだ」

首に込められた力が、抜けた。

消え去りかけた思考が戻る。咳き込み、足りなくなった酸素を取り戻すためにわたしは激しく息を吸う。首から鈍痛が消えない。自分の子供のような細首は、文字通り折れそうな痛みを抱えた。

「愛しい人が死んだくらいで壊れるくらい、人の心は弱くないと思うんだ。心の傷なら、どんな傷でも、いつかは癒えるものだと思う」

死ぬとは、こういう事か。意識がなくなり、自分が何であったかも忘れてしまうような苦しみ。愛しい人の事も忘れてしまうような苦しみ。

「身体が死ねば心も死ぬんだという事、判ってる？　僕が死ぬ理由は、君を、君の心を——死なせたくないからだっていう、そういう事が判ってくれた？」

わたしは何も言葉を発することが出来ないまま。

彰のそんな笑顔を、ただ見ることしか出来ない。

恐怖が胸を貫き、勇気の矢が折られ、ただ震えだけ

がわたしの身体を支配する。もう、動けなかった。

　けれど。

「それじゃあさよなら、初音ちゃん。君がいなくなったら僕は死ぬ。君があと五分以内に立ち去らなかったら、腕ずくで君を耕一たちのところに戻すよ。——ああ、もういっそ腕ずくで眠らせておこうか」

　動けないくせに。

　勇気の矢は折られ、信頼の盾は砕け散ったのに。

　わたしの口だけが、必死に動いた。

　思う。

————————わがままだな、わたしは。

「馬鹿だもん、わたし」

　ぴたり、と彰の口が止まる。

「すごく苦しかったよ。死ぬのがどんな事かって今まで判らなかったけど、今、なんとなく判った」

「そうだろう？　初音ちゃんだって死にたくないだろ。大丈夫、耕一と一緒にいれば死ぬことはないよ」

　彰の口から安堵の溜息が漏れる。理解してくれたんだな、そんな風な笑顔を見せた。しかし、わたしが言いたいのはそんな事じゃない。

「だから、彰お兄ちゃんにも死んで欲しくない」

　彰の表情が固まった。

「彰お兄ちゃんがあんな苦しい目にあわなくちゃいけないなんて、絶対に嫌だ」

「——初音ちゃん」

「彰お兄ちゃんが死んだらわたしも死ぬ。すぐに後を追うよ。そして、同じ苦しみを味わう」

　彰の表情が歪むのが判った。どうしようもない苦痛の表情が痛々しくて、わたしの決意も少し歪む。けれど。わたしは彰を止めるために喋り続けなければならない。これ以上、大切なものを失えない。

「彰お兄ちゃん、すごく苦しかったよね。わたしみたいな足手まといを護って、戦ってきて、いっぱい怪我して。本当にごめんね。わがままばっかりだっ

たし、言うこと聞かない子だったしね。でもわたしは自分の事しか考えないわがままな人間。わたしは自分勝手な人間なんだ。聞き分けがない子だって怒ってもいい。だけどわがままな子供だから、わたしはこう言うよ」

　呟いた言葉は、

「一緒に生き残ろう。二人とも苦しくないでいられるのは、それが一番なんだ」

　きっと彰の盾を砕く、強力な矢になったと思う。

「お願いだから、一緒にいて」

　本当に言いたいことは、少しだけ違ったけれど。

けれど、それこそ本当のわがままになってしまう。

　僕は言葉を失った。

　何を言えばいいのか、本当にわからなくなった。目の前で決意を前面に押し出して笑っている初音をどう説得すればいいのか、彰には心底判らなかった。本当に腕ずくで眠らせようか、と思ったが、それで何の解決にもならないことも判った。

　自分の存在が、彼女の中でそこまで大きくなっていたこと。自分が彼女の心の一部に住み込んでしまったこと。

　あまりに長い時間、一緒にいすぎたのだ。

　僕はどうすればいいんだろう。

　初音が自分に手を差し出す。「帰ろう？」と初音は言って、もう一度天使のような笑顔を見せた。僕はもう何も考えずにその手を取って帰ろうか、と思う。彼女の見せた決意に答えるべく。僕もまた、自分の中に潜む狂気を潰し切るために、必死に心を強く持つことに全力を注ぐべきなのか。自分の考えが浅はかであったことを思い知る。死ぬことは先送りにしていいかもしれない、と思う。もう少し、考えてみるべきなのかもしれない。僕がやったことは許されないだろう。

　けれど。償う時間は許されるのかもしれない。

　目を閉じて、僕は思考する。

生きてみよう、と思った。

彼女の盾になって、もう少し生きてみようと思った。心に潜む狂気を潰し切り歩いていこうと思った。

僕は、間違っていたのかもしれない。

僕は、彼女の手を握った。

初音は本当に嬉しそうな顔をして、大きくて優しい声で「おかえり、お兄ちゃん」と笑った。僕は苦笑して「ただいま、初音ちゃん」と呟き、

幸せそうに笑って向かい合って、

そこで異変が起こった。

キィイイイイイイインッ、と頭の中で金属が弾け合う音が響きだした。瞬間頭に鋭い痛みが走り、全身の自由が剥奪されていく。初音の手は確かに自分の中にあるのに、そのぬくもりが遠くに消えていく。身体が急速に冷えていく。そして僕の五感が消え失せる。正確には、聴覚だけが残っているのか、何者かの声だけが聞こえる、誰の声だ、女の声、それは女の声だ。聞いたこともない女の声だ。

——殺せ。目の前でぬくぬくとお前を説得して、牙をもぎ取ろうとする偽善者を殺すのだ。生きる事の意義もしらない小娘を殺すのだ。

(黙れッ、お前は誰だ)

——ふふ、嫌か。自分の手で殺すのが嫌か、殺人鬼。……そうだな。一時、おぬしの身体を借りる事にしよう。それほど相性が合わぬから、長時間棲み付くことは難儀だろうがの。まあ、この小娘を殺すには十分な時間だろうて。

(なにを、)

——しばし眠れ、鬼。

目の前で突然しゃがみこんで頭を抱えた彰の様子に、わたしは何か不吉なものを感じていた。たった今自分に笑顔を見せてくれた彰の変貌に、初音はどうすれば良いのか判らなかった。手のひらから伝わ

る彰の体温は変わらない。ただ、手のひらに多量の汗が滲んでいる。
「彰お兄ちゃん!?　大丈夫!?」
呼びかけにも答えない。一瞬の後、彰は顔を上げた。その顔にもまた多量の汗が浮かんでいる。
何かに耐えているような表情だった。
「あ、彰お兄ちゃ――」
わたしが彼を呼び切る前に、
彰はわたしの手を、ぐい、と引いた。何かの冗談のように強い力で、わたしのバランスも何かの冗談のように簡単に崩れる。わたしは膝を突き、片手では十分な受身を取ることも出来ず、そのまま地面にうつ伏せに倒れた。
そして彰はわたしの手を離した。
彰は強引な手つきでわたしを仰向けにすると、お腹の上に乗り、
――わたしの喉に、再び指を当てた。
「あきら――おにいちゃん」
潰れた声で必死に呼びかける。けれど、彰の力は緩まない。今度こそ本気でわたしを殺そうとしている。それが判った。
――必死に見上げた彰の顔は。
不思議なことに、驚愕の色に染め上がっていた。
――……待てよ、冗談だろ?
何を、僕は何をしている?　待てよ、なあおい、僕の心は本当におかしくなっているのか?　なんで、なんで、なんで!　この手に入る力が緩まないのは、初音ちゃんを殺そうとしてるのは、
なんで、なんで、なんでっっっ!!
畜生、畜生、止めてくれ、止めてくれッ――……
ぎりぎりと、わたしの首を締めつける力が強まっていく。先程とは比べ物にならないほど強い力で、わたしは殺されていく。意識が朦朧としていく、思考を放棄したくなる。けれど、もしもうこの手の力

が緩まないのなら、意識を失ったときが最期だ。
わたしは、最期の瞬間まで意識を失わない。
お兄ちゃん自身は、やっぱり壊れていなかったのだ。わたしはやっとそれを理解した。ごめんね、彰お兄ちゃん。勘違いしていた。お兄ちゃんの中には、やはり『鬼』がいたんだね。殺したくてわたしを殺そうとしてるんじゃないんだよね。

　ただいま、って言ってくれたもんね。
それならやっぱり、わたしの血のせいかな？　わたしの所為でお兄ちゃんが壊れたんだ。――本当にごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。
殺させちゃって、ごめんなさい。

　今更こんな事を言うのはおかしいかもしれないけど、最期だから言うね。彰お兄ちゃんは怒るかもしれないけどね。

　お兄ちゃんを探しに出た瞬間から決めていたんだ。彰お兄ちゃんに逢ったら、殺してもらおうって。わたしは彰お兄ちゃんに――殺して欲しかったんだ。

　彰お兄ちゃんは耕一お兄ちゃんを殺さなかった。殺せなかった。結局、彰お兄ちゃんは優しいお兄ちゃんのままだったんだ。それなのに、わたしは勘違いをしてお兄ちゃんに銃を向けて、殺そうとした。勘違いだから、で許される筈もないよね。わたしは紛れもなく自分の意志であなたを殺そうとした。恩を忘れたみたいに、思い出をすべて忘れたみたいに。

　お兄ちゃんは優しいからその事も許してくれるだろうけど、わたしは自分が許せないから。自分の弱さが、自分の偽善が。死ぬべきなのは、わたしだった。殺そうとしてごめんね。殺してほしかったんだ。これが、わたしの本当のわがまま。

　でも、

　自惚れじゃないけど、彰お兄ちゃんもわたしのこと、ちょっとくらいは好きだったよね？
だとしたら――好きな人を殺させようなんて、本当最低だね。わたしはやっぱり、最低だ。

　彰お兄ちゃん、

ごめんなさい。殺させて、ごめんなさい。
傍にいなければよかったね、
ごめんなさい。

畜生、畜生、畜生、やめろ、なあ、なんで、
畜生畜生畜生！
僕の身体だろ、僕の言うことを聞け！
お願いだから。僕は死んだって良いから、
どうせ死のうと思っていたんだから、
だから、お願いだから、
僕の希望を折らないで、
僕の希望を奪わないで、
お願いだからッッ――!!

あと、もうひとつ、聞いてほしいことがあるんだ。
さっき彰お兄ちゃん言ったよね。死んだら、全部忘れてしまうって。それですべてお終いになってしまうって。うん。わたしもそう思うよ。

でもね。
ああ、声にならない。声にならないよ。彰お兄ちゃん。ねえ、聞こえてる？
大好きだったよ。今思い出せる事は、彰お兄ちゃんと過ごしたこの短い日々だけ。つらい事ばかりだったけれど、楽しくて、楽しくて、楽しくて。楽しかった事しか思い出せない。嬉しかった事しか思い出せない。
優しいキスをくれたね、強く抱きしめてくれたね、二人、肌を重ねたね、優しい言葉をくれたね、強い言葉で励ましてくれたね、その手でずっと護ってくれたね、
だからね。
わたしは、彰お兄ちゃんの事はね、

初音の唇が小さく動いているのに僕は気付いた。何かを言いたげなのに、それは声にならない。この手の力を緩めれば、その声が聴けるかもしれない。

それどころか初音を救うことも出来る。けれど手の力は決して緩まない。
やめろやめろやめろやめろぉぉぉぉッ！　何故君を殺さなくちゃいけないんだよ！　なんでなんでなんで！　嫌だ、嫌だ、なんでなんでなんでなんでッ！
嫌だッッ！
——そして、僕は。
僕に今唯一出来ることを。
絶対にしたくないことを。
僕自身の意志でしていた。
僕は彼女の唇の動きを、必死に読み取っていた。彼女が何を伝えようとしているのか。それを読み取ろうとしていた。実際には僕はここでもう絶望しきっていたのだと思う。そして、
彼女の言葉を理解して、
——希望の弓が砕け散った。
「彰お兄ちゃんの事はね、死んだって忘れないよ」

ごきり、と音がした。
初音は小さく笑むと、それを最後に目を閉じた。
全身から溢れるように流れ出る汗が、一瞬にして冷える。彼女の身体から、だらりと力が抜けた。閉じられた瞼。小さく開けられた口。
失われたこころ。
そして彼女が、どうしようもない遠くに行ってしまったのだという事が理解できた。そして漸く僕の手から力が抜けた。
「うあああああああああああああッッッッッ!!」
遠く海の果てまで届くような、そんな絶叫をあげて僕はその手で自分の顔を覆う。涙が零れない。絶望だけが胸の中に押し寄せて、僕の体温を奪っていく。すべてを失ったのだ。喪失感が真っ黒な重石になって僕を潰していく。僕を、圧し潰していく。
ああ、僕は何の為に生きているのだろう？　彼女を護るために生きると決めたのじゃなかったのか？
何故、何故、何故彼女を失わなければならない！

何の為にこの島で生き残ってきたのだ、何の為に！
誰か教えてくれ、なあ、誰か、誰か、誰かッ!!

『人は、罪深き存在だからよ』

そんな声が聞こえた。僕の内側から響く声は、他人の声だった。年端も行かない少女のような柔らかな声と、地獄の鬼のように残酷な言葉。

『生きている事がどれだけ罪悪なのかも知らずにお前は生きてきたのだ。更に言うなら、他のどんな人間もそれを知らない。それこそが、人の罪だ』

そんな言葉が響いたかと思うと、声は次第に遠ざかり、何処かに消えうせてしまった。残っているのは初音の死体と、僕の抜殻だけだった。

（生きている事が、どれだけ罪悪か）

その言葉の意味を理解することが、今の僕には出来る。理解して、僕は崩れ落ちた。

僕の頬を、一筋の残滓が伝う。

――頬を伝うのは赤いもの。

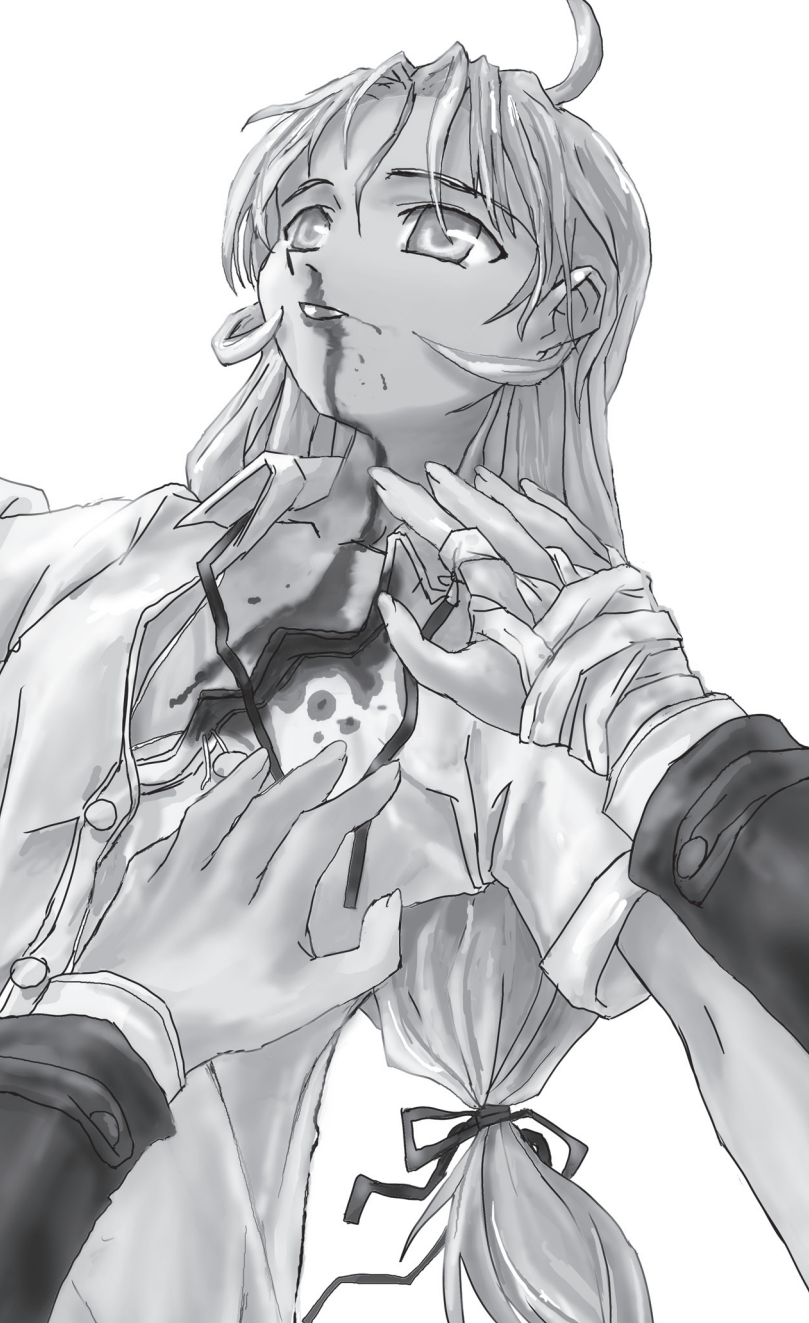
目を閉じた、未だ赤みの残る顔の少女は、それでも口元には優しげな笑みを浮かべていた。それはひどくひどく美しかった。なにものよりも綺麗だった。

ぽたりと音を立て、その柔らかな頬に、赤いものが雫となり零れていく。彼の瞳も真っ赤に染まっていく。頬を伝う赤い雫。それはそれは真っ赤な――

血の涙だった。

その慟哭が、彰の希望の残滓だった。

十九番　柏木初音　死亡
【残り19人】

《葉鍵ロワイアル　第六巻　了》

端書

前回の後書きから一年。遂に、と言うべきか、残すところ一巻になりました。
このままいけば、七巻の発行も滞り無く済むかと思いますが、ここまでこられたのは多くの方々の応援と協力によるもので、そのことを大変感謝しております。
ところで、この企画を進めている間、疑問に思っていることが一つあります。
この六巻を最後まで読み進められた方にはお分かりかもしれませんが、この葉鍵ロワイアルという作品の中では、異なるカラーの物語が展開されています。このことをどう受けとめられているだろう、というのがその疑問です。この異なるカラーの物語というのは、シリアスとギャグが入り混じってる（のも事実ですが）ということを指している訳ではありません。
まず、本家（高見広春著　バトルロワイアル）の如く、がむしゃらに突っ走った序盤。
次に、残り参加者数半ばにして絶えてしまった殺戮者（マーダー）たち……という現実を前に、物語の行方を模索しつつ、様々な伏線をリレーさせていった中盤。
そして、それらの多くを受けとめ、終局へ向けて物語を集約させることに腐心していった終盤……。
異なるカラーと言ったのは、これらのことです。振り返ってみれば、それぞれのパートで展開が異なっていることが分かる（指摘されるまで気が付かなかったという方もいらっしゃるでしょうが）かと思います。
この、物語の大前提が少しずつ転調していく進行には、連載当時から幾らか不満の声もありましたが、今、

初めて（改めて）単行本で読まれている方々は、このことをどう受けとめられているだろう、というわけです。物語の構築に携わった立場としては、なおのこと反応が気になるところです。

さて、反応が気になる、と言えば、ハカロワを読み始める前と、読み始めた後の、『ゲームのプレイ度』もそうですね。

活動を続けている間に感想をいただく機会もありましたが、そこで思ったのは、やはりと言うべきなのかもしれないですけど、色んな方がいらっしゃるなぁ、ということです。幾つかはやったことがあったけど、という状況で本書を手に取った方がやはり一番多いようなんですが、このタイプにしても、葉（Leaf）作品と鍵（Key & Tactics）作品が半々だったり、片方のみだったり、微妙な比率だったりと多様です。また、ゲームを一つもやったことが無かったけれど面白そうなので読んでみた、という方や、本書に出会う前から既に全ゲームをコンプリートしていたという強者の方もおりますし、そうかと思えば、Flashで興味を持ったものの全ゲームをやってから読もう！　……と、実に一年近くをかけてゲームをコンプリートして、それから本書に臨んだ方などなど、他にもいろんな方がいらっしゃいますね。そして、本書に触れる前にゲームをコンプリートしていなかった方たちが、読後、或いは読中に、やったことの無かったゲームをプレイしてみた、ということも多いようでして、大元のゲームが好きでハカロワの執筆に関わった者としては同好の士が増えることに喜びを感じます。

また、企画開始当初は捨てきれずにいた『ごく限られた人間しか手に取ってくれないかも……』という懸念が、全くの杞憂になったことも大きな喜びです。より多くの方に読んで貰えたらという願いは、どうやら叶ったといえそうです。

お蔭様で、この六巻と、それに続く七巻は、単体なら出血になる筈の頒布価格を設定することができます。（七巻に関しては現在のところの予定です。発行予定のファンブックも同様に出来ればと考えています）企画としては、現時点でほぼ成功したと言えるでしょう。
あとは読者の方々に、最終巻の出来と物語の結末を気に入って貰えれば、と思います。満足していただけるよう、企画側なりに最大限の努力をしています。
それでは……。
――葉鍵ロワイアル最終巻に、ご期待下さい。

長い追伸‥
……ギリギリまで触れようか触れまいか迷っていたのですが、やはり、少し書くことにします。
実は、ハカロワを通して知り合った方を、この六巻の編集期間中に亡くしまして……。知り合ってからしばらくはチャット、メール。その後、ハカロワ関係以外のサークルで参加したイベントでお会いしたり、ハカロワ単行本化発動後、ここ一年と少しの間は、ちょっと飲みに行ったりボードゲームをしたり、ＴＲＰＧの約束をしたりと、まぁ、様々に接していたわけです。
――それなのに、本当に突然の訃報で。
初めてその訃報に触れたとき、酷く驚きましたが、それと同時にしばらくの間は実感が沸きませんでした。
数日の間、実感が無いながらも、なんだか胸騒ぎのような妙な感覚と、やり場のない怒りにも似た苛立ちのような感覚を抱えつつ、なんとかポカしない程度に仕事はこなして。……そうして過ごす内に通夜、葬儀

がやって来ました。流石に葬儀へ参列すると、実感もなにも、認めざるを得なくて。割りとドライな人間を自称していたにも関わらず、涙がこみ上げてきて仕方ありませんでした。ご両親の言葉は今でも耳に残り、離れません。

……何故、エンターテイメントたるこの本の後書きにこんなことを書くのか、と憤られる方もいるかもしれません。でも、それだけ自分にとって大きなことだったので。正直な話、数年前に祖母を亡くした時よりも遥かに喪失感が大きかったです。

今回のことを通して、若くして逝くとはこういうことか、と、今更ながらに痛感させられたわけで。人の生き死にがどうこう、という話しは、物語の中だけにしたいと思わされました。物語の中でも、もう軽々しくは扱えないな、とも思いました。勿論、連載中の時期にしたって、決して軽々しく扱っているつもりは無かったわけですが、それでもやはり、今にして思えば、他の執筆者の方々はともかく、自分はその重みを理解してはいなかったのではないかとも思えてくるわけで……。湿っぽい話で申し訳ありませんが。

どうしてもここで触れておきたかったのです。

——この場を借りまして。ハカロワの連載中のみならず、企画にも協力を惜しまなかった、彼(か)の人物のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

平成一六年　三月　某日

セルゲイ＠Ｄ

葉鍵ロワイアル　第六巻　著者一覧

奇跡の企画を作り上げた皆様に

この場を借りて、お礼を申し上げます。

683　口は災いの門……祐一＆浩平さん
684　来訪者の多い場所……名無しさん
685　雨宿り……名無しさん
686　日常と狂気の交わる場所……NBC さん
687　エンプレス二人　……YELLOW さん
688　反転芹香は輝く魔女？……名無しさん
689　転機、そして彼は……林檎さん
690　産声……。さん
691　破損……彗夜さん
692　嵐、そして太陽……観月さん
693　死者からの贈り物……名無しさん
694　それぞれの勇み足……林檎さん
695　新たなるボケ役？……NBC さん
696　それぞれの目的へ……NBC さん
697　碁石……名無したちの挽歌さん
698　そしてここから始まるストーリー……祐一＆浩平さん
699　沈黙……NBC さん
700　選択……MIU さん
701　木と風の祝福……名無したちの挽歌さん
702　姉の立場として……5 さん
703　綱の上の踊り手……名無したちの挽歌さん
704　壮大なムービー……林檎さん
705　真実の明暗……名無したちの挽歌さん
706　芹香の誤算……名無しさん
707　飛空艇の墜ちた地で……セルゲイ＠ D さん
708　間が悪い耕一……林檎さん
709　CD　……名無したちの挽歌さん
710　動き出す意思……NBC さん
711　北へ……MIU さん
712　まだ見ぬ敵……林檎さん
713　狩人の視界……名無したちの挽歌さん
714　霧中……。さん
715　発見……名無したちの挽歌さん
716　狂走……セルゲイ＠ D さん
717　望まれざる再会……MIU さん
718　ふたつの奇跡……名無したちの挽歌さん
719　誇りを捨てない僕らのために……。さん
720　合言葉は……祐一＆浩平さん
721　夕べの祈り　序曲……L.A.R. さん
722　嵐のあと……名無したちの挽歌さん
723　優しい手当て……5 さん
724　長い道……。さん
725　ななせとはるかのぼうけん……祐一＆浩平さん
726　―― Kizuna ――　……セルゲイ＠ D さん
727　旅の途中……名無しさん
728　フランクの思い……フラスキさん

729　スタートライン……………………………………………………… 祐一＆浩平さん
730　遠い夢の中……………………………………………………………MIU さん
731　相似性…………………………………………………… 名無したちの挽歌さん
732　侵食、『痛み』 ……………………………………………………… 暇人さん
733　女と女の子……………………………………………………………… 5 さん
734　微笑と嘲笑……………………………………………… 名無したちの挽歌さん
735　導く声〈前編〉 ………………………………………… 名無したちの挽歌さん
736　導く声〈後編〉 ………………………………………… 名無したちの挽歌さん
737　別れを告げる僕らのために ………………………………………………… 。さん
738　神様なんて信じていない僕らのために …………………………………… 。さん
739　サヨナラ ………………………………………………………………… 暇人さん
740　礼…………………………………………………………………… フラスキさん
741　斜陽――なんだか、ショックを受けてるみたいだけど――……………… セルゲイ＠ D さん
742　切り裂く閃光…………………………………………… 名無したちの挽歌さん
743　やわらかな傷跡…………………………………………………………… 。さん
744　応用と実戦………………………………………………………… フラスキさん
745　使徒…………………………………………………………… セルゲイ＠ D さん
746　道化……………………………………………………………………MIU さん
747　幕開けは爆音と共に ………………………………… 名無したちの挽歌さん
748　観鈴の決断、北川の迷い ……………………………………………… 暇人さん
749　まだ癒えぬ傷跡…………………………………………………………… 。さん
750　霊山……………………………………………………………………NBC さん
751　擬似人格起動…………………………………………………… 祐一＆浩平さん
752　思い出に縋る僕らのために ………………………………………………… 。さん
753　信頼関係……………………………………………………… セルゲイ＠ D さん
754　灯台地下にて ……………………………………………………… フラスキさん
755　死神と、天使と、 ……………………………………………………MIU さん
756　空の名前…………………………………………………………………… 。さん
757　禊 ……………………………………………………………………… 暇人さん
758　輝きと虚しさ ………………………………………… 名無したちの挽歌さん
759　そして二人は再会した …………………………………………… フラスキさん
760　手を離さない僕らのために ………………………………………………… 。さん
761　魂食らい………………………………………………… 名無したちの挽歌さん
762　鏡合わせの二人 ……………………………………………………… 111 さん
763　確信、そして…… ………………………………………………… 駄っ文ださん
764　凶刃…………………………………………………… 名無したちの挽歌さん
765　母…………………………………………………………………… フラスキさん
766　contradiction ………………………………………………… 祐一＆浩平さん
767　糸口……………………………………………………………………MIU さん
768　The day will birth again and again. ……………………………………… 。さん
769　赤い光…………………………………………………… 名無したちの挽歌さん
770　崩れるものと始まるもの ……………………………………………名無しさん
771　弓、折れる時……………………………………………………………… 。さん

◎制作者一覧
制作協力：
111、５、JOYH-TV、L.A.R、MIU、Yellow 、#3-174、
いつかの書き手、独活大樹、葵原てぃー、久々野　彰、
冴村浩志、静かなる中条、真空パック、駄っ文だ、
ないしょ、ナナツさんだよもん、名無し達の挽歌、
名無しさんだよもん＠誤植指摘、遥か昔の書き手、日向葵、
フラスキ、箕崎、観月、林檎、『 。』、名無しさんだよもん

制作協賛：
104、Alfo、Kyaz、NBC、感想スレＲの 142、シイ原、
七連装ビッグマグナム、暇人、祐一＆浩平、
名無しさんだよもん

スペシャルサンクス：
189、quit、River. 、zin、#4-6、#7-76、荒門、命、彗夜、
ダンディ、名無し cd、名無しさんなんだよ、にいむらたくみ、
花と名無したん、ヘタ霊、赤目、名剣らっちー、
訳あり名無しさんだよもん、旧データサイト管理人各氏、

そして全ての名無しさんと読者の皆様
（アルファベット～アイウエオ順、敬称略）

葉鍵ロワイアル　(6)
二〇〇四年　　四月二九日　初刷発行
二〇二二年　一二月三〇日　電子書籍版　初刷発行

著　　者：(別頁に記載)
発 行 者：瀬戸こうへい
発　　行：ハカロワ出版企画
初　　出：２ちゃんねる、葉鍵（Leaf&Key）板
編集事務：セルゲイ＠Ｄ　三浦　闌
挿　　絵：指狐
印　　刷：株式会社ポプルス
連 絡 先：kohei19800310@yahoo.co.jp

9784917977773

1928058813178

ISBN4-01510-122-1

C0510

ハカロワ出版企画

HAKAGI ROYALE Ⅵ

「蝉丸、ドキドキするね！」
「うむ。これが生き残った者たちの、脱出への
　きっかけとなる事を祈るばかりだがな」

惨劇の島の中で少女は青年と出会った。
共に過ごすうちに惹かれ合ってゆく二人。
それは幸福と呼ばれるものだったかもしれない。
だが、互いを大切に思うあまり、二人はすれ違う――

残り 22 人となった参加者たちは、多大な犠牲を
払いつつも確実に未来への道を刻んでゆく。
徐々に明らかになるこの島の秘密。
謎の存在神奈。

物語が終局に向かう中、参加者達は、
混沌とした迷霧の中を彷い続ける……